

デジモンアドベンチャー 優しさの少女と転生デジモン

Zelf

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人のサラリーマンが死んで、転生させてくれるという神様において、デジアドの世界に優しさの紋章に選ばれた子供を追加して、自分をその子供のパートナーデジモンにしてもらったお話。

※この作品は、「初代デジアドの世界に、優しさの紋章を持つ選ばれし子供がいたら」というifのお話です。一乗寺賢の先代がいたら、というのがこの作品になります。

毎月15日に更新します！（時々毎週更新します。前書き、後書きにて告知）

現在休止中。詳しくは活動報告へ。

目次

プロローグ

第一話 デジモンに転生する男 | 1

第二話 優しさ選ばれた少女 | 7

ファイナル島編

第三話 漂流？冒険の島！ | 14

第四話 爆裂進化！グレイモン | 32

第五話 蒼き狼！ガルルモン | 52

第六話 灼熱！バードラモン | 68

第七話 電光！カブテリモン | 82

第八話 パルモン怒りの進化！ | 97

第九話 咆哮！イツカクモン | 114

第十話 穿つ拳！トゥルイエモン | 130

第十一話 冒険！始まりの町 | 154

第十二話 エンジェモン覚醒！ | 170

エテモン編

第十三話 出航・新大陸へ！ | 189

第十四話 エテモン、悪の花道！ | 208

第十五話 グレイモン対グレイモン！ | 226

第十六話 幻船長コカトリモン！ | 242

第十七話 妖精！ピッコロモン | 259

第十八話 迷宮のナノモン | 276

第十九話 完全体進化！メタルグレイモン | 297

ヴァンデモン編

第二十話 結衣の心 | 312

第二十一話	守護獣！アンテイラモン	326
第二十二話	輝く翼！ガルダモン	342
第二十三話	闇の城を攻略せよ！	357
第二十四話	マンモン光が丘大激突！	379
第二十五話	東京湾大襲撃！	395
第二十六話	早すぎる遭遇	408

プロローグ

第一話 デジモンに転生する男

「選ばれし子供達に九人目、優しさの紋章の子供を追加してくれ！それで俺をその子のパートナーデジモンにしてくれ!!」

俺は死んだ。具体的には覚えてない。ていうか普通に寝て、気づいたらここにいたわけだが…今、目の前にいる神様に聞いたら、ミスで大地震が起きて俺は家に潰されたらしい。俺の後ろにはかなりの人数の転生待ちがいる。

まるで閻魔大王に処遇を決められる順番待ちをしているようだ。魔人が世界中の人間を殺したりしたのか。

いや、それほどの規模ということである。日本どころか、アジアは殆ど壊滅状態らしい。こりややつちまったな、神様よ。

「お主が転生するにあたってその世界自体がやや変化することになってしまおうが、良いな？」

「ああ！決まり文句は良いから、早く頼むよ！」

この台詞、一つ前に転生した奴にも同じ事言ってた。本来存在しない者が加えられるのだから変化があるのは当たり前だとか何とか。そのことに前の奴は何故か反論していた。そいつは主人公に転生、というより憑依がしたくて、アニメで見ていたことを肌で感じたいだとか何とか。所謂主人公ロープレってやつ？

俺はそんなのつまらんとする。好きな創作の世界に行つて、原作よりハッピーエンドにするのが良いんだよ。俺だつたら敵に殺される好きなキャラを救いたいね。もう歩く死亡フラグとか言わせん。アイツも、コイツも、俺が助けてみせるぞ。

その為には戦えるデジモンにならないとな。しかし原作に沿って戦つて行くには普通のデジモンになっていては進化までに時間がかかる上に、現実世界ではついて行けない…そこで俺は思いついた。02でしか登場していない優しさの紋章の選ばれし子供達を初代に持

ち込み、俺がその子のパートナーデジモンになれば良いと！

「よし、では送るぞ」

「あざっす！大変だろうけど頑張って下さい！」

なんて考えながら聞いてたら終わってた。ついに俺の第二の人生(デジ生)が始まる。デジモンになるってどんな感覚なのか：楽しみでしようがない。

こうして俺はデジモンアドベンチャーの世界、九人目の選ばれし子供のパートナーデジモンとなった。

「ぼぶ〜?」

あ、そつからね、りよーかい。

☆☆☆

あれから何日経ったかは数えていない。視界もボヤボヤで、音も良く聞こえなくて、何かを待ちながらただ空を見つめ、跳ねる。そんな日々を送っていた。

跳ねる、というのが意味不明だと思うが言葉の通り。俺、今跳ねることしか出来ない。頭の上にある物を小突いて遊ぶことしかやることがないのだ。いやウソ。本当は現実逃避よ、ウン。

「おーい！こつちこつち、早くーっ！」

「おー、いまいくー」

「はやくはやくー！」

「…げんきだなあ」

コロモン達の相手にしなきゃいけないこと。変に拒否したら泣き

出すし、結構危ないことしようとするし…中身が大人だと、子守的な苦労を滅茶苦茶味わうことになる。それも普通の環境下なら問題ないと言えるのかも知れないが。俺の場合、「危ない」の基準が違うのだ。

お分かりかと思うが、俺は元人間。あの子達、根っからのデジモン。そこで既に感覚違うんだよ。デジモンって結構ね、無茶っぽいことするんだよ。数メートルはある小さな崖から飛び降りたりとか。俺からしたら「赤ちゃん（幼年期Ⅱ）が何やってんの!?死ぬ気か!!」だけど、アイツらからしたら「何で来ないんだアイツ?」なんだよ。デジモンってやっぱ人間より強い生き物なんだなあ。

あ、そうそう。俺、どんなデジモンになるかは敢えて決めて無かったんだよね。好きなデジモン多くて決めれなかったよ…だから、神様にランダムでお願いした結果。

今の俺の容姿をちゃんと確認出来たのは、転生して視覚やら聴覚やらが正常に働き始めた頃。多分、生まれてから数日ってところか?多分、幼年期Ⅱになりたてホヤホヤの頃。雨降った後の水たまりで見てもいたら、全身茶色で頭に三本ツノが生えてた。犬っぽい(?)耳もある。

どう見てもチョコモンです、ありがとうございます。いや、結構マジでありがとう神様。自分で言っついてただけど、優しさの紋章って言ったらどのデジモンだ?って悩んでたんだよね。02見た人、ワームモンじゃねえの?ってなっただろ?しかも!俺はこの神様の采配にグツジョブ。

何でか理由を説明すると、俺デジモン図鑑とか結構見てただけど、どーも優しさのデジメンタルで進化したやつって可愛い系の動物っぽいデジモンなんだよね、オポッサモンとかプレイリモンとか。でもそんな可愛い動物っぽいデジモンって誰?ってなるとき…俺、男じゃん?可愛いデジモンになりたいって言いたくなかったのが本音。

まあデジメンタルが全てってわけじゃないけどさく…友情のデジメンタルだつて雷系だけど、ガブモンの進化形って属性で言うとなと炎とか氷なわけだし。

結局何が言いたかったか。ロップモンならアリ！完全体までなら確実に成れるはずだし、アンティラモン好きだよ、俺！まあ、まだロップモンになるって決まってるけどな。デジモンはパートナーの人間の育て方によって進化先決まるって言うし。どんな子が、楽しみだな！早く進化したいっ！

☆☆☆

デジモン達は皆、パートナーの少年少女達の事を語る。早く会いたい、待ち遠しい、そんなことばかり。

もう何日、何十日、何百日と待ち続けている俺達だが、いつ来るかは分からない。せめて人間界の日時が分かれば、今が何年何月何日なのかとか、逆算することも可能なんだが…如何せん暇である。この暇な時間を利用して、出来るだけこのデジモンアドベンチャーの物語を頭の中で思い返すくらいしかやることがない。

世代的にドンピシャだったことから、初代はまだ思い返せるんだが…02に関しては微妙、その続編だったtriは一度見たきりなので非常に怪しい。ブルーレイ、買つときや良かった…因みに、アニメはクロスウォーズまでは把握してる。ゲームの方はあんましただけど。一番昔で覚えてるのは…デジモンストーリーからか？まあそんなレベルである。

ある程度の流れは覚えてるし、思い出せない物は仕方が無いな。今現在最も重要なのは初代の情報だから、問題ない。そうして思い返している内にくっつか問題点もあるわけだが、今は保留しか出来ないね。まあとにかく、初代の知識があるから余計な危険は避けることもある程度は可能だ。

そして俺のことだ。今の俺は「チョコモン」だ。幼年期Ⅱ、技は

ダブルボブル”という、プウッ!とやって飛ばすことが出来る “アワ”とは違う。粘着質な泡を沢山出せるんだが…これ多分逃げる用の技じゃね? 攻撃するには中途半端というか…そんな遠くまで飛ばない。しかも量もそこまでじゃない。ダブルってどっから来た? って考えてたんだが、多分だけどここれグミモンと出すのが正解なんだな。グミモンとチョコモンって双子で生まれるらしいし。単品で生まれた俺には関係無い話である。

進化先は恐らくロップモン。テイマーズでは小^{シユウチヨウ}春って子のパートナーデジモン、そしてその進化先は…成熟期ってトウライエモンで良いんだよな? 暗黒進化がウエンディモンだよな? フロンティアで究極体も闇墜ちしてたが…俺のパートナーによつてはそうなるかもしれないのか。いや、俺は善になつて見せるぞ! もしパートナーが悪ガキだったら俺が矯正してやる!

とりあえず今できることをした結果は、何とかスライム型で動くことは出来るようになった。転がるしか出来なかったのが跳ねることも可能になった程度だけど。 “アワ”も大分上手く出せるようになったと思う。

この “アワ” って唾液? 明らかに洗剤っぽくね? 色もなんかピンクっぽいし…原理は知らんけど、一応今の必殺技なんだから練習しておくに越したことはないな、ウン。

一通り現状を思い返してみたが…あと出来ることって何あんの? 子供達待つしか無いなら…あれ? よく考えたらさ、俺のパートナーってちゃんと8月1日にサマーキャンプ参加してんのか…? ヒカリちゃんは熱で参加出来なかったわけだし、参加出来なかった可能性も…:…:や、やべえ。そうなつたら俺、完全にヒモじゃん。

そうなつたらヴァンデモン編からしか参加出来ないわけだが…え、かなり先じゃん。デジタルワールド時間で少なくとも二ヶ月は先じゃん。そんな待てねえ…頼む! マジで頼む! 土下座でも何でもするから、ちゃんとサマーキャンプ参加してくれえ!!

「チョコモン、なにしてんのー?」

「なんかみつけましたん?」

「え、あー…わり、なんでもないからきにすんな!」

マジで土下座したらしい。ヒモになる可能性があることが分かった今、せめてデジモン達と仲良くなっておかないといけない…なんかヒモする気マンマンに見えるだろうけど、違うからな?絶対違うから!チームワーク、大事!

第二話 優しさに選ばれた少女

「結衣、早く起きなさい！」

「もう起きてるよーっ！」

今日は特別な日。お台場小学校の生徒達がサマーキャンプに参加する日だ。きつと私のように、何日もろくに眠ることも出来ない程に楽しみにしている子供は多いはずだ。

昨晩用意していた服に着替える。白の袖無しワンピース、下は紺色のボトムス。必要は無さそうだったが、家族二人の助言によって淡い紫色のアウターを羽織る。荷物は整容道具と、チャッカマンとかサバイバルナイフ等のキャンプ用品とか、水筒もバッグに入れて持っていく。あ、絆創膏とかお薬セットも持っていかなきゃ。最後に後ろ髪をお気に入りの紺と白のチェック柄のリボンで低い位置で纏めて：うん、準備オツケー。

居間に向かうと、案の定いつも通りお爺ちゃんがテレビでニュースを見てて、お姉ちゃんが朝ご飯を並べている所だった。

「おはよう、お姉ちゃん、お爺ちゃん」

「ん、お早う」

「おはよう、結衣。やっぱり今日の気合いの入りようは違うね！」

「まあね：ずっと楽しみにしてたの、知ってるでしょ？」

「最初は面倒くさがっていたのにのう…」

「：お爺ちゃん、余計なこと言わないでよ。それにだらしない大人ってお爺ちゃんでしょ」

「な、何じやと！儂はただ事実を言っただけじゃと言うのに…」

「文句があるならパチンコ止めてからにして」

「なら結衣はゲームを止めねばならんぞ？」

「はいはい、二人とも早く席について！あ、結衣！キャンプだからってあまりはしゃぎ過ぎちゃダメだからね？もう六年生なんだから、下の子達の面倒も見ないとね」

「それも分かってるよ…頂きます」

食卓テーブルに並べられたトーストを食べて、牛乳を一口。うん、

やっぱり朝はこのセットが良いな。お爺ちゃんには日本人なんだからご飯を食べなさいって言われるけど、ご飯が重たく感じるんだよね。

「そういえば結衣や、どうやら寒くなるらしいから気をつけるんじゃないぞ」

「…？もう八月だよ？」

「ああ、例の異常気象ね。外国もそうなんですよ？暑かったり寒かったり」

サマーキャンプなんだから蚊に刺されるよってお姉ちゃんがお爺ちゃんと一緒にこのアウターを買ってくれたけど、お爺ちゃんとしてはこつちが理由らしい。ホント、最近の異常気象はおかしいよね。雨が降らなくて水田が枯れるだとか、大雨で洪水が発生だとか：アメリカでも記録的な冷夏ってさっきニュースで言った。

「二人とも、新しい服買ってくれてありがとう」

「どういたしまして！これを機に結衣ももっと可愛い服を着てくれると嬉しいかな」

「儂も同感じゃな。もっと女の子らしくしても良いと思うぞ」

「それは…考えとく」

あんなヒラヒラした服、あんまり着たくない。動きづらいし、なんか変な感じがするし：お姉ちゃんの頼みだから着てあげてるだけだもん。女の子らしい服なんて、私には分からないしそもそも似合わないと思う。

ふと時計を見ると、少し時間が危ない。急ぎ気味に残っている朝食を食べて、牛乳を飲み干す。整容もバツチリして、昨日の夜に作っておいたお握りも持ったし：まあ、お昼ご飯ってわけじゃないんだけどね。これはこれで使いようがあるんだ。というか同じ班の子と約束しちやっただからね。

「それじゃ行ってきます」

「気をつけて行きなさい」

「お粗末様！色々大変かも知れないけど、頑張っってね！」

「うん、ありがとう」

確かに、キャンプの準備とか大変だろうな…あまり体力使いたくないし、男子達に任せよう。

☆☆☆

バスに乗って暫くして、目的地に到着した。班に分かれてそれぞれテントを張ったりご飯の準備をしたり。私は予定通り男子達にテントを張るのを任せることに成功して、キャンプ地を見て回っている。男子達がやる気出してたからテント作業はすぐ終わった。手作りのおにぎりを分けてあげる代わりにテント作業は俺達がやる！って約束させられたというか…私が楽過ぎてどうかと思うんだけど。

「すうー、はあー…」

自然の中の空気を大きく吸い込み、そのまま吐き出す。それだけでかなりリラククス出来た。やっぱり勉強ばかりしていたら体が鈍っちゃって駄目になる。たまにはこうして気分転換をすることも大事だよ。やっぱり来て良かった。

さて、そろそろ戻ろうかな。後で班の皆も一緒に来よう。

「…？あれは…」

石畳の階段の前で、一人の少年がいた…っていうか、同じクラスだから誰かはすぐ分かった。

「丈君、どうしたの？」

「あ、結衣君。ちよつと四年生の太刀川ミミ君に用事があったね」

「あー、成る程…確かミミちゃんなら上で見たよ」

「本当かい!?ありがとう、すぐに行かなきゃ」

確か丈君は食料当番じゃなかったはずなのに、荷物が非常食なのは変だなって思っていたけど、そういうこと。大方、ミミちゃんがサボったんだね。それで担当の先生にでも頼まれたか…いや、丈君のことだから自分から引き受けたって所かな。

「あれ…?」

「どうしたの？」

「いや、今何か…冷たっ」

「これ…雪？」

今、私の手と丈君の頬に降ってきた物は…間違いない、雪だ。でも、夏に雪って…あり得ない。そういうえば…お爺ちゃんが寒くなるって言ってたっけ。

段々と雪がどんどん降り始め、視界が白く覆われていく。

「さ、寒い…！早く大人達の所に行かないと…！」

「待って、ここからだと上にあつた祠の方が近いよ！そっちに行こう！」

「わ、分かった！」

階段を駆け上がり、祠の中へと駆け込む私達。中には、見覚えのある赤っぽい茶髪の男の子がいた。

「あ、丈さん！結衣さんも！」

「光子郎、君も来てたのか！」

「まだ外に人が来るかも知れないね…近くに誰かいないか見てくる！」

「え!?駄目だよ、風邪引いたら大変だ！」

「大丈夫だよ、私アウター着てるから。近くに誰もいなさそうだったらすぐ帰ってくるから！」

祠から出た私は、まずこっちに向かって走っている子達がいるのを見つけた。それと、少し離れた所にも何人かいるみたい。

「太一君、空ちゃん、こっち！」

「結衣さん！」

「結衣先輩、ありがとうございます！」

「中に丈君と光子郎君がいるから！」

少し離れた所にいるのは…ヤマト君かな。ミミちゃんもいる。もう一人低学年っぽい子もいるけど…誰だろう？私は知らない子だ。

「おーい！ヤマト君、ミミちゃん！」

大きく手を振りながら呼ぶと、ミミちゃんが手を振って返してくれた。どうやら聞こえたみたいだね。後他には…うん、誰もいないかな。流石に雪が強くなってきたから、もうちよつと辺りを探したら私も祠に戻ろう。

「結衣さん」

「ヤマト君、早く祠に向かつて。太一君達もいるから」

「：俺達がいた方には誰もいないですよ。あっち側は分からないですけど」

「ホント？あっち側：あ、階段の方は私達が来た所だから大丈夫だね。ありがとう、ヤマト君」

「いえ」

じゃあ私も早く中に入ろう。それにしても、夏なのにこんな吹雪になるなんて：お姉ちゃんとお爺ちゃんにアウター用意して貰って正解だった。

暫く待っていると、風の音が弱まって聞こえなくなった。太一君が扉を開けると、さつきまで見えていた地面が全て真っ白に染まり、そこから辺にある木々にも雪が乗っかっていた。

「やつと止んだみたいだな」

「うわあ、雪だ！凄ーい！」

「おいタケル！気をつけろ！」

「うう：寒いわね。夏とは思えない」

「早く大人がいる所に戻ろう。ここにいつまでもいると：」きやく、キレーー！」

皆夏服なのに、寒いって言いながら何で外に出るんだろう：風邪引いちゃうよ？

「光子郎君、どうしたの？」

「いえ：吹雪が止んだから、電話とかも使えるかと思っただんですが、繋がらないみたいで」

「そつか：でも、この辺は山奥だから元々電波が届かないのかもね」

「光子郎ーっ！早く来いよーっ！」

「結衣せんぱーい！早く早くーっ！」

外から太一君とミミちゃんの声が聞こえ、私達も外に出た。そして、上空に見える幻想的な光景に、他の子達と同じように目を奪われ

てしまう。

「キレーイ、ロマンチック…!」

「あ、あれは…」

「オーロラよ!」

「初めて見たぜ!」

「凄いいね!」

皆感極まっているようだけど…やっぱり変。オーロラって元々、日本じゃ見ることは出来ないはず。そもそも、オーロラが見えるくらい寒いようには感じられないし、精々冬なのかと思うくらい。これも、例の異常気象と関係が…?

「そんな、変ですよ!日本でオーロラなんて!」

「…そうなんだよね」

「は、早く大人達がいるキャンプ場に戻らなきゃ!」

「そうだな…風邪引いちやつまんねえしな」

「…?おい、あれ!」

太一君が何かを見つけたようで、彼の目線の先を追うと何か…大きな穴のような何かが見えた。あんなの、普通じゃない…私には、どうしてもそれが超常的な何かであるような気がしたんだ。

その予感的中しているのか、その穴の中で何か光ったように見えた。やがてそれらはどんどん大きくなって…こつちに向かつてきてる!?

「皆、伏せてっ!!」

私の叫びの直後、光の塊が次々と私達の周囲に降り注ぐ。着弾する度に雪が舞い上がり、目の前が真っ白になる。

「皆、怪我は無い!?!」

「…何とかな」

「び、ビツクリしたあ…」

「い、一体…」

「今の、隕石でしようか…?」

「光子郎君、下手に近づかない方が…え?」

光子郎君が、光の塊が着弾したと思われる穴をのぞき込もうとした

その時、その穴から光が溢れ出す。しかも、彼の傍の物だけでなく私達の近くにある八つ全ての穴が。そしてその穴からは、光の光源と思われる小さな何かがフヨフヨと浮かび上がってきた。私達は咄嗟に、それを掴み取った。

「何、これ…」

「ポケベルでも、ケータイでもないし…」

「あれ、今…?」

掴み取ったそれを観察していると、その機械の真ん中の液晶画面の
ような部分が微かに光った。

『!?!』

何故か、山の中なのに大きな高波が現れ…それは既に私達を呑み込
まんとしていた。

『うわあああつ!!?!』

これが、私達の長い長い冒険の旅の始まりだったんだ。

ファイル島編

第三話 漂流？冒険の島！

彼らは空から落ちてきた。俺達が投げた物と思われるデジヴァイスを身につけて。デジヴァイスが物理法則無視で遙か彼方まで飛んでいくのは何とも言えない不思議な光景すぎた。ってか、投げたっていうよりいつも通りポンポン遊んでただけなんだが。途中で重力無くなつたみたいに飛んでつた…で、その後八人の子供達がバラバラに落ちてきたのだ。

ちやんと、俺のパートナー、イターー!!マジで良かった、マジで!!これでニートとはおさらばよ!!

コロモン達が感激してそれぞれのパートナーの元に向かうのを見て、俺もパートナーと思われる原作では存在しない子が落ちたと思われる場所を目指す。特訓の成果か、俺は既にスライム体での動きに大分順応し、コロモン達と変わらないくらいのスピードで動き回れるようになった。何日も特訓した甲斐があつたつてもんだ。やつと言葉も片言なのが直ってきたし。

感覚で何となく進んでいたが、すぐに彼女は見つかった。やつぱ女の子か。どうやら気絶しているらしいが…背丈から大体小学校高学年くらいか？髪は後ろで纏めていて、長さは肩甲骨の辺りまでであるな。

「おい。おい、起きろ〜」

「ん……うん……」

体全体を使って彼女の肩を揺さぶる。しかしそれでも彼女は呻き声のような声を上げるだけだ…いや、待てよ？この最初の着地で当たり所が悪かった場合はどうすれば良いんだ？アニメではあまり気にせずスルーしていたが、ここは現実。大いにあり得る。デジタルワールドで死んだら現実世界でも死ぬのだ。

「おい…生きてるなら返事しろ！おい…結衣!!」

「…ん…ん…ん？」

名前を呼ばれたから反応したのか、彼女はうつ伏せの状態から起き上がり、微睡んだ目で俺を見つめる。その後、辺りを見回し…また俺の方を見て首を傾げた。

「今、誰かに呼ばれたような…気のせい？」

「気のせいじゃないな」

「っ!?ぬ、ぬいぐるみが…喋った？」

…ああ、デジモン知らねえんだもんなあ。そりゃ化け物を見たような反応するのも無理ないか。

「どうやら無事みたいだな!どつか痛い所無いよな?記憶喪失とかになってないよな?」

「…小林結衣、十一歳。お台場小学校六年生。うん、大丈夫。ちゃんと覚えてる」

ほう…何かこのガキ、小学生っぽくないな。中学生って言っても通用しそうな大人っぽさだ。小6なら当たり前かもしれないが。特に女子は成長早いつて言うしな。

「それで…君は?ここ、私達がいたキャンプ場じゃないよね?とか…何者?」

「俺はチョコモン。ここはデジタルワールドって世界のファイル島だ」

「デジタル…ワールド?ファイル島…?」

「混乱するのは分かるが、そこはとりあえず流してくれ。お前は知らない場所に漂流したようなもんだ」

「漂流…そうだ、皆は?!」

結衣はそう言つて、俺に詰め寄ってきた。俺を持ち上げて、自分と同じ目線にして俺を揺さぶるようにしながら。

「私の他にも子供がいたはずなの!その子達はどこ!?つていうか、ここは日本じゃ無いの!?君、なんて動物!」

「く、お、おい!ちよ、しゃべ…!」

「え、あ…ごめん」

揺さぶられ続けて脳が揺れてろくに喋ることも出来なかった。グ

ロッキー状態になりそうな所に気づいてくれて助かったぜ…え？
脳ってどこだよって？知らん。

「ったく…揺さぶられちゃ喋れるモンも喋れねえよ！」

「謝ってるでしょ…ごめんって」

「ったく…まず、恐らくだが他のガキ共も無事だ。俺の仲間達が探してる」

「そ、そうなんだ…ひとまず安心？」

「俺らは別に敵ってわけじゃねーぞ？」

「どうだか。そこは私が判断する」

「ああ、そうしてくれ」

「え？」

そこはお前に賛成だよ。信頼はすぐには作れないモンだからな。
ちよつとずつ仲良くなれば良い。

「まっ、すぐに俺達は敵じゃ無いつてのは分かるだろ。今はとにかく
お前の仲間を探そうぜ」

「わ、分かった…」

なんか怪しまれてる？別に何もしないんだが…俺、悪いスライム
じゃないよ？

「あー…多分だが、あっちの方が？俺の仲間達はあっちを探してる」
「じゃあ行こう。早く合流しないと」

そう言って結衣は俺をまた持ち上げ、抱きかかえるようにして歩き
始めた。

「…お、おい？」

「…いいでしょ、別に。私が運んであげるよ」

え、怪しんでたんじゃないのか？いや、そうか。こんな見知らぬ土
地じゃ不安だよな。こうしてれば安心してくれるなら、俺はこのまま
でいるとするか。大人っぽいと思ったけど、まだ小学生には違いな
い。

結衣は他の子供達の名前を呼びながら、俺は野良デジモンがいたりしないかを警戒しながら森の中を進んでいく。

「…なあ」

「…何？」

「さつきからさあ、くすぐったいんだけど。止めて貰ってよろしいか？」

「やだ。っていうか何その喋り方…変」

何度か結衣が俺の抱き心地を楽しむようにムギユムギユと動かすので、注意したんだが…別に痛くは無んだけどき。なんかこう、ムズムズする。スライムを抱きしめて喜ぶ女子がいるとは…スライムで喜ぶのって男子だけじゃないの？

「…！結衣！」

「な、何？大声出したりして…」

「早く隠れる！どつか木の陰で良いから!!」

「う、うん…分かった」

結衣はその辺の木の陰に座り込み、周囲の様子を探り始める。

少しすると、ブーンという羽音のような耳障りな音が聞こえる。それだけでなく、ズシーンという何か大きな物が倒れるような重たい音もしている。これはアイツに間違いない。

「な、何この音…？」

「…恐らく、クワガモンだ」

「クワガモン？」

「デツカくて赤いクワガタみたいなデジモンだ。成熟期だから、幼年期の俺達じゃ相手にならない」

「良く分からないけど、そのクワガモンって奴がこの森にいるってこと？」

「ああ」

「…急がなきゃ」

「今はジツとしてやり過ぎすしかない。襲われたら一溜まりもないぞ」

クワガーモンが暴れているってことは、既に太一と光子郎は奴に遭遇しているってことだ。ということは、既に選ばれし子供達は殆ど集まっているはず。クソツ…合流には間に合わなかったってことか！確か、見かけだけの木でクワガーモンをやり過ぎて、その間にクワガーモンはどっか飛んでったはずだ。その後は…

「いや〜〜!!」

「今のつて…ミミちゃん!」

あー…一人だけはぐれていたミミがクワガーモンから逃げた先で他の奴らと合流するんだ…つてやば!もう追われてるってことか!?

「仕方ねえ、行くぞー!」

「うん!!」

結衣が俺を抱えたまま、音のする方へと走り出す。結構速いな…意外と運動得意なのか?不安定な足場だよな、森の中って。

そのまま走り続けて、段々と音が近くなってきていた。もう目と鼻の先にいるはずだが…どこだ?

「…っ!あっちだ、結衣!」

「いた…!ミミちゃん!!」

「結衣さ〜ん!!良かった〜!!」

「ミミちゃん、こっちは駄目!!」

「え…いやあ〜!!」

ミミは俺達を見つめ、こっちへ駆け寄ろうとしていたが、後ろの奴がそうはさせてくれない。当然だ、クワガーモンから逃げることもすらギリギリだと言うのに、奴の進行方向から真横に行こうとしても間に合うわけが無い。為す術無く、ミミはクワガーモンと反対方向に走っていく。

「…チヨコモン、アイツの気をこっちに向けさせられる?」

「は!?お前、何言ってるんだ!」

「お願い、このままじゃミミちゃんが!」

コイツ、正気か!?普通、あんなデカい化け物見たら逃げたり怖がったりするもんだろ!?ただの小学生が、逃げる以外に出来ることなんて…!

「お願い…:チョコモン!」

俺を真つ直ぐに見つめる結衣。その目は恐怖を感じていないわけじゃない…:しかし、それ以上にミミを助けたいという意志を感じる目だった。

「…チツ、どうなっても知らねえぞ!!」

それ程の覚悟があるなら、やってやるよ…!

クワガーモンに「ダブルボブル」を放ち、足にヒットする。成熟期のデジモンに幼年期Ⅱのデジモンがダメージを与えることはないだろうが、粘着質な泡によって地面にほんの少しくつつくようになってた。

「ギシャアアアア!!」

足に「ダブルボブル」がぶつかったのが分かったのか、こちらに振り返って奇声を発しながら直進してくるクワガーモン。結衣は俺を抱えたまま木々をかき分け、全速力で今まで通ってきた道を駆け抜けていく。対してクワガーモンは木々を薙ぎ倒しながら進んでいく。

…成る程、一度通った道ならルートが予め分かっているし、奴から姿を隠せるように木々を背後にするようにしている。当てずっぽうってわけじゃなかったようだが…:クワガーモンは木々を全て薙ぎ倒しつつ進んでも結衣の全速力より若干速い。このままじゃ追いつかれちまう!“ダブルボブル”でも足止めはそんな出来ねえし…!

仕方ねえ…:今回は俺が体張ってやるしかねえか。正直…:あんな

巨大な奴に攻撃されて無事に済むのかって恐怖はあるが…パートナーの子供が覚悟決めてんだ、俺も覚悟決めねえとな!!

「…うおおおおっ!」

「チヨコモン!?」

「右!隠れてろ!!」

結衣の腕の中から飛び出し左側の木に飛び移る。結衣は俺の指示通り進行方向の右側、つまり俺のいる方と反対側の木に隠れ、俺はそれを確認しながら足下に「ダブルボブル」を出して自分とくっつける。その作業が終わった所でクワガーモンが見えてきた。

「くらえっ!」

もう一度、今度はクワガーモンの顔面に「ダブルボブル」を直撃させたことで、奴は進行方向を俺の方へと向かってきた。俺の姿を捉えたクワガーモンはその大きな顎を下から振るい上げ。

「ぐあっ…!」

「…っ!」

俺がいた木と一緒に大きく吹っ飛ばされた。くそ、めちやくちや痛え……っ!!

だが、乗っていた木の枝に貼り付いていたおかげでクツションになっってくれたようだ。思ったよりダメージは無い…飛ばされる方向も良い。丁度結衣の近くに落下してきた俺を、結衣は驚きながらも回収したと同時にその身をクワガーモンの死角に隠した。

よし、これで結衣の方を見ていなかったクワガーモンは、このままだっかに逃げていくだろ!

「…」

「…」

ブウウン…ドオン…と、羽音と木が倒れる音がどんどん遠のいていく。上手くいった。

「はあく……」

俺達は同時に溜息をついた。きつと逃げていた時間は精々一分も無いだろうが…消耗が半端ない。結衣も疲れ切っているな。マジ痛え…

「…気は済んだか？」

「…うん。ごめんなさい」

「こういうのを無謀って言うんだ。もう止めとけよ…俺が生きてたのは奇跡とも言えるな」

「…できるだけ、そうする」

「できるだけ、かよ…ったく、頼むぜ、相棒」

…ま、他人の為に命を賭ける事が出来るその覚悟は認めてやるか。大した小学生だ、お前は。

☆☆☆

ようやく全員集合した俺達。クワガーモンもようやくどっか行ってみたみたいだし、ひとまず安心だな。

「よし、これで全員だな！」

「良かった、結衣先輩が無事で…」

「ありがとう。皆も無事で良かった…怪我してる子はいない？」

…コイツ、本当に心配性というか何というか。一番危険な目にあつたのは俺達なんだが？クワガーモンに吹っ飛ばされたとはいえ、俺ももう殆どダメージ無くなっているんだから離してくれ…そう言うとき悲しそうな顔で見ってくるし抱きしめる力が強くなった。

「結衣君、君が抱えてるそれって…」

「チョコモンだ、よろしくな。そいつらの仲間だ」

「えっと、デジモンの皆。私は小林結衣。丈君と同じ六年だよ、よろしくね」

「よろしく〜！」

しかし、小6となるとあんまり02とかt r iには関われないかも
しれないな…丈も02だと忙しくて来れずにいたみたいだな。俺
もテイルモンみたいに常時成熟期になれるように特訓しようかな？
「それで、これからどうしようか？」

「やっぱりさっきの場所まで戻って、大人達が来るのを待とう！」

と、丈が何か馬鹿なことを言ってるし…いや、クワガーモン見た時
点で日本じゃ無いって気づけよ。お前ら以外人間なんてこの世界に
いねえんだって。

「おい、丈よ」

「え？ぼ、僕？」

「お前はさっきのクワガタ野郎に喰われたいのか？」

「喰われっ…!?そ、そんなわけないじゃないか！」

「だったら、この森をさっきと抜けるべきだな。今のクワガーモンは
興奮してるから、いつ襲われるか分かったもんじゃ無い」

「そんなのいや〜!!」

「チョコモン達、森の出口分かる？出来ればさっきみたいなの、デカいの
がいなさそうな安全な場所とかあったら助かるんだけど…」

「そんなところあったか…？」

結衣の質問に答えようとしたその時だった。

ブウウーン!!

また嫌な羽音が聞こえてきやがった…早くこの森から抜けるべき
だったか。

「ま、また!?!」

「皆、逃げるぞー！」

全員で森の中を走る…が、さっきと一緒だ。クワガーモンの方が速
いからすぐに…って、もうすぐそこにいるし!?

仕方ねえ、俺が飛びだして…って、結衣のホールドが強すぎる!抜
けれねえっ!?

「伏せろ！」

ヤマトの声に従い、全員で倒れ込むように地面に伏せると、クワガーモンは俺達の真上を通り過ぎて上空へと飛んでいく。

「な、何なんだよこれは…一体ここはどういう所なんだ!？」

「また来る！」

大きく旋回したクワガーモンは、また森の中に姿を消した。上から俺達の位置を把握し、逃げ道が無くして追い詰める気か！つまり、アイツと反対方向が森の出口…どうする。まだ奴とは距離があるが…バラバラに逃げたとしても、全員がやられない保障なんて無いのだ。

「くそ、あんな奴にやられてたまるか！」

「太一、無理よ！」

「そうだ、俺達には何の武器も無いんだぞ！」

「ここは、逃げるしか！」

「くっ…！」

太一はクワガーモン相手に立ち向かおうとしたが、皆の説得により渋々逃げることを承諾した。案の定、クワガーモンのいる方と反対側へと一心不乱に走る子供達。そうすることが奴の作戦だとも知らずに…いや、アイツにそんなアタマは無いか。ただの狩猟本能のままに追い詰めようとしているだけだろう。

このまま進めばあの崖に追込まれる…しかし、ここはこのまま進むしか無い。子供達は…結衣は、俺が守ってみせる。

「……」

「…チヨコモン、まだ痛いのか？」

「いや、大丈夫だ。それより今は逃げることに集中してくれ」

「…うん」

ホント、人のことばっか気にしやがって…足止めたら死ぬぞ？俺の覚悟を無駄にしないでくれよ？

そして、ついに森を抜け、開けた場所に出た。しかし、そこは崖…

他に逃げ場は無い。太一が下を覗いているが、ここはとても小学生や幼年期のデジモンが降りられない。下は川だが、水面に叩きつけられれば場合によつては無事とは言えないだろう。

「こつちは駄目だ！別の道を探すんだ！」

「別の道つて…っ！」

「皆、一旦茂みの中に…っ！」

「ギシャアアアア!!」

結衣が全員に隠れるように指示を出そうとしたその時、とうとうクワガーモンが森から現れた。子供達は崖の方へと逃げるしか無く追い詰められてしまった。

コイツ…咄嗟の判断力にも優れているな。さつきクワガーモンから隠れてやり過ごせたからかも知れねえが…今この場に置いて最適と言える行動を指示しようとしていた。

つと、そんなことを考えてる場合じゃ無い！クワガーモンが森から飛んできて、Uターンして戻ってくる！

「あっ…！」

「コロモン！」

「くらえっ…！」

「プウツ！」

「キシャアアアアアアア!!」

コロモンと同じタイミングで飛び出た俺は、さつきと同じように「ダブルボブル」でクワガーモンの気を逸らして方向をずらそうとしたが、逸らしきれずに奴の体当たりが直撃し吹っ飛ばされた。このままでは子供達がクワガーモンに押し潰されてしまう…そう思った時、ツノモン達残りのパートナーデジモン達が俺とコロモンと同じ行動に出た。結果も俺達二人と同じだったが…何とか方向を逸らし、奴は森の中へ突っ込んでいった…ざまあみろ。

「馬鹿野郎、なんて無茶を！」

「だって…僕は、太一を……守らなくちゃ…」

「コロモン…」

それぞれが自分のパートナーデジモンを抱き上げていく。俺も駆け寄ってきた結衣に、震える体に力強く抱きしめられた。

「結衣…大丈夫だ。あんま締めつけないでくれ…」

「…バカ。無謀なのは君もだよ」

「こりゃ、一本取られたな……っ」

復帰してきたクワガーモンが、森の中から獲物を追い詰めるようにジワリジワリと迫ってくる。選ばれし子供達は崖の先まで追込まれてしまった。

「…おい、降ろしてくれ」

「え…?」

「ここが、正念場なんだよ!」

「だ、駄目! さっきだって吹っ飛ばされてたのに、敵うわけ無い!!」

他のデジモン達と同じように、結衣の腕の中で暴れる。結衣も必死に抑えつけようとするが、俺は無理矢理結衣の腕から飛び出た。

「あっ……!」

そして、俺はコロモン達と同じように、結衣の腕の中から飛び出してクワガーモンへと向かっていった。

この時、俺は凄く不思議な気持ちだった。

今まで他人の為に体を張るなんてしたことが無かったのに、死後…しかも会って間もない小学生のガキを守る為に怪物に立ち向かうな

んで、思ってもみなかったからな。こんな体はったこともないし。

「チョコモン!!」

結衣が俺を呼ぶ。その声は悲しみに満ちていた。

パートナーになる子供がどんな奴なのかと不安だったが…優しさの紋章に相応しい子供だ。中々賢いし、性格も思いやりがある良い子だ。

結衣、任せろ。俺のタイマーとして認めたお前のためなら、俺はこんな奴に負けたりしない、俺は…どこまでだつて強くなつてみせる!!

そう思った、その時だった。

「え…!？」

デジヴァイスによって引き起こされた進化の光。それが俺含めたデジモン全員に降り注ぐ。

…体の内側から力が湧いてくる。まるでこの光によって俺の中の何かが反応しているみたいだ。体が作り替えられるかのような…でも、全然恐怖は感じない。どこか清々しさを感ずるくらいだ。俺は自身に起こっている変化に身を任せる。

「チョコモン、進化——!! ロップモン!!」

☆☆☆

こんなの、嫌だよ。あんな怪物に敵うわけ無い。さつきは運良くあのクワガールモンって奴の攻撃から助かったけど…あんなの、チョコモンの言う通り奇跡。何度も同じ事が起きるとは…あり得ない。今、クワガールモンとチョコモン達との間には何も無い。衝撃を和らげることも、出来ないんだ。

この見知らぬ土地で目を覚まして、太一君たちがいなくて…私一人

しかないと思つて絶望してしまいそうになつた時、チョコモンが
ずつと励ましてくれていた。皆と合流できると知ることが出来て、本
当に安心した。口調はその可愛らしい見た目に反していたけど、私に
は何となく彼(?)が優しいんだつて思えた。

昔から知つていたかのような、そんな不思議な感じ…最初こそ警戒
したけど、それも最初だけだつた。あの子は、私のことを体を張つて
まで助けてくれた。私の頼みを聞いてくれた。

…だからなのかな。チョコモンがクワガーモンと戦う為に今、コロ
モン達と一緒に飛び出して…凄く、胸がギュツて締めつけられるよう
な気がするの。

もうチョコモンは、私にとつては友達の一人だつた。いや…友達と
いうよりも…そうだ。さつきチョコモンが言つてた。私のことを、
相棒つて。その言葉が何となく、しっくりきた。

私はただ見ていることしか出来なくて…嫌だよ、チョコモン。勝手
に、いなくならないでよ…!もう、誰もいなくならないで…!!
「チョコモン!!」

皆がそれぞれデジモン達の名前を叫んだ。その時、突然辺りが暗く
なつたように感じた。空から七色の光が八つ、デジモン達に降り注い
で――

「コロモン、進化――!!アグモン!!」

「ピヨコモン、進化――!!ピヨモン!!」

「モチモン、進化――!!テントモン!!」

「ツノモン、進化――!!ガブモン!!」

「トコモン、進化――!!パタモン!!」

「プカモン、進化――!!ゴマモン!!」

「タネモン、進化――!!パルモン!!」

「チョコモン、進化――!!ロツプモン!!」

デジモン達の姿が：変わった!? チョコモンも、茶色い二足歩行のロップイヤーみたいな垂れ耳のウサギっぽくなって…! :

「皆行くぞーっ!」

オレンジ色の恐竜っぽい、コロモンだった子の掛け声に従って、全員でクワガーモンに体当たりしていく中、何でか分からないけどチョコモンだった子は動かない。あれ? な、なんで?

それでも七体もいればクワガーモンが若干後ろに仰け反りそうになるくらいの威力はあった。でも、クワガーモンは右腕二本を振るって弾き飛ばしてしまう。

「ああ…!」

「これくらい大丈夫!」

コロモンだった子の言う通り、ダメージはそれ程大きくないようで、全員が体勢を立て直していた。さつきまであんなに小さな子達だったのに：凄い! 姿が変わって、体が強くなったみたい…

「『ポイズンアイビー』!」

クワガーモンが背中にある羽を広げ飛び立とうとしたその時、頭に大きな花があるタネモンだった子が両手の爪のような物を伸ばしてクワガーモンの足に巻き付ける。クワガーモンは空中で動きを止めてしまった。

「『エアショット』!」

トコモンだった子が、頭の辺りにある一对の翼を羽ばたかせ、クワガーモンの頭上に何かを当てた：…んだと思う。私には何を飛ばしたのか見えなかった。クワガーモンの頭部から衝撃音だけが聞こえた。

「プチサンダー！」

テントウムシみたいな、モチモンだった子がクワガーモンの頭に：電撃？みたいな何かを当てて怯ませる。

既に片足をタネモンだった子によって地面に降ろされていたクワガーモンがもう片足を地面につけようとしたその時、プカモンだった白い毛の子が丁度クワガーモンの足と地面の間に勢いよく転がり込み、クワガーモンはバランスを崩し片膝をついてしまった。

「皆、離れろ！『ベビーフレイム』！」

「『プチファイアー』！」

「『マジカルファイアー』！」

コロモンだったオレンジ色の恐竜みたいな子、ツノモンだった毛皮を着たツノの生えた子、ピヨコモンだったピンクの鳥みたいな子が放った攻撃で、クワガーモンの体が徐々に着火。今ので所々燃え始めている。完全にこつちが優勢みたい：あんな巨大な敵相手に、凄い：！

それにしても：チョコモンだったあの子が最初の位置から未だに動いていない。何か、その小さな手の平を閉じたり開いたり、ピヨンピヨンと軽くジャンプしたり：体の調子を確認しているような動きしかしていない。

そうこうしている間に他の子達はチョコモンだった子の近くに集まっていて、クワガーモンが奇声を上げながら所々燃えていた体を振り回して消火してしまう。ああ、このまま倒せると思ったのに：！

「よーし、もう一度だ!!」

全員でさつきと同じ攻撃をしようとしたその時だった。チョコモンだった子は跳躍し、グルグルと全身を使ってコマのように回り始めた。

「プチツイスター！」

チョコモンが出した竜巻が、他の子達の攻撃によって燃えてしまっていたクワガーモンに少し遅れてヒット。竜巻が炎を纏って、さらに火力が上がる。元々上半身が燃えていたクワガーモンは、竜巻によって全身が燃えてしまった。

そして遂に、クワガーモンはそのまま後ろへと蹈躡を踏み、森の中へと後ろ向きに倒れ込んだ。クワガーモンの姿は、森の木々の中に消えていったんだ。

「やった……」

「太一く!!」

デジモン達が私達の所に帰ってくる。勿論、あの子も私の所にテクテクと歩いてきてくれた。

色々驚いたけど……その雰囲気というか、この子がチョコモンのままなんだって分かって。私はその子を思いっきり抱きしめちゃった。

「……あー、よしよし。怖かったか？」

「ううん……ありがとう」

「どういたしまして……って、苦しいっての!」

私達を守ってくれた……そして、無事に戻って来てくれた。その事が、本当に嬉しい。

でも、安心していたその時だった。

「……チツ、やっぱりか」

「どうしたの、チョコモン？」

「太一!!」

チョコモンが不機嫌そうな顔をして、空ちやんが太一君を大声で呼んだ。私達は、一番森に近かった太一君を見た瞬間、背筋が凍り付くような寒気がしたんだ…だって、森の中から赤い二本の、巨大なハサミのようなものが見えていたから。

森の中から一歩ずつゆっくりと近づくクワガーモン。ゆっくりといてもその重量のせいで足音は隠し切れていなかったから、太一君達はすぐに気づいて私達の方へと走る。クワガーモンはもう疲れ切っているような動きしてるけど…崖に追込まれた私達は、ここから逃げる事が出来ない。

「ど、どうしたら…」

「クソツ…——！」

クワガーモンがその巨大なハサミを地面に突き刺し、私達は巨大な岩ごと崖から落とされることになってしまった。

第四話 爆裂進化！グレイモン

「どうしたら…」

クワガーモンがその巨大なハサミを地面に突き刺そうとする直前、俺は出来るだけ大声で叫んだ。

「クソツ…おい、ゴマモン!!飛び降りてくれ!!」

「ちよ…えっ!?何言ってる…」

「オツケー、任せて!」

「うわあっ!!」

ゴマモンが川に飛び込むのと、クワガーモンによって崖の先端が崩されるのは同時だった。これで川に落ちる前に魚達が何とかしてくれるだろう。

「空っ!」

「光子郎っ!」

「タケルっ!」

空を飛べるピヨモン、テントモン、パタモンはそれぞれのパートナーを助けようとしたが、成長期のデジモンではパワー不足…すぐに力尽きて落ち始めた。

「えいっ!」

今度はパルモンが手の触手を伸ばして岩に掴まるが、こちら辺の岩壁は脆いらしい。掴んだ部分がすぐに崩れる。

「ぐ…ぬぬっ!」

「チヨコモン、下は水だから落ちても大丈夫だよ!だから——」

「うるせえ、黙ってる!」

俺も耳を使って滑空を試みているわけだが…やはり子供一人でも持てるわけが無い。他の子供達より落下が少しばかり遅くなっただけだった。ゴマモン、早くしてくれえ…!

「ッマーチングフィッシューズ!」

ゴマモンを中心にカラフルな魚達が集まり始め、子供達は次々とそ

の魚達の上へと着地。全員が着地し終わり、俺はすぐに崖の上へと視線を向ける。

「おい、あれ!」

「ゴマモン、逃げれるか!」

「急げーっ!!」

さっきのが最後の力を振り絞った攻撃だったのかクワガーモンも川へと降ってくる。ゴマモンの尽力によって押しつぶされることは何とか回避することが出来た。そこで皆が安堵の溜息を漏らす中、結衣はまだ顔を引きつらせていた。

「ふいー、やつと一息つけるな!…結衣?どうした?」

「ね、ねえ…まだ安心は出来ないと思うんだけど」

『え?』

「あつ!」

クワガーモンが落ちたことよって、一時的に川の水位が上昇する。それに流されるように、俺達も近くの陸地まで流されることになった。

何とか濡れるのは回避できないかと思っただが…やっぱそう簡単にはいかねえよな…

☆☆☆

何とか全員無事に近くの陸地に着岸し、ようやく落ち着くことが出来た私達。ずぶ濡れ…気持ち悪い。お風呂入りたいけど、そうも言われてられない。

「…やつと、本当に助かったみたいだな」

「何だったんだ、さっきの魚は…?」

「あれはね、”マーチングフィッシュ”さ!」

「へ…?」

「オイラ、魚を自由に操ることが出来るんだ!」

「そうか、お前のおかげだったのか!ありがとうプカモン、じゃなくて…えつと、その」

「ゴマモンだよ」

「ゴマモン？」

ゴマモン：…そういえば、さつきチョコモンもそう言ってた。姿が変わったから、名前も変わったってこと？

「どうなっちゃったの、トコモンは？」

「今はパタモンだよ！」

「僕達、進化したんだ！」

「進化？なんだ、進化って？」

「普通は、ある生物の種全体がより高度な種に進化することですけど…」

…光子郎君、凄い。四年生でそんな完璧な答え方出来る子、他にはいないと思う。私もそんな的確な答え方出来ないよ？

「そうですね、その進化！わいはモチモンからテントモンに！」

「アタシはピヨコモンからピヨモンに！」

「俺はツノモンからガブモンに…」

「私はタネモンからパルモンに！」

「そして僕は、コロモンからアグモンになったんだ」

「ふうん、とにかく前より強くなったみたいだな。その、進化してもデジタルモンスターなのか？」

「そうだよ、太一と会えて良かったよ！」

「は？なんで？」

「僕は自分だけだと進化出来なかったんだ。きっと太一と会ったおかげで進化出来たんだよ！」

成る程：…もしかして、ここにいる子達は皆、私達と会えたから進化出来たってこと？じゃあ、チョコモンだったこの子も…って、自己紹介してないじゃん、この子だけ。

「ね、君は今なんて名前なの？」

「ん？俺は、チョコモンからロップモンになった」

「ロップモン…もうチョコモンにはならないの？今も可愛いけど、チョコモンも——」

「止めろ、可愛いって言うな。しばらくはこのままだっ」

「ごめんごめん、怒らないですよ」

「怒ってねえ！」

本気で怒ってないのは分かってるけどね。しばらくはこのまま、か
…ってことは、またチョコモンになる時もあるんだ。でも、しばらく
くつて…ロツプモンでいることが普通になるってこと、だよな？じや
あなんでチョコモンになる時があるんだろ？えつと、チョコモンが
ロツプモンになるのが進化で、その逆だから…退化？する時もあるっ
てこと、かな？

「それより、これからどうする？」

「元の場所に戻ろう。大人達が助けに来るのを待つんだ」

「…ハア」

ロツプモンが溜息を漏らした。丈君、さつきロツプモンになんて言
われたか忘れちゃったみたい。あんな非常事態だったから、いちいち
気にしてられなかっただろうけどね。

「戻るって言うてもな…」

「随分流されちゃったし…」

「崖の上に戻るのは、簡単じゃなさそうだぜ」

「じゃあどうしたら良いんだ？どこか道を探して…」

「…丈君、多分ここ、日本じゃないと思うよ」

「ええ!!」

「確かに…少なくとも、キャンプ場の近くじゃ無いのは間違いないな」

「そうですね…植物がまるで亜熱帯みたいだ」

「ホンマや！」

「え、分かるの!？」

「いんや」

テントモン、なんで適当に返事したんだろ…？会話に混ざりたかつ
たのかな。光子郎君は呆れたような反応をしてるけど、可愛らしい
なって私は思った。でも確かに、全然見たことが無いような花ばっか
り…パルモンの頭の花に似てる？

「でも降りてきたんだから、戻る道もあるはずだ！」

「そうね、とにかく戻ってみればどうしてこんな所に来たのか、何か手

「がかりがあるかも」

「ええ、でもさつきみたいなのが他にもいるんじゃない？」

「いるわよ」

「ほらあ…」

「危険は犯したくないな…」

「他の人間は？」

「人間？太一みたいなの？見たこと無いよ、ここはデジモンしかないんだ」

「デジモンしかないって言っても…お前ら結構色んな格好してるよなあ」

「…うん、やっぱりここは日本じゃ無い。クワガーモンみたいな生き物なんて、普通はあり得ないもん。どういうわけか、私達はここに来ちゃったってことだよ」

「確か…ファイル島、でしたっけ」

「本当に島なのか？」

「聞いたこと無い島ですね」

「日本じゃ無いのか…」

「とにかく行こうぜ！…ここでジツとしてもしょうがないよ！」

そう言つて、太一君はどこかへと歩き出そうとしている。それを、ヤマト君が呼び止める。

「おい、どこへ行く気だ！」

「さつき、海が見えたんだよ！」

「海？」

「そう、だから行ってみようぜ！」

…もしここが本当に島で、海が近くにあるんだったら、砂浜にSOSを書いておけばヘリとか飛行機から見ってくれるかも知れない。危険で戻るのにも難しいなら、そっちの方が良いかも。っていうか、明らかに東京ではないのは確か。だったらSOS書く意味も無いかも…それは言うべきじゃ無い。希望が無くなっちゃおう…

「皆、行ってみよう。海に行けば何か分かるかも知れないし」

「そうですね」

次々と太一君の後についていく皆。でも、一人だけまだ立ち止まっている人がいた。

「こういう時は、出来るだけジツとして、大人の助けが来るのを待つんだ。その為にも、本当は元いた場所へ——」

「丈く！早くおいでよく！」

「えっ？お、おーいっ！」

結局、丈君もしっかりついてきていた。

森の脇道を、全員が小話しながら歩いて行く：訂正、ゴマモンだけは川の中を泳いで進んでる。私はロップモンを抱きしめながら、最後尾を歩いていった。さつきもチョコモンだった時に抵抗しようとしていたけど、ロップモンは私がこうするだろうって予測していたのか最初だけしか抵抗はしなかった。

皆に聞こえないように、小声でロップモンに話しかける。

「ね、ロップモン。君なら何か知ってることもあるんじゃないの？」

「何でそう思うんだ？」

「だって、最初に会った時：君は、私達がこの世界に漂流したって言ってなかった？それにデジタルワールドがどうか：ここって日本っていうか、地球じゃないの？」

「：何でそれ、さつき言わなかったんだ？」

「：言えるわけじゃないよ。皆パニックになっちゃうだろうし。荒唐無稽過ぎて信じてもらえないかも知れないしね」

「なるほどな：お前らしい」

ロップモンが何か考え込むような仕草をした後、私の顔を見上げた。

「：本当に知りたいか？」

「：うん。君が嫌だって言うなら、無理には聞かないけど。でも、出来るだけ情報が欲しいの」

「：分かった。だが、今は駄目だ。今夜なら：まあ何とか」

「：ありがとう、ロップモン」

やっぱり、この子は口が悪いだけで根は優しいんだ。

「おう…って、おい!？」

「どうしたの?」

「どうしたって、お前がどうした!? 止めろ、顔を埋めるなっ」

だって、ずっとこうしてみたかったんだもん! ああ、すっごい柔らかくてフワフワしてて気持ち良い…チョコモンの時も思っていたけど、ロップモンになってから抱き心地が凄く良いんだよね。私がつってる中で一番抱き心地が良いぬいぐるみのメメたんよりも良いかも。特にこの耳が良いよね、やっぱりウサギって言えばピヨンって尖った耳が代表的かも知れないけど、ロップイヤーって凄く可愛いからいつか触ってみたいって思ってたんだ。あ、でもロップモンってウサギなのかな? ウサギだよね! だってこんなに可愛らしくて、目もクリクリしてて可愛らしいんだもん!

「えーい、鬱陶しい! 離せて…言ってるだろっ!」

「あつ…:そういうえば、ロップモンって飛べるの? さつきちよつと浮いてた気がするけど?」

「ただ耳で滑空してるだけだ! 飛行は出来ねえよ!」

どうやら飛べるわけじゃなくて、耳で空気抵抗を大きくしてるだけみたいだね。それにしても、飛んでる所も可愛いかったな…:カメラ、持ってくれば良かった。またやってくれないかな?

「お! 見えたよ、海だーい!」

そんな感じで私達がスキンシップ(?) を取っていたら、川を泳いでいたゴマモンがそんな声を上げた。

☆☆☆

海に近づいてきた俺達。足を止めると、どこからか電話の音が聞こえてきた。全員で駆け足で向かっていくと、砂浜の上に立つ複数の電話ボックス。すっげえ不自然な場所に立っていて、結構な音量で「prrrrr」という音が鳴り続けている。これ、公衆電話のくせに電話がかかってくるってどうなのよ?

太一が真っ先に鳴り続けている電話ボックスの扉を開けた途端、音

が止んだ。何か、おちよくらられてる気がするんだが。ムカつくな、これ。ピンポンダツシユされたらこんな気持ちになるだろうな。

「こんな所に電話ボックスなんて…」

「不合理です」

「でも、これはいつも見る電話ボックスだな、普通の」

「あたしん家の傍にもあるわ」

「ということとは、ここは…ここはまだ日本なんだ!」

「日本? 丈、何だそれ?」

「…やっぱり違うかも」

お前はいい加減気づけ。デジモンなんていたらテレビに取り上げられるくらいビッグニュースだろ、絶対。見たことが無い生物しかない時点で日本じゃ無いって分かれ。

「光子郎、十円貸してくれよ!」

「え、何するんですか?」

「決まってるんだろ、電話かけるんだよ家に」

太一その発言が切欠で、それぞれ自宅に電話をかけてみることにしたらしい。だが、結衣は何か考え込むように両手を組んでボーツとしている。

「お前はかけないのか?」

「…そうだね。やってみる」

そうやって結衣も電話ボックスの中に入って、受話器を取る。それにしてもこの電話ボックス、なんで電気が通ってんだ? 明らかにそんなケーブルも見当たらないし、そもそもどうやって建てた、これ。砂浜に建てるなんて、普通無理じゃね?

「…繋がった、けど」

「けど?」

結衣の肩に乗って、受話器に耳を近づける。聞こえてくるのは…やっぱりか。良く聞く電話サービスに似てるけど、わけ分からんこと言ってるやがる。

「結衣さん、どうでした?」

「変な所に繋がっただけだったよ。皆も同じみたいだね」

「ええ。でも、丈さんが…」

「丈君？」

「駄目か…よし、じゃあこれなら！」

うわ…色んな所にかきまわってやがる。金の無駄じゃね？意外と破産するタイプか？

「結構しつこい性格してるんですね」

「丈らしいよ」

「どこにかけても聞こえてくるのは、デタラメな情報ばかりか…」

「もう諦めて移動しようぜ」

「ちよつと待て！こつちからかけられなくても、向こうからかかってくることもあるんじゃないか？さっきみたいだ」

「ここでジツとしても、時間の無駄だよ」

「しばらく様子を見たらどうだと言ってるんだ！皆疲れてるんだぞ！」

これは…ヤマトが正しいな。太一や空はとにかく、ミミやタケルにはたった一日で移動するには厳しい距離だ。休憩がてら、しばらく待つべきだと俺も思う。運動得意じゃ無い奴もいるってことだ。

「太一君、少し休んだ方が良いよ。ヤマト君の言う通りだと思う」

「お腹も減ってきましたね…」

「そうだな、お昼もまだだったもんな…よし、休憩だ、休憩！」

「誰か食べる物持ってる？私が持ってるのはこの…あら？これって…あの時空から降ってきた…」

空が腰に取り付けられていたデジヴァイスを手取る。何だ、皆気づいてなかったのか。結衣も今気がついてらしく、鞆に取り付けられたのを取り外して見ていた。

「おい、食べ物の話はどうなったんだ？」

俺の一言で、話の流れは持ち物の話に戻る。正直お前らの持ち物なんて細かに覚えてはいないからな。ここで確認させて貰おう。

えーつと？太一が単眼鏡だけで、ヤマトはハーモニカくらいだろ？空は携帯医療キット、光子郎はパソコン、デジカメ、携帯電話。ミミと結衣は一番役立つな、本格的なサバイバル用品も入ってる。で、タ

ケルはリュックに一杯になるまで入っているお菓子か。後の食料はミミと結衣が持っていた非常用の缶詰、そして丈が持っている非常食の入ったバッグくらいだ。っていうか丈、お前自分の荷物はどうした？向こうに忘れてきたのか？

ようやく電話ボックスから離れた丈も加わって、非常食を全員で分ける。俺達デジモンの分は割り振られていないが、そこはどうでも良い。結構食料豊富だからな。後々子供達も食料調達していくことになるんだが…ヤバい、久しぶりの調理された飯に目を奪われる。少し離れておくか。つーか、先に木の実でも探しに行かねえと後々不味い。

「ロップモン？」

「気にしなくて良いから、とつとと食っちゃまえよ。俺はその辺に食いもんねえか探してくる」

「ちよ、ちよつと待って」

おい、止めろ。なぜ捕まえる。生殺しに近いから、食いもん持って近づかないで欲しいんだが…意外と力強えな、コイツ。

「…いいよ、食べて」

「は？」

「私の分、半分こにしよう？食べたいんでしょ？」

「…サンキュ」

ホント、良く見てるな。ただ食料を少し長く見てただけだったのに…小学生の観察力じゃなくね？まあ、正直助かったがな…この後の展開を考えれば。

結衣から食べ物を貰い、口に含む。他の子供達には見えないよう、上手く隠している。太一とアグモンが堂々と食べていたことで視線がそつちに言ったのもあるが。

そして、子供達の食事が終わった頃になって…とうとう奴が襲ってきた。

「うわあっ!?!」

「な、なんだ!?!」

電話ボックスが、次々と間欠泉のように噴き出した水流によって吹っ飛ばされる。それを見た俺達は、咄嗟に海とは反対側へと逃げた。

砂の中から現れたのは、巨大な貝。天辺の部分が高速で回転し、砂を巻き上げている。

「シエルモンや!」

「シエルモン!?!」

「この辺はアイツの縄張りやったんか!」

貝全体が見え、その貝からピンク色の本体部分が出てくる。どうやら、縄張りに入ったことで怒ったらしいな。

「皆、こっちへ!」

俺達の後ろは岩壁か…不味いな。それ程高くはないとはいえ、登るのには時間がかかる。そして何より…

「シエルウツ!!」

「う、うわああっ!?!」

「丈!うわっ!?!」

シエルモンの頭頂部から出た水流攻撃。直接的な威力は低いようだが、丈みたく落とされるのが関の山だ。海を泳いでいたゴマモンも水流攻撃で吹っ飛ばされる。

「皆、行くぞ!」 “ベビーフレイム”!」

「プチファイアー…あれ?」

「マジカルファイアー…え?」

「プチサンダー…あ、あ?」

「どうしたんです!?!」

「技が全然出てない!」

最初の “ベビーフレイム” だけがヒットした後、他のデジモン達の

追撃は不発に終わる。その隙をついてシエルモンがまた水流攻撃で俺達を吹っ飛ばそうとする…が、俺は難なく回避。この攻撃、そこまですりゃ無さそうだな…吹っ飛ばすことは出来てもあまりダメーじにはならない。ガブモン達は攻撃しようとした隙を突かれたみたいだが。

「エアショット！…あれ？うわっ！」

「ポイズンアイビー！…あら？きやあ！」

パタモンとパルモンもやられ、残るは水流攻撃から復帰したアグモンと俺だけ。水系の成熟期にどれだけ効くか分からないが…やれるだけやってみるしかねえ！

「『ベビーフレイム』！」

「『プチツイスター』！」

クワガーモンにも効いた、あの竜巻で火力を上げた一撃がシエルモンの顔面にヒット。露骨に嫌そうな顔してるから、火は苦手らしい。水は火に強いんじゃないのか。携帯獣はそうだぞ？

「いいぞ、アグモン！」

「なぜアグモンとロップモンだけが!？」

「すんまへん、腹減って…」

「え？」

「力が出ない…」

「そうか、アグモンはさつきご飯食べたから！」

「でも、ロップモンは…まさか結衣さん？」

「あ、あはは…さつき分けちゃった」

「成る程…」

「じゃあ、他のデジモンに戦う力は無いってのか！」

俺も全快ってわけじゃないけどな。何も食べてないよりはマシだ。俺が戦えるようになったことで、アグモンの進化フラグが変わっちゃまうかもと思ったんだが…やっぱ、黙ってみてるわけにはいかねえ。実際、さつき結衣が飯持ってこなきゃこっそり森に行って適当に漁ってくるつもりだったんだ。

「…アグモン！俺達だけで何とかするぞ！」

「分かった、太一！」

「待つて！太一君、ここは連携しないと！ロップモン、アグモンに合わせて！」

「おう、やってやるよ！」

太一と結衣がシエルモンの左右に同時に走り出す。それによってシエルモンはキョロキョロとし始め、その隙に俺とアグモンは懐へと入り込んだ。

「『ベビーフレイム』！」

「『プチツイスター』！」

二度目の高火力攻撃。顎の下辺りを焼かれ、シエルモンも水流攻撃は出来ない。水流攻撃は頭の上から出してるから、懐には出せないようだ。前足を使って俺達を攻撃するが、横っ飛びして難なく回避。ス पीードも遅いし、上手くやればノーダメージで奴を退けるくらいは出来るはずだ！

その時、加勢しようとしてるのか、太一が電話ボックスの残骸から棒状の部品を手にとって突撃しようとしているのが見えた。進化フラグだし、止めないべきか…いや、流石に危険すぎるな。原作通りに行く保障は無いんだ、どうにかして止めねえと。

「太一君、待つて！私達じゃ攻撃しても殆ど効かないよ！」

「じゃあ、どうしろって言うんだよ！」

「落ち着いて！相手を良く見て、アグモンに指示を出して！サッカーと一緒だよ！」

「サッカーと一緒？」

…ま、原作通りに行かないのは当たり前前だな。俺達がいるんだから。俺が動く前に結衣が止めてくれて助かった。ナイスだ結衣。

「ロップモン、上！その後は右に飛んで！」

「おう！『ブレイジングアイス』！」

「氷…？いや、冷気？」

結衣の指示で、シエルモンの頭の触手が来ているのを確認した俺は口から冷気の塊を出して凍り付かせながら粉碎してみせる。続いて前足による踏みつけ攻撃も、指示通りに動いて紙一重で躲す。足下が

ろくに見えていないんだ、俺達の場所を完全に把握できているわけじゃない。俺も頭上のコイツの行動が完全に把握できないが、結衣のサポートもあつて簡単に躲すことが出来る。

その後もシエルモンの動きを伝えることで、俺のサポートをする結衣。相手が鈍重なことであつて、一撃も食らうことは無い。攻撃が当たらず苛つているのか、シエルモンは俺に集中して攻撃してくる。

「よし：アグモン！アイツの顔に攻撃だ！」

「分かった！『ベビーフレイム』！」

太一が指示を出し、アグモンの火球がシエルモンの顔面にヒット。やっぱ俺よりアグモンの方がパワーは上だな。相性の問題なのかもしれないが、奴は炎の方が嫌がつているように見える。太一も、結衣が言ったサッカーと一緒にという意味が分かったみたいだな。ただ攻撃する場所言っただけだが。

サッカーでも司令塔という存在が必要で、チームの状態に合わせて指示を出す役割が存在する。まあ、太一はどちらかというとシユートを決めるフォワードだと思うんだが：司令塔じゃないからといってチームの状況が分からないというわけでは無い。自己中心なのとリーダーシップは違うってことだな。

「いいぞ、もう一発行け！」

「『ベビーフレイム』！」

「ロップモン！」

「任せろ！『プチツイスター』！」

正面から繰り出した『ベビーフレイム』に合わせて、俺はシエルモンの横側に飛んで高速で回転、三度小さな竜巻で火力を上昇させる。「シエルウウツ……！」

今の攻撃で、シエルモンの頭の上にある触手はかなりボロボロだ。顔や前足も所々火傷している。

「す、凄……！」

「皆、今のうちに荷物の所に急げ！」

「ええ、ピヨモン達にご飯をあげましょう！」

他の奴らも、シエルモン出現時に放置された自分達の荷物元へ向

かったようだ。シエルモンのタゲは俺達四人に集中しているから、このまま戦えればガブモン達も参戦、一気に形勢逆転出来る！

アグモンの進化は、ひとまず考えないことにする。紋章を使った初進化なら難しいが、成熟期への進化ならまだ機会はいくらでもあるはずだ。つーか、正直そこまで考えてたらやられる気がする。

「アグモン、後ろに回って攻撃だ！」

「分かった！」

「は？後ろって貝…っておい！」

「ロップモン、正面から水が来る！」

「チツ…！」

結衣の指示でギリギリ水流攻撃を回避できたが…アグモンの奴、本当にシエルモンの後ろの貝殻部分に回ってやがる！太一の奴、何考えてんだ!?絶対効かねえだろ！アグモンも何素直に聞いてんの!?絶対効果はいまひとつ…ってか効果は無いだろ！

「『ベビーフレイム』！」

貝殻部分に攻撃するアグモン。しかし貝殻には罅も入らず、シエルモンはそれを好機と見たのか、本体が貝殻の中へと引っ込んでしま

「シエルウウツ!!」

「うわあっ！」

「くっ…!?!」

最初に砂の中から出てきたときにやっていた、貝殻の上部分を高速回転させて砂を巻き上げ、貝殻の近くにいたアグモンは大きく吹き飛ばされる。俺もシエルモンに近づこうとするも風で後ろに下げられる…クソツ、今だけはデカイ耳が邪魔に思える。風の抵抗ハンパネエ。前世でムーンウオークなんか出来なかった俺が今出来るように…ってそうじゃねえ。というかこれはウオークっていうよりランだ。ダツシユだ、これ。

これ、どうすりゃ良いんだ…?俺の技じゃこの砂嵐を突破なんか出来ねえし。アグモンと合わせ技しても火力が足りねえ。まあアグモ

ンだけがシエルモンの背後の方に行っちゃまったからアイツだけ孤立してんだよな…もうさ、コイツ放置して良くね？今のシエルモンは砂嵐を起こすのに集中しているんだ、あの貝殻に引きこもってる間は周囲が見えてねえはずだろ？

「アグモン、一旦離れるぞ！結衣、太一！お前らもだ！」

「わ、分かった…！」

「ここまで来て逃げるのかよ！」

「馬鹿野郎!!誰のせいでこんなことになったと思ってるやがる！」

「なっ…なんだと!?!」

「お前の出した指示で、アグモンが無駄な攻撃したんだろうが!そのせいで奴にこんな攻撃させる隙を作った!アグモン、お前も考えなしに言うこと聞いているからこうなってるんだぞ！」

「無駄な、攻撃だと…!?!」

「ご、ごめん…」

「ちよつと、今は言い争いしてる場合じゃ…!?!」

こんな言い争いを…いや、俺がカツとなっていなければ気づけたのかも知れない。シエルモンの回転がゆっくりになってきていることに。貝殻の中から、触手が何本も伸びてきていたことに。

「なっ…うわっ!?!」

「太一っ！」

「何っ!?!」

太一が触手に絡め取られていくのを見て、ようやく俺はシエルモンの変化に気づく。シエルモンは太一を捕らえたことで優位に立ったと思ったのか、本体が姿を現す。クソッ、やらかした!結局捕らえられちゃった…!

「チッ！」

「ベビー…うわあっ！」

「ロップモン、アグモンが！」

「アイツもかよっ…！」

アグモンも太一を助けようとして近距離で必殺技を使おうとしたが、シエルモンの前足によつて抑えつけられる。これじゃ俺達が一緒に戦った意味ねえじゃんか！

どうする…いや、落ち着け。成長期の俺じゃ、シエルモンを怯ませるのが精一杯だ。アグモンを助け出すにはシエルモンの体勢を崩させる必要がある。つまり――

「ロップモン、触手を凍らせるしか無い！太一君を助けて！」

「！…おう！」

結衣も俺と同じ考えか。まあそれしか出来ることがねえんだが。アイツの体勢を崩すにはパワーが足りてないなら、触手を凍らせて太一を助けることに集中する。そうすればシエルモンもこつちに気をとられてアグモンの拘束を緩めるかもしれん。

「シエルウウツ!!」

「なっ…結衣、危ねえ！」

「きやつ…！」

俺がシエルモンに飛びかかろうとしたその時、シエルモンは頭から水流を横薙ぎに放った。咄嗟に結衣を庇い水流から守るも、二人まとめて後方まで吹っ飛ばされてしまう。

押し倒したつもりだったんだが…軽すぎて無理だったか。また耳が余計に空気抵抗を受けちまった…

「うわあっ！」

「きやあっ！」

「ううっ！」

俺達以外の、加勢をしようとしていた他の奴らも今の薙ぎ払いで吹っ飛ばされた。俺達が戦っている間に飯は多少食って回復したみたいだが、このまま遠距離で水流ぶつ放されたら近寄れねえ…！

「み、皆っ…うわあっ！」

シエルモンが触手の力を強くし、捕らえた太一をさらに締め上げる。

「た、太一いつ…!」

「アグモン…っ」

突然、太一の腰にあるデジヴァイスが光り出した。同じようにアグモンの体も光り始める。これは、原作と同じ…!

「アグモン、進化——!!グレイモン!!」

シエルモンが、踏みつけていたアグモンがグレイモンに進化したことよって体勢を崩し、触手で捕らえていた太一を離す。

「プチツイスターッ!」

「うわ…っ!」

太一を竜巻で安全に着地させ、俺はグレイモンとシエルモンの方へ目を向ける。二体のデジモンは力と力のぶつかり合いをしていた。シエルモンは打開策として頭部からの水流攻撃を放つがグレイモンは紙一重で躲し、口から炎攻撃をぶつける。

水流攻撃が止んだ瞬間、グレイモンは自身の頭をシエルモンの体の下に入れ、掬い上げるようにシエルモンを高らかに吹っ飛ばす。そしてあの必殺技が放たれようとしていた。

「メガフレームッ!!」

巨大な炎弾をその身に受け、シエルモンは海の遙か彼方へと吹っ飛ばされていった。

す、すげえ…これが、成熟期のかか…!

「アグモン!戻ったんだ、大丈夫か、アグモン!」

「たいちい…腹、減った…」

グレイモンはアグモンへと退化し、こうしてシエルモンの脅威は去った。

☆☆☆

「もしもし、もしもし！」

丈の奴…壊れた電話ボックスに何で話しかけてるんだ。人工物を見て期待を持ってしまったからなのか…？

「ここにいる理由はなくなったな」

「ああ…」

「シエルモンも、完全に倒したわけではありません。また襲ってくる前に、ここから離れた方が良いと思います」

「確かにな」

「だったら、やっぱりあの森に戻ろうよ！僕らが最初にやって来た森だよ、あそこで助けを待とう！」

まだ諦めて無かったのか…丈って結構堅物だからな。この冒険を通じて柔軟な発想も出来るようになったんだっけ。

「前にも言ったけど、私達は崖から落ちて川を下ったのよ？そう簡単には戻れないわ！」

「クワガーモンは嫌!!」

「ここに電話があったってことは、誰か設置した人間がいるはずですよ！その人間を探した方が良いかもしれません」

「な、なるほど…」

「私もその意見に賛成」

「よし、それで行こう！」

「僕は太一の行く所だったら、どこにでも行くよ！」

「ありがとよアグモン！」

「あ、ごめん皆。もう少し待って」

「結衣君？どうしたんだい？」

そういやさつきから結衣が黙々と何かやってるな。あれは…成る程、砂浜にSOSね。普通の無人島での遭難だったらそれで正解なんだろうが…

「結衣…」

「成る程、救難信号か！これなら僕らに誰か気づいてくれるかもしれ

ない！」

「うん。これから向かう場所にこうして残しておこうと思っ
てね。こ
れでよし、っと」

「それじゃ、出発しようぜ！」

俺を抱えて、結衣は太一達の後続く。その手は、僅かにだがまだ
震えていたような気がした。

第五話 蒼き狼！ガールモン

辺りが暗くなってきた頃、俺達は湖へと到着した。途中でモノクロモン同士の縄張り争いに巻き込まれそうになったりしたが、互いに夢中になっていたからか逃げることは成功した。あのモノクロモン達、海に落ちていったみたいだが…弱肉強食の世界にはよくあることだ。俺達は気にせず先に進むことにした。

「あれって…」

ここはあの路面電車のある湖だ。路面電車のある離れ小島に目をやると、その路面電車のライトが突然点いた。湖に建っている鉄塔のいくつつかも電気が通っているような音がしている。

「ライトが点いた！」

「路面電車だ！」

「どうしてこんな所に…」

「ねえ、誰か中にいるんじゃないの？」

「行ってみようぜ！」

急いで路面電車へと向かう俺達。しかし、この路面電車は何で急にライトが点いたんだ？急に電力が供給されたようだったが…どこから？人為的に供給されているのか？アニメ勢の俺には、この路面電車に関して持っている情報は少ない。デジモンの漫画って読んだこと無いから一度は読んでみたいと思ってたんだよねー、もう叶わないけれども。

「誰もいない！」

「ホント…」

「まだ新しいですね…」

「ちゃんとクツシヨンきいてる！」

「しかし分かんねえなあ…昼間の海辺の電話といいどうなってんだ？」

「まさか突然動き出すとか？」

「そんなわけないだろ？線路なんて無いんだから」

「この中なら眠れそうね」

「その前にそろそろ飯にしまへんか？」

「そうだね。この辺なら魚とか果物とか、食料には困らなさそう」

「じゃあ役割分担しようぜ」

この路面電車を宿代わりにして、俺達はそれぞれ食料を調達して行くことになった。湖で釣りなどで魚を捕まえる班と、その辺の森で果物やらキノコやらを採集する班、あとは薪を集めて焚き火の準備をする班か。

まあ、大体子供達が魚釣りか薪拾い、俺達デジモン組は食料調達で別れたけどな。毒キノコとかはこの島で生活していた俺達の方が詳しいし。子供達には料理の方を期待したいぜ：なんせ、生で食べることの方が多かったからな。腹を壊さないとはいえ、せめて焼くぐらいはしたかったが：幼年期の俺達じゃ無理つてもんだ。手、ねえもん。「ロップモン、どう？」

「ああ、順調だよ。結衣、そっちは？」

「こつちも焚き火の準備が終わった所。アグモンが火を点けてくれたから簡単だったよ」

「そっか。んじゃ、そろそろ飯だな」

「うん：ねえ、さつき言ってた話なんだけど」

「あー：もう少し待ってくれ。結構長い話になるからな。皆が寝静まったらにしようぜ」
「分かった」

その後、夕飯は焼き魚に焼きキノコ、果物をそのまま食べた。やっぱ焼いてるだけでも十分うめえ！ああ、幸せだ：明日の朝飯もこれだけあれば何とかなるだろ。調理した飯が食えるって最高だな！

ちなみに、子供達は「せめて米があれば」とか何とか不満を訴えていた。ま、今までの飯を考えれば当然だよな。

☆☆☆

「空、タケルはヤマトのことをお兄ちゃんって言ってるけど、あの二人

名字違うよな？・何でなんだ？」

「私、知らない」

「二人とも、そんなに気になってるなら本人に聞いたら良いんじゃない？」

「結衣先輩…でも」

家庭の事情だから聞いちゃ行けないかもしれないけど…：こうやってコソコソ話される方が私だったら嫌な気持ちになる。マナーとしてなっていないのかも知れないけど。

「そっか、それもそうだな。おーい、ヤマト！」

「なんだ」

「ちよつと、太一！」

「タケルは何でお前のことお兄ちゃんって呼んでるんだ？」

凄い…：皆に聞こえる声で直接言うとは、思ってたなかった。まあ皆大なり小なり気になってたことだろうし、問題ないよね。現にヤマト君とタケル君は気になってないみたいだし。

「ああ、その事か。俺達、兄弟なんだ。親が離婚してるから名字が違うんだよ」

「そうだったのか…：だつてさ」

「太一、貴方はもうちよつとデリカシーを持った方が良いわ」

「は？…：どういふことだよ？」

「ふふ、まあまあ。スッキリして良かったじゃない」

「はあ…：結衣先輩ってそんな感じだったんですね」

「そんな感じって？」

「もつとクールというか…：運動も勉強も出来てて、文武両道とかそういう言葉がしっくり来ていたので、意外で」

私ってそんな風に思われてたの？そんなこと無いと思うんだけど…：お姉ちゃんには可愛い物が好きなのバレてるから子供っぽいって言われる。そこが知られてなかったら周りからはそんな風に見えるってことかな？

「私は別に何でも出来るってわけじゃないよ。空ちゃんだって文武両道じゃない」

「そんな、結衣先輩に比べたら私なんて」

「謙遜しなくて良いのに。私の場合、勉強はそれなりでも、スポーツはそこまで出来ないよ」

「え、でも確か結衣さんって運動出来るイメージなんだけど。走るの速いし」

「そんなことないけど…あ、合気習ってるからじゃない？スポーツはからきしだよ。空ちゃんは色々出来るよね？サッカーとか、バドミントンとか」

護身術じゃ！とか言ってお爺ちゃんに覚えさせられたんだよね。お姉ちゃんだって何故か薙刀術教わってたし…あんなの護身と関係無いと思う。だって薙刀なんて身近に無いから、護身にならないもん。

「私は…スポーツやってる方が、楽しいですから」

「…そうなんだ。ね、今度サッカー一緒にやろうよ！太一君もね？って言ってもあんまり相手にはならないかも知れないけど」

「…ふふ、結衣先輩なら太一にも勝てるかもしれないね！」

「何!?俺だつて負けねえよ、サッカーなら結衣さんにだつて！」

「あはは、私だつて負けられないよ？」

「うーん…」

そんな会話をしていると、後ろから丈君が上を見ながら歩いてきた。何してるんだろう？

「丈先輩、どうしたんですか？」

「方角を確かめようと思つてね。でも北極星が見つからないんだ」

「…ホントだ、知ってる星座が見当たらないです」

「おつかしいな…北極星が見えるのは北半球だけだろ？」

「じゃあ、ここは南半球つてこと？」

「…ううん。南十字星も見当たらないね」

「つてことは一体…」

「ふわあ…」

「眠いの？パタモン」

そんな話をしていたら、パタモンが欠伸を一つした。他のデジモン達も何人かはそろそろ眠いみたい。色んな姿をしているから、生態も変わったってことなのかな…？その辺も後で聞いてみようっと。

「それじゃ、そろそろ寝るとするか」

「交代で見張りをした方が良くないですか？」

「そうだな、順番を決めよう」

「女の子はやらなくても良いだろ？」

「タケルもだ」

「僕、平気だよ！」

「いいから、お前はゆっくり休め」

「でも寝るって言ってもお布団とか無いのにな…」

ミミちゃんのそんな一言を聞いて、太一君がガブモンに視線を向けた。また何か変なことしようとしてる？

「おい、ガブモン…毛布代わりにその毛皮貸してくれよ…俺、すっごく気になってたんだよな。ガブモンのさ、毛皮の下ってどうなってるの？」

「うわわ、それだけは〜！」

「よせ！」

ガブモンを庇うように、ヤマト君が太一君を突き飛ばしちやっただい一君もすぐに毛皮離してたから、ほんのイタズラというかからかっただけなんだろうけど…

「何すんだよ！」

「嫌がってんだろ！」

「突き飛ばすことないじゃないか！」

「や、やめて二人とも！」

取っ組み合いになりそうだったけど、タケル君のおかげで助かった…これは、今後もこの二人は喧嘩しそうな予感がするなあ。

「さて、最初の見張り番は…」

「俺がやる！」

「次は俺だ！」

「わ、分かった。光子郎がその次、最後が僕だ。さあ皆、路面電車の中で寝るんだ」

「あ、ちよつと待って太一君。アグモンも」
「え？」

見張りに向かおうとした太一君とアグモンを呼び止める。二人には謝らないといけないことが一つあるから。

「ほら、ロップモン。海でのこと、ちゃんと謝って」

「はあっ!? な、何でだよ！」

「当然でしょ。あんなに失礼なこと言ったんだから」

私が言っているのは、シエルモンとの戦いの時にロップモンが二人に言ったこと。無駄な攻撃とか、考え無しの指示がどうか言っていたことだ。

「ぐっ…確かに、言い方が悪かったのは認めるよ。でもな…！」

「ああ、分かっている…あれは俺が悪かったよ」

「僕も…ごめん、ロップモン」

ロップモンが何か言い訳を言おうとしていると、二人の方から先に謝ってくれた。

「い、いや…俺の方こそ、何て言うか、その…悪かったな。でもな太一、俺達デジモンはお前たち人間のパートナー次第で力が発揮できるか決まるってことは、忘れないでくれ」

「あ…えーつと？」

「要するに、監督次第で選手は強くも弱くもなるってこと。ね？」

「ま、まあそういうことだ」

「なるほどな！分かった、気をつける！」

こうして二人と仲直りすることが出来た私達。二人に見張りを任せて路面電車で休むことになったけど…少し遅くまで起きてないからね。

☆☆☆☆

よし、そろそろ良いか。

全員…といってもさつきヤマトとガブモンが出て行ったが、他の皆が眠ったのを見越して体を揺さぶる。

案の定結衣は俺を抱きかかえて寝てたので、こうすればすぐに気づくだろう。結衣はすぐに目を開け、皆が起きないようにこっさり外に出た。その後、湖の傍の森の方まで結衣は歩いて行く。

「この辺なら大丈夫かな？」

「…ああ、近くにデジモンはいない。湖も遠くないし、大丈夫だろ」

結衣の腕から飛び降り、俺は結衣に向き直る。結衣も視線を合わせようようにしゃがみ込んだ。ようやく落ち着いて話が出来るからな。

「で、聞きたいことは？どこから話せば良い？」

「この世界のこと、デジモンのこと…それと、君のこと」

「俺のこと？」

「うん。君がどんな子なのか…教えて欲しい。私は相棒、なんでしょ？」

成る程、親睦を深めようってことか。そこは俺も賛成だな。

「分かった。でもお前のことも教えてくれよ？」

結衣が頷き、聞く姿勢に入ったのを見て俺はその場に座り込む。これだけ小さかったら立っていても座っていても、大して変わんねえだろ。

「じゃあ、まずはこの世界のことから話そう。ここはデジタルワールド、お前たちの世界…リアルワールドとも呼ぶか。そのリアルワールドの影とも言える世界だ」

「世界の…影？」

「ああ。この世界はお前たちの世界のネットワークと密接に関わっているんだ。例えばこの世界の文字…あれはそっちの世界で言う所のプログラムのようなものだ。プログラミングが出来る奴ならここと別の場所を直接繋ぐゲートを作ったりとか出来るだろう」

確か光子郎がそんなことやってたよな？まあ正確にはデジタル

ワールドとリアルワールドの間にネットワークの世界があるって感じなんだろうが：詳しいことは俺にも分からん。アニメやゲームしかしてないからな、この世界の設定は多少知っている程度だ。デジタルワールドの誕生とか歴史とか、俺には分からん。

「つまり…ここはネットの中の世界ってこと？」

「大体その認識で間違ってるねえ。ただ、ここで間違ってもらいたくねえのは、ここはゲームの中ではないってことだ。ゲームの主人公みたいなのはまず起こらねえ」

「…ここでもし怪我をしたら？」

「リアルワールドと同じだと思ってくれて良い。治す方法も大体一緒だと思ってくれ：言いたいことは分かるな？だがデジモンは違う。デジモンの場合、死んだらデジタマになる。今俺が死んだとしても、来世では俺の記憶を、心を受け継いだデジモンが生まれてくるんだ」
「心を…でも」

何か言いたそうな結衣の前に、俺はハッキリと言う。

「だから、非常時になったら俺が自分を盾にしても守ってやる」

「止めて!!そんな話…：聞きたく、無いよ」

「…悪い。だが、お前を守るのは俺の役目なんだ。そこだけは分かってくれ…なーに、無闇に命を投げ出すようなことはしねえよ」

「…：…うん。絶対だよ」

「ああ」

…確かに、こんな話をするのは誰だって嫌だろうな。俺だって逆の立場だったら…：デジモンだけが死ぬってのは、悲しい。しかも俺のパートナーは小学生なんだよな…：そんなの、一生心に残る傷になっちゃう。タケルがそうだったしな…：絶対、そんなことにならないようにしないとな。

にしても、この今にも泣き出しそうな顔は…：まるで…：いや、今は良いか。

「デジモン達は、このデジタルワールドで弱肉強食の生活をしてきた。

縄張り争いとか、群れ同士で協力したりな。そうして生き残ってきた
デジモンは、やがて進化し成長していく」

「進化…進化って、具体的にはどんな現象なの？」

「どんな現象って…？どういうことだ？」

「定義は光子郎君が言ってたのに間違いは無いと思う。でも、進化って本当は長い年月で行われていくものでしょ？でも、君達デジモンはこの一日だけでも進化してる。それって私達が知ってる進化とは違うってことじゃない？」

「あー…そこはそういうものだって思ってた貫うしかねえな。本来はデジモンだって長い年月で進化していく。ただ、俺達は例外だ」

「例外？」

「そ、例外。お前たち人間のパートナーがいることで、その力を借りて進化出来る。勿論、それは一時的だ。時間をかけなければ進化したままいれるってわけじゃない。アグモンがそうだったろ？」

「うん…私達の力って、何？これと関係あるのは分かったけど…」

そう言いながら結衣はデジヴァイスを取り出す。そこまで分かってるのか…まああれだけ太一があの時光らせていたら分かるか。

「人間とデジモン、それぞれの思いの力だって俺は思ってる。昼間の海で言うなら、アグモンが太一を助けたって強く思ったから進化したんだ」

「じゃあ、私がロップモンに進化して欲しいって思ったら進化するの？」

「簡単には出来ないだろうな…心の底から願う感じって言ったら良いのか？ま、進化が必要になった時にや俺も進化するだろうよ。要は慣れってことだな」

「そうなんだ…アグモンみたいに大きくなるの？」

「いや…デジモンってのは進化先が分からねえ。言い方によっちゃ、どう生きるかによって進化先が決まるんだ」

「…？ごめん、良く分からない」

「デジモンは体がデータで構成されてる。周囲の環境、戦いの経験とか…そういうデータを取り込んで進化するんだ。大元は俺達の体な

んだが…ワリイ、俺も上手く説明出来ねえ」

「…例えば、火のデータを取り込んだら、炎みたいなデジモンになるってこと?」

「お、おお…ま、そういうことだ。お前、よく理解できたな」

やっぱ頭良いだろコイツ。勉強出来るだろ。さつき空も才色兼備って言ってたし。まあ容姿は良いのは分かってたけどな。所謂優等生だな?お前。丈より頭良いとか…言わないよな?お前、ダメだぞ!アイツから頭良いってキャラを取ったらただのビビりだろ!

「あー、話を戻すとだな…デジモンにも色々いるんだよ。小さかったり大きかったりな」

「そっか…大きいのもアリ?でも…」

「見た目も同じく色々だ。可愛いのだったり、クワガーモンとかみたいに凶暴そうなのだったり…あと強さもか。成熟期でも弱い奴だつて…」

「ロップモンは…ううん、きっと大丈夫だよ。可愛くなるよね?」

「は?いや…え?可愛さを俺に求めるのは間違ってるぞ?」

「うーん…このまま大きくなってくれるなら…乗りたいな」

な、なんかコイツ自分の世界に入ってるのか…?やたらと俺を抱きしめたがるのはぬいぐるみか何かと勘違いしてるんじゃない?ヤバい、今更になってコイツがパートナーになってことに危機感を覚えてきたぞ。俺はテイマーズのロツテリアと同じ扱いにはなりたくないぞ!

そんなことを考えていたその時だった。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…!!

「地震!?!」

「いや、これは…湖に戻るぞ!!」

太一とアグモン、もうやらかしたか!その前に戻るつもりだったんだが…仕方ねえ、速く戻らねえと!今頃アイツがキレて暴れ始める頃だ!

急いで湖の畔まで来ると、すでに中央の路面電車のある小島へと繋がる唯一の通路が壊されていた。しかもあの小島、ほとんど陸から遠ざかっているな…小島の先には水色の体に頭が黄色い蛇みたいなデジモンがいる。

「結衣さん！何でこっちに…」

「ヤマト君達もこっちにいたんだ…何があつたか分かる？」

「それが、突然アイツが湖から現れて…」

「でもおかしいよ！シードラモンは大人しいデジモンのはずなのに…」

「その詮索は後だ！今は何とかしてあそこまで行かねえと！」

「くっ…タケル!!」

「おい、待て！」

俺は耳を使ってヤマトの手を掴み、湖に飛び込もうとするのを止める。

「おい、離せ！」

「焦るな！湖に飛び込むのは自殺行為だつての！」

「ヤマト君、まずは途中まで走って行こう！多分その方が速いよ！」

「ほら、行くぞ!!」

小島は俺達から離れるように動いている。そんなに広くない湖とは言え、ここから泳いでも時間がかかっちゃうからな。それだったら途中までは走った方が速い。

小島が湖の中に建っている鉄塔にぶつかり、動かなくなった。そしてシードラモンもまた小島から攻撃している皆によって足止めされているようだ。

「よし、ここからなら…！」

「ロップモン、水面を凍らせることは出来る？」

「いや…多分無理だな。水面がシードラモンのせいで波打ってるし、何より俺のブレイジングアイスじゃ表面しか凍らせられないだろうから…踏んだら結局湖に落ちるな」

「そっか…じゃあ、泳ぐしか無いね」

「よし…今行くぞ、タケル!!」

「あ、待って！……毛皮が水に濡れてしまうけど……えい！」

ヤマトに続いてガブモンも湖に飛び込もうとしている。そして結衣もまた、湖に飛び込もうとしていた。

近くに丸太か何かあれば、風を送って漕げたり……いや、無理か。あれじゃ水の上で丸太が回転するだけな気がする。進めたとしても少しずつだろうな……ん？

「結衣！」

「どうしたの、ロップモン？」

「この木だ！この木に登ってくれ！この上からなら、お前を掴んで滑空して、上手く鉄塔を足場に飛んで行けるかもしれないねえ！」

「……確かに、行けるかも。うん、やろう！」

結衣と俺は近くの木の上に登り始める。この作戦は俺がどれだけあの滑空状態を保てるかにあるが……やってやる！

数分後、無事に木の上まで辿り着いた結衣と俺。結衣が俺の両手を掴み、準備完了だ。

「よし……結衣、思いつきり行け!!」

「うん!!」

結衣が力強くジャンプしたのと同時に、俺は耳を大きく広げる。

くうっ……やっぱ、重いっ……!!いや、だがこれくらいなら耐えられるぞ!!

作戦通り、落下地点を鉄塔に目指して飛んで、落ちそうになったらその鉄塔を足場にして結衣がジャンプするというのを繰り返して、何とか小島にぶつかった二つの鉄塔の片方に辿り着いた。しかし、もう足場に出来そうな部分がないぞ……いや、でも十分ショートカット出来たんだ、後は着水した後で急いで泳げば……!

「ロップモン、耳を閉じて!!」

「お、おう……な、何いつ!？」

結衣の指示通りに耳を広げるのを止めたが、このまま落下すれば鉄塔にぶつかるような位置だった。しかし結衣はその鉄塔を掴み、それ

を軸に一回転。まるで：そう、体操選手が鉄棒でグルグルやるアレだ。落下の反動を使つて、そのまま上に飛んで：俺は偶然にも最も高い位置になった瞬間に耳をまた広げた。結果、さつきよりも高度があり、距離も若干稼ぐことが出来たらしく、無事に小島へと辿り着いた。

何だこれ。小学生が何でこんなこと出来るんだよ…？おかしくね!? マグレなのか!? 鉄棒得意つてレベルじゃねえだろ、これ!!

「っ…!」

「ゆ、結衣先輩…凄い」

「皆…無事で良かった。それより、あのデジモンはどこに行ったの?」「ヤマト!!」

俺達が何とか頑張つて辿り着こうとしている間に、一悶着あつたらしい。タケルが湖に落ちてゴマモンの背中に乗っていることから、ヤマトとガブモンが囿になったんだな。で、ガブモンはこうしてここにいてつてことは、シードラモンに吹っ飛ばされたか。

ヤマトはシードラモンの尻尾の先にグルグル巻きにされて捕まっていた。このままでは絞め殺されてしまう…が、これは例の進化チャンスだ。

「ガブモン、行け!!」

「そ、そんな…俺には…」

「このままじゃヤマトがいなくなるんだぞ!! お前の、パートナーだろ!!」

「いなく、なる…そんな、もうヤマトの吹くハーモニカが聞けないなんて…あの優しい音色が聞けないなんて…! ヤマトおー…!!」

ガブモンの体と、ヤマトのデジヴァイスが光り始める。

「ガブモン、進化——!!ガルルモン!!」

ガルルモンは、助走をつけて大きく跳躍。シードラモンの尻尾の、ヤマトの傍を通り過ぎると、何かに斬られたようにヤマトが解放された。

「これが……進化」

「ヤマト!!こっちまで泳いで来い!!」

シードラモンはヤマトの時と同じように、ガルルモンを捕らえようとする。しかしガルルモンの毛皮はミスリル並の強度を誇っていると言われ、逆に捕まえようとしていた奴の体の方がどんどん傷ついていく。

「ガルルモンの毛皮は、伝説の金属ミスリル並の強度なんや!」

「何ですか、伝説の金属って?」

「伝説やさかい、わても見たこと無いさけ知りません…」

「物知り何だか物知りじゃないんだか、良く分かんない奴だなテントモンって」

「んなアホな…」

「ミスリルってのはレアメタルの一種だ。鉄の合金で硬度を増してる鋼よりも、さらに硬い金属。シードラモンにとっちゃ、全身刃物の相手を捕まえようとしているってことだ」

「…詳しいんだね、ロップモン」

「何だよ、ロップモンの方が詳しいじゃんか」

「んなアホなあ!」

シードラモンは捕まえるのは無理と判断したのか、ガルルモンに向かって口から氷のブレスを吹きかける。するとガルルモンは体のあちこちがどんどん凍ってしまう。

「あれは、シードラモンの必殺技 “アイスアロー” や!」

「ガルルモン!!」

「“フオックスファイアー” !!」

ガルルモンもまた必殺技の蒼い炎を吐き：正面からシードラモンの「アイスアロー」を打ち破る。そのままシードラモンは「フオツクスファイアー」を喰らい、水面へと沈んでいった。

☆☆☆

「ガブモン！」

「何とか無事だったみたいだね！」

「何だよ、進化出来るなら始めからしろよ」

「ガブモン、ありがとう助けてくれて！」

「いやあ、そんな…」

「それに、お兄ちゃんも助けてくれてありがとう！」

「べ、別に…」

「照れ屋なんだから！」

「それはお前だろ！」

そんな微笑ましい会話があったから作ってみた：私達はゴマモンの「マーチングフィッツシリーズ」で岸まで戻して貰って、そのまま休むことになった。夜中に戦うことになっちゃったからね：皆、疲れているからしようが無い。数時間だけでも寝て、ご飯を食べてから出発かな。

「結衣、お前も休んどけよ。あと、これでも手に塗っとけ」

「これは？」

「塗り薬だ。近くに薬草があったから作ってみた。お前、あの時怪我しただろ？鉄棒でもねえのにあんな無茶するからだぞ、まったく…」

あの時：鉄塔で宙返りした時に、手の皮が破れてた。誰にもバレていないって思ったけど、そんなこと無かったみたい。ちゃんと私のこと気にかけてくれてる子がいてくれた。

「…ありがとう、ロップモン」

「おう！それじゃ、俺も寝るからな」

「何処行くの、君はこっちだよ」

「お、おい！やめ…」

「シート：あんまり大声出したら、皆が起きちゃうよ」

「てめっ、謀ったな…！良いから離せ…！」

「私、抱き枕が無いと寝れないんだよね…というわけで、お休み…！」

「お、おい!?!」

ロップモンって…一体、何者なんだろう。

他のデジモン達が知らないことも知っていたり、この世界のことだって…人間のいるリアルワールドのことを知っていないと分からないはず。でも、ただのデジモンにそんなこと分かるのかな。まして、ロップモンは成長期だし…

あ、でもデジモンって寿命とかで死んだらデジタマに戻って、記憶が引き継がれるんだっけ。だったら、ロップモンの…前世？が世界の理とかに詳しくあったってことなのかな。

でも…インターネットとか、鉄棒とか…私達の世界にあるものの名前を、なんで知ってるんだろう…？この世界にも、そういったものがあるのかな。でも、そうじゃなかったら…何者なの？

ロップモンを抱き枕代わりにしてそんなことを考えながら、私は眠りについた。

第六話 灼熱！バードラモン

シードラモンとの戦闘から数時間後。俺達は今、森の中を進んでいた。時間は多分昼前って所か？仮眠して、すぐ起きて、朝飯か昼飯か分からない食事を食って出発。それからずっと森の中を進んでいるわけだが…サバンナはいつになつたら見えるんだ？

「…？ねえ、今何か聞こえなかった？」

「…ああ、上だな」

結衣の言う通り、というか俺はさつきから聞こえてはいたんだが、今俺達の上空を何か飛んでる音がした。目視で黒い物体が、木々の隙間から確認出来た。これが恐らく黒い歯車だろう…あれの行く先がピヨコモンの村周辺で良いのか？

「歯車みたいだったな」

「空飛ぶ円盤じゃないの？」

「歯車型の隕石だったりして…」

「何にしても、良い感じのするもんじゃないな…」

空飛ぶ円盤、歯車型隕石…結構ぶつ飛んだ発想するんだな。小学生だからこれくらいが当たり前か？テレビの見過ぎだろ。

「あ、タケル。そこ足下気をつけろ」

「え？あ、ホントだ！ありがとうロップモン」

タケルが足下の木の根っこを避けるようにして進む。この森、たまに落とし穴みたいな部分があるんだよな。腐ってるというか、脆い根っこがある。それこそタケルくらいの体重でも穴が空くくらいに脆い奴が。スツカスカだからか、風の通り抜ける音が微かに聞こえる。多分これはロップモンというデジモンならではの聴力のおかげだろうな。

「気をつけるよ、タケル」

「うん、分かった」

「さあ、行きましようか」

「そうだ、泣き言言ったって始まらないからな」

「そうは言っても、どっちに言ったら良いかなんて誰にも分からない

し…」

「それはそうだけど…」

「アタシは空がいてくれればそれであーんしん！」

太一達が話し合っている中、ピヨモンが空に体をスリスリと擦りつける。やってることが犬みたいだな…鳥なのに。

「そんなあ…100%安心されても困るんだけどな。責任取れないよ」

「ひやくぱー？」

「い、良い良い、気にしないで」

「せきにんとれ？」

「良いってば、気にしないで」

じやれ合っている二人は置いといて…何となくで進み始める俺達。成り行きで見守っているが…歯車飛んでいった方角とは違うんだよな。じやあメラモンに埋め込まれる歯車は別ってことなのか？結構な数ばらまかれているはずだからな、出来れば何とかしたいが…どうすれば良いのか分からん。やっばデビモンぶっ倒すしかないのか？

「…あー森から抜けるぞー！」

ヤマトの見る先に、やっとお目当てのサバンナが見えてきた。うん、やっば変な感じするな。サバンナに無数の電柱が建っている様は。

「これって、テレビで見たアフリカのサバンナってとこに似てる…」

「え？じやあ、ライオンとかキリンとか出てきちゃうのか？」

「さあ…そんな普通の奴が出てきたらまだマシだけどな」

「ここにはそんな動物いないよ？」

「その通り、ここにはデジモンしかいてません」

「デジモンしかない、か…」

「…ライオンにキリンに似たような奴ならデジモンにもいるけどな」

「そうなんですか？」

「ああ。最も、ここにいるかは知らねえけど」

デジモンって動物モチーフの奴も多いからな。というかライオン

とかよりヤバいはずの恐竜型がすぐ近くにいますけど。

「…私も光子郎君が言うサバンナをテレビで見たことあるけど、電柱なんて無かったよ」

「はい、僕が見たのもそうでした」

「きつと、人間が近くにいるんだ！そうに違いない！」

「ええー？でも、海岸の公衆電話とか、湖の電車みたいなことだってあるじゃん」

「いや、違う！絶対ゼツタイ人間がいるんだって!!」

「まーだ言ってるよ…いい加減その妄想は止めた方が良いでしょう」

「こら、そんな口聞いちやダメだよ」

コツン、と俺の頭に結衣の拳が優しく当てられた。お前は俺の母親か？

「…あんまりさつきみたいなこと言っちゃダメだよ」

「は…?」

俺にだけ聞こえるくらいの声量で結衣にそう言われた。

「フンフンフン…ここは一体どこでしょう？ジャーン!!」

方位磁石を取り出したミミを、全員で見守る。あれ、でもここって確か…

「いや、何コレ!!」

「…砂みたいに見えるけど、よく見たらこれ鉄の粉だ。磁石にくっつきますよ」

「やっぱり私達、とんでもないところに来ちゃったのかしら」

「それにしても暑いですね…早く水を確保した方が良くないですか？」

「そうだね、このままじゃ脱水症になっちゃう…あ、そうだ。ロップモンなら氷作れない？」

「…仕方ねえな。『ブレイジングアイス』!」

結衣の腕から飛び降りて、その辺にあった鉄の棒を掴み、冷気の息を吹きかける。すると俺の頭と同じくらいの大きさの氷の塊が形成されていた。

「ほれ、出来たぞ」

「すごい、綿飴みたい！」

「ちよつとまった！ガブモン、これを鉄の棒から切り離してくれ」

「ええ？でも、多分バラバラに割れちゃうよ？」

「それで良いんだよ、どうせ全員欲しいだろ？一口大くらいが丁度良い」

「分かった！ええい！」

ガブモンがその両手の爪で氷の塊を切り刻み、キレーイに全員に一口大の氷が行き渡るようになった。まあ、16等分だからホントに小さいけどな。

「うっひゃー！生き返る〜！」

「でもどうするよ？俺だって技を何度も出すのに限界がある。早く水源を探さねえと」

「森の湖に戻って、水を十分に確保して来るのもアリかもしれないよ？」

「僕もそう思う。戻った方が良いんじゃないか？」

ピヨコモンの村まであとどれくらいあるのかも分からないからな。まだサバンナ入ってから十分程度しか経ってないし…今後のことを考えたら、ちゃんと水分を確保しておく必要があるな。原作だったらピヨコモンの村で確保してたんだろうが…

「うーん、もうちよつと進んでみようぜ！何か見えるかも知れないだろ」

「そうね、まだ森を出てからそんなに経ってないし…」

「そうしよう。いつでも湖には戻れるしな」

子供だから体力が切れるかと思ってたんだが…いや、寧ろ逆に体力有り余っているのかもしれないな。一部を除いてだけど。

「結衣せんぱい、氷欲しい」

「僕も〜」

「…っお前らあ！結衣じゃ無くて俺に言えよっ！」

全く、ガキみたいな奴もいたり大人っぽい奴もいたり…ホント、統一性がないメンツだな。

☆☆☆

進み始めてしばらく、先頭を歩く太一君が何かを発見した。単眼鏡を取り出して、村を見つけたと叫んだ。それを聞いた丈君が、やっぱり人間がいるんだと言っているけど…予想通りというか、人間の姿は無かった。

でも、そこはピヨコモン達が沢山いた。空ちゃんのパートナーデジモン、ピヨモンの幼年期の姿。沢山の花が踊っているみたいで、可愛い子が、いっぱい…！それに、ピヨモンがピヨコモン達に色々教えてあげてるのも可愛い…

「空く、ピヨコモン達が皆にご馳走してくれるって〜！」

「ほ、ホント!？」

「ひゃっほく!!」

「ピヨコモン様大感謝!」

「私、お腹ペコペコ!」

「腹一杯食っちゃおうぜ!」

「一体どんなご馳走なんでしょうね?」

「…あくまでピヨコモンにとつてのご馳走だからな。まあ食べねえもんじゃないってのは確かだ」

「お家も全部ピヨコモンサイズ…可愛い」

「おい、結衣?聞いてんのか?」

「あ、うん。ちゃんと食べれるなら大丈夫じゃない?」

ピヨコモンのご馳走か…きつとピヨコモンが食べやすいような一口サイズのものとか…それを食べてる所、早くみたいな。夕食が待ち遠しい。

「お水〜!噴水がある〜!」

そんな時、タケル君が噴水を見つけた。良かった、ここで水分補給出来るね。それにピヨコモン達に聞けばこのサバンナもどきがどこまで続いているのかも聞けるし。

「この辺りは、皆見晴山に水源があるの。とつてもおいしいんだ」

「これがあの有名な、見晴山の美味しい水ですわ！」

「見晴山？」

「「あの山！」」

「あの山？」

ピヨコモン達が見る視線の先に、大きな山があった。結構遠い…でも水路があるってわけじゃないし、どうやって水をここまで引っ張ってきたんだろう？地下に水路があるのかな？

「とりあえず水分摂取だ、お前も飲んでけよ」

「あ、うん」

皆が噴水の傍に集まって水を飲もうとして…そしたら。

「うわっ!?何だ!？」

「まだお水飲んでないのに!」

「皆、大丈夫!?怪我してない!？」

「う、うん…」

噴水から突然火柱が立ち上った。噴水にあった水は多分蒸発してしまっている…何で急に？

「だ、大丈夫!あつちに池があるから!」

「行ってみよう!」

ピヨコモン達の案内で向かった先には、大きな池だったと思われる場所があった。しかし水は一滴たりとも残っておらず…池に元々浮かんでいたであろう、またしても人工物らしき船があった。

また、人工物…これが、この世界がインターネットの世界ということを物語っているように思えてしまう。自然と機械が不自然にこちゃ混ぜになっているのって、インターネットの情報がこつちにも流れ込んできているからだと思えちゃう。

「村の中にある井戸なら!」

ピヨコモン達と共に慌てて村に戻り、井戸にロープ付きの桶を投げ入れる。でも普通は聞こえるはずの水に落ちるポチャンという音じゃなくて、ボツという何かが燃えたような音がした。

「ボツ?」

「とにかく上げてみる!」

「気をつけて、さつきみたいになるかも」

「あ、ああ…あ!?!」

太一君がロープを引き上げると、先には桶がついておらず…焼け焦げたような痕があった。

「太一君、離れて!」

「うわっ!?!」

先程と同じように井戸の中から真上に向けて火柱が立ち上った。一番近い位置にいた太一君も間一髪で無事だった。

「そういえば、さつき見晴山に何か落ちるの見た!」

「…ああ!俺達が見た、あれか!」

「黒い歯車、ですね」

「でも、見晴山に歯車が落ちたからって…どうして?」

「何が起こってるんだよ…」

「この辺りは全て見晴山の水が水源なの。だから見晴山に何かあったら水は全部干上がっちゃう!」

「そうなんだ…」

「でも見晴山にはメラモンがいるの!」

「見晴山はメラモンが守ってくれてるはずなの!」

「見晴山だな、見てみようぜ!」

太一君が単眼鏡で見晴山を観察し始める。すると、見晴山の頂上が突然、炎が燃え上がった。私達でも視認できるくらい、大きく。そして見晴山を真っ直ぐ下りてくる、ギラギラと光る何かがあった。

「な、何だ!?!」

「メラモンが山から下りてくる!」

「メラモンが山から下りてきた!」

「どうして!?!」

「いつものメラモンじゃない!」

『燃エテイルー!!俺ハ、今!燃エテイルンダゼー!』

メラモンのものと思われる狂気じみた声が、辺り一帯に響いていた。

☆☆☆

「皆、逃げろーっ!!」

俺達はまず、あの池の所にある船へとピヨコモン達を避難させることにした。

「皆、急いで!!」

「足下に気をつけて!」

子供達が協力し合い、ピヨコモンの避難誘導をする。俺達デジモン達もそれを手伝っていたが、一体だけ見当たらないことに俺は気づいていた。

「空ちゃん、ピヨモンは?」

「それが見当たらなくてっ…!まさか!」

村からこの船へ向かう場合、そこそこ高い崖を下りなければいけないのだが…アイツ、ピヨコモンの誘導の為に崖の上にあった。ピヨコモンに仲間意識があるピヨモンは、ピヨコモンを助けようと必死になっている。

「あのバカ、仲間を助けてるんだ…ピヨモン!!」

「空ちゃん!!」

「あ、おい!お前らは戻れ!!」

ピヨモンの下へと空が、それに続くように結衣と俺も走り出す。そしてついに、ピヨコモン達が崖を下り終わった頃、ついにメラモンが姿を現した。

「あっ!ピヨモン、後ろ!!」

空の叫びでメラモンがすぐ後ろにいることに気づいたピヨモンだったが、メラモンの攻撃を掠めてしまい、崖をゴロゴロと転がり落ちる。

「ピヨモーン!!!」

空は走るスピードを上げ、スライディングしながらピヨモンをキヤッチした。

「空ちゃん、ピヨモン！大丈夫!?」

「は、はい…っ、ピヨモン！」

「空…ピヨモンのこと、助けに来てくれた？」

「もちろんだよ…大事な、仲間だからね！」

「ありがとう、空！」

「…！お前ら、話は後だ！来るぞ！」

メラモンが掌に炎を集め、攻撃体勢に入ってやがる…何とか空と結衣だけでも逃がさねえと！

「ピヨモン、行くぞ！」

「うん！今度はあたしが空を助ける!!」

ピヨモンが先行してメラモンへと向かい、俺は崖をピヨンピヨンと飛び移りながら向かう。少し遅れる形にはなるが、ピヨモンが注意を集めてくれるうちに不意打ちしてやる！

「マジカルファイアー」！「マジカルファイアー」！

炎属性の攻撃ではやはりメラモンを倒すのは不可能みたいだな…今度は俺の番だ!!

崖を登り切り、下からメラモンを見上げる形になった俺は、口から冷気を放つ。

「ブレイジングアイス」！

「グツ……バーニング、フィスト」!!

「うあっ!？」

「ううっ！」

炎を集めた拳を俺に叩きつけ、そのまま反対の手に溜めた炎の塊をピヨモンに投げつける。俺は躲しきれず崖から落とされてしまい、ピヨモンはまともに食らって墜落してしまう。

くそっ、思ったより速えし痛え…！俺の攻撃ならまだ効果はあるつてのに…けど、まだ掠っただけだ、皆と力を合わせればやれる！黒い歯車さえ、メラモンの中にある黒い歯車の位置さえ分かれば…！

さっきのピヨモンみたいにゴロゴロと崖を転がり、何とか耳を使って途中で止まることに成功した。

「お、おい、マジかよっ…！」

「《バーニングファイト》!!」

アイツ、俺に追撃してきやがった…！だがさっきと違って距離があるし、今度は躲せ——

!!

「結衣、危ねえっ！」

「きやっ！」

あの野郎、狙ってやがったのか!?俺と結衣が直線上にいる瞬間に撃ってきやがった!っていうか、何で結衣がまだこんな所にいるんだ?さっきの場所から殆ど動いてねえ…それどころか、ほぼ崖の真下だぞ?空もまださっきの場所にいるし…

「結衣、ここは危ねえぞ!とつとどこから離れろ！」

「っ…結衣先輩!早く行きましょう！」

「う、うん…分かった」

…?何か、変だな。アイツ、いつもなら俺より先に空を連れて行くはずなのに…

とにかく、結衣は空と一緒に太一達の方へと走って行った。どうやら、アグモン達が応援に駆けつけてくれているみたいだな…よし、だったらまだ時間はあるな。

確か、さつきその辺に…いた!

「おい、ピヨモン!大丈夫か?」

「うう…」

「流石にまともに入っちゃったからな…無理ねえか」

すぐにピヨモンを起こせば進化タイミングが早まるかと思つたが、無理そうだ。だったら、原作通りにアグモン達と一緒にピヨモンが起きるまで時間稼ぎするしかないな。あの野郎、さつきのお返ししてやる。

「そーいや、まだ試してないことがあつたな…やってみるか!」

まず、*「プチツイスター」*の要領で回転を始め、その回転の最中に*「ブレイジングアイス」*を使う。デジモンって俺みたいに必殺技が二つあるやつがいるから、一人合わせ技みたいなことができないか試してみたかつたんだよな。上手くいけば、氷の竜巻みたいなのが出来るはずだ。メラモンには水氷系の技が聞くのは間違いない!

「行くぞ…*「プチツイスター」*!…からの、*「ブレイジング」*…うおっ!」
回転で竜巻を起こすことには成功したが、口から冷気を出すのが威力調節できず、俺はあらぬ方向へと吹っ飛んだ。

これ…調節出来ねえな。同時使用はやっぱ無理か…出来たら色々出来そうなんだけどなあ…

「*「ベビーフレイム」*!」

「*「プチファイアー」*!」

「*「プチサンダー」*!」

「*「エアショット」*!」

「…あ」

やっべ…間に合わなかつた!メラモンを火炎系の技で倒すには、メラモンの炎吸収能力を超えるパワーで勝つしかない。しかし、成長期四体の攻撃で成熟期のデジモンのパワーを上回るはずがなく…原作通りメラモンはアグモン達の攻撃を吸収して大きくなる、はず…?

「おいおい…こんなデカくなんのかよ…」

デカすぎるだろ…!最初はまだ大人の人間と同じくらいだったのに、見た感じもうすぐグレイモンと同じくらいになるんじゃないか?

「燃エテルゼエ——ッ!!!」

「っ…ヤベェ!」

飛び降りやがった!このままじゃ下にいる俺達も…潰される!

そんな時、ある方向から光が見えた。それは、電話ボックスがあった海や、路面電車のあった湖の時と同じ現象。勿論、ある方向というのは…アイツがいた場所だ。

「ピヨモン、進化——!!バードラモン!!」

ピヨモンは灼熱の巨鳥となり、メラモンを崖の上へと押し上げる。そして一度距離をとり、再度突撃を仕掛ける。

メラモンも黙っていない、*「バーニングファイト」*を何度も連発しバードラモンを迎撃するが、バードラモンはそれでも進んでいく。

「バードラモン、頑張ってーっ!!!」

「*「メテオウイング」*!!!」

バードラモンから放たれた炎の連弾を、メラモンは吸収しようとした。しかし体は耐えきれず、やがて元の大きさにまで縮んでいき…メラモンの体の中から、黒い歯車が飛びだし、上空で粉々に砕け散った。

☆☆☆

「ハア…」

「どうしたの? ロップモン」

「いや、ちよつとな…」

「ちゃんと食べれるよ?」

「いや、そうじゃなくて」

メラモンが正気を取り戻し、元の見晴山へと帰って行った。もう日が暮れており、約束のピヨコモン達のご馳走が今日の前にあるのだが…これは、やっぱ何かの種なんだろうか？あの変に真面目な丈でもよく咬めば食べれないことも無いとか言っていたが…あれか？ヒマワリの種みたいな感じ。いや、前世でもヒマワリの種がどんなのか見たことねえから実際そうか分からねえけど。

「じゃあ、昼間のこと？」

「ああ、まあな…今回何も出来てなかったからな、ちと反省中だ」

「そっか…あれ、何か失敗したような感じだったけど、何やろうとしてたの？」

「『プチツイスター』と『ブレイジングアイス』を合わせたら強力な技になると思ったんだが…結果はご覧の通りだよ。『ブレイジングアイス』だけ使ってれば良かったぜ…」

「…多分、それじゃ倒せなかったよ。グレイモンとか、ガルルモンからのパワーが無いとどっちみち倒せなかったと思う。時間稼ぎくらいにはなったかもしれないけどね」

まあ…他にやろうとしてたのは、パタモンの『エアショット』と『ブレイジングアイス』を合わせることくらいだったんだが、多分結衣の言う通りだったな。時間稼ぎが出来るならそれでも良かったしな。ピヨモンが起きるまで時間稼いどけば何とかなつたわけだし。

「そういうやさ、お前あの時変じゃなかったか？」

「…というところ？」

「いや…ほら、俺がお前を庇った時。俺はてつきり空を連れてあそこから離れたもんだと思ってただけ…」

「…そう、だね。そうすれば良かった」

「…？思いつかなかったのか？ちよつと意外だな」

「そんな時も、あるよ」

結衣はそう言って、横に座っていた俺を持ち上げそのままいつもの体勢に入った。って、いつもの体勢って認めたら俺が人形みたいじゃねえか！

「おい、まだ飯食ってる最中だろ！つーか俺をぬいぐるみ扱いすんなっ」

「このままでも食べれるでしょ？」

「そういう問題じゃ……！」

「お願い。今日だけ、このままでもいいさせて」

俺の背中に隠れるように顔を埋める結衣。少し、体が震えていることに今ようやく気づいた。

……そう、か。まだ、小六なんだもんな。一番大人っぽい結衣でも、まだガキなんだ。

それを、本当に今更だが……ようやく、俺はそれを身をもって実感した。

第七話 電光!カブテリモン

ピヨコモンの村で一泊し、翌日。サバナナをとことん歩き続け、辺りに緑がちらほら見え始めた。多分、明るいうちにアンドロモンの工場へと辿り着けるだろう。

「うう〜……もうダメ〜」

「もう、一歩も…歩けないよお」

「限界かな…」

「ずーっと歩きっぱなしだもん」

「よし、ここで休憩しよう」

ミミヤタケルにしては頑張った方だろう。パルモンやゴマモンもへばっているようだな…まあ、暑いのが苦手だろうし仕方ない。俺も何度氷を作る羽目になったことか…お陰で俺は腹ペコだよ、全く。

全員が各々休憩している中、光子郎が小さな岩に座ってパソコンを取り出しカタカタと何かやっている。確か、こっちに來てからは起動しなくなったって聞いてたけど…光子郎のパソコンって何が切欠で動くんだった?途中からよくパソコンを弄ってた気がするが。

「はあ…やっぱり動かないよな」

「そういう時は、こう叩けば直るって!」

「うわわわ、止めて下さいよ!」

光子郎からパソコンを奪い、バンバンと力強く叩き始める太一。光子郎は慌ててパソコンを取り返した。何やってんだよ、太一…それ、パソコン内のデータが消し飛ぶだけじゃないか?

「俺は、お前の為を思っ…」

「それは分かるけど、誰だって大切にしている物を他人に触られたくないでしょ?」

「というか、パソコンは叩いちやダメだよ太一君…」

「ちえっ…」

おい、コイツ反省してねえぞ。これで光子郎のパソコンが壊れたらお前のせいだぞ。

太一ってよくパソコンとか叩くよな…確かディアボロモンの時と

かも叩いてフリーズさせてたし…この癖、どうにか直せないかね。そうすれば将来ディアボロモンと戦う時に助かるんだが。

「…あれは！」

「あー、太一待って！」

「どうしたんだろ太一？」

「トイレだろ」

「光子郎君、パソコン壊れてない？って、そもそも動かないんだっけ」「はい……あれ？」

またカタカタとパソコンを弄っていた光子郎の表情が変わる。そしてパソコンからもピピツ、という電子音が聞こえてきた。おおぅ…こ、これは何と懐かしい音だ。自然界ではそうそう聞く機会など無いだろう。人間界を思い出させてくれる音だ。

「やった！直ったぞ！…でも、バッテリーがゼロになっているのに動いている…」

「…それ、壊れたんじゃねえの？」

「そ、そんな…」

「おーい、皆〜！」

…壊したかもしれない張本人が、ある場所で俺達を呼ぶ。声の方を向くと、太一とアグモンの背後に黒い煙が見えた。よく見れば、煙を出しているのが鉄っぽい何かであることが分かる。

そこにあつたのは、かなり大規模な工場だった。

☆☆☆

太一君達が見つけた工場に入ってみることにした私達。不法侵入だけど、誰か出会えるかもしれない。悪い気もするけど、仕方が無いということになった。

「ねえ、何作ってるの？」

「何だろ…調べてみないと分からないな」

「調べるなら、人がいるかどうかかも調べようよ！…これだけの工場なら絶対誰かいるはずだ！」

今までなら丈君のこの口癖のような言葉も、今回ばかりは説得力があった。何せ、これだけの設備があるんだから。誰も反対はしなかった。

二手に分かれて調べることになり、太一君、空ちゃん、丈君、私の四人とそのパートナーデジモン達は奥にどんどん進んでいくことにし、他の皆は手前から一部屋ずつ見ていくことになった。

「誰かー?」

「誰か、いませんか?」

「誰もいないのかしら…」

「そんなことはない、機械を動かしている人間がどこかにいるはずだ！」

「あれ?」

大きめの声を出しながら進んでいく私達、するとピヨモンが足を止めて首を傾げた。

「どうしたの、ピヨモン?」

「何か聞こえる!ね、ロップモン?」

「ああ、ピヨモンの言う通りだ」

ピヨモンとロップモンがそう言うので、耳を澄ませてみると…どこからか、低い、男の人のような…誰かの呻き声が聞こえてきた。

「人の声かな?」

「行ってみよう!」

「ロップモン、ピヨモン、声はどっちから聞こえる?」

「うーんとね、あっち!」

「だな」

…何か、ピヨモンに任せてサボっているように見えるのは私だけ? とりあえず進んでみると、すぐにある部屋を見つけた。そこには何か…人とは思えないけど、人型の何かが倒れていた。これも…デジモンなのかな?

「何かしら…機械の歯車に巻き込まれているみたいね」

「ろ、ロボット?」

「ロボットじゃない、アンドロモン!」

「へ？これもデジモンなのか？」

「そう、しかも良いデジモン！」

良いデジモン…やつと良いデジモンに会えた。今までは凶暴だったり、正気を失っていたりしてゆっくり話したりする機会もなかったから、今回はちゃんと話してみたいな…って、このアンドロモン、下半身が空ちゃんの言う通り歯車に巻き込まれてしまっているみたい。

「それに、凄く進化したデジモン！」

「進化したって…グレイモンとどっちが上なんだ？」

「断然、アンドロモン！」

「グレイモンがもう一回進化して同等レベルだな」

「どっちにしる、人間じゃ無かったってことか…」

グレイモンがもう一回進化…確か、昨日の夜にロップモンが教えてくれたっけ。今のロップモン達が成長期で、グレイモンが成熟期…その次が確か、完全体？だったはず。じゃあこのアンドロモンも完全体なんだ。

「助けてあげよう？」

「ああ！」

「そうだね、皆で引っ張ってみよっか」

ロボットみたいなデジモンだから、かなり重そうだけど…多分、これだけ人数がいれば引っ張り出せるはず！

「ちよつと待て、引っ張るより壊した方が速くないか？」

「え？」

「壊すって…アンドロモンをか!!？」

「なわけあるか！アンドロモンが挟まってる、そこら辺の歯車をだよ！」

「でも、どうやって壊すの？いくらピヨモン達でも、いくら攻撃しても…」

「アグモン、ピヨモン、炎で攻撃だ。その後に俺が冷やしたら、また攻撃してくれ。それを繰り返せば脆くなる」

「んー？よく分からないけど…分かった！」

そうか、熱して冷やせば壊れやすくなるってお姉ちゃんから聞いた

ことがある。熱すると膨張して、そこを急激に冷やすと部分的に収縮するのが原因とか何とか…金属は伸び縮み出来るから壊れにくいとも言ってた気がするけど…あれ？

「ちよ、ちよつと待って！そんなことしたら、アンドロモンも無事じゃすまないんじゃないか？」

「やっぱ引つ張った方が速いんじゃないか？」

「…やっぱダメか？」

「…実は最初から分かってたでしょ」

ロップモンってこんな危ないこと考えたりするんだ…よく考えたらメラモンの時も、躊躇無く氷で攻撃したりしてたもんね。あれだつてメラモンの弱点だから大怪我させちゃうかもしれないのに…もしかして、自分より強いデジモンにはそこまで効かないって考えてるのかな？

そんなわけで、結局全員でアンドロモンの体を掴んで引つ張ることに。でもやっぱり見た感じロボットっぽいからか、凄く重い。四人と八体がかりでも本当にちよつとずつしか動かせなかった。いや、ゴマモンとかロップモンはちゃんと引つ張れてるのかも怪しかったけど。

「せーのっ…！うわっ！」

「太一、大丈夫？」

「あ、ああ…」

「このレバー、何だろ？」

「…何も起ころないみたいだな」

アンドロモンを皆で引つ張ってる時に、太一君がすっぱ抜けて後ろにあつたレバーを押しちやつたけど…特に何も起ころなかった。

で、ようやくアンドロモンを完全に歯車の隙間から引つ張り出すことが出来た。

「やったーっ！」

「……………」

「起きないね、アンドロモン」

「こういう時は叩けば…！」

「それはダメだつてば！」

空ちゃんと丈君と私の三人がかりで太一君を止めたけど、その時にゴーンって音がした。ふとアンドロモンの方を見たら…アグモンが叩いてた。太一君の真似しちゃったかあ…

「おまつ…馬鹿野郎！」

「へ？」

「機械は叩くもんじゃない！」

「そうよ！叩いたから、余計壊れちゃったかもよ…」

「どうしよっか、これでアンドロモンが壊れてたら…」

しかしその時、アンドロモンの目が開いて、いきなり立ち上がった。

その手には空ちゃんの片足が掴まれている、空ちゃんは逆さに宙ぶらりんになってしまった。大人の男の人…いや、それ以上に大きい…！

「きやあつ！何コレ!？」

「空ちゃん!!」

「シンニユウシヤ、ハツケン…」

侵入者発見…？もしかして、敵だと思われてる？

「何するんだ！」

「空！マジカルファイアー！」

「きやあつ！」

「うおつ…と！」

ピヨモンがアンドロモンの後頭部に攻撃したけど、大した聞いた様子も無い。反撃とばかりに空ちゃんを投げてきたけど、太一君とアグモンがしっかりとキャッチしてくれた。良かった…でも、安心してばかりもいられない。何とかして逃げなくちゃ！

「あいつは良いデジモンじゃなかったのか!？」

「そのはずなんだけど…」

「じゃあなんで!？」

「うう…」

「そんなことより、早く二人を助けなきゃ！ロップモン！」

今、二人は壁際にジワリジワリと迫込まれてしまっている…早くどうにかしないと、二人が…！

「…！アグモン、天井を狙うんだ！」

「…いや、俺達は逃げる準備だ」

「そんな…ロップモン！」

「上を見てみろって」

「上…？」

「『ベビーフレイム』！」

アグモンの攻撃が、アンドロモンの真上に直撃して、天井に吊してあった鉄骨が次々と落ちてきた。アンドロモンはその下敷きになり、身動きがとれないみたい…

「ほらな？アイツらだって、やるときはやるのさ」

「う、うん…」

「よし、今のうちに逃げるぞ！」

☆☆☆

やらかした!!

太一のレバースイッチ忘れてた！アレのせいで黒い歯車が埋め込まれちまうんだった！やっぱり時間かけてでも歯車だけを壊せば良かった！

「今度は何!?!」

「ブレーカーが落ちたのか？」

アンドロモンから逃げている最中に、急に停電した。これは、確か…光子郎がやったんだ。ってことはすぐに点くだろうから問題ないな。

そんなことを考えていると、後ろの方から足音が聞こえてきた。チツ、もう脱出したのか。思ったよりも速いな…

「どうしよう…」

「暗いから、アイツにも俺達の姿は見えないよ」

「そ、そうか？」

「息を殺して、静かに移動しよう」

いや。アンドロモンは暗闇でもある程度近づけば見えるはずだ。

しかしだからといって、音を立てながら逃げるのは意味ないしな…

ん？アンドロモンって何で暗闇でも太一達を確認出来るんだ？もしかしてサーモグラフィーなのか…？だったら、対処できるはずだ！
「っておい、結衣！降ろせ！」

「…何で？」

「良いから！急がねえと攻撃されて…！」

「…スパイラル、ソード！」

「やべっ！皆、その角を曲がれ!!」

俺達が飛び込むように角を曲がった瞬間、後ろの突き当たりの壁に何かが凄い勢いでぶつかった。スパイラルソードって確か、手を高速回転させてるアレだよな？何でたったそれだけでこんな威力が出るんだよチクシヨウ！

「あ、電気が…」

「ここで戦うのは不利だ！どっか広い場所まで逃げろ！」

「抱えられてる奴が言うな！」

それは俺じゃ無く結衣に言え！俺だって好きで抱えられてるわけじゃねえつつの！何でかさつきから力強く抱きしめられてて身動きとれねえんだよ！

「結衣、降ろせて！」

「やだ」

「これじゃ今みたいに攻撃されても守れねえ！」

「やだ」

「っ…俺が咄嗟に動けねえとお前が怪我すんぞ?！」

「それもやだ」

「だぁー！っ!!お前は子供かー！っ!!？」

「…まだ子供だもん。それとロップモンうるさい」

そうだった、コイツまだ小六…ってこの下りは前にやったよ！

走りながらそんな会話していたら、っていうか俺は走ってねえけど、とにかく広い場所に出れた。が、動けるのは通路と通路を結ぶ狭い橋だけ、下はかなりの高さだ…ここじゃまだ戦えねえ。

「だから助けられない方が良かったんだよ！」

「叩いたりするから！」

「あのな！今もの凄く立て込んでるんだから、そう言う話は後にしてくれよ！」

「スパイラル、ソード！」

「皆、外側に！」

手すりにぶら下がるようにして、スパイラルソードを回避する。アイツ、確実に当たるように低空で放つてきやがった…流星はアンドロモン、頭良いな。

「よつと！」

太一が真後ろにあった何かの運転席に乗って、クレーンを操作する。すると見事にクレーンの先のアンカーがアンドロモンの後頭部のパーツに丁度引つかかり、空中へと吊し上げた。いやいや、何で操作出来るんだよお前。まあ助かったから良しとするけどさ。

「太一、掴まれ！」

「サンキュ、つと！よし逃げろ！」

「ここは危険だ！」

「皆に知らせなきゃ！」

「ロップモン、ピヨモン、ヤマト君達の場所分かる？」

「ちよつと待ってる…」

俺やピヨモンの聴覚でヤマト達の場所を探る。話し声をするのは上の方、音の響きからして工場の外…多分工場の屋上の方に全員集まってる。いや、光子郎とテントモンだけ今屋上に着いたみたいだな。

「上だ！屋上に全員いる！」

「私も聞こえたよ！」

「よし、急ごう！」

屋上へと向かっている途中で、ブツンっていう何か切れた音、そして何か着地した音が聞こえたが…っていうか、この音は何だ？ガガガッ…って、何かを掘っているような…？くそ、工場内だと音が反響するからうるさくて仕方がない！

「おーい、皆ーっ!!」

「何か見つかったか？」

「逃げろ！アンドロモンが！」

「アンドロモン？」

ヤマト達と合流できたと思ったその時、俺達とヤマト達の間の地面からアンドロモンが下から穴を掘って出てきた。この音かよ!?

「シンニユウシャ、ハツケン…『ガトリングミサイル』！」

アンドロモンの胸の部分が開き、二つの顔面付きミサイルがヤマト達の方に発射された。それぞれ横に逃げるが、タケルだけが残されて

：

「や、やだ〜っ!!」

「タケル!!」

「俺に任せて！ガブモン、進化——!!ガルルモン!!」

おお…ガブモン、いつの間に自由に進化出来るようになったんだ？ガルルモンに進化してタケルに迫っていたミサイルを蹴り飛ばし、上空で爆発…したのは一つだけ、もう一つは俺達の方に向かってきた。ミサイルの口(?)が開き、小さなスピナーが回転して名前の通りガトリング弾で俺達を攻撃してくる。

「うわわわっ!？」

「結衣、おい！」

このままじゃやられちゃうつてのに、こんな時でも結衣は俺をホルドしてやがる…!

と、その時、アグモンが俺達の前に出た。

「アグモン、進化——!!グレイモン!!」

今度はアグモンまで…グレイモンになってあのミサイルを尻尾で弾き、その衝撃でぶっ壊れた。た、助かった…まったく結衣の奴、一体何考えてんだよ!?!怖いのは、まあ分からなくも無いが…そんなに怖がりだったか？

「グレイモーン!!」

「ガルルモン!!」

アンドロモンを挟み撃ちにして二体だったが、先に飛びかかったガルルモンをアンドロモンが背負い投げの要領でグレイモンにぶつけ、下に落ちていった。それに続くようにアンドロモンも自ら飛び降りていく。

「ズパイラル、ソード!!」

「メガフレイム!!」

「フオックスファイアー!!」

ガルルモンにスパイラルソードを当てて怯ませ、そこに放たれたグレイモンのメガフレイムを片腕を振るって防御、その後のガルルモンのフオックスファイアーも同様に掻き消された。元々防御力が高いアンドロモンにとっては、グレイモン達成熟期の攻撃ではビクともしない。

「…これが、アンドロモン。グレイモン達より進化したデジモンの力……」

「パワー、スピード、どれをとってもアタシ達のデジモンよりレベルが上だわ!」

「どうやったら勝てるんだよ!」

いや…アンドロモンが強いのもあるが、グレイモンとガルルモンの戦いの経験不足も原因だな。今だって、ガルルモンが投げ飛ばされたグレイモンの下敷きにされている。成熟期では一対一しかしてこなかったし、連携の取り方だって分からないだろう。それに引き換え、アンドロモンは完全体、完全体ってのは多くのデジモンと戦い、勝ち抜いてきた猛者の証だ。これじゃ勝負にならないぞ…

「グレイモン、頑張れ!」

「ガルルモン、しっかり!」

「光子郎はん! さっきのあのプログラム!」

「…良いのか?」

「はいな！」

「よし、行くぞ！」

「…プログラム？」

テントモンが何かを思いつき、光子郎はパソコンを開いて何かをカタカタと打ち込み始める。結衣は光子郎の後ろに回り込んでパソコンの画面を覗き込んで、俺も一緒に見ているが…パソコンに打ち込まれた文字がグニャグニャと動き始めた。

すると、テントモンの体が光り始めた。

「うおお、何や！力が漲ってくる!!」

「だ、大丈夫か!？」

「テントモン、進化——!!カプテリモン!!」

テントモンは頑丈な頭部を持つ昆虫型デジモン、カプテリモンへと進化した。ど、どうやって進化したのか何度見ても分からねえ…光子郎のタイピングが速すぎるのもあって、何を打ち込んだのかも分からなかったぞ。

まあとにかく、カプテリモンはアンドロモンへと上空から突撃していく。紙一重でアンドロモンには回避されてしまい、カプテリモンは頭から地面へと突っ込んだが、持ち前の固さで特にダメージは入っていないようだ…すげえ。

続いて二度目の突撃、これをアンドロモンは受け止め、横へと流すように立ち回る。やっぱ成熟期じゃ完全体の力には勝てないか…!

「『ガトリングミサイル』！」

カプテリモンは二つの顔面付きミサイルから逃れる為に一度上昇するが、あのミサイルは自動追尾型だ。速度はあまりないようだが、それでも少しずつカプテリモンへと近づいている。

「くそっ、アンドロモンに弱点はないのか!？」

「弱点…!カプテリモン、右足だ!アンドロモンの右足を狙え!」

アンドロモンが機械で覆われていない生身の部分、その右足が僅か

にスパークしているのを光子郎は見逃さなかった。四本あるうちの右腕二本でガトリングミサイルをガードしたカブテリモンは、そのまま必殺技の体勢に入った。

「ッメガブラスタァー!!」

「グオオオツ…!」

今までどんな攻撃を受けても反応一つしなかったアンドロモンが僅かに呻き声を上げ、その右足からは黒い歯車が飛び出した。メラモンの時と同じように、黒い歯車は上空で塵となった。

「邪心が、消えタ…」

暴走が収まったアンドロモンから、あの歯車の隙間に挟まってしまった経緯を聞いた。元々、あの黒い歯車が機械の中に紛れ込んだらしく、それを取ろうとしたら挟まってしまったらしい。いやいや、だとしても何で足から入ろうとしたんだよ。手を使え、手を。

まあ、誰も気づいてないけど黒い歯車がアンドロモンの中に入ったのは太一が原因なんだよなあ…無鉄砲というか何というか。トラブルメーカー感があるな、太一とアグモンは。

「…で？何か言うことはないか、俺に対して」

「……………ごめんなさい」

タケルと光子郎がテントモンの進化のことで話している間に、最後にいた俺と結衣は小声で話をしていた。

今回に関しては結衣の行動の意味が殆ど分からなかったな…昨日のメラモンとの戦いの後もそうだが、今回もまた少し震えている。他の皆には気づかれていないみたいだが、ぬいぐるみのように抱かれて

いる俺だから気づけたのかもしれない……というか、だ。今回俺、殆ど何も出来なかったぞ……

「お前がそうなっちまうのは、何か理由があるのか？メラモンの時もだったが……戦いが怖いのか？」

「……………そうじゃない」

「だろうな。シエルモンとかシードラモンの時は寧ろ率先して戦おうとしてたし……じゃあ何でだ？」

「……………怖いのに」

「……………？どういうことだ？」

戦うのが怖いわけじゃないが、怖い？さっぱり意味が分からん。

「戦うのがじゃないの……訳あって、その……大人は、怖いのに」

「大人がって……ハア、成る程。それじゃ仕方ないな」

大人が怖い。要するにメラモンやアンドロモンみたいな大人を連想させる人型デジモンは怖いって事だ。だからメラモンの時は咄嗟に動いていなかったし、今回は俺を抱きしめることで恐怖に耐えていたってことか。メラモンの時の方がまだマシだったのは……多分、炎で人型を連想しにくかったからか？

何で大人が怖いのか？それも尋常じゃない怖がり方だが……それを聞くのは、俺にはまだ無理だ……。俺と結衣はまだ出会ってからまだ三日なんだから……結衣が話したくなかった時で良い。

「……………あー、その、なんだ。もう気にしてないから、あんまり落ち込むな」

「……………そんなに分かりやすいかな、私」

「まあな。ま、今度またそういうデジモン達が出てきたら、大人しくぬいぐるみになってやるよ……」

「……………ホント？」

「出来るだけ、だぞ？危なくなったら、今度は無理矢理にでも飛び出す

「からな！」

「うん……それで良い。あり、がと……」

その後はそれぞれ他愛ない話をしながら、俺達は地下水道を進んでいった。

第八話 パルモン怒りの進化!

「遠い〜故郷思い出す〜♪はーい、デジモンチーム思い出す〜のすー!」
「すっぱいなくすっぱいなくは成功の元じゃーないない〜い♪はーい子供チームないないないのいー!」

「い!?!」

「いー!?!」

「いけなくい〜人〜♪」

「…何?それ」

「お父さんがよくカラオケで歌ってた演歌!」

「そんな歌知らなーい」

「今は〜何もー♪」

「ああ、それなら知ってる!」

「俺もー!」

私達は今、アンドロモンが教えてくれた下水道を通って先を進んでいた。暗くて狭い所を進んでいるだけでは気が滅入ってしまうから、歌しりとりをしながら進んでいる。デジモン達にも知ってる歌があるっていうからこうして子供チームとデジモンチームに分かれているけど、何だかデジモン達の歌って童謡っぽい。いや、その方がイメージに合ってるから良いんだけどね。

これ、ロップモンは歌ってくれてないんだよね…デジモン側の列に並んで歌っているように見えるけど、あれは多分口パクだ。歌うフリをしている。口調に似合わず可愛い声してるから、こういう童謡なら合ってると思ったのにな…ちよつと残念。

「今は〜何もー♪…キャアッ!」

「大丈夫か!?!」

「どうしたんだ!?!」

「水が…落ちてきたの!」

「え?」

空ちゃんの上の天井から水滴が落ちてきたみたいで、それでビツクリしちやったみたい。ここってジメジメしてるし何か嫌な感じなん

だよね…早く外に出たい。

「汚れましたよ」

「え？あゝ…洗濯したい…」

「…俺だって、風呂に入つてのんびりと…」

「僕は…」

「タケルお前なあ、こんな時にテレビゲームはないだろ？ハツハツハツハ…俺も、タケルのこと笑えない。今、俺のしたいことは、ジュージュー焼ける焼き肉…腹一杯食いたい！」

「誰も笑えないさ…僕は勉強。宿題山ほどやりたい！」

「変わってるわね…アタシは冷たいコーラが飲みたい！」

「ミミさんそれ良い！僕も！」

「僕は、インターネットで友達にメールを送りたい！」

空ちゃんの何となく言った一言で、皆それぞれ今やりたいことを話し始めた。やっぱり皆、我慢してることの方が多いいよね…こつちに來てからホントにサバイバルみたいな生活しかしてないもん。最初は少し、キャンプの延長みただったから野宿の準備とかは楽しいと思うこともあったけど…何日も経ったらそれも薄れてくる。

「ね、結衣さんは？」

「私？私は…そうだね、丈君と光子郎君と同じかな。勉強と、友達とお喋り。でもコーラも飲みたいな〜」

「ですよね！」

「何処かに自動販売機とか、無いのかな？」

「え？さあ…」

「あつたら飲み物には困らないよね」

「そしたらアタシ、コーラだけじゃなくて色んなジュース飲みたい！」

「俺も飲んでえ〜！」

「もう、そんなに飲んだらお腹壊すわよ？」

「…おい、ちよつと静かにしてくれ」

「?どうしたの、ロップモン」

そんな他愛ない会話をしていると、ロップモンがそう言うので私達は全員口を紡ぐ。ロップモンは目を閉じて、後ろの方へと耳を傾ける。少しピクピクと耳が動いているのが可愛い…って、そんなこと考えてる場合じゃない。ロップモンがこういう時って、デジモンが私達に迫ってきている時だから。

「…これは、ヌメモンだな」

「ヌメモン?」

「暗くてジメジメしたところがなくて、知性も教養も無いデジモン」

「強い?」

「弱い」

「弱いけど汚い」

「汚いの?」

「デジモン界の嫌われ者って言われてる」

「嫌われ者?」

「分かりやすく言うとだな…アイツらは自分のウ○チを飛ばしてくるんだ」

「「…へ?」」

私と空ちゃん、ミミちゃんの声が重なった。ロップモンが、そんなこと言うなんて思わなかったから…正直、耳を疑ったし聞きたくなかった。

「おい、走るぞ!もうすぐ姿も見えるはずだ!」

「皆、急げ!」

太一君の一声で、私達は先を急いだ。ロップモンの言う通り、後ろの方には…何か、緑色のスライムみたいな体に、大きく立派な歯並びをした口と、触覚みたいに突出している目玉がついたデジモンがいた。今まで見てきたデジモンに比べると、何だか…こう言っちゃ悪いんだけど、キモチワルイ!

「あーっ!っち!!」

一番前を進んでいたタケル君が、外に繋がっていきそうな脇道を見つけてくれた。全員一目散にそこへ駆け込んでいき、しばらく進んでい

ると光が差し込んできているのが見えた。

「というか、気のせいかな…さつきから、後ろの方でベチャって音が何度も聞こえてくるような。逃げるのに必死で、振り返る勇氣は無かったよ。」

「ギヤア〜!?!」

「あ、あれ…?」

「ヌメモン達は、太陽の光が苦手なんだ」

「ハア〜…」

全員が空の下に出たら、後ろの方でヌメモン達が悲鳴?をあげながら帰って行ったみたい。出来れば、もうこんな通路は二度と通りたくないな…

ヌメモン達から逃げ切った後、私達は近くにあつた道に沿って移動を始めた。道があるってことはこの先に何かがあるということだと思ふ。工場みたいな施設があるんじゃないかな。

そう思つて皆我慢して移動しているけど…正直言つてヘトヘト。あの下水道を移動し始めてから何時間も経つてるし、そろそろ休憩しないと。そう思つて声に出そうとしたその時、ミミちゃんが何かを見つけた。

「こんな所に自動販売機が、たくさん…!」

「…ミミ、まさか飲みたいなんて」

「そのまさか〜!」

「ミミ君、どうせ出やしないよ!」

「全く…」

「しょうがないわよ、まだ子供なんだもん」

「さつきあんな話してたしね」

「…でも、気をつけた方が良さぞ。あの自動販売機」

「え?…もしかして、中に何かいるの?」

目の前には自動販売機がデタラメに、大量にある。パツと見た感じだと五十はあると思う。それぞれの中にデジモンがいるとしたら…

「キヤーツ！」

「ミミちゃん！」

真つ先に自動販売機の方へと向かって行ったミミちゃんとパルモンの方を見ると、自動販売機の前面部分が外れて、中からヌメモンが出てきた所だった…何であんな所に入っていたんだろ。太陽の光が苦手なんだったら、閉じ込められているのと一緒になのに。

そんなことを考えていたら、抱きかかえていたロップモンが服の袖を引っ張って、耳で上を見ると合図してきた。その仕草が可愛いなど思いながら上を見ると、丁度太陽が雲に隠れていくのが見えた…え、まさか……！

「あ、あんなにたくさん…」

「そんな！」

「ミミちゃん、何かしたの!？」

「ミミが怒らせるようなこと言うから！」

「ごめんなさ〜い!!」

「別れて逃げよう！」

「オツケー！」

またしても、ヌメモンの群れに追われることになってしまった私達。ヤマト君の提案で一旦バラバラに逃げることになった。幸い、近くには森がある。疲れてるし、そう長くは逃げてられないし…森で撒くしかない！

「おい、その木の陰に隠れろ！」

「うん！」

「今回は邪魔するなよ！」

「分かってる！」

ロップモンの指示で、私は自分の体を隠せるくらいの木の下に隠れ、ロップモンを離す。ロップモンはヌメモン達の攻撃が終わったのを見計らって、すぐに飛び出した。

「これでもくらえ！ プチツイスター！」

「ギャアツ!？」

「ブレイジングアイス！」

「ウワア!？」

十体くらいいたヌメモン達だったけど、戦いには慣れていないみたいで連携が出来てない。上手く躲せずにロップモンの攻撃が当たって、そのまま全員逃げ…ようとしたけど、最後尾にいたヌメモンだけロップモンに掴まった。

「おい、お前にちよつと聞きたいことがある」

「ロップモン、どうするの?」

「この近くに何か目印になりそうな場所があるなら教えろ」

「そ、それならオモチャの町があるよ!アツチ!」

「あつちか…ありがとよ、助かった」

ヌメモンが見ている方向を確認した後、ロップモンはすぐにヌメモンを解放した。ヌメモンが一目散に逃げていくのを見送って、ロップモンが歩き出したので私はそれについていく。

「ねえ、オモチャの町に向かうの?」

「ああ、バラバラになっちまったからな。闇雲に探すより、目印になる場所に向かった方が良いだろ?」

「それもそつか…でも何でこの辺はヌメモンが多いんだろ。もう追われるのは勘弁してほしいなあ」

「そりゃ、この辺りは湿地だからだろ。雨が多い場所ならヌメモンも好んで居着く」

「だから晴れの日には自動販売機の中とかにいたんだ…ところで、何でそんな早足なの?」

「いや、だって…ほら!ヌメモンにもう会いたくねえし!」

「ふーん?私、持とうか?」

「それこそ勘弁してくれ……」

若干早足になっているロップモンの後を、気持ち大股で歩いてついて行った。

☆☆☆

確かオモチャの町の町長のもんぎえモンは、太一達をそれぞれ捕獲

する為に動いているはずだ。だったら今はオモチャの町には奴はいないはず。皆には悪いが、囿になってもらってる間に潜伏して、皆を助ける準備をするんだ。デジモン達の入っていたあの箱を開けることが出来れば良い。せめて、ミミとパルモンの手助けくらいは出来るだろう。

又メモンに聞き出した方向へと歩き出して数十分、思ったよりも時間はかかったが何とかもんざえモンに遭遇することなくオモチャの町に到着した。やっぱり名前の通り、オモチャだらけだ。あんなデカイぬいぐるみみたいなのとか、どうやって浮いてるんだ？確か、アニメだと丈が遊ばれてた気がするけど……こういう原理だよ。

「……ここがオモチャの町……」

「みたいだな。それじゃ、皆を探し——」

「か、可愛い……！」

「……ハイ？」

目を離れた際に、結衣がその辺の建物に入っていった。急いで追いかけると、結衣がぬいぐるみを抱えて楽しんでいた……

しまった、コイツ可愛い物に目が無いんだ……こんなデイ○ニーみたいなものが沢山ある場所に連れて行ったらこうなるのは当たり前か。

「おい、結衣！早く行くぞ！」

「こっちの子も良いけど……うん、やっぱりこの子かな……あ！あっちの子とかタケル君やミミちゃんが喜んでくれるかも！」

「何してんだよ！いい加減皆を探さねえと！」

「ね、ロップモン！この子とこの子、どっちが良いと思う？ミミちゃんにあげようと思うの！」

「そんな場合じゃねえ！つーかそれ勝手に持つてく気がよ！」

「勿論、お会計はしてくよ？当たり前でしょ」

「結衣……お前金持つてるのか？」

「少ないけど持つて……え？」

俺が耳で示した方向を見てようやく気がついたようだ。この店の金の単位が円じゃなくドルだつてことに。まあこの世界の通貨は

全部ドルだけだな。

「これで分かったか？ほら、早く行くぞ！」

「そっか……そうだね……………」

「落ち込みすぎだろ……」

「……いや、でも！もしかしたらこの町って、色んな国から来た人向けに作られてるのかも！オモチャだって見たことないのも多かったし！」

「ハア!?いや、デジタルワールドじゃ全部ドル——」

「ロップモン、早く日本円が使える店を探すよ!!」

「人の話を聞けえええ!!」

その後、結衣はオモチャの町の建物全てを散策し始めた。

「あ！丁度ロップモンが着れそうな服が……」

「それぬいぐるみの着せ替え用じゃねえか！絶対嫌だね!!」

「ほら、これとか凄く可愛い！」

「な、おい、バカ、お前……止めろおお!!」

俺は疲れた……戦うよりも疲れた。三件目辺りで俺はもう、考えるのを止めた。ただ、心の中で俺はもう、こういう系統の場所にコイツを連れてくるのは止めようと誓った。

オモチャの町に来てからしばらく散策する羽目になった俺達は、誰とも合流できず。ただ結衣の暴走が収まるのを待つしかなかった。

「ロップモン、ロップモンってば！」

「……何だよ」

「あっちの凄く大きい熊のぬいぐるみが動いてるんだけど……あれってデジモンだったりする？」

「へえー……何!?!」

結衣に言われるまで気づかなかったが、かなり遠くに家くらいデカい黄色い熊がいた。間違いない、もんざえモンだ！しまった、もうそんなに時間が経っちゃまったのか！いや、まだアイツは俺達に気づいていないみたいだ……気づかれる前に隠れねえと！

「アイツはもんざえモンだ…その店に入るぞ！」

「う、うん」

建物の中に隠れた俺達は息を潜め、もんざえモンに気づかれないうにしながら外の様子を窺う。しかし、ズシン…ズシン…という重たい足音はこちらに向かっていない。どうやら別の方角へ向かっているようだ。

もんざえモンがもうこの町にいるってことは…少なくとも誰かは捕らえたということか？確か、ミミとパルモン以外は殆どまとめて掴まっていたような描写があつたな…ということは、もう残っているのは結衣と俺、ミミとパルモンの四人だけか…？

「ねえ、もんざえモンってどんなデジモンなの？」

「もんざえモンは完全体、アンドロモンと同じレベルのデジモンだ。このオモチヤの町の町長で、オモチヤを愛している…らしい」

「…何か、そんなに危なそうじゃないと思うんだけど」

「…まあ、今の説明だけだとそう思うよな。だが、お前…自分の格好を見てみるよ」

結衣は今、外にあつた風船やらオモチヤやらをこれでもかと持ち歩いている。ミミとかタケルにあげるとか言っていたが、明らかにそれだけの量ではない。

「何か変？」

「いやいや、お前なあ…オモチヤの町の町長が、自分の町のオモチヤを勝手に持って行かれていたらどう思うよ？」

「別に盗んだわけじゃないし、店の外に落ちてた物ばかりだし…町長さんなら喜んでプレゼントしてくれそうじゃない？」

「…ま、まあそうかも知れねえけど、アイツが敵じゃないとは限らない。これまでも良い奴なのに暴走してる奴もいたしな」

「それもそっか…」

やっぱこうやってこじつけの理由じゃ納得しないか？でも暴走してるのは事実だろうしな…そういや、アイツはさっきのあの場所で行してたんだ？近くには…いないな。あの足音はかなり遠い。

「…大丈夫そうだし、出てもいいだろ」

「分かった…とりあえず、皆に合流しなきゃね」

「俺は最初からそう言ってたんだがな？」

「う…ごめんなさい。こういう所に来るとつい…」

「ウム、大いに反省すると良いぞ」

「…何かその喋り方、イラツとする」

「ほれ、良いから行くぞ」

もんざえモンがさっきいた場所に向かうと、近くの倉庫らしき建物の中にガタガタと動くやや大きな宝箱を発見した。

「これ…何？」

「おい、誰かいるのか？」

『その声は、ロップモン？』

『結衣も無事か？』

「アグモンとガブモン…え、何で？」

「さっきの見たろ。もんざえモンにこの宝箱に入れられたんじゃねえのか？」

『そうなの…私達、皆もんざえモンにやられて』

「全員いるの？」

『パルモンがいない！きつとまだ捕まってないんだよ！』

状況はアニメと殆ど同じみたいだな…後は、この宝箱が同じようにアグモン達でも壊せないのかって所なんだが…

「これ、中から壊せなかったのか？」

『皆で試したけどダメだった！』

「じゃあロップモンだけじゃ壊せないよね…どうしよつか」

「もんざえモンを倒すか、この宝箱の鍵を探すか…どっちにしろ、もんざえモンとは戦わなきゃいけないな…」

「あ！結衣さーん！」

「ロップモンも、無事だったのね！」

丁度、ミミとパルモンがやって来た。良かった、無事に合流することが出来たな。探す手間が省けたのはありがたい。作戦を立てる時間が出来た。

「ミミちゃんとパルモンも、無事で良かった…怪我はしてない？」

「良かった、結衣さんはいつも通りで！」

「え？」

「聞いて下さいよ、太一さん達の様子がおかしくて……」

「オモチャに追いかけられてたのに、皆笑顔で変な感じだったの」

「まるで感情がないみたいで……アタシ達にも気づかなかつたみたい」

『もんざえモンの仕業や！もんざえモンの“ラブリーアタック”でわてらを捕まえた後、光子郎はん達の感情を奪ったんや！』

「感情を奪った……」

「つて、今の声ってテントモン？まさか、この中にいるの？」

「ああ、俺とパルモン以外は皆この中だ」

もんざえモンの必殺技、“ラブリーアタック”はハート型の風船みたいなのを飛ばして、その中に取り込んだ相手を幸せな気持ちにさせる技。戦闘向きではないように思えるが、相手の戦意を奪うという意味では最強の技かもしれない……アイツと戦う上で、あの技をどう対処するか重要だ。

アニメだとヌメモンが文字通り肉壁となつてミミ達を守つたおかげで何とかなつていたが、アイツらを犠牲にするようなことはしたくないな……何とか、作戦を立てねえと。

「良いか、ここは俺達だけで何とかするしかない。協力して、もんざえモンと戦うんだ」

「そんな！アタシ達だけなんて……！」

「ミミちゃん、太一君達を正気に戻す為にはもんざえモンを何とかしないとイケないの。一緒に頑張ろ？」

「結衣さん……うん、アタシ頑張る！」

「アタシも！」

「それじゃ早速作戦を立てるぞ……まずは——」

俺達はオモチャの町の行き止まりのようになっている場所までもんざえモンを誘導し、迎撃する作戦を立てた。奴を倒す手段がパルモ

ンの進化以外になくとも、もんざえモンから黒い歯車を取り除く策はある。

三人には準備をしてもらっている間に、俺は準備が出来るまで奴を誘導することになった。結衣からかなり心配されたが、ここには二階建てくらいの建物が迷路のように配置されている。徒歩ならともかく、建物から建物を滑空して移動すれば追いつかれることはないはずだ。『ラブリーアタック』もスピードはない。

「お、見つけ」

やっぱこつちまで向かってきてるな…それじゃ、気づいて貰う為に渾身の一撃、喰らわせてやる！

「『ブレイジングアイス』!!」

冷氣弾がもんざえモンの顔面に直撃。しかし…まあノーダメだな。あんなふざけた見た目してるのに完全体だしな…せめて成熟期くらいじゃないと傷も負わせられない。

「オモチャの町へようこそ」

「お邪魔してるよ、もんざえモン…もうしばらく遊ばせて貰うぜ！」
もんざえモンが目から光線を出して攻撃してきたのを躲し、滑空して移動を始める。もんざえモンも俺の方へとついてくる。

やっぱ完全体には黒い歯車じゃ不十分なんじゃないのか？アンドロモンもそうだったが、単純な動作しかしていない気がする。選ばれし子供達やそのパートナーデジモンを倒すことしか考えていないから、こんなあからさまな囮にも簡単に引っかかってくれる。

「お会いできて光栄です」

「うおっ！お前、自分の町を壊す気かよ!？」

目からビームが建物に当たっても容赦なし…これ、復旧作業も手伝わないといけなくなるんだろうか。なるだろうなあ…少なくとも、結衣が言い出すのが目に見える。何とか光線を空中で避けるようにしないとな。

とか考えていたが、ふと後ろを見てビームが直撃した場所はそのままで壊れていなかった。焼け焦げる程度で済んでいた。建物が頑丈なのか？それとももんざえモンの攻撃がそこまで威力はないというこ

となのか？

「ブレイジングアイス！」

冷氣弾をもんざえモンに浴びせながら、滑空して逃げ回る。タイミングを見てもんざえモンのビームに冷氣弾を当ててみたら、一瞬で蒸発した。なるほど、あのビームは熱線なのか。威力というより超高温のビーム、あんなのに当たったら火傷じゃ済まなさそうだな…

それにしても、もんざえモンの歩みが思ったより遅い。追いつかれる心配はないのは安心だが…これじゃ思ったより引き離せないな。俺と距離が空きすぎると諦めて別方向に移動し始めるかもしれないし…つかず離れずってのは思ったよりキツイ。早く結衣達の準備が終われば良いんだけどな。

囀作戦を始めて、十五分くらい経過したか。結衣達が準備している場所からロケット火花がピュ〜と音を立てて飛んでいくのを確認した。その瞬間、俺は地形を利用してもんざえモンを引き離す。もんざえモンと俺の間に建物を挟むようにして移動し始めたことで、奴も見失ってしまったようでビームが飛んでこなくなった。これではらく安心だな…奴の位置は俺なら一方的に把握出来るし、捕まることはない。

もんざえモンの奴、結局最後までビームでしか攻撃してこなかったな…一度直接「ラブリーアタック」を確認しておきたかったんだが、仕方ねえ。出来れば奴が必殺技を使う前に黒い歯車を取り除きたいな…

「ロップモン！」

「おう、戻ったぞ」

「怪我してない？ちよつと見せて」

「だからお前は俺の母親か！何ともねえって、ほら」

合流して結衣が俺を視界に入れた途端に、心配そうに近づいてきたのでそう言い返してやった。その場で一回転してどこも怪我していないことをアピールすると、何故か結衣が顔を伏せてしまう。

「おい、どうした？」

「…ちよつと今の、もう一回」

「…絶対ヤダ。それよりパルモンは？」

「ちゃんと位置についたわ！」

結衣じゃなくミミがそう答えた。装備も万全みたいだし、後は奴がここにやって来るのを待つだけだ。流石は町長と言うべきか、迷わずしらみつぶしに探しているようで、この調子ならあと五分もしないうちに来るだろう。

「おい、いつまでやってんだ。お前も配置につけて」

「分かってるよ…」

「ただ落し込んでんだよ。ホント、人形とか可愛いのが好き過ぎだろ。そこに関しては小六か疑うレベルだぞ？」

そんなこんなで、迎撃の準備が出来た俺達。丁度、もんざえモンももうすぐ見えるだろう距離まで近づいてきていた。

結衣とミミは行き止まりの奥の方に、俺とパルモンは横に並んでいる建物の屋根に待機している。もんざえモンが曲がり角を曲がろうとした時にパルモンが、オモチヤが大量に入っている箱を落として気を引かせるのが第一段階だ。

もんざえモンが俺の位置から見える距離までやって来た。もうすぐ…もう少し…今だ！俺は耳で円をつくってパルモンに合図を送った。

「えーいっー！」

「？」

もんざえモンに直撃はしないが、突然目の前にオモチヤが大量に降ってきたことに目を奪われている。続いて第二段階、まずは俺に気づかせる必要があるのでまた冷氣弾で攻撃する。

「ブレイジングアイスッ！」

「！オモチヤの町へようこそ」

「それはさつきも聞いたぞ…っつと！」

俺の傍にはぬいぐるみが大量に入った箱が三つある。俺はそれを順番に落とし、俺はそのぬいぐるみに紛れて一緒に屋根から飛び降り

た。さらにパルモンの方からスーパーボールが大量に落とされる。

動く物を探して追いかけてみようとしてもスーパーボールがデコイになってくれるし、ぬいぐるみもあって俺の姿は身を隠しやすい…これは結衣の提案だったが、もんざえモンは俺を探しているがまだ見つかっていないようだ。このまま奴の背後まで忍び寄って、背中についているチャックを下ろして中の黒い菌車を直接攻撃する！

「ミミちゃん！」

「はいー！」

結衣とミミもただ黙って見ているわけではなく、さつき合図にも使ったロケット花火の残りをもんざえモンに向かって発射した。これによってもんざえモンは俺から結衣達にターゲットを変更したように、俺は慎重に奴の背後まで辿り着いた。後は、隙を見て飛びかかれば…

その時、もんざえモンが結衣達を視界に捉えた後、やや前屈みになった。

「ラブリーアタック！」

「来た…！」

結衣達に向けて青いハート型の風船らしきものが放たれた。結衣達が作戦通り左の建物の中に入って回避したのを確認して、俺はもんざえモンの背後のチャックに飛びかかり、ついに掴んだ！

後はそのまま下げて…：下げ…て？おい、下がらないんだが…？

「ぐっ…ぎぎぎっ…！！どん、だけ！かってえんだよ！ぐあっ!!」

「ロップモン、大丈夫!？」

アイツのチャックを下ろすことが出来ず、俺はもんざえモンに振り落とされた後、腕のぶん回しに巻き込まれてダメージを負ってしまった。俺を心配してパルモンが声を上げたことで、パルモンの場所もバレてしまったらしい…俺の飛びつき作戦が失敗した場合は、パルモンが「ポイズンアイビー」でチャックを下ろしてもらおう予定だったが…あんなに固いんじゃないやパルモンの力でも無理だな。

しかしどうする？結衣達は隠れてるから比較的安全だとしても、俺とパルモンがああ、ッラブリーアタック」に当たったらそこで終わりだ。結局は、パルモンの進化に頼るしかないのか…!?

「まだだ…まだ、諦めねえ!」

「お姉ちゃん、助けに来たぜ!!」

「あれって…ヌメモン!?」

「ミミちゃん、ダメ!」

そんな時だった。ヌメモンの大群が、もんざえモンに向かって攻撃を仕掛けたのは。ヌメモン達を目にしたミミは外に出てきてしまい、結衣も一緒に出てきた。

「ッラブリーアタック!」

もんざえモンの必殺技で、次々と戦意喪失されていくヌメモン達。それでもヌメモン達は諦めず、攻撃を仕掛けていく。

「プチツイスター!!」

「ロップモン!ダメ、戻って来て!!」

「俺は、結衣を守らなきゃいけないんだ…絶対に、守って…っ!」

「ロップモンも傷だらけなのに…:…ヌメモン達もあんなに弱いのに、ミミ達を必死に守ってる。アタシも…!!」

屋根の上にいたパルモンの体が光り始める。ミミのデジヴァイスも、呼応するように光を放つ。

「パルモン、進化——!!トゲモーン!!」

屋根の上から飛び降りた巨大な人型のサボテンみたいなデジモン、トゲモンはもんざえモンに直接体当たりした。トゲが刺さったからか、苦悶の表情を浮かべたもんざえモンは振り払うように腕を振り回し、トゲモンから距離をとった。

睨み合ったもんざえモンとトゲモンは、そのまま近づいていき殴り合いを始める。完全体のもんざえモン相手に一進一退の攻防を繰り返す。

広げるトゲモン。お互いにノーガードで殴り合い、トゲモンが相手の隙について連続で殴った後、数歩下がって必殺技を放つ体勢になった。

「ッチクチクバンバンッ!!」

「ヌワアア、ア…」

無数の針を飛ばし、もんざえモンはボロボロになりながら倒れる。あんなに固かったチャックがやや開き、黒い歯車がもんざえモンから飛び出して行った。

その日の夕方、子供達は正気に戻り、もんざえモンがお詫びとお礼と称して「ラブリータック」で幸せな気分を味わう中、俺だけは幸せになりきれずにいた。

第九話 咆哮！イツカクモン

もんざえモンにオモチヤの町で一泊させて貰い、俺達は旅を続けていた。進んでいくうちに段々と肌寒くなり、周囲の木々もいつの間にか亜熱帯のようなものから針葉樹へと変わっていた。

「寒いよく…」

「しおれそうー！」

「約二匹やけに元氣だよな」

丈が言う約二匹というのは、ゴマモンとガブモンのことだ。あいつらは毛皮あるからちよつと肌寒い程度じゃ何とも無いんだろ。そういう俺も、どうやら暑い場所よりはこれくらいの気温の方が過ごしやすいみたいだな。

「ま、寒いのも悪くはないよな！」

「「えく？」」

「そんな、勘弁して下さい！」

「だって雪が降ったら、雪合戦が出来るぜ？」

「雪合戦！」

今まで寒いのが嫌だったタケルやミミも、雪合戦と聞いて表情を明るくした。やっぱまだ子供だな…デジモン達はこういう遊びみたいな文化は知らないから、時々光子郎とかに解説してもらってる。テントモン、雪合戦とかかまくらとか、知らない単語を聞く度に食べ物だと決めつけるな。

「気楽なんだから…雪なんか降られたらたまらないよ」

「丈先輩、何一人で深刻な顔してるんですか？」

「ハア…深刻にもなるさ。考えてもみろよ、これ以上気温が下がれば野宿だって難しくなる。寒冷地では食料の調達だって大変になるだろうし」

「でも、この島はどんな環境でも食料は実ってたりするみたいだし、探せばあるんじゃない？」

「結衣君まで…ハア、頭が痛いよ。僕は皆を守らなくちゃいけないんだ。年上なんだから」

流石年長者、こういう奴が一人くらいいてくれないと大変だからな。ただ、丈の場合考え込んでどうしたら分からなくなるタイプמידいだから、お前はもうちよつと樂觀的になった方が良いと思うぞ？
「だったら、私も頑張らなきゃね。私だって最年長だし、一緒に話し合って考えれば良いことも思いつくよ、きつと」
「結衣君…そうだと良いけどね」

しばらく進んで森を抜けると、辺り一面真っ白な場所についた。そう、雪原だ。着くなりゴモンだけでなく、タケルとミミ、パタモンとパルモンもはしゃいでいる。お前ら、さっきまでの寒がりようはどいうしたんだ？

「ほらみる、僕が心配した通りだ」

「これからどうする？」

「とりあえず先に進む。ここでボケつとしててもしょうがないだろ」

「え!?この雪原をか？」

「そうだよ、これ以上は無理だよ！」

「じゃあどうするんだよ！前は雪原、後ろはあの山！どっちにしろ、どっちかに進むしかないだろ！」

「ん…ちよつと待って、何か変な匂いが」

アグモンがそう言って気づいたが、何か独特な匂いがする。腐った卵みたいな匂い…ま、硫黄の匂いだな。匂いのする方を見ると、森の中から湯煙が出ている。

「そうか、この匂いは！」

「温泉だ!!」

「温泉!?!」

温泉が近くにあると気づいた子供達は全員、その場所へと走りだした。この世界に来てからもう四日、そんなに長い期間風呂に入れないことなんて無かっただろうしな、気持ちは良く分かる。俺も…この姿になってからは風呂なんか入ったことない。何日かに一回くらい水浴びして汚れを落とすだけなんだもんな…

そんな考えに耽っていると、気づけばもう目の前が湯煙で視界が

所々遮られている。気温もどんどん暖かくなっていき、ついに露天風呂らしきものを発見した…が。

「これ、沸騰してるぜ…」

「これに浸かるんかいな」

「まさか…」

「あーん、これじゃお風呂に入れない！」

「でも暖かいわ〜」

「とりあえず寒さは凌げるな」

「のんきなこと言ってる場合か！食料はどうするんだよ、ここには食料なんて…」

「あるよ？」

「何言ってるんだよ、こんなゴツゴツした岩だらけのところに！」

「ほらー！」

「…へ!?そんな、ばかな…」

「何だよ?…お!ラッキー!」

「非常識だ…何でこんな所に冷蔵庫が〜!?!」

丈、お前の気持ちは良く分かるぞ…岩場に冷蔵庫って思ったよりシユールだな。今までもそうだったけど、この世界のこういう電化製品ってコンセント刺さってないのにどうやって動いてんだ?デジタ的な世界だから電気が空气中に漂ってるのか?…いや、それはねえな、うん。それだと俺ら常時感電してる。

そういうや結局、この冷蔵庫は誰のだったんだろ?アニメでは分からずじまいだったし…皆も持ち主のことなんてすぐ忘れてたっぽいし、まあ良いか?

この冷蔵庫の中身は、卵がビツシリ。勿論デジタマジやなく人間の世界にもあるごく一般的な卵だ。非常事態だからということ、持ち主には後で謝罪することになり、この卵を夕飯にすることになった。丈だけは反対してたけど。木を削って箸や器を作り、丁度良さそうな大きな平たい岩を熱して目玉焼きに卵焼き、温泉でゆで卵が大量に出来上がった。

「いったただつきま〜す!」

「頂きます…」

「うん、うめえ！こんなまともな飯なんて久しぶりだよ！」

「これで白いご飯でもあれば言うことなしだな！」

「ホカホカご飯にゆで卵！」

「うーん、良いわね〜！」

「ロップモン、そんな急がなくてもまだあるからね？」

「おお、サンキュ！」

旨い、マジで旨い！何で塩とかの味付けも無くこんなに旨く感じるんだ!?俺はこの小さな手で箸を巧みに使い、片っ端に食いまくる。太一とこれ程共感できることが今までにあただろうか？いや、ない！食卓を囲めば心も通じ合えるってもんだな。うん！

「何だ、丈。食べないのか？」

「あ、うん…家に帰ればこんな苦労しなくても良いんだと思ってさ」

その一言は、場を一気に凍らせた。俺はむせそうになるのを堪え、口に入っている物を何とか飲み込んだ。

おまつ、急に爆弾ぶつ込むんじゃねえ！もうちよつと考えて発言しやがれ！ほら、全員泣きそうな顔してんじゃねえか！

「あたし…お家に帰りたい」

「皆、どうしてるかな…」

「あれからもう、四日も経ってるんですよね」

「…ね、ねえ皆！目玉焼きには何かけて食べる？」

ナイスだ空！あからさまだが、話を変えてくれて助かった…！

「何言ってるんだよ。目玉焼きには塩こしょうって決まってるじゃないか」

「俺、醤油」

「マヨネーズ」

「私はソース！」

「僕は、ポン酢を少々」

「私はケチャップかな」

…塩こしょうって決まってるという丈の発言もどうかと思うが、光子郎。目玉焼きにポン酢か…うーん、合いそう…か？卵料理ってなん

でも合うから凄いやな。

「えー、皆変よ！やっぱり、目玉焼きって言えばお砂糖よね！あたしその上に納豆に乗つけたのも大好き！」

「納豆…？」

「それ変すぎだよ…」

納豆は…流石に無いな。いや、というか納豆はご飯にかけて食べる派だし。あー、そんな話してたら納豆ご飯食べたくなってくるじゃねえかよ！早くリアルワールド行ってえ!!

「えー、皆は目玉焼きにそんな変な物をかけるのか…ショックだ！日本文化の崩壊だ！」

「何ワケわかんないこと言ってるんだよ！」

「おい、丈？」

「そこまで悩むか、普通？ま、納豆は悩むかもしれないけどな…」

「だって、目玉焼きには塩こしょうだもの！醤油でもマヨネーズでもなく、塩とこしょう！」

「やれやれ、丈は融通が利かないなあ」

「何だ?!」

「だってそうだろ？どうでも良いことで悩むし！」

「僕のどこが、融通が利かないんだよ!!」

丈とゴマモンの喧嘩が始まり、止めに入ったヤマトにも八つ当たり気味に「どうかしてるのは皆の方だ！」と言って、その後すぐに何処かへ行ってしまった。

「…私、ちょっと行ってくる」

「おい、結衣？お前、飯は…」

…もう食べ終わってたらしい。結衣は丈の後を追って行ってしまった。一応、俺もこっそりついて行くか。これが食べ終わったらな！

☆☆☆

夕食が食べ終わった後、私は丈君の後を追うことにした。彼があんなに追い込まれていたなんて思ってなかったし、そうなってしまったのには私にも責任がある。

丈君は、少し離れた温泉の片隅に座り込んでいた。小石を温泉に投げ入れながら、「僕はしつかりしてる…」って呟いてる。

「丈君」

「ゆ、結衣君?」

「大丈夫?」

「…勿論さ。僕は大丈夫、僕はしつかりやってるんだ」

「あの、さ。こんなこと言ったら怒らせちゃうかもしれないけど…苦しくない?」

「苦しい…何が?」

「自分はしつかりやってるんだって何度も、何度も自分に言い聞かせて、自分で自分を締めつけてるように見えるんだ…今の丈君は」

「そ、そんなこと…」

「今まで…あつ、ロップモン達に出会ってからね?丈君はちゃんとやってるのは知ってるよ。こんな大変な状況で、丈君が言ったことは普通なら間違いじゃ無いと思う」

「普通ならって?」

そう、普通なら丈君の言ってることは合ってる。子供だけでこんな森の中に入ったら、まずは大人と合流できるように行動したり、一番最年長の自分が何とかしなきゃいけないって責任感を持つことは当たり前なことだったんだ…この世界に来るまでは。

「デジモンってさ、本当に不思議だよね…アグモンみたいに火を吐いたり、ロップモンみたいに耳が凄い良かったり…あんな生物、私今まで出会った事無いよ」

「そんなの当たり前だよ!あんなデタラメな生物、簡単に出会えたら町中…いや、日本中、世界中でニュースになってる」

「そうだよ。つまり、私達はデジモンっていう、未知の生物が沢山いるここで、何とか帰る方法を探さなくちゃいけない、あのキャンプ場だね。でも、未知の生物がいるのに、今までの常識を物差しにしていた

ら…多分、非常識なことばかりでパニックになっちゃうよ。誰かさ
んみたいにさ」

「……………」

「…ごめんね、丈君。私、あんなに君が追い込まれてたなんて思っ
てなかつた。昼間に一緒に相談していろいろって決めたのにね…」

「…君が謝る事じゃないだろ」

丈君は立ち上がり、大きく腕を広げて伸びをした。私も丈君につら
れて立ち上がる。

「僕の方こそ、ごめん。そうだよ、ここには結衣君もいるんだ。僕だけ
で何でも責任を感じる必要は無かつたんだ…これからは、もつと色々
相談するよ。絶対、あのキャンプ場に帰ろう！」

「うん…！…こちらこそ、改めてよろしくね。でも、それは私だけじゃな
くて、皆も頼って良いと思うよ？」

「う、うん。そうするよ」

互いに握手を交わし、私達は太一君達の所へと戻ることにした。

皆の所に戻ると、太一君とヤマト君が何か言い争っているみたい。
空ちゃん達も距離を置いて見守っているみたい…あ、ロップモンが
こつちに歩いてきた。

「何かあつたの？」

「太一がああの山…ムゲンマウンテンに登って辺りを見渡したいんだ
と。でもあの山は凶暴なデジモンもいるから、ヤマトが危険だって反
対してる」

「うーん…どつちも正しいから、困っちゃうね」

今の所、このファイル島が本当に島なのかどうかも分かってない。
私達、結構当てもなく散策してた感じだし…何処か目的地はあつた方
が良い。あのムゲンマウンテンっていう山は今まで見た中で一番高
いから、あそこからなら今まで通つた道も、行つたことない場所も分
かるはず。

でも、皆を危険に晒してまで登るべきなのかと言われると…個人的
な意見だと、私はヤマト君に賛成かな。どれだけ危険なのかも分から

ないから、せめてムゲンマウンテンにどれくらいデジモンがいるかとか、そういう情報をちよつとずつ集めてからでも良いんじゃないかと思う……時間がかかるのは間違いないけど。

「待ってくれ、二人とも！まずは、落ち着いて話し合おう、喧嘩しないでやっ。」

「で？丈はどう思う」

「え？」

「どっちに賛成なんだよ？」

「えーと……太一の言ってることは正しいよ。あれに登ればこれからの指針にはなると思うよ」

「ほら見ろ！」

「だけど、ヤマトの言うことももつともだ。皆を危険に晒してまで登る意味があるのかって言うと……うーん」

太一君とヤマト君を止めに入った丈君も、どっちが正しいのか決めきれないみたい。と、ここで丈君は私達の方に目を向けた。

「皆はどう思う？」

「私達？」

「これからの行動を決めるには、皆の意見を聞きたい。太一の言う通り、危険な目に遭うかも知れないけどあの山に登って周りの状況を知りに行くか、ヤマトの言う通り危険を避けて、山じゃなくこの雪原、もしくは今まで来た道を引き返すか」

「そうね……私は、途中まで登るっていうのもアリだと思うわ。得られる物はそれだけでも十分、無理に登りきることはないでしょ？」

丈君の質問に、空ちゃんが少し考えてそう提案した。確かに、危険なデジモンに遭遇する前に引き返せば、リスクも少なく情報を得られるかも。

「私も、空ちゃんに賛成かな。さっきまではヤマト君派だったけど、危険なデジモンに会ったら逃げれば良いよ」

「結衣さん……」

ヤマト君が何だか……捨てられた仔犬みたいな目をしているように見えてくるのは気のせい？

「俺やピヨモンが、デジモンに遭遇する前に音で分かるだろ。何より、全員で行けばリスクも少なく出来る」

「ロップモン…だつてさ。他の皆は？」

「僕もそれが良いと思います」

「うん！皆一緒なら怖くないよー！」

「あたしも！」

「決まりだな、ヤマト？」

「…分かった。ただし、危なくなったらすぐに下山だ、良いな？」

「おう！」

「それじゃ、もう休みましょう。もう夜も遅いわ」

「それと、全員で登るなら日が昇る前に出発するぞ。ムゲンマウンテンにいるデジモン達が動く前に少しでも登れるようにな」

こうして私達は、ムゲンマウンテンに登ることを決めた。もし怖いデジモンに出会っても、皆がいる。皆で助け合えば、何とかかなると思う。

それにしても、さつきまでの丈君だったら二人の喧嘩に加わってもおかしくないと思っていたけど…さつき二人で話した甲斐があったかな。丈君なりに、皆を頼るってことを実践しようとしていた。責任感も大事だけど、背負いすぎは良くないってことだね。こうして皆をまとめることが出来たんだから。

☆☆☆

昨日はこつそりついて行っていたのがバレたのかと思ったが、何とかバレなかったらしい。やっぱりロップモンの聴覚の良さには助けられてるな…あれだけ距離離れても、太一達の会話も、結衣達の会話もある程度聞こえるから、何かあってもすぐ助けられるし。

結衣が丈を励ましに行つて、その後太一とヤマトの喧嘩を丈が止めに入ったのまでは一緒だったんだが、丈が皆に意見を求めたことで、明日全員でムゲンマウンテンに登ることになった。俺の意見で日が昇る前に出発ということになったけど…どういうことだ？結衣のや

つ、丈とどんな話をしてたんだ？声は聞こえても、温泉のボコボコという音と太一達の怒鳴り気味の声のせいで会話はあまり聞き取れなかったんだよな…

俺が昨日、結局原作通りの展開になったことに軽く絶望してたのがバカ見てえじやねえかよ…こんなあつさりと原作と乖離しちまうとか、結衣め、恐ろしい子…！

ま、まあ良い。丈とゴマモンだけで登るよりは良い展開になったし…やっぱ、俺一人で何とかしようとしたのが間違いだっただな。これからはもつと考えて行動しないと、原作で死んだデジモン達を助けるなんて出来ない、気をつけねえと。

「おい、お前ら起きろ！朝だぞーっ!!」

「う、ううん…」

「あと五分……」

「起きろコラア!!」

案の定、殆ど寝坊してるな。起きといて正解だった…何人かパタモンの羽ビンタ、ではなく俺の耳ビンタで目覚めさせることになったが、まあ女性陣に手を上げるようなことにならなくて良かったとだけ言っておこう。

何とか全員、予定通りに出発した。ムゲンマウンテンは部分的に足場が非常に悪かったり、崖らしき場所を登らなくちゃいけないかったり…本当に道が悪い。原作でここを進んだ丈とゴマモンはよく登ったな、たった二人で…ゴマモンなんか、ここを登るには大変だったろうに。

中腹を少し過ぎた辺りから日が昇ってしまったが、その後は特にデジモンに遭遇するようなくともなく順調に進んだ。で、今は黒い歯車が飛びだしていたと思われる、不自然に亀裂の入った岩壁が見える場所まで辿り着いた。

「ロップモン、この辺にデジモンは？」

「…大丈夫だ、俺達以外には誰もいねえ」

「よし、一旦休憩しよう！」

「つ、疲れたあゝ…」

「もう歩けな〜い」

「結構登って来たわね」

「山頂までもう少しか…ここまで来たら辿り着きたいな」

「そうですね。運良く危険なデジモンにも出会っていませんし」

それは俺が耳を尖らせてるからな…とやりたい所だが、そもそも殆どいないみたいなんだよな。デビモンがもう既にムゲンマウンテンにいるデジモン達を操っているのか？

つと、言ってる傍から俺の耳がバサツ、バサツという重量のある羽ばたきのような音が聞こえてきた。これは恐らくアイツだな。

「皆、あっちの方から何か来るぞ！」

「ホントだ、羽ばたくような音が聞こえる…」

「ということとは、鳥みたいなデジモンってこと？」

やがて、俺達が見ている方向から馬に翼が生えたようなデジモンがその姿を現した。ソイツはもう既に気性を荒くして、俺達を見つけた途端に口を開けて光を吸収して球のようなものを形成し始めた。

「あれは…ユニモンだ！」

「本当は穏やかなデジモンのはずなのに！」

「言ってる場合か、打ち消すぞ！ プチツイスター！」

「ベビーフレイム！」

「マジカルファイアー！」

俺とアグモン、ピヨモンの攻撃でユニモンの必殺技、〃ホーリーショット〃を相殺する。成熟期の攻撃でも、成長期が三体も集まれば相殺も可能みたいだな。ユニモンはあまり力強そうじゃないし、聖属性は闇属性以外には威力は弱まるらしいけど。

とにかく、上手くいけばユニモンの背中にあるあの黒い歯車を、進化せずとも何とか出来るかもしれない。

そう思っていたら、俺の耳がまたしても音をキャッチした…ってデジャヴかよ！しかしこれは気のせいじゃない、ユニモンが来た方とは違う…これは、俺達が登って来た方からゆっくりと近づいてきているのか！

「皆、ユニモンだけじゃねえ！別の奴が来るぞお！」

「え!？」

「そんな…!」

「ロップモン、どっち!？」

「下だ！俺達が登って来た方だ！」

最初に見えてきたのは、大きな右手だった。崖からその右手だけが
見えて、勢いよく登って来たことでその全貌が明らかになる。グレイ
モンと同じような頭部の外殻に、全身は黄色がかったオレンジ。よく
見れば人型に分類されるが、その大きな右腕がアンバランスさを際立
たせている。右目に古い傷跡があり、血走ったその目はこちらを睨み
付けていた。

「あれはサイクロモン!？」

「あれも元は穏やかなデジモンなの？」

「元から獰猛なデジモンや!」

「黒い歯車が見当たらない…アイツ、元々ここら辺を縄張りにして
いたのか？」

「不味いな…逃げられなくなったぞ」

「二手に分かれよう!」

「俺達があつちをやる！ヤマト、そっちは頼んだぞ！」

「へまするなよ、太一！」

サイクロモンがやって来るとは…予想外だ。そして咄嗟に別れた
班が、ユニモン側にアグモン、ピヨモン、ゴマモン、俺。他の皆がサ
イクロモン側だ。咄嗟に別れたとはいえ、この組み合わせに運命的な
ものを感じてしまうが、そんなことを言ってる暇は無い。

「太一君、もう少し上まで行こう!このままじゃ乱闘になっちゃう」

「アイツの攻撃は俺達に任せろ!さっきみたい打ち消してやる!」

「よし、行くぞ!」

もう何段か崖を登り、その間のユニモンからの攻撃は俺達が相殺す
る。反対にヤマト達は、サイクロモンを下の方に誘導しているみたい
だ。これだけ離れば、各個撃破出来るはず。あつちの方が進化でき
るデジモン多いし。

「ここまで来れば…アグモン！」

「お願い、ピヨモン！」

「アグモン進化——!!グレイモン!!」

「ピヨモン進化——!!バードラモン!!」

「ゴマモン、俺達は結衣達を守るぞ！」

「おう！」

グレイモンとバードラモンのタッグと、ユニモンの戦い。こっちの方が有利に感じるんだが…ここは足場の悪い山道、グレイモンは思った通りに動く事も難しい。そしてユニモンはバードラモンより素早いみたいだ…こっちの攻撃を回避し、ヒットアンドアウェイのスタイルで二体をじわじわと追い込んでいる。

「メガフレーム！」

「グレイモン、隙を作るな！」

「ぐあつ！」

「グレイモン!!」

「あつ！バードラモン!!」

必殺技を放ったグレイモンだったが、紙一重で躲したユニモンに横からの体当たりを喰らい、足場が崩れ下の方へと落下していった。ユニモンは背後から近づいていたバードラモンにも気づいていたように、難なく躲して岩壁にバードラモンをぶつけるように体当たりをする。

まずい…ここはアイツの方に地の利がある。このままじゃサイクロモンのいる下の方に追い込まれて挟み撃ちになるぞ…ここは、俺とゴマモンでどうにかするしかない。グレイモンとバードラモンの反撃の隙を作ってやる！

「ズブレイジングアイス！」こっちだ、ユニモン！」

「よーし、オイラも！」

俺の攻撃でユニモンの注意を引き、ゴマモンと一緒に結衣達から離れる。よし、狙い通りにユニモンがこっちをターゲットしたな。あとは出来るだけ逃げて、グレイモン達が戻ってくるのを待ただけだ。

「お、湧き水だ！だったら…「マーチングフィッシュズ！」」

ゴマモンの必殺技は魚を操るから、水場が無いとゴマモンは必殺技を使えないが、今回は丁度湧き水があり、湧き水の出ている場所や下流の方から何匹か魚が飛びだし、ユニモンに体当たりをしていく。急に現れた魚達に翻弄されているようだ。

しかしすぐに魚達の攻撃が大したことがないと気づいたユニモンは、彼らの攻撃を無視してさっきのように口を開けて光球を作り出す……これは、まずい！

「ゴマモン、危ねえ！ ブレイジングアイス！」

「くっ…うわっ!？」

「ゴマモン!!」

ユニモンの「ホーリーショット」がゴマモンに向けて放たれ、俺は冷気弾を当てて相殺まではいかなくとも攻撃をずらそうとしたんだが…ほんの少ししか変えられず、ゴマモンの目の前に着弾し衝撃でゴマモンが吹っ飛ばされてしまった。

後ろから聞こえてきたのは、丈の声だった。吹っ飛ばされたゴマモンに駆け寄り、抱きかかえる。直接は当たっていないから、ゴマモンもそこまでダメージは負っていないはずだが…とにかく、二人からユニモンを離さねえと！

「プチツイスター」…くそ!!」

俺の攻撃を避け、またしてもゴマモンの方を狙おうとしているようだ。こうなったら、俺が丈達の前に出て――

「うわあああつ!!」

「お、おい丈!!何やってんだよ!？」

「僕が…皆を、守らなきゃ!」

丈が、高度が下がっていたユニモンに正面から飛びついた…!?アイツ、俺の攻撃を回避したタイミングを狙ってたっていうのか!？」

黒い歯車までは届いていないが、ユニモンの首にガツシリと捕まっている丈。ユニモンは振り払おうと暴れ、徐々に高度も上げている。

このままじゃ丈が…!

「い、今だ! ロップモン、黒い歯車を…!!」

「何言ってるんだ、お前にも当たるぞ!!」

「僕の話は、いい…から! 早くっ…」

あんなに暴れているのにしがみついている丈も凄いが…俺に丈を巻き込まずに攻撃できるような命中精度はない。巻き込んででもやるしか…ないのか?

「う、くっ…うわあああっ!?!」

俺が迷っている間に、丈はユニモンが暴れる力を強めたことで振り落とされ、このままでは丈は崖下に落ちてしまう。しかも、ユニモンが体勢を立て直して丈にターゲットを絞っているのがその目で分かった。このままじゃ、落ちてでも落ちなくても丈は…!

「丈…:…:丈お——っ!!!」

ゴマモンの叫びが、辺りに響き渡り…その時、ゴマモンが光に包まれた。

「ゴマモン、進化——!! イツカクモン!!」

白い毛皮に、口から飛び出た大きな二本の牙。そして頭の上に生えた大きな黒い一本角は、一角獣をモチーフにされたデジモンであることがすぐに分かる。丈を頭の上でキャッチし、向かってきていたユニモンを前足でスクラッチ攻撃して迎撃する。丈が背中の上に移動したことを確認したイツカクモンは、ユニモンに向けて角を向ける。

「〴〵ハーブーンバルカン〴〵!!」

再生可能なその一本角を数発連射し攻撃するイツカクモン。ユニ

モンも一度は全弾回避したが、イツカクモンの「ハーブーンバルカン」はこれでは終わらない。黒い角の中に格納されているミサイルが展開され、スピードを何倍にも上げて再度ユニモンに襲いかかり、ユニモンは躲しきれずに何発か被弾。背中に入り込んだ黒い歯車を破壊され、ユニモンは明後日の方向へ撤退していった。

「何とかなかったか…そうだ、サイクロモンは」

「大丈夫、ほら」

結衣の声を聞き、下を見る。丁度、ガルルモンとカブテリモンがそれぞれ必殺技をサイクロモンに命中させ、崖下まで落とした所だった。サイクロモンはその重量もあってか、落ちた先も崖が崩れ、どんどん下へと落下していく…あの調子なら、中腹より下まで落ちていくだろうな。

ユニモン、そしてサイクロモンも無事に撃退し、全員合流した俺達は、ようやく頂上へと辿り着いた。そこから見えたのは…この山を中心として、周囲は海に面していた景色。ここが絶海の孤島ということ、子供達はようやく実感したんだ。

第十話 穿つ拳！トウルイエモン

「なんてことだ……ここは本当に、島だったんだ。これからどうすれば良いんだ、僕達は……」

「丈君……」

「太一、何してるの？」

「地図を作ってるんだ。これから何かの役に立つかもしれないからな」

絶海の孤島だと目の前の景色で実感した子供達。そんな中、樂觀的なか前向きなのか分からないが、太一がどこからか紙らしきものを取り出してペンで書き込んでいる。お前、どこからそんな物を取り出したんだよ？単眼鏡しか持ってなかつたはずだろ？

「成る程、それは良い考えですね……？」

「とても役に立つとは思えん」

「太一って図工苦手だったよね……」

「書いた本人が分かってるから良いんだよ！」

太一が書いた地図は……言っちゃ悪いが落書きだった。これはきつと、太一が後で見ても分からなくなる書き方だと思うぞ。

「写真でも撮れたら良いんだけどね……」

「デジカメはありますけど……ここに来てからは動いてません」

「だよね」

あらゆる電子機器が殆ど使用出来ないからな……例外で光子郎のパソコンくらいだ。インスタントカメラとかなら撮影できるのかね？まあ、無いものねだりだから考えても仕方ないけどな。

「地図なんか書いても無駄だよ。もうどうしようもないんだ……」

「どうして、こんなことになっちゃったのかしら……」

「ミミ……」

「丈君、ミミちゃん……」

結衣が落ち込んでいる丈とミミに何を言ったらいいのか分からずにいる。全くの未開の地、そんな場所に子供だけで飛ばされ、拳げ句にはデジモンという不可思議な生き物もいる。こんな絶望的な状況

で、気休めでも何て言えば良いのか、俺にも分からない。

そんな時、何処からか、ドカーン！という大きな音がした。方向からして、俺達が登って来た方からだな…

「何だ!？」

「見に行こう!」

全員で音のした場所まで向かうと、通った通路に穴が空いていた。その部分だけ崖崩れしたみたいな穴。パルモンに手伝って貰えば、渡れなくもないだろうが…問題は、その崖崩れした道の先にアイツがいることだ。

「あ、レオモンだ!」

「レオモンって?」

「レオモンは良いデジモン!」

「とっても強い、正義のデジモン!」

ライオンの獣人のような、二足歩行のデジモン。俺が、助けたいと思ったデジモンの一体だ。レオモンの目を見る限り…間違いない、もう操られてる。

「子供達…倒す!」

「っ…逃げろ!!」

「チツ…ブレイジングアイス!」

レオモンは腰に差していた剣、獅子王丸を抜き、崖を飛び越えて俺達を追い始めようとする。牽制で一発、冷氣弾を撃つてみたが簡単に躲かれた。しかし、少しはこれで距離が稼げたはずだ。

と、ここで俺は結衣の変化に気がついた。この前と同じように、小刻みに震えているのを、手首を掴んで必死に隠しているようだった…そう、アンドロモンの時と同じだ。俺は跳躍し、結衣の手に収まるように身を委ねる。結衣もそれに気づき、咄嗟に俺をキャッチした。

「結衣!」

「っ! ロップモン…?」

「大丈夫だ、俺がついてる。行くぞ!」

「う、うん……！」

少しは安心させることが出来たみたいだ。太一達に若干遅れてしまったが、結衣はすぐに皆を追いかける。

しかし、ここで逃げてでもその先にはオーガモンがいるはずだ……どうする、ここでレオモンと戦うか？ デジヴァイスの光を当てられれば、レオモンは正気に戻る。俺達が戦い始めれば皆も戻ってきて協力してくれるはずだ。

……いや、ダメだ。オーガモンが戦闘中に不意打ちしてくる可能性が高い。そうなったら、誰かが怪我をしてしまうこともあり得るし……結衣も、オーガモンが出てきたら満足に動く事も出来なくなるかもしれない。ここは原作通り、挟み撃ちにされた所をカウンターにするしかない！

「あつー！」

「太一!!」

「太一君……!? 戻ってー！」

太一が急に反転して、俺達の所まで戻って来た。どうやら、ポケットに入れていたさっきの地図を落としてしまったらしい。しかし、レオモンがすぐそこまで迫っているのを見た太一は足を止めた。

「『ベビーフレイム』！」

太一を助けようとしたアグモンの攻撃が、レオモンに命中。丁度射線上に地図があったから、キレイに燃えてしまったが、まああんな地図あってもなくても一緒か。グツジョブ、アグモン。

「ごめん太一、地図まで燃えちゃった！」

「しょうがないよー！」

ここからは緩やかな下り坂になっていて、比較的走りやすくなっている。少しずつレオモンと距離を離せているみたいだが……レオモンが本気で走っていないな。軽くランニングぐらいのペースに見える。

「ハハハハハ！ いらっしやーい！ 待ってたぜえ、覚悟しな！」

「オーガモンだ！」

「あれも本当は良いデジモンなの？」

「正真正銘の、悪い奴だよ！」

「選ばれし子供達、倒す！」

曲がり角からオーガモンが顔を出し、歩みを止めた俺達。後ろからもレオモンが追いつき、完全に挟み撃ちにされた。

「しまった、挟まれた！」

「最初から僕達を、ここに追い込む作戦だったんですよ！」

「そんな、レオモンとオーガモンは敵同士なのに！」

「レオモンの奴、操られてるからな…それより、来るぞ！」

「骨棍棒！」

「獅子王丸！」

オーガモンとレオモンがほぼ同時に俺達に襲いかかってきた。その時、子供達のピンチに呼応するように、六つのデジヴァイスが光を放った。

「アグモン進化——っ!!グレイモン！」

「ガブモン進化——っ!!ガルルモン！」

「パルモン進化——っ!!トゲモン！」

「ピヨモン進化——っ!!バードラモン！」

「テントモン進化——っ!!カブテリモン！」

「ゴマモン進化——っ!!イツカクモン！」

レオモンはグレイモン、オーガモンはカブテリモンの頭部の外殻に弾かれ、それぞれ三体ずつ相対する形になった。

「タケル、こっちだ！」

「いっけえ、グレイモン！」

「メガフレイルム!!」

「ハーブーンバルカン!!」

「チクチクバンバン!!」

レオモンはグレイモンの火球を防いだ直後、トゲモンの攻撃を浴びせられ、オーガモンはイツカクモンの攻撃がヒット。ユニモンとサイクロモンとの戦いがあったとはいえ、六体の成熟期に二体の成熟期相

手では分が悪い。

「トドメだ！」

「メガフレイ——」

グレイモンがもう一度攻撃しようとしたその時、俺達の頭上が突然崖崩れを起こした。大きな岩石が俺達目がけて降ってきたのを、グレイモン達が一齐攻撃をしたことで粉微塵となり、小さな石や砂となって降り注ぐ。

「くっ…皆、大丈夫か！」

「こっちは何とかな」

「もう嫌、こんななの！」

「あっ…アグモン！」

「大丈夫、ちよつと疲れただけ…」

気づいたら皆退化していたようだ。まあ、今日が初めての、一日に二回の進化だ。最初は疲れてしまうのは仕方ない。こんな時、進化出来ないのが歯がゆいけどな…俺も、早く進化したい。

「ロップモン、ありがとう…もう大丈夫」

「ん？ああ、そうだな。分かった」

「ロップモンの耳、すごい！」

俺が結衣の頭を、耳を使って覆っているのを見たタケルがはしゃいでいた。結衣に抱えられている状態だと、これくらいしか出来ないかな。本当だったら、頭の上で耳を広げるつもりだったんだが。

まあ、とにかく…レオモンもオーガモンもいなくなつたし、もう結衣から離れても大丈夫だろう。崖崩れに巻き込まれたと皆思っているみたいだが…実際は崖崩れに合わせて撤退しただけだ。今晚、あの館で襲ってくるだろうな。

「……」

「どうした？太一」

「何で急に、崖が崩れたのかと思ってさ」

「向こう側の道が崩された時に、罅でも入っていたのかもしれませんが？」

「そうか…」

皆が下山を再開する中、結衣は俺に耳打ちするように小声で話しかけた。

「……ロップモン、どう思う?」

「…今は近くにはいない。でも、恐らく無事だろうな」

「レオモンとオーガモンのことだね…崖崩れは? タイミングが良すぎたと思うんだけど」

「ああ…上手く聞き取れなかったが、二体の協力者だろうな。何かあればすぐに言う」

「お願い」

本当は…戦いの最中、ずっと意識を崖の上に向けていたから殆ど聞こえていた。

お前の好きにはさせないからな…デビモン。

☆☆☆

「どう考えてもおかしいですよ、一日に二回の進化だなんて」

「いいじゃねえか、おかげで助かったんだから」

「でも…」

「ねえ、デジモン達がパワーアップしているとは考えられないかしら」

「そうか、その可能性はありますね」

「だがそうだとしても、今日はハード過ぎだな…」

「大丈夫? パルモン」

「全然大丈夫じゃない…」

「もう歩けないよお…」

アグモン達は、今日の戦いで酷く疲れてる…私達も、登山と下山で疲れてるし、もう夕方になってる。これから野宿の準備をするのは大変…出来るなら、ピヨコモンの村とか昨日の温泉のような、食料や寝床の整った場所があれば良いんだけど、そんな都合の良い話は…

「…ダメだ。どこかゆつくり休める場所を探した方が良いな」

「そうね、私達もかなり——」

「あーっ!!あれ!!」

……あつた。都合の良い話。丈君が見つけたのは、大きなお屋敷だった。でも、何でこんな森の中に?誰かの別荘…でも、この世界にはデジモンしかいないんじゃない?

「やった!普通の建物だ!今度こそ、人間がいるに違いない!」

「待て、いきなり入ったら危険だぞ!」

「…?」

「どうした?太一」

「こんな建物、上から見た時にあつたかな?」

「地図になんか書いてないの?」

「あー…」

「なくしちゃったの?」

「お前が燃やしちゃったんだろ!」

「あ、そっか…」

私もそこが引つかかる。こんな大きな建物が山の麓にあつたら目立つのに…太一君を見習って、私も地図を描いておけば良かった。

丈君とヤマト君の後に続いて、私達もお屋敷の玄関に向かう。

「ごめんください!誰かいませんか?」

「どんな様子だ?」

「特におかしいところはないみたいだが…」

「それだけに、かえって不気味ですよ」

「…そうね」

「君たち、まさか引き返そうって言うんじゃないだろうね?こんな立派な建物があるっていうのに!」

「…それもそうだな」

皆、やっぱりこのお屋敷を警戒しているみたい。丈君は人間がいそうだからと興奮しちゃってるけど、私もここに入った瞬間に何か…寒気がした。中もイメージ通り立派なのに…あれ?そういうえば、靴を脱ぐスペースがない。海外様式?

「わー、キレイイ!」

「ホントね!天使の絵?」

「タケル、天使って何？」

「うーんと、それはね…」

「こんな綺麗な天使の絵が飾ってある所に、悪いデジモンがいるはずないじゃないか！」

「まあ、今更野宿っていうのも厳しいわね」

「仕方ないか…」

「皆、ヘトヘトだもんね」

「おーい！皆行くぞー！」

とりあえず中に入ってみたは良いものの…どうしよう？あれだけ大きな声で叫んでも誰も出てこないってことは、ここは空き家…？調べようにも、ドアが沢山あって…疲れている今はあまり探索する気も起きない。

「ロツプモン、何か聞こえる？」

「…いや、物音一つしないぞ。誰もいないのは間違いない」

「ん、これは！」

「どうした、ガブモン？」

「食べ物匂いだ！」

「ええーっ!!？」

「それもご馳走だ!!」

「ええーっ!!？」

「こっちだよ！」

ガブモンの案内でお屋敷の中を進んでいくと、やがてテーブルクロスが敷かれた大きな長机に、椅子が十六脚…ガブモンが言った通り、長机の上には豪勢な料理が並べてあった。

「食い物、だよな？」

「そう見えますが…」

「なんてラツキーなんだあ…」

「こんな馬鹿な話があつてたまるか！」

「いくらなんでも、話がうますぎるわ！」

「椅子の数も、丁度私達と同じ人数分あるね…」

「おい、お前ら！何勝手に食ってんだよ！」

ロップモンの声が聞こえて、見てみたらもうアグモン達が既に料理を食べ始めてしまっていた。これ、毒とか入っていそうとか思っていたんだけど…アグモン達は凄く美味しそうに食べてる。

「何とも無いのか？アグモン」

「うん！美味しいよ！」

「こんな旨いモン食わんなんてバチがあたるで！」

「……ぼ、僕は食べるぞーっ！少しくらいラッキーなことがあったって良いじゃないか!!いったただつきまーす!!」

…結局、私達はお腹が空いている状態で目の前に美味しそうな料理があるというこの状況に屈してしまった。一人(?)を除いて。

「ロップモン、食べないの？」

「俺は今日、大した事してないしな。俺は建物の中を探索してくる」

「あ…もう」

そう言っつて、ロップモンは一人で部屋から出て行っちゃった。何か掘ねてるようにも見えたけど…もしかして、自分も進化して戦えたかったとか？でも、私は……

今は止めよう。折角こんなに美味しい料理が目の前にあるんだから…少し、ロップモン用に取り分けておこうかな。

…ご飯を食べ終わった私達は、五日ぶりのお風呂を堪能した。ロップモンが戻って来て、お風呂と寝室、浴衣なんかの服も見つけてくれた。
いた。

「まあた、バカやつてる…」

「ああく良い気持ち〜…」

「ロップモンもこっちでお風呂入れれば良いのに…」

「えーっ!?!ロップモンはダメですよ！」

「どうして?..」

「だって、ロップモンって男の子でしょ？確かに声は高めだけど…!」

「あれ?デジモンって性別あるの?」

「…さあ?..」

「でも、ロップモンが嫌がったんですね?」

「うん…太一君達と男湯にいますと思うけど。一緒に入っていったし」
でも、ミミちゃんや空ちゃんやパルモンやピヨモンと一緒にこうしてお風呂に入っているのを見ると、私だけパートナーがいないってちよつと寂しい…ロップモンの精神が男の子寄りだとしても、デジモンは性別無いみたいだから気にしないのに。

なんて思いながら、長めのお風呂を終えて、浴衣に着替えて…それからダブルベッドが八つある大きな寝室で、安全を第一に考えて全員その部屋で寝ることにした。

「わーい、ふかふかだー!」

「シーツも、布団も…まるで新品みたい」

「何だか林間学校みたい!」

「みたいじゃないよ…そもそも僕達はサマーキャンプに来てたんだ。それがどういうわけか…」

…何か、昨日に続いてまたしんみりした空気になっちゃった。丈君も、言ってから気づいたみたいで、すぐに「ごめん…」と小さな声で謝っていた。

「そうだよな…ただのキャンプに出かけるつもりで家を出たんだよな…」

「俺達がこのファイル島に来てから今日で五日…学校や町内会じゃ大騒ぎになってるだろうな…」

「パパ…ママ……」

「…今日はもう寝ましょう? デジモン達も疲れてるし…」

「…そうだな。お休み!」

太一君が明るくそう言っただけ、皆もそれぞれ返事をして…私はベッドに横になりながら、ロップモンを軽く抱きしめる。

お姉ちゃん…お爺ちゃん…会いたいな。それに、学校の友達とも…ロップモンから、時間の流れが違うっていうのも聞いているけど…やっぱり、早く会いたいな。お姉ちゃんの手料理が食べたい。お爺ちゃんのお愛ない話が聞きたい。それから、それから…お母さん、と…

☆☆☆

結衣の奴：寝る前に泣いていたの、自分で気がついてないみたいだな。丈の空気ぶち壊し発言のせいで、リアルワールドのことを思い出したのかもしれない。全く、アイツは何回やらかせば気が済むんだ？

結衣が寝息を立て始めたのを確認して、手は届かないから、耳を使って結衣の涙をそっと拭き取る。それからしばらく、俺は寝たふりをしながら太一とアグモンがトイレに行くのを待つことにした。少し眠気もあるが、そこは我慢しなければ。それ程時間は経たないはずだ。

…それにしても、少し腹が減ったな。意地を張ってあの料理を食べなかったのは失敗だったか？いや、あの時じゃないと探索も出来ないし、建物の近くの森で木の実を食べることも出来なかったしな…仕方ない、そう言い聞かせているんだが…やっぱ、料理食べたかったなあ……ハア。

その後の風呂は、危うく女湯に連れて行かれそうになったのは大変だった。確かに俺もゆっくり入りたかったが、流石に女湯は…ねえ？精神的に無理だった。結衣の奴、俺のこと男と思ってないみたいだな…まあ、ゴマモンの女湯乱入も防げたし、どこかの旅館みたいな風呂で大いに楽しめた。それだけで良しとしよう。

…それより、この後のことを考えておかないとな。

これから相手にするのはレオモンとオーガモン、そしてデビモンだ。トイレに行った太一とアグモンが三体に遭遇し、デビモンによってこの館の幻覚が解除される。太一がデジヴァイスを落としたことで、レオモンに聖なる光が当てられて、それでレオモンが正気に戻るんだよな。でも、デビモンが子供達のいるベッドをあちこちに飛ばしてしまい、さらにファイル島も分裂してしまう。

今回は、戦えるのが俺しかない。アグモン達が食べたのは幻の料理だ、実際は何も食べていないのと同じ…だから俺は、デビモン達に

対抗する為にわざわざ森で食料を食べてきたのだ。ただ：正直言うて、俺一人でどうこうできる相手ではないだろう。太一とアグモンが助かったのは、レオモンがオーガモンとデビモンを決死の覚悟で食い止めてくれたからだ。

今回、俺がするべきことは、太一とアグモンを逃がすこと。そしてレオモンがもう一度操られるのを防ぐことだ。その為には、俺は太一とアグモンがトイレに行く時に一緒に行く必要がある。だからこうして待っているんだが：問題は、結衣だ。起こして一緒に行つて貰うべきか、俺一人で抜け出すべきか？

結衣も一緒に戦つて貰えるなら、後ろから指示を出して貰えるから助かるんだが：危険すぎるんだよな、今回は。三体の成熟期に同時に襲われると：結衣を守り切れるとは思えない。

だが、一人でここに残していく場合：後々、結衣が分裂したファイル島のどこかに飛ばされてしまう可能性がある。そうになると、たった一人で結衣は生き残らなければならない。もしデビモンに操られたデジモンに襲われてしまったら：

「……チツ」

つい、小さく舌打ちをしてしまった。どっちを選んでも結衣が危険に晒される。

俺は、原作で死んでしまうデジモン達を助ける為にこの世界に転生した。本来巻き込まれるはずがなかった結衣を巻き込んで。

だから、俺は結衣を無事にリアルワールドに帰す責務がある。それが、俺が唯一結衣に出来る罪滅ぼしだ。

：そもそも、今ここで動く必要はあるのか？このまま何もしていなければ、誰も命の危険に晒されることはないはずだ。太一もアグモンも、きつとレオモンのおかげで助かる。たとえレオモンがもう一度操られてしまふんだとしても、このまま何もせずにいるのが正解なんじゃ…

「……んう……」

「……！結衣……？」

「ロップモン……まだ、起きてるの？」

結衣が目を擦りながら起き上がった。

「ま、まあな……どうしたんだ？」

「うん……ちよつと、お手洗いに行ってくる」

その一言を聞いて、俺は背筋が凍り付くような感覚がした。まさか、太一とアグモンよりも先に結衣がトイレに行くことになるとは……結衣がベッドから出て、少しフラフラしながら部屋のドアをゆつくりと開けた。

「……結衣、俺も行く」

「そう……じゃあ、ここ開けとくね……」

俺は、枕元にあつた結衣の服や荷物を布団で包んで、先に行つた結衣の後をついて行つた。こうなつた以上、俺と結衣が太一とアグモンの代わりに奴らと対峙するしかない。しかし幻覚が消えたら結衣が今来ている浴衣も消えてしまうし、持ち物も全部持っていかねえと。

「……？ロップモン、それは……？」

「あー……少し寒いから持ってきただけだ」

「そっかあ……ふあ……」

あ、あれ……説明面倒だから適当に返したから、ツツコまれるかと思つただけ……寝惚けてるのか？

「それじゃ、後でね……」

「あ、ああ」

結衣が女子トイレに入っている間に、男子トイレ調べるか……？オーガモンが中にいるはずだ……いや、まだ開けなければ戦闘にはならないはずだ。先に結衣に事情を説明して、準備して貰った方が良いな。

後は……この足音、レオモンか。少し離れた場所にいるな。またそこで挟み撃ちにする作戦だろう。デビモンもいるはずだが……やつぱり

奴はどこにいるのか分からねえな。翼の羽ばたく音もしない。これだけ耳を澄ませていれば聞こえてもいいのに…不気味だな。

俺が布団を広げて、荷物の整理をしていると、結衣が女子トイレから出てきた。

「…何やってるの?」

「先に着替えてきてくれ。その後で説明する」

「…うん。分かった」

俺の目を見て、ただ事じゃないと思ったのか、結衣は素直に頷いてくれた。数分して、結衣がいつもの服に着替えて出てきた。

「それで、何があったの?」

「…敵がいる。オーガモンとレオモンだろうな」

「…部屋を出る時から、気づいてたの?」

「…ああ」

「…そっか。じゃあ、皆を起こしてこないと」

「…実はな。もうすぐ近くにいるんだ。皆を起こしに行く時間はない」

「そう、なんだ…」

結衣は辺りを目を凝らしてキョロキョロと見渡し、見える距離に誰もいないのを確かめて、その場でしゃがんだ。俺の目線に合わせるように。

「ねえ、ロップモン。部屋を出る時から気づいていたんだったら、何でその時に言わなかったの?」

「そ、それは…いや、ここまで接近されているのに気づかなかったというか…?」

「…言ってることとやってること、矛盾してるよ」

「…ええ?」

「普段のロップモンなら、敵が近くにいるんだったら皆を起こすはずなのに…今回は、私の荷物だけ持ってきた。まるで…私とロップモンだけで戦えって言ってるみたい。そういうことで良いの…?」

…やべ。原作に合わせて行動しちまったのか、俺は。何で皆を起こして全員で戦うって発想をしなかったのか、結衣からすれば疑問でし

かないだろう。理由は、アグモン達に戦えるだけの力が無いから何だが…それを説明すると、俺はこの館が敵の罠だということを説明しなくちゃいけない。知る由もない情報を、説明しなくちゃいけない。

「……………」

俺は、沈黙を選んでしまった…：…そうだ、今回皆を危険に晒したのは、俺だ。結衣の…皆の安全を優先するなら、何としても野宿をしなくちゃいけなかったのに…

俺の顔を見て、結衣は悲しそうな顔をしている。今にも泣き出しそうな顔だ。そりやそうだよな…これじゃ、俺が結衣に危険な目に遭わせようとしているみたいじゃないか。

「ロップモン…本当のことを話して。何で——」

「ヒヤッハー——っ!!!」

その時、男子トイレから奇声を発しながら、ドアを蹴破ってオーガモンが出てきた。クソツ！タイミングが悪いんだよ！

「声が出ると思ったら、こんな所にいるとはなあ！」

「『ブレイジングアイス』!!」

「冷てえっ!?!」

「結衣!!一緒に来てくれ!!」

「あ…………う、うん!」

引き返そうとしたその時には、もう遅かった。後ろには、レオモンがすぐそこまで迫ってきていた。

「選ばれし子供達…倒す!!」

「チツ…………!」

「レオモン…………」

「大人しく寝ていれば良いものを…」

通路はレオモンとオーガモン、そして唯一の逃げ場だった一階に飛び降りれそうな吹き抜けには、黒いコウモリのような翼を持つ黒ずくめのデジモンが宙に浮いていた。

「デビモン……」

「デビモンって…?」

「このファイル島の…悪の親玉ってどこか。黒い歯車も、お前の仕業だろ?」

「ほう…気づいていたか。だが、もう遅いのだ…夢はもう、失われた」

デビモンがそう呟いた瞬間、まるでガラスが罅割れるかのように、館全体に罅が入り、豪華な館が一瞬で廃墟へと変貌した。

「こ、これって…!?!」

「…今までののは全部幻覚だったんだ。料理も、風呂も、この館にあるものは全部な……」

「そんな…だから、ロップモン…!」

「な、なんだこれは!?!」

「キヤーツ!」

「どうなってるんだ、これ!?!」

俺達がさつきまで寝ていた寝室は、床とベッドだけの、部屋とは呼べない状態になっていた。デビモンはその場所に向けて手を伸ばし、何か黒いオーラのようなものを纏うと、ベッドが子供達を乗せたままグルグルと浮遊し始めた。

「…貴様、何者だ?私の幻に気づいていたのは貴様だけだ」

「そんなの、どうだって良いだろ!それより皆を下ろせ!」

「何で、こんなことをするんですか…?黒い歯車を操っていたのが貴方なら…今まで襲ってきたデジモン達も、全部貴方のせいで、傷ついで…!」

「それはお前たちが…選ばれし子供達だからだ」

「選ばれし、子供達…」

「そう、私にとつて邪魔な存在なのだ。黒い歯車でこの世界を覆い尽くそうとしている私にとつてはな!」

その時、ムゲンマウンテンの岩肌が、縦に割れた。次第に地響きも強くなり、崖崩れのような音もあちこちで聞こえてくる。

「ファイル島は、既に黒い菌車で覆い尽くした。次は海の向こうの世界、全てだ！」

「海の、向こう…」

「…させてたまるかよ」

「ロップモン…？」

「俺は、お前のような奴をぶちのめす！そのレオモンのような、良いデジモンを助ける為にな!!」

「それは叶わぬことだな。ここはお前たちの墓場となるのだから」

「子供達、倒す!!」

レオモンがこちらに拳を構えた。俺はレオモンの顔面目がけて、冷氣弾を放つ準備をする。

「『ブレイジングアイス』!!」

「『獣王拳』!!」

「くっ…!」

俺の攻撃がレオモンの顔面にヒットし、俺は『獣王拳』をギリギリで躲せた。何とか、結衣を守ってみせる…!

「…小賢しい真似を。やれ、レオモン！」

「何っ…!?!があっ！」

レオモンが一気に距離を詰めて、俺の首を右手で掴み、岩壁に叩きつけた。そしてすぐさま、左手で獅子王丸を抜く。

見えなかった…!レオモンの動きに、反応できなかった…!

「ロップモン!!」

「ゆ、い…っ。来るなっ……!?!」

「えっ……」

レオモンが狙っているのは、結衣だった。左手の獅子王丸を逆手に持ち、回転するように右側にいた結衣に向けて攻撃しようとしている。

「『ブレイジングアイス』……!!」

「ぐっ……」

キーン!と、甲高い音がした。何とか獅子王丸に冷氣弾をぶつけ、レオモンの手から弾くことが出来たようだ……でも、このままじゃ、結衣が……!

「ゆい……っ、早く、にげ……」

「嫌だよ……絶対、嫌。ここで私が逃げたら、ロップモンが……死んじやう、よ……」

……結衣が泣きながら、俺を見る。その目を見て、何となく……言いたいことが分かった気がした。

——ここでロップモン^俺を死なせるくらいなら、私も死ぬ。

「だ、めだ……させ、ねえ……!」

「……?」

「俺、は……結衣を、守らなきゃいけねえんだよ!!」

「ロップ、モン……?」

この感覚は、前に味わったことがある。そう、結衣と初めて出会ったあの日に。

体が、造り替えられていく感覚。俺と……結衣の想いに呼応して、今の体よりも強く、大きく。

「ロップモン、進化——っ!!トウルイエモン!!」

結衣のデジヴァイスから光が放たれていたのに気づいたのは、進化した後だった。体格が変化したことで、レオモンは俺から手を離し、目を覆い隠すように腕を交差させていた。多分、進化の光で怯んだん

だろう。今なら…レオモンを助け出せる。

その場で跳躍し、レオモンの頭上を飛び越え、後ろから蹴りを数発、レオモンに食らわせる。体勢を崩したレオモンは、前のめりに倒れ込んだ。

「は、速い…！」

「結衣！レオモンにデジヴァイスを翳してくれ！」

「っ！は、はい！」

呆氣にとられた様子の子の結衣だったが、鞆についているデジヴァイスをレオモンに翳す。すると、聖なる光を放ち、レオモンはその光を浴びた。

「ぐああああつ…！」

「こ、これ…大丈夫なの？」

「ああ。これで正気に戻るはずだ」

「…邪悪、消滅!!」

俺の予想通り、レオモンは正気に戻せたみたいだ。レオモンにはオーガモンの相手をしてもらうとして、俺の相手は…

「…フン」

「させるか!!」

デビモンがまた皆の方に手を翳して何かをしようとしていたので、一直線に跳躍して殴りかかる。デビモンはそれを上に飛行して避けて距離をとったので、俺は一旦結衣の近くまで戻る。

「君たちが、選ばれし子供達だったのか…」

「レオモン、オーガモンの相手を頼めるか？」

「デビモンはどうするのだ」

「俺が戦う…奴さえ倒せば、皆を助けられるからな」

結衣に話しかけるレオモンを呼び止め、俺はレオモンと結衣の間で割り込むように移動する。レオモンに対してトラウマが起きてるのが見て分かったし、俺の方がまだマシだろう…と思う。今の俺は人型だし、結衣と同じくらいの目線になっているから、俺に対してもトラウマが起きてるかもしれないな。

「結衣…俺が怖いか？」

「ロップモン…うん、トウルイエモンだっけ。大丈夫、可愛いし強くて、良いと思うよ」

「…別に可愛くなくて良いぞ？俺は」

「ダメだよ、可愛いって大事だよ？」

「何言ってるんだお前…」

どうやら…いつも通りみたいでホツとした。結衣に怖がられたらどうしようかと思っただぞ。進化する度に気にしてたら、戦闘に集中することも出来ないしな。

さて、これで心置きなくデビモンと戦えるんだが…デビモンが飛行できるのが問題なんだよな。いくら跳躍力があっても、俺は飛べるわけじゃない。まずは奴を地上まで引きずり下ろさないと。

「トウルイエモン、ここは逃げろ」

「嫌だね。せめて一発、ぶん殴ってやんないと気が済まねえ」

「だが、このままでは他の子供達が飛ばされるぞ」

「トウルイエモン…私も、このまま戦っても不利だと思う」

「俺が飛べないからだろ？不利だからって逃げろって？」

「…違う。私も、皆の為に戦いたい。レオモンも、手伝ってくれる？」

「デビモンに一撃入れたら、そのまま私達も逃げるから」

「…作戦があるのだな？だが、聞く時間はなさそうだ…『獣王拳』！」

「ぐぎやあつ!？」

結衣は俺とレオモンに作戦を伝えようとしたその時、オーガモンがこちらへと飛び込んできたのを、レオモンが『獣王拳』で牽制を入れた。

「今の攻撃、一度に沢山出せたりする？」

「可能だが…威力はその分落ちるぞ」

「それで良い。合図したらデビモンに向かって攻撃して。でも、直接当てなくて良いから。攻撃したらすぐにレオモンも逃げてね」

「…分かった。お前たちを信じよう」

「トウルイエモン…かなり危険だけど、私を信じてくれる？」

「ああ。頼りにしてるぜ…相棒！」

「うん!…それじゃ、私を背負って」

「はあっ!?何言ってるんだ、危ねえからダメに決まってるだろ!」

「そうするしかないの…お願い!」

…ふざけて言ってるわけじゃなさそうだ。結衣の考えた作戦なら、宣言通りデビモンに一撃入れられるだろうが、あまりに結衣が危険すぎる。

「第一、お前がかなり危険って自分で今言ったばっかじゃねえか!お前が怪我でもしたら…」

「大丈夫。ちゃんと、考えてある。トゥルイエモンが私の作戦通りに動いてくれれば、私は絶対怪我しない」

ここまで言われたら、信頼してくれている結衣に対して失礼、か…というか、結衣の信頼に、答えてやりたい。

「…あー、クソ!そこまで言うなら、やってやる!ほらっ!!」

「ありがとう…よいしょ」

結衣に背を向けてしゃがみ、結衣が俺に身を預ける。思っていたより軽いな…とか考えていたら、結衣に怒られるかもしれないな。

「よしっ…レオモン、準備は良い?」

「いつでも良いぞ!」

「それじゃ…行くよ、トゥルイエモン!」

「おうっ!!」

「3, 2, 1…走って!!」

結衣の合図で、俺は全力で走る。

「今!跳んで!!」

「うおおおおっ!!」

大きく跳躍し、デビモン目がけて一直線に進んでいく…が、やはり途中で勢いを失っていく。

「レオモーン!!」

「〴〵百獣拳〴〵!!」

結衣の声に合わせ、後ろにいたレオモンの拳から〴〵獣王拳〴〵に似たようなエネルギー波が分裂して放たれた。その内の一つは、俺のすぐ真後ろにまで迫ってきている。

「トウルイエモン、あつちに!」

「っ!おうっ!!」

後ろに迫っていたエネルギー波を強く蹴り、結衣の言った方向へ跳ぶ。

「次は…そこ、次、そっち!!」

「任せろ!!」

〴〵百獣拳〴〵を足場にして、デビモンへと少しずつ近づいていく…しかし、それをゆっくり見ているデビモンではなく、こっちに近づいてきていた。

「デビモンが攻撃してきたら、軽くジャンプしてそのままバック宙!」

「なっ…!」

「浅はかだな、選ばれし子供。〴〵デスクロウ〴〵!!」

デビモンが左手に黒いオーラのようなものを纏い、俺達に攻撃してきた。全く、無茶ぶりしやがって…!こうなったら、とことんやってやる!!

「うおりゃっ!」

「何!?!」

「トウルイエモン、あそこに！」

「…よし、きた!!」

バック宙を決めて、デビモンの攻撃を紙一重で躲す。次に結衣が指差したのは、近くまで飛んできていたベッドだった。あそこに着地して結衣を下ろせば、思いつきり攻撃できる！

ついでに、デビモンの背中を足場にして蹴っ飛ばすように跳躍し、無事にベッドまで辿り着いた。

「落として良いよ！行って!!」

「…結衣を頼んだぞ!!」

ベッドに結衣を投げ出して、もう一度大きく跳躍し、デビモンに一直線に飛んでいく。バランスを崩している今なら、渾身の一撃を入れられる!!

両手に装備された俺の武器、〃兎角鉄爪〃。折り畳まれて装備されているこの武器を展開し、両手を前に突き出した状態で回転する。

「〃巖兎烈斗〃 おーっ!!」

「ぐっ…!」

決るような一撃に、デビモンは呻き声を上げた。攻撃の途中で俺は両手を勢いよく広げ、またデビモンを足場にして結衣の元へと再度跳躍した。

ベッドに着地した途端、俺はすぐに退化してしまった。初めての進化だし、満足を飯を食われてなかったから、仕方ないか…もうこのベッドも、さつきまでいた場所からかなり距離があるし、大丈夫だと思いたいな。

「ロップモン、すごいー!」

「ふう…何とか、なったな…」

「…お疲れ様、ロップモン」

「アレ見て！レオモンが！」

声につられて、俺達が見たのは…デビモンに向かって「獣王拳」を放つレオモンの姿だった。アイツ、まだ逃げてなかったのかよ…！

「レオモン…レオモーンっ!!!」

「縁があればまた会おう!!」

結衣の声に、レオモンがそう返した。

原作と違って、レオモンの断末魔は聞こえなかったが…頼むから、どうか…どうか無事でいてくれ。

「結衣さん、大丈夫？」

「…うん。ありがとう、タケル君」

俺達が着地したのは、タケルとパタモンのいるベッドだった。俺達が寝ていたはずの空のベッドよりは、誰かのいるベッドで良かった。合流する手間が省けるからな。

「とりあえず、服着たらどうだ？」

「う、うん！」

さつきまで浴衣だったから…今はパンツ一丁だ。タケルも恥ずかしくなったのか、そそくさと着替え始める。

「それにしても…よくあんな無茶苦茶な作戦を思いつくもんだ」

「助かったから気にしない。それより…落ち着いたら、ちゃんと話の続き、聞かせてね」

「…分かってるよ」

こりや、ベッドから下りたら質問攻め再びかね…仕方ねえけど。結果的に騙すみたいになっちまったし、この際全部話してしまおう。

俺が知っている、その全てを。

第十一話 冒険！始まりの町

「うわあ〜っ！」

「皆、しつかり掴まってて…！」

「お、おい！このままじゃ…！」

デビモンとの戦いを何とか切り抜けられたのもつかの間、俺と結衣、パタモンとタケルは激しく揺れるベッドに必死に掴まりながら移動していた。完全にベッド任せだし、デビモンの力で何処に飛ばされるかも分からねえ…っていうか、不規則に動きすぎて酔いそうなんだが。

「あ、あれ！」

「ウ、ウソ…：…っ」

「うわあああ〜！！」

…ってというのが、昨夜の出来事。まさか、滝に落ちるとは。ベッドは空中に浮いていたはずなのに滝壺に真っ逆さまになるって、コレ如何に。ホント、わけが分からんベッドだった。デビモンもどういう能力で動かしてたんだか…

幸い、パタモンがタケルを、俺が結衣を掴んで飛んだおかげで無事に済んだ。空飛べるパートナーがいなかったら、ヤバかったなこれ。俺の場合滑空だけど。

「ふわあ〜…おはよう、結衣さん。ロップモン」

「おはよう。タケル君、パタモン。よく寝れた？」

「うん！二人は寝れた？」

「ああ。丁度洞穴があつて助かったな」

「皆疲れてたもんね」

滝の近くにあつた洞窟で一睡し、しつかり休めた俺達。朝食も川で捕った魚を焼いて食べた。火起こしは結衣の持つサバイバルグッズ

で何とかなった。俺もパタモンも火の技は使えないからな、助かった。

「さて…これからどうしよつか」

「お兄ちゃん達とはぐれちゃった…」

「タケル…」

「…大丈夫だよ、タケル君。きつと、すぐに皆と会えるよ」

「ホント…?」

「うん、ホントだよ」

タケルが泣きそうになったのを、結衣が宥める。流石上級生、下級の扱いに慣れてるな。ここで泣かれたら、俺にはどうしたら良いのかサツパリだからな…

それにしても、ここはどの辺なんだ？ベッドに乗ってる間は海を越えた様子もないから、デスマウンテンに歩いて行ける場所だとは思うが…この近くに始まりの町があるんだよな？

「こんな時、僕も進化して空をスイスイ飛べたらなあ…」

「進化…ねえねえ、君は一体どんなデジモンに進化するの?」

「え?何に進化するかなんて、そんなの進化するまで分からないよ。

タケルには分かる?」

「うーん…」

「おいおい、想像通りに進化するとは限らないだろ」

「良いじゃない。夢が広がってさ」

そんなこと言ったってなあ…確かに、どんなデジモンに進化するんだろうって考えるのは楽しい。が、想像が現実になることは殆ど無いだろう。

俺?俺はほら、想像っていうより予測に近いし。情報がほとんど無いから「想像」なのであって、デジモンの情報を大体網羅している俺にとっては、自分がどんなデジモンになるのかは「予測」出来る。勿論、外れることもあり得るけどな。想像と予測は違うのさ。

「うーん…タブンコンナモン!必殺技は「ブーブーアタック」!ブー!

「…ヤダ」

「じゃあ…キットコンナモン！必殺技は『ヒポポタバキューム』！」
「…絶対ヤダ!!」

…想像力が年齢通りで、微笑ましい限りだよ。パタモン、気持ちは察するぞ。こんな想像をするタケルのパートナーだからな…自分が間抜けな獣型デジモンに進化するような気がしたことだろう。

「プツ…良いね、可愛いよきつと」

「もううっ！結衣も笑わないで！ロップモンはその目やめてよっ！なんかヤダ！」

「うーんじゃあ…」

「もういいってば！止めて！いいの、もう僕進化なんかしな〜いっ！」
「あ、待ってよパタモン！」

掘ねてしまったパタモンを追いかけて、とりあえず移動することになった俺達。確か…タケルの気の向くままに進めば良いはずだから、道案内はタケルに任せよう。

…ダメだ。今まで考えないようにしていたが、どうしても気になる。俺は今、一つ、問題を抱えている。昨晚のデビモンの館の一件について、結衣にどう話したら良いのか分からねえ……

どう話したらというか…話すタイミングがなくね？この後、あまりの町に着くまではタケルとパタモンがいるだろ？その後は赤ちゃんデジモン達を世話することになるだろうし、エレキモンと一悶着あるだろうし…それでその問題が解決したと思ったら次はレオモンが…レオモン？

…そうか！本来ならレオモンが襲ってくるが、レオモンが無事かもしれないんだ。操られていなければ、そもそもレオモンがここに襲ってこないはず。だったら、太一達と合流する前か、合流した後のデスマウンテンに向かう準備の時間に話せるか？

うーん、時間がなあ…詳しい時間経過が俺にも分からねえからな。下手したら、もしかするとデビモン戦終わるまで俺達…っていうか、俺は個人的にモヤモヤを抱えたまま過ぎさなくちゃいけないのか？それは…やだなあ。早く洗いざらい話してスッキリしたい…これ

じゃ俺、犯罪者が何かみたいになってないか？

「…ロップモン？大丈夫？」

「あ？お、おう。別に何でもねえよ？」

「…何で疑問形？」

「いや、その…」

「結衣さーん、どっち行こう？」

少し前の方からタケルの声が聞こえてきた。どうやら辺り一面草原で、どこに進むか迷っているらしい。草原の中にポツンと踏切だけがあるのが異様な光景だった。

「タケル君に任せるよ。当てもないし…直感でお任せ」

「うーん、じゃあ…こっちー！」

その後、始まりの町に到着するまでの間、結局結衣と話す暇も無いままだった。あーあ、こんなことなら昨日の夜、寝る前に話しくんだったなあ…

☆☆☆

どうしよう…結局、ずっとロップモンと話すタイミングが見つからないままだ。そのせいでずっとモヤモヤしてる。こんなことなら、昨日寝ちやう前にロップモンと話しておくんだった。私もロップモンも、疲れが出たのかすぐ寝ちやったんだよね…

昨日は成り行きで戦ったけど…まだ、手が少し震える。クワガーマンの時はこんなことなかったのに……やっぱり、相手が人型だと…昔を思い出してしまう。戦っている間は気にならなかったのは、ロップモン…トウルイエモンと一緒にいてくれたから？でも、トウルイエモンも人型なのに…背丈が私と同じくらいだから？

ううん、それよりもつと気になるのは…ロップモン、貴方はどうして私達だけで戦う選択をしたの？アグモン達が戦えなかったことを知っていたから？だとしたら、何で貴方はデビモンの幻を見抜けたの？何で…だったら、どうして……館に入る前に教えてくれなかったの？

……ダメだ。この考え方は、ダメ。ロップモンのことを疑うなんて…彼は、私を助けてくれたんだ。ロップモンには、私達を騙そうとしているような…そういう嫌な感じはしない。そもそも、ロップモンが私を騙して得することが思い浮かばない。

「結衣さん、あれ！」

「町…？オモチャの町みたいな感じだね」

遠くから見た感じでも、巨大な積み木みたいなものが目立つ町…町？というかどつちかというと、少し遊園地っぽいような…なんだろう、上手く言い表せない。観覧車とかそういう遊具は何もないけど、建物が全部カラフルな積み木で出来た町って言えば良いのかな。そうだ、シヨッピングセンターとかにある小さい子用の遊び場エリア…名前が浮かばないや、とにかくあれを町にした感じ。

「うわあ〜…」

「キレーイ…」

「オモチャの町とはちよつと違う…でも、何か色々あるね」

「中入ってみようよ！」

「そうしよつか。あまりはぐれないようにね」

「はーい！いこつ、パタモン！」

「うん！」

タケル君とパタモンが走って行った。良い気分転換にはなるかな…って、何か、途中から凄いジャンプ力だったけど。軽く数メートルは飛んでなかった…？あ、この辺の地面、弾む。歩く分には普通に歩けるのに、少しジャンプするとトランポリンみたい。不思議な素材だなあ…

「建物とかも同じ材質なんだ…」

「そりゃ、始まりの町だからな。怪我しないような作りなんじゃないか？」

「…やつと喋ったと思ったら」

移動中はずっと無言なんだもん…喋ったら喋ったで、ここが何処だったのか知ってるみたいだし。

「……ねえ、聞きたいことがいくつもあるんだけど」

「そうか…俺もだ。話しておきたいことがいくつもある。だが、俺達だけの時にしてくれ。今は…」

「そっか…うん。分かった」

今はタケル君達から目を離すわけにはいかないもんね。ちゃんと見守ってあげなきゃ…ヤマト君に怒られちゃうよ。

……ちゃんと、話してはくれるらしい。

タケル君達に追いついたとき、辺りには大きな卵を持つタケル君。その卵が地面に沢山置いてあって、この卵くらいの大きさの岩も沢山ある。

「あ、結衣さん！こっちこっち！」

「何かあったの？」

「見て見て！赤ちゃんデジモンがいっぱい！」

「それにほら！デジタマもあるよ！」

「デジタマ？」

「俺達デジモンの卵さ」

「ひよこさんと一緒なんだって！」

「で、この岩が籠なんだな…固そうだな」

タケル君が持つているのが、そのデジタマ…随分大きい。ダチヨウとかの卵ってこれくらいの大きさじゃなかったかな。中を覗いてみると、タケル君が言っていた赤ちゃんデジモンらしい子達がいるのが見えた。

か、可愛い…！チョコモンの頃のロップモン達も可愛かったけど、この子達はさらに小さくて…なんていうか、守ってあげなくなっちゃうなあ…でも、こんな小さな子達が沢山いるなんて、食べ物とかどうしてるんだろう。それにロップモンが言うように、もうちよつと柔らかかそうな揺り籠とか無かったのかな？

「何これ？」

「私をなでなでして…なでなで？」

「私って…誰のこと？」

「デジタマだろ……ほら」

「今、一斉に動いたね……」

デジタマって、意識とかあるの……？少しビックリしちゃった。何十個もある巨大な卵が一斉にガタガタと揺れたら、誰でもビックリ……してなかったね、タケル君。微動だにしてなかった……結構怖いのが平気なタイプなのかな、タケル君って。

「じゃあ……なでなで」

「あ、デジタマに罅が……！」

「なでなでなで……」

「ポヨォ〜！」

「生まれた！」

デジタマを上下に真つ二つになるように罅が広がっていき、中から水色のぷよぷよした赤ちゃんデジモンが生まれてきた。スライムみたい……この子も可愛いな。ちよつとチョコモンを思い出すかも……色は全然違うけど。

「あ！この子を入れる籠がない！」

「どこかに空いてるのは……うわっ！」

「ビックリしたあ……このデジタマの殻が籠になるんだ」

「へえ〜、こうなってたんだ」

「君、デジモンなのに知らなかったの？」

「赤ちゃんくらい小さいときのこと覚えてないよ。タケルは覚えてる？」

……あれ？確か、デジモンって前世の記憶を引き継いでいるんじゃない？確か、ロップモンの話だとそうだったはず。卵から孵ったばかりだと記憶が曖昧になったりするってことなのかな？

パタモンの質問にタケル君は少し考えて、苦笑いを浮かべながらパタモンに向き合う。

「うーん……やっぱり覚えてないかも！」

「でしよ〜？」

「結衣さんは覚えてる？」

「ううん、私も。ロップモンは？」

「俺もだ。チョコモンの前は覚えてねえ」

チョコモンの前：それがこの子達ってことだよね？やっぱり赤ちゃんデジモンの頃は前世の記憶を引き継いでいても、ほとんど覚えてないってことなんだ。

ちよつとだけ……疑ってしまった。私に間違った情報を教えて、混乱させようとしてるのかって。そんなことする意味も思い浮かばないのに。

「結衣さん、大丈夫？」

「え？何が？」

「今……悲しい顔してたみたいだったから」

「そんなことないよ？うん、全然元気！それよりタケル君、ちよつと周囲を回って見ない？」

「周囲って？」

「町の中とか、町の近くの森とか。これだけ沢山赤ちゃんデジモンがいるんだから、多分ベビーシッターさんみたいなデジモンがいると思うんだ」

「…成る程、ソイツに他の奴らの情報が無いか聞くわけだな」

「そっか！お兄ちゃん達がどこにいるのか分かるかも？」

咄嗟に話題を変えたけど……ビックリした。正直、タケル君みたいな小さい子が、そんな気遣い出来るなんて思ってたなかった。そんなに分かりやすく顔に出てたのか……気をつけないと。

「それじゃ、手分けして探した方が速いんじゃないか？この辺は危険も少ないみたいだしな」

「それじゃあ……私とロップモンであっち、タケル君とパタモンはこの辺から探してみてる？」

「うん、分かった！いこつ、パタモン！」

「うん！」

町の中を探してくれていれば、多分危険に晒されるようなこともないと思うけど……出来るだけ急いで戻ってこなきゃ。この町そんなに広くないし、一時間もすれば戻ってこれるはず。

「…よく気づいたな、俺の目線に」

「うん…自分でもよく気づけたと思う」

「何だそれ」

私達が向かう方向を決めたのはロップモン。偶々だけど、ロップモンが会話しながらそつちばかり見てたから、そこに向かえつてことなのかと思っただけど、当たったみたい。

私は歩みを止めず、周囲にも気を配りながら進んでいく。全然デジモンの影も見ないけど…本当にベビーシッターがいるのかも怪しいかも。

「…この辺は誰もいないみたいだ。そんなに気張らなくて良いぞ」

「……知ってたの?」

「…予想はしてた」

今しかない。そう思った私はロップモンを下ろし、しゃがんで目を合わせながら…今まで気になってたことを、聞いた。

☆☆☆

「貴方は…何者? 未来が、見えてる…の?」

凄く不安そうな顔をした結衣。タケルも言っていたが、酷い顔をしているな…今にも、泣きそうな顔をしている。

「一つずつ、答える。俺は…元人間だ」

「……………え?」

「言っても信じられないだろうが、本当だ。ロップモンとして生を受ける前は、人間だったんだ。普通に暮らしていたら大地震が起きてな?それが神様のミスらしいから転生してくれて頼んだんだよ」

「……………え?」

……表情から察するに、理解が追いついてないように見えるんだが。本当のことだから納得して貰うしかないんだが…まあ、続けさせて貰おう。

「…でな?俺がいた前世だとこのデジモンの世界は物語になってな?俺はその物語が好きだからって理由で、この世界に転生させて貰っ

たんだ。あ、俺がいた前世の世界はお前らのリアルワールドとは違う
と思ってくれ。別次元のリアルワールドだと思ってくれ」

「……」

「おーい、大丈夫かー」

「……私のこと、からかつてる?」

「…現実逃避したくなる気持ちは分からなくもないが、これは全部真
面目な話だぞ」

だからあまり言いたくなかったんだよ…ただでさえデジタルワ
ールドに来て、最年長として皆に気を配っているし、トラウマの件もあ
る。これ以上、精神的負荷を与えたくなかったんだ…言わなかった
結果、別の不安を与えちまつてるみたいだが。

結衣が立ち上がり、頭に手を当てながらフラフラと後ずさりする。

「……ちよ、ちよつと待つて。理解が追いついてない…え、それじゃ
あ、私達を騙そうとしていたとか、そういう魂胆があったりとかは…
?」

「何で俺がそんなこと企むんだよ…逆だろ、俺はお前のパートナーデ
ジモンだぞ?お前を…お前たちを、絶対にリアルワールドに返してや
る!そう決めて行動してたつもりだったんだが……」

「ロップモン…?」

俺は地面に膝をついて、土下座をする…これ、ただ丸まつてるよう
にしか見えないんじゃないや…いや、まあいいか。こういうのは誠意を伝
えるのが一番だ。

「昨日は…ごめん。変にお前を不安にさせちまつたみたいで…さつき
も言った通り、俺は物語としてこの世界線のことを知っている。未来
を知っているっていうのも、あながち間違っちゃいねえ」

「…えつと…要するに、君の世界線の私達は、あの館に泊まったか
ら、その通りに行動したらああなつたつてこと?」

「…流石の理解力だな。お前、小学生じゃねえだろ」

「失礼な…歴とした小学六年生です」

「いや、俺と同じ転生者って言われた方が納得出来るぞ」

「だって…今日ずっと考えてたもん。これくらいは思いつくよ」

俺がそう言うと、結衣はやつと笑顔を見せた。それを見て、俺は少しホツとした。きつと全部は理解したわけじゃないだろうが、とりあえず冗談ではないということをつかってくれただけでも万々歳だ。

結衣は再びしゃがみ、俺を脇に手を入れて持ち上げた。おい、これじゃ俺が赤ちゃんみたいじゃねえか。

「ホント…ずっと、考えてた。ロップモンが色々知ってる理由とか、目的とか…」

「…ごめんな。路面電車で泊まった夜のうちに話しておけば良かった」

「ううん。あの時話されても、正直受け入れられるとは思えないよ。ロップモンに沢山助けられた今だから…信じられる」

結衣が、俺をギュツと抱きしめる。そう言ってもらえるのは嬉しい。俺がしてきたことが無駄じゃなかった。間違いじゃなかった。そう思えると、気が楽になった。だが…俺はまだ、言っておかなければいけないことがある。

「…あと、一つだけ言っておきたい」

「…何？」

声が震えているのが…自分でも分かる。

怖い…これからずっと一緒に共に過パトナーごす結衣に、拒否されたら。でも、そんな風に怖がって、また…こんなことがあったら、今度こそ取り返しがつかなくなるかもしれない。それだけは、嫌だ…！

「俺が、転生したのは…デジモンや人間を助けたいと思ったからだ。けど、俺はその時点で矛盾した行動をしちまった」

「どういうこと？」

「俺が…この世界に来たことで…お前を、巻き込んだしまった。俺がこの世界に転生してなければ、お前がデジタルワールドに来る事なんて無かったかも、しれないんだ…！」

「……………」

「お前が、こっちに来てから、危険な目に遭う必要なんて……本当は、無いんだ。だから、俺は…絶対、お前を——っ!!」

結衣が俺の背中を、ポンポンと優しく叩く。安心させるように、落ち着かせるように。

「大丈夫だよ。正直言えば、まだ気持ちの整理がついてないけど…でも、こっちに来てから嫌なことばかりじゃないよ。太一君達とも仲良くなれたし、普通じゃ出来ない体験も出来たし…」

結衣が腕を伸ばして、俺と視線を合わせる。結衣は…笑ってた。

「君に出会えた…私にとって、それはどんなに危険な目にあつたとしても嬉しいことだよ。ちよつと口は悪いけど、優しくて、皆の為になろうと必死で、私の自慢のパートナー」

……ヤバツ…気を抜いたら、泣きそうだ。今だけ、結衣が女神か何かに見えてくる。

「でも、一つだけ約束。これからはちゃんと私にも相談して。私も貴方を頼らせて貰うから、ギブアンドテイクってことで」

「……ああ、分かったよ。これからはちゃんと話す」

「ありがとう、ロップモン。それじゃ、いこつか」

「ああ」

「そういうば、俺を下ろせって言わなくなったね？」

「時には諦めも肝心ってことを俺は学んだのさ…」

「何でそんな悟ってるの？」

「お前のせいだろが!」

そんな軽口を叩きながら笑い合う。今回のことで、ようやく俺は…ちゃんとコイツのパートナーになれたような気がした。

☆☆☆

何か、凄い話だったなあ……今でも信じられないような話だと思う

し、理解しきれない。いや、ロップモンのことは信頼してるけど、とりあえず今は、ロップモンは未来のことを知ってるってことだけ分かってくれば良いかな。

それより、大分時間使っちゃった。タケル君とパタモンの所に戻らなきゃ。でも、この辺の探索、ほとんど手つかずだ…どうしよう。

「戻らないのか？」

「だって、まだこの辺探索してないし…」

「…多分、この辺に例のデジモンはいないな。きつと今頃、タケル達と合流してるんじゃないか？」

「何で…あ、そっか。知ってるんだもんね。この辺のことも分かるの？」

「大体な。この町は始まりの町、死んだデジモンがここに集まって、デジタマとして転生する場所だ。で、例のベビーシッター役のデジモンがエレキモンっていう成長期のデジモンだ。町にいなけりゃ、川で魚を捕ってるはずだ」

何か、一つ聞いたたら二つにも三つにもなって返ってきたんだけど…物語として知ってる、だっけ？小説とかで有名な作品になったとかそういうことなのかな？何だか、登場人物になったみたいで、変な感じ。「そっか、デジタマが集まる場所だから、始まりの町なんだ…そのエレキモン？ってデジモンは、敵じゃないんだよね？」

「そうだな、後々あの二人と仲良くなる…って、何でそう思ったんだ？」

「敵だったら、二手に分かれたりしないでしょ？」

「成る程、流石。それじゃ、戻ろうぜ。あ、因みにエレキモンはパタモンくらいで、赤いから見たらすぐ分かるはずだ」

「分かった」

ロップモンを抱えたままさっきの場所まで引き返す。途中でロップモンが耳を動かしているのが見えた。どうやらロップモンは、周囲の音を探る時に耳をピクピクって動かす癖？みたいなものがあるみたい。これ、本人は気づいてないみたいだけど…

…………可愛いつて、思っちゃったんだけど、ロップモンって元人間

なんだよね。口調がこんな感じなのは、やっぱり中身が男性で、しかも多分大人の……？

…あれ、中身が大人の男の人って想像しても、何とも無い。もしかして、私、ちゃんと理解出来てない……？いや、でもやっぱり私にとつては、ロップモンはロップモンだ。本人もあんなに笑ったり泣いたり、感情豊かだし…何というか、子供っぽい？感じがするし、前世がどうというのは気にしないでおうっと。私のパートナーは現在進行形で可愛いです。

「…どうやら、あつちで一悶着あつたみたいだ」

「二人が危ない？」

「ああ、どうやら戦ってる…んぐ!？」

エレキモンが良いデジモンだとしても、私達を見て敵だと思ってしまう可能性が高い。早く、タケル君達を助けに行かないと！

始まりの町の中を駆け抜けて、さっきのデジタマが沢山ある場所が見えてきた。すると、建物の陰からパタモンと赤いデジモンがゴロゴロと転がってきた。きつとあれがエレキモンだ。

「タケル君！パタモン！」

「結衣さん！」

「あのデジモンは？」

「分かんない、急に飛びかかってきたんだ！」

「おい、エレキモン！」

ロップモンが飛び出し、取っ組み合いをしている二体に声をかけた。それを見たエレキモンは、パタモンと距離をとってこちらを睨む。やっぱり、敵だと思ってるみたい？

「チツ、仲間がいやがったのか！」

「俺達はお前に聞きたいことがあるんだ！話を聞いてくれ！」

「ハッ、俺がいない間にベイビー達をかわいがってた、の間違いだろ!?!
「スパークリングサンダー!!」

「プチツイスター!!」

エレキモンが毛を逆立てて、バチバチと電気を溜め始め、ロップモンに放電して攻撃する。でもこうなることを予想していたロップモン

ンは、体を回転させて起こした竜巻をぶつけて相殺した。

いけない、このままじゃエレキモンと戦うことになってしまう…
ロップモンも上手く話し合いに持ち込めなくてイライラしているよ
うだし、ここは私が！

「おい、攻撃して来んなって！ちよつとは落ち着いて話をだな！」

「お前だって攻撃してんじゃねえか！話がしたいってんなら、お前が
攻撃すんなってんだ！」

「無抵抗で攻撃当たれって言うてんだろ、それ！」

「ロップモン！ちよつとストップ！」

「なっ…！」

エレキモンとロップモンの間に割り込むように、両手を広げてエレ
キモンと向き合う。気が立ってる相手に刺激しちやダメだ。本当は
良いデジモンなんだ、ちゃんと説得すれば争う必要なんてないはず。

「お前…死にたいのか!？」

「結衣！」

「勝手に町に入って、赤ちゃんデジモン達と接触してしまったことは
ごめんなさい。ここが始まりの町だなんて知らなかったの。もう
こっちには争うつもりなんてないから、貴方もどうかこっちの話を聞
いて…！」

「…エレキモン、俺からも頼む。こっちは話がしたいだけなんだ」

すぐ横に立つロップモンが、エレキモンを真っ直ぐに見つめてそう
言った。でも、私には何だか、エレキモンが攻撃しようとした瞬間に
迎撃してやる！って気合いが入ってるようにしか見えないんだけど
…

エレキモンは周囲の赤ちゃんデジモン達の様子を見渡す。それで
少し緊張がほぐれたのか、力を抜いたような仕草をした。分かっても
らえたのかな…

「…分かったよ、悪かったな。ここんどこ妙なことが続いてて気が
立ってたんだ」

「ふう…良かったあ」

「全く…ヒヤヒヤしたぞ」

「ありがと、ロップモン」

「君、エレキモンって言うんだよね？僕はタケル、こっちが結衣さんで、パタモンと、ロップモン！」

「おう、タケルとユイサンだな！俺はエレキモン、よろしくな！」

「いや、結衣だからね？」

名前がユイサンだと思われた気がするけど、エレキモンはなんか、首を傾げてる。頭に「？」が浮かんでるように見えるのは気のせい？

「それで、エレキモン。聞きたいのは——」

「結衣、待ってくれ！この足音…！」

また耳をピクピクさせて、勢いよく振り返ったロップモン。見ているのは、私達が来た方向の森の中。良く見ると、そこには。

「……………嘘だろ」

「あれって！」

「……………レオモン？」

立派なたてがみを靡かせて、一歩ずつ、ゆっくりと。こちらに近づいてくるレオモンの姿があった。

第十二話 エンジンエモン覚醒!

おいおい、まだ夕方と言うには早すぎるだろ……! 何でレオモンがこの町まで来てるんだよ!?

「レオモンだ……!」

「タケル!」

「……全員下がってろ。エレキモンもだ」

「何でだ? レオモンは良いデジモンだぞ?」

「デビモンがデジモンを暴走させる黒い歯車を操っているの。最後にレオモンと別れた時、デビモンとの戦いの最中だったから……」

レオモンが操られているという確証はない。断末魔が聞こえなかったから、大丈夫だったと思いたいが……万が一を考えておくべきだ。多分、操られてたら白目になると思うんだが……見えないんだよね、微妙に距離があつて。数十メートルくらいか? レオモンの「獣王拳」なら射程圏内、こつちが不利だ。

俺が一步前へ出て、結衣がデジヴァイスを構える。レオモンはそれを見て……こつちに向かつて両手をゆっくりと頭の上へと上げた。良かった……レオモンは、無事だったんだな。

「レオモン……!」

「あれって……!」

「……ああ。正気みたいだな」

俺と結衣が警戒を解いてレオモンの方へ歩き始めると、後ろにいるタケルとパタモンが走って行ってしまった……近づいても大丈夫って判断が速すぎだろ! もう少しだけ慎重に動いてくれねえかなあ。

俺達もやや駆け足でタケル達を追いかける。レオモンもこちらに近づき、先に到着したタケルとパタモンを優しく受け止めた。

「レオモン、無事だったんだね!」

「ああ、君たちも無事で何よりだ。他の子供達は?」

「バラバラに飛ばされちまったからな……まあ、あの山にデビモンがいるのは分かっているし……こら辺にいれば集まれるだろ」

始まりの町にいれば、だけどな。原作で太一組と光子郎組が集まれ

たのつて奇跡じゃね？レオモンと戦ってたのに気づいたからかもしれないが、それでも奇跡的な集合だったのは間違いない。

「じゃあ、ここで待つてれば…」

「お兄ちゃん達に会えるの!？」

「そういうことだ」

「やったね、タケル！」

「うん！」

「問題は、どれくらい飛ばされているかなんだよな…」

あの超巨大デビモンは黒い歯車が十分に集まった状態だ。今はまだ力が集まりきってない状態なんだから、原作より早い段階で仕掛ければ、当然原作よりもデビモンの力も弱まる。俺達が登り始めたのに合わせて黒い歯車を集め始めたら負けるけどな…

けど、俺達も集まるまで時間がかかるよなあ。流石にアイツらが飛ばされた詳しい場所までは把握してないし、俺達がいるこの始まりの町もムゲンマウンテンの麓に近いが、ムゲンマウンテンから見るとどの方向にいるのかも分からないしな。

そういえば、レオモンが操られていないっていうことは…光子郎達はレオモンとは遭っていないんだよな。じゃあ、ケンタルモンの暴走を止めた後のレオモン遭遇イベントは回避出来るってことか。それなら、もしかすると少しは早く合流できるかもしれない。

「ロップモン、どうするの?」

「そうだな…そりゃ、全員合流する方が良いんだが、デビモンの想定より早く奇襲をかけるべきかもしれない」

「でも、デビモンとトゥルイエモンが戦った時は勝てそうだったよ?」
「いや、奴はあの時、まだ本気ではなかった。それに、島中に蔓延っている黒い歯車を集めれば、相当な力になるだろう。私とロップモン、パタモンが束になっても勝てるかどうか…」

レオモン、俺はともかくパタモンは戦闘要員に加えないでくれ。まだ進化出来ないし…いや、進化の為に連れて行かないといけないっていうのは、そうなんだが……

ダメだ、どうやってたらエンジエモンを死なせないで済むのかが分か

らない。パタモンが進化するってことは、他の奴らは全員、原作通りにデビモンに一掃され、タケルとパタモンが狙われてしまう状況になってしまっていることだろう。そんな状況になったら、力尽きただろう俺にエンジエモンを助けられるとは…正直思えない。

かといって、俺達全員が何とかデビモンを倒せたとしても、パタモンが進化出来るようになるのはいつになるか分からなくなるんだよなあ…これは、一人で考えても駄目なパターンだな、きつと。早速だが結衣に相談させてもらおうとしようか…ん？

結衣に何かしら合図を出そうと思ったら、結衣が俺のことを見つめていた。目が合うと結衣が頷いて、レオモンの方へ顔を向ける。

「…レオモン、とりあえず太一君達が集まるまで待ってみようと思うの」

「そうだな…だが、余り遅くなつてはこちらが不利だぞ」

「うん、分かった。じゃあ、それまでタケル君達と一緒にいてくれない？ 私達、町の外に探索に行こうと思って」

「それなら私が行こう」

「結衣さん、僕も手伝う！」

「レオモンはここで体を休めてて。タケル君達は太一君達とすれ違いになつちやうと困るから、ここにいて欲しいの。大丈夫、暗くなる前には戻ってくるから」

「う、うん…分かった！」

「それじゃ、お願いね！」

「おつ、おい？」

結衣は流れるように俺を拾い、駆け足で町の外の森へと向かう。段々俺を抱えるまでがスムーズになってやがる…しかし、結衣が何も言わずに察してくれるのは助かったな。これで心置きなく相談できる場をいつでも作ってくれる。

森を歩きながら、結衣が俺に話しかけてきた。

「ロップモン、あれで大丈夫だったかな？」

「ああ、丁度話したいこともあったしな。よく分かったな？」

「真剣に何か悩んでるみたいだったから」

「上手く説得も出来てたしな。助かったぜ」

「えへへ：ん、んっ！それで？何を考えてたの？」

少し照れ笑いをした後、咳払いしてから本題に入る結衣。俺は軽く深呼吸して、考えをまとめる。

「ハッキリ言うとな：太一達はデビモンに勝てなかった。バードラモン、イツカクモン以外の四体とレオモンが協力して挑み、空達も後から合流した。それでも、蹴散らされたんだ」

「そっか、ロップモンはいないんだもんね：どうやって、デビモンを倒したの？」

「パタモンが、タケルのピンチに覚醒したんだ。天使型デジモン、エンジエモンとなった」

「天使、かあ：でも」

「ああ。それでハッピーエンドならこんな悩んでないさ。エンジエモンは強大になりすぎたデビモンに、子供達七人のデジヴァイスから聖なる力を借り、諸刃の一撃を使っただ。それで：デビモンを倒した後、エンジエモンは：デジタマになった」

「：ロップモンは、エンジエモンをデジタマにしたくないんだね」

「：前に言った通り、デジモンは死んでもデジタマに戻る。生まれただも前世の記憶を引き継いでいる：だけど、タケルにはトラウマが残っちゃう」

タケルが暗黒の力に対して強い嫌悪感、憎悪を覚える。思い出されるのは02の、デジモンカイザーこと一乗寺賢と対峙した時とか、ブラックウオーグレイモンと戦う時。あの時のタケルは、明らかに頭に血が上っていた。間違っただけじゃなかった、とは言えないが：今くらいのタケルならあそこまでの反応はしなかったと思うんだ。

「：ねえ、それってデビモンが暗黒の力を集め終わってたってこと？」

「ああ、殆どな。太一達が合流したのは夕方だったんだ。それから話し合った後にムゲンマウンテンを登り始めたから、結局夜になっち

まった」

「じゃあ、夕方には出発っていうのは間違っていないんだね」

「まあな…けど、それでも勝てるかは分からねえ。とにかく、エンジエモンを助けるには二択だ。タケルとパタモンを置いていくか、デビモンを何とかして倒すか」

「…後者は、漠然とし過ぎだね」

「前者はタケルとパタモンは納得しないだろうしなあ…それに、パタモンの進化チャンスを妨害すると、次はいつ進化出来るか分からねえんだ」

「うーん…それでもどうかにかしてタケル君達を危ない目に遭わせないようにするべきだと思う。置いていっても追いかけて来ちゃうかもしれないから、連れて行って安全な場所で隠れててもらおう感じかな」

「そうか…そうだな。命を守る事の方が大事だよな。エンジエモンに進化出来なかったとしても、俺がその分戦力となって戦えば良い。」
「となると…デビモンに勝つ為の作戦を立てる必要があるな」

「巨大化するんだっけ？どれくらい強いのか？」

「グレイモン達の必殺技は殆ど効かないな。あとオーガモンがデビモンの体の一部になっていて、死角への攻撃はオーガモンが反撃してくる。デビモン自身の技の威力も上がってるし…ああ、確か自分を中心に暗黒の力をドームみたいに広げて吹っ飛ばすことも出来たな」

「なんか、すごい化け物みたいになってるね…」

「言つてて同感だな」

エンジエモンなしでどうやって倒すんだ、これ…オーガモンのせいで死角への攻撃も無効化、そもそもデビモンに攻撃が殆ど効いてないっていう。あれか、眼球に攻撃すれば良いのか？眼球はどんな生物も鍛えることは出来ないって聞いたことがあるし…あの姿なら、目からビームとか出せそうだな。

「…オーガモンが、死角を守ってるの？」

「ん？ああ、取り込まれてるんだ。確かレオモンがデビモンの背後に攻撃を仕掛けたら叩き落とされてた。オーガモンもパワーアップし

てて、〃霸王拳〃でレオモンを遠くまで吹っ飛ばしてたな」

それでレオモンが合流したのって、デビモンが倒された後だからな。取り残されたオーガモンに脅してたのを覚えてる。

「…ねえ、わざわざオーガモンに守らせてるってことは」

「…！死角なら、効くかもしれないってことか？」

「かもね。だったら、オーガモンさえ何とか出来れば…」

「そういうえば、オーガモンがエンジェモンにビビって逃げた時、デビモンに穴が空いていたな…」

「それだよ！オーガモンを追い払えれば、何とかなるかも！ほら、体内からドカーン！みたいな」

体内から爆殺って、なんかのアニメに影響されてないか？コイツ。

「な、中々エグい発想するな…よし、俺はデビモンの体を攻撃しながら飛び回ってみる。そうすればオーガモンが出てくるだろうし、レオモンもオーガモンが潜んでいると分かれば狙ってくれるはずだ」

「分かった…私も出来るだけ観察してみるね。絶対、デビモンを倒そう」

少しだけ光が見えてきた気がする。気がつけば、町の反対側にまでぐるっと大回りで移動していたようだ。結衣が少し歩くスピードを速めて、俺は出来るだけ音に集中しながら探索する。

「…！この音…」

「…向こう？」

「ああ、一体だけだな」

「行こう」

何か、大きな…といってもグレイモンほどではないが、足音が聞こえる。俺の耳で聞こえるってことはそう遠くない、近くの森だな。結衣達人間よりも大きいのは間違いない…二足歩行のようだけど、人型か？真っ直ぐこの始まりの町へ向かってる。

けど、誰だ？本来ここで戦うはずのレオモンは始まりの町にいる。他に俺達と敵対している、人型のデジモンって…いや、まだ敵対しているデジモンとは限らないか。とにかく、結衣達を呼び戻しておく必

要があるな。

。今気づいたが、レオモンと足音が少し似ているというか：似たような体型か？レオモンみたいな大きさのデジモンって：あ。

「デジモンだよね：敵なの？」

「多分だけど：オーガモンかもな」

アイツの存在、忘れてたな：原作でもレオモンと戦った時に一緒にいたっけ。人質とってたけど太一にあっさり奪い返されてたし、レオモンが強化されて、デジヴァイスで正気に戻された途端に逃げてつたのを今思い出したぞ。前にデビモンの館で聞いたアイツの足音と比べても、まず間違いない。

結衣が足音を出るだけ殺しながらオーガモンがいるであろう方向へと向かう。やがて、緑色の体がすぐに見えた。やっぱりオーガモンだったな：よし、ここは進化して先手必勝で叩く！

「結衣、行くぞ」

「うん」

「ロップモン、進化——っ!!トウルイエモン!!」

今、ここでオーガモンを捕らえるなり無力化させることが出来れば、デビモンの攻略がしやすくなる：ん？いや、デビモンの所へ返した方が良いのか？じゃないとデビモンの体に穴が空かないし：まあ、撃退するのは可能だろう。戦いに気づいてレオモンも気づいて駆けつけてくれるかもしれないしな。

「お、お前はー」

「悪いが、話す時間はねえよ！『忍迅拳』!!」

「がはあっ!？」

“忍迅拳”は、高い跳躍力を活かした拳法だ。オーガモンが戦闘態勢に入っていない内に、オーガモンの後ろに回り込んで拳を二回、蹴りを二回打ち込んで、最後の回し蹴りでオーガモンを数メートル吹っ飛ばす。

「よし、一気に：っ?」

オーガモンにそう言い放ち、“兎角鉄爪”を展開する。必殺技で終わらせようとしたその時、俺の耳がこちらに飛んでくる飛来物の風切

り音を捉えた。一瞬そちらに気をとられたせいで、オーガモンは隙を突いて俺に拳を向ける。やべっ！

「『霸王拳』!!」

「チツ……」

結衣を抱えて跳び回避する。着地しオーガモンに向き直ると、さっきの飛来物がオーガモンの体に吸い込まれていく所だった。ま、まさか……!?

「ぐ、ググ……ッ、ウガアアアッ!!!」

オーガモンの体が、少しずつ大きくなっていく。肌が緑色から紫色に、白い髪が黒くなっていく。

コイツ、原作のレオモンみたいに黒い歯車でパワーアップしやがった……!

「これって……!」

「『霸王拳』!!!」

「危ねえっ!」

オーガモンの『霸王拳』をギリギリ躲し、そのまま木々を薙ぎ倒していった。まずいな……結衣にデジヴァイスを翳して貰おうと思ってたけど、これじゃ下手に近づけねえ。下手に喰らったらやられる。せめて、動きを止められれば……

「『ココナッツパーンチ』!!」

「グ……アアアアッ!!」

「トゲモン!?!」

空から降ってきたトゲモンが、オーガモンに拳を叩きつける。オーガモンの足が地面にやや沈むが、オーガモンはトゲモンを弾き飛ばす。

トゲモンが来たということは、カプテリモンも上空にいるはずだ。だったら、何とかなる!

「結衣、デジヴァイスを!隙を見てアイツの懐に飛び込むぞ!」

「うん……お願い、トウルイエモン!」

原作のレオモンと同じ状態なんだとしたら、結衣一人だけのデジヴァイスじゃ足りないかもしれない。太一とヤマトが二人がかりでレオモンを元に戻していたからな。

「カブテリモーン!!突撃だっ!!!」

チャンスは、カブテリモンの突進攻撃をオーガモンが受け止めた瞬間だ。その一瞬で俺が飛び込んで結衣がデジヴァイスを翳し、カブテリモンの頭の上にいるはずの光子郎にもやって貰えば良い。ケンタルモンのいる遺跡でデジヴァイスが聖なるデバイスであることを既に知っている光子郎なら合わせてくれるだろう。

カブテリモンがこちらに近づいているのを音で感知し、俺はオーガモンの周りを跳び回って攪乱する。

「セイヤアアーっ!!!」

カブテリモンの頭突きがオーガモンに命中する。しかしオーガモンは受け止め、地面に電車道を作りながら後ずさるも、やがて静止した。

俺は横からオーガモンに近づき、抱えていた結衣がデジヴァイスをオーガモンに翳す。

「光子郎君っ!」

「は、はい!」

「グギャアアアッ!!!」

察してくれた光子郎もデジヴァイスを翳し、二つの光がオーガモンを飲み込む。これで、オーガモンは正気に戻――

「ギャアアッ!!!」

「うおっ!?!」

受け止めていたカブテリモンを横に振り回し、俺達を攻撃してきやがった!大きく跳躍して躲し、カブテリモンはそのまま投げられてしまった。あと一歩だったのに……!

オーガモンは俺達に追撃する……のかと思ったんだが、背を向けて猛ダッシュでムゲンマウンテンへと行ってしまった……あの野郎、逃げやがった!!

「待ちやがれ、テメつ…!」

「トウルイエモン、待つて! 追いかけない方が良いよ!」

結衣に静止され、少し冷静になる。元々アイツは今は悪いデジモンだし、正気に戻した所で協力してくれるというわけではない。これでデビモンに弱点が出来るというのも分かる…それは分かっているんだが、何かこう、モヤモヤする! オーガモンってあんな、負けそうになつたら逃げるような奴だったか!? …いや、よく考えたらメタルエテモンとかから逃げてることの方が多かったか。

一度深呼吸し、結衣を地面に下ろす。俺はロップモンへと退化し、さつき吹っ飛ばされたカブテリモンの方へと走っていく結衣を追いかける。丁度、カブテリモンもテントモンに戻ったみたいだな。

「光子郎君、テントモン! 大丈夫!」

「はい、大丈夫です。テントモンが庇ってくれましたから」

「いたたあ…びっくりした」

「ミミちゃん! 大丈夫!」

「結衣センパイ!! 会いたかつた!!」

カブテリモンにミミも乗ってたのか。よく考えたら、トゲモンに乗ってるわけじゃないか…ってかお前も乗ってたならデジヴァイス使えよ。三人がかりなら何とかなつたかもしれない…結果オーライだから、良いか?

「よしよし…二人とも、無事で良かったよ。他の皆は?」

「さつき上からガルルモンらしきデジモンを見かけましたよ」

「ホント? じゃあ、早くタケル君に知らせなきゃ…二人とも、一緒に来て」

「ハイ!」

「ミミ、置いてかないで」

とにかくこれで、太一組と光子郎組が合流したな。これでデビモンがいるムゲンマウンテンへと向かえる…絶対、全員揃ってデビモンを倒してみせる。

光子郎からの情報通り、太一組が先に始まりの町に来ていた。ヤマトがタケルを抱きしめ、タケルも安心出来たようだな。

空と丈はやっぱりいないが、俺達は話し合いを始めた。色々、情報を共有する必要もあるからな。

「いつの頃からだったか：噂が流れ始めた。世界が暗黒の力に覆われた時、別の世界から選ばれし子供達がやって来て、世界を救うというものだ。今のファイル島は、まさに暗黒の力に覆われている。そこに、君たちが現れた」

「それで俺達が、選ばれし子供達ってわけか」

「だけど証拠はないんだろ？」

「選ばれし子供達は、デジモンを進化させる力を持つという。君たちのようにな」

「この世界：デジモンしかないなら、私達が人間っていうことが証拠かもね」

「もしそうだとしたら：暗黒の力を消滅させれば、僕達はこの世界にとって不必要なものとなる」

「何言ってるの？光子郎君」

「つまり、元の世界に戻るかもしれないってことですよ！」

「ホントに!?!」

「だがその為には…」

「暗黒の力の中心にいる、デビモンを倒さなければならない」

「やろうぜ、皆！アイツを倒さなきゃ、俺達は生き延びることは出来ないんだ！」

全員が元の世界に戻る為に、デジモン達は元の世界に返してあげる為にと奮起する。こうして俺達は、再びムゲンマウンテンを登ることにした。

ムゲンマウンテンに出発したのは夕方だが、原作よりは早いはず。だが、ムゲンマウンテンを登っている最中に、黒い歯車がムゲンマウンテンの頂上集まっていくのを何度も目にした。あまり時間は関係無いのかもしれないな：俺達が登りきるより、黒い歯車が集まりき

る方が早い。

こうなると、デビモンが原作通りに強化されるのは間違いないよな
…結局、オーガモンを追い出してデビモンに弱点を作るしかないな。

レオモンの案内でデビモンの住処へと向かい、いよいよその場所が見えてきたその時、空がどんどん暗くなる。まだ日が沈むには少し早
いはずだが…

「な、なんだ…!?!」

地面が揺れ始めたその時、デビモンがいるだろう住処をぶち壊して
現れたのは、超巨大なデビモン。

「キャアーツ！な、何アレ!?!」

「デビモンなのか!?!」

「何であんなに大きいのよ!」

「幻覚とかじゃないですか？前みたいに」

「いや…あれは、暗黒の力で巨大化しているのだ」

デビモンが飛び立ち、俺達がいる山道のすぐ横の崖下に着地した。
といっても、デビモンが巨大すぎて俺達が見上げる形になっている。

「アグモン、進化だ!」

「うん!」

「いや…違う!デジヴァイスを出せ!!」

俺が叫んだ直後、デビモンが振り向いただけで風圧で吹っ飛ばされる。そしてデビモンは右手から暗黒の力を放出して俺達を包み込む。範囲から外れていたレオモンだったが、左手からの力の放出で俺達と同じように身動きを封じられてしまった。

しまった…先に進化しておけば良かった!

『愚かな!お前たちは全てここで滅ぶ運命だ!!』

「ッハープーンバルカン!!」

「ッメテオウイング!!」

その時、多数のミサイルと火の玉がデビモンに襲いかかる。危ねえ
…ちゃんと空達が間に合って良かった…

「皆ーっ!今のうちに進化よーっ!!」

「アグモン！」

「うん！行くぞ、皆！」

「アグモン、進化——っ!!グレイモン!!」

「行けーっ、グレイモン！」

「ガブモン、進化——っ!!ガルルモン!!」

「頼むぞ、ガルルモン！」

「テントモン、進化——っ!!カブテリモン!!」

「お願いしますよ、カブテリモン！」

「パルモン、進化——っ!!トゲモン!!」

「頑張つて、トゲモン！」

「ロップモン、進化——っ!!トウルイエモン!!」

「お願い、トウルイエモン！」

皆が一斉攻撃を仕掛けている…が、やっぱり聞いていない。グレイモンとガルルモンの攻撃は掻き消され、カブテリモンとトゲモンの攻撃は意に介さず、トゲモンとカブテリモンを殴り飛ばす。

「いやあ、トゲモン!!」

「カブテリモン!!」

背後を見せたデビモンに、すかさずレオモンが飛びかかる。それに合わせて俺も必殺技の体勢に入った。

「甘いぜ、レオモン!!」

「何!？」

「『巖兎烈斗』!!」

「オラアツ!!」

オーガモンとレオモンの間に入り込み、高速回転でオーガモンを攻撃する。オーガモンは『骨棍棒』を使って受け止める。

さつきみみたいな黒い歯車での暴走状態ではないが、力はそれ以上に感じる…だが、一点集中で攻撃すれば!

「うおおおっ!!」

「お、りやあつ!!」

「なっ:!!?」

「ハッ、軽いんだよ!! “霸王拳”!!」

「ぐああつ!」

「お前もだ、レオモン!!」

「ぐっ:!!」

俺の渾身の一撃が:オーガモンの “骨棍棒” の一振りで弾かれた
:!!? “霸王拳” も、さつきより威力が:!!

崖の上へと吹っ飛ばされたが、何とか体勢を立て直せた! オーガモンは:足下に行ったか。レオモンも吹っ飛ばされてしまうだろうが
:今は、デビモンの死角を狙う!

「巖兔——」

『貴様には借りがあつたな:』

「ぐあああつ!!?」

「トウルイエモーン!!」

振り向いたデビモンの右手に掴まり、強く握りしめられる:!!く
そっ、抜け出せない:!!

『ふんっ!!』

「かはっ:!!」

『“デスクロウ”!!』

「く、あ、がああつ:!!」

「止めて:!!止めてーっ!!」

崖に叩きつけられ、“デスクロウ”をまともに、連続で受け続けた
俺は:情けないことに、一番最初に成長期へと退化してしまった。ま
だ、グレイモン達は戦ってるのに:俺は、力尽きてしまったらしい。
やっぱり、ダメなのか:??成熟期に進化出来るようになって、俺
は:エンジエモンを、救えないのか:...

『最も小さき選ばれし子供よ。お前さえいなくなれば、もう恐れるも
のは無いのだ! “デスクロウ”!!』

「逃げろ、タケル!」

『何…!』

タケルが…狙われている。助けなくては…助けるんだ。俺は、まだ
……………

『この、くたばり損ない、共がああーっ!!』

デビモンの暗黒の力で弾き飛ばされ、ついにグレイモン達も動かなくなってしまう。そして、デビモンの魔の手がタケルへとゆっくりと伸びていく。

「ッエアショットッ! エアショットッ! エアショットッ!!」

パタモンは、涙を流しながら抵抗し続ける。しかし、デビモンに効くはずも無い。そんなことはパタモンにも分かっている。それでも…タケルを、守ろうと必死で戦う。

「パ、タ…モン」

「パタモーン!」

「タケルーっ!!」

デビモンの手に掴まれたその時…手の中から、光が放たれる。あまりの光の強さに、デビモンは手を離してしまう。

「パタモン、進化——っ!!エンジエモン!!」

俺の目の前には、天使がいた。白い六枚の翼を持ち、聖なる力をその身に宿す天使。

「パタモンが進化した!?!」

「エンジエモン…」

「タケルの、デジモンなのか…?」

「まるで、天使…!」

「パタモンが進化した!」

「……ロップモン」

皆の声色が明るくなっている中、結衣の俺を呼ぶ小さな声は未だに悲痛なままだ。当然だ、この先を既に知ってしまったのだから…

エンジエモンの、死を。結衣ですらこんなに悲しんでいるんだ…タケルに心の傷が出来てしまうのは当たり前だろうな。だから、何とかしてやりたいと願っていたのに。

何か、本当にもう他に出来ることは無いのか…！俺にしか出来ないことが…何か、なにか…！

『おのれ…もう少しだったのに…！』

「お前の暗黒の力、消し去ってくれる！我が元に集え！聖なる力よ！！」

エンジエモンがその手に持つロッドを掲げると、子供達のデジヴァイスから光が集まり、エンジエモンへと注がれていく。グレイモン達は一斉に、成長期へと退化していく。

聖なる力が目の前のエンジエモンに集まっていくのを感じる…身を滅ぼす程の力。これ以上集まれば、エンジエモンの身が持たないのは火を見るよりも明らかだった。

『貴様、何をするつもりだ!?止めろ、そんなことをすれば、お前もただでは済まんぞ!!』

「だが、こうするしかないのだ。たとえ我が身がどうなろうと…！」

「エンジエモン!!」

「デビモン…お前の暗黒の力は大きくなりすぎた。この世界から、消し去らねばならん!!」

「させるかよおっ!!」

オーガモンが、エンジエモンの聖なる力に弾かれ、デビモンに風穴を空けて去って行った。それを見たエンジエモンは、右手に力を溜め始める。

エンジエモンのその光を見て、俺は直感した。エンジエモンが集めたこの進化エネルギーは、元々俺達の体に流れていたものだ。だったら、俺にもその力を扱えるはずだ。さらに言えば…俺は、エンジエモンと同じ可能性を持っているのだから。出来ないなんて…ことはない、はずだ。

「エンジエ…モン…待て、よ」

「ロップモン…?」

俺は無意識に、エンジエモンに身を投げ出していた。トウレイエモンから退化したことで、自分の体の形に出来ていた凹みから出れたみたいだな…

エンジエモンの頭の上に掴まり、俺はエンジエモンの中に流れる聖なる力に集中する。膨大なエネルギーを、自分をエンジエモンの体の一部のように、自分とエンジエモンの体を循環させるんだ。

エンジエモンが死んだのは、この膨大な力を体に流し込み過ぎたからだ。エンジエモンの体が力の奔流に耐えきれずに崩壊したんじゃないかと思う。だったら、サブタンクとして俺が力を肩代わりして、且つ力の循環を手伝ってやれば…体が崩壊することも、ないかもしれない。

「ロップモン、何を…!」

「お前を死なせない、為に…俺も、一肌脱いでやるよ…!」

「だが、それではお前も…!」

「一人だったら、死ぬだろうな…だから、二人でやるんだよ。死なない為にな!」

「…!そう、か…分かった。頼む、ロップモン!!」

「おう!!」

エンジエモン、お前だって…大切な人パートナーの悲しむ顔は、見たくないだろう?

「エンジエモン!!」

「ロップモン…っ」

「大丈夫だ、タケル」

「俺達を信じろ、結衣!」

「…へブンスナックル!!!」

☆☆☆

エンジエモンの拳から放たれた力は、凄まじかった。デビモンどころか、ムゲンマウンテン全体を覆うくらいの聖なる力だった。これが、自身の命も賭けた一撃なんだ。

私は、何も出来なかった。デビモンの圧倒的な力の前に、為す術も無く倒されていく皆を…ロップモンを見ることが出来なくて。私達が立てた作戦も、無意味だった。

パタモンがエンジエモンに進化した時は、もう諦めるしかないのかと思ってしまった。でも、ロップモンは諦めていなかったんだ。必死に考えを巡らせて、自分出来ることを、精一杯やったんだと思う。『愚かな…私よりも強い暗黒の力が、海の向こうに広がっているというのに…終わりだよ、お前たちは。ハッハッハッハ…ハッ…』

デビモンはそんな感じのことを言って消えていった。でも、私達はデビモンなんかより気がかりなことがあったんだ。

「エンジエモン！エンジエモン!!」

「ロップモン…そんな…っ」

エンジエモンが私達の元に下りた瞬間に膝をついた。私とタケル君は一目散に駆けつけた。エンジエモンに泣きながら抱きつくタケル君と、ぐったりしているロップモンを抱きしめる私。

エンジエモンだけじゃなく、ロップモンまでデジタマになってしまいうんじやないかって…死んじやうんじやないかって、どうしても考えでしまう。涙が、止まってくれない。

「ゆ、い…」

「ロップモン…置いて、いか、ないで…っ」

「…バカ、だな…ちよつと、寝るだけ…だ…」

「エンジエモン！エンジエモン!!」

「タケル…大丈夫、また…すぐに話せるさ」

エンジエモンのその言葉を最後に、エンジエモンとロップモンの体が光り、どんどん小さくなっていく。

やだ、やだ、やだ…!!もう、誰も、いなくならないで……っ!!

「これ、は…」

「ポヨ〜」

「ポヨモンと、ココモンだ…デジモンの赤ちゃんだよ」

「力を使い果たしちやつて、赤ちゃんまで退化しちやつたのね」

タケル君の手には、始まりの町でも見たクラゲのようなデジモン、ポヨモンがいた。元気に飛び跳ねている。そして、私の腕には…チョココモンよりもさらに小さい、三本角と尻尾が特徴的なデジモンがいた。

「ココ、モン……?」

「……(ニコッ!)」

「良かった、たあ〜……」

私は、初めて…自分より年下の子達が見守る中で大泣きした。

…お帰り、ココモン!

エテモン編

第十三話 出航・新大陸へ！

ココモンを抱きしめながら、どれくらい泣いたんだろ…冷静になると、年下の子達が皆見ていたのに、恥ずかしい…！目が腫れてる気がするし…夕方じゃなかったら、顔が真っ赤になってるって指摘もされてそう。ホント、こういう所が子供っぽいってお姉ちゃんにからかわれるんだよ、私。

ムゲンマウンテンの山頂付近に来たら急に暗くなったから、おかしいなって思ってたけど…それもデビモンが原因だったみたい。デビモンを倒したら、また空が赤く染まった。

「皆…今の、忘れて」

「え？」

「あとしばらく私の顔については触れないで下さい…」

「結衣さん、どうしたんだ？」

「太一、止める！」

「女子には色々あるんですーっ！」

ヤマト君とミミちゃんが庇ってくれた。二人の好意に甘えて、しばらく隅っこで大人しくしてよっと。

顔を手で隠してしやがみ込んでいると、腕の中にいたココモンが私の腕の中から出て、器用に頭の上まで登って来た。潰されるかもって思ったのかな…別に良いんだけど、何でずっと跳ねてるの？何か見えるの？

「ポヨモンっ！」

「ポヨ〜！」

タケル君がポヨモンに頬ずりして、ポヨモンも嬉しそう…可愛い。後でポヨモンも撫でてみたいな…

「あ、見て！島が戻ってくる！」

「この島を覆っていた暗黒の力が、無くなったんです！」

空ちゃんの言葉で遠くを見ると、分裂していた島々が全てこっ

ちに流れてきているのが見えた。デビモンの暗黒の力つていうのが消えたんだと…あのデビモンを倒せたんだって実感が今更だけ出てきた気がする。

「けど、海の向こうにも強力な暗黒の力を持つデジモンがいるって言ってたな」

「元の世界に戻れるかと思ったのに…」

「まだ戦わなきゃいけないの？もう嫌あ…」

「だけど、やるしかないんだ。どんな相手だろうと——」

と、その時、太一君達のいる地面が罅割れた。そして何かが地表から姿を現す。咄嗟に構えたけど…デジモン、じゃない…？丸い金属の円盤みたいなのが…何これ？もしかして、デジモンの体の一部とか…

「な、何だ!？」

「皆、離れて!」

『ほう…これが、選ばれし子供達か』

その円盤みたいなものの中から、上に向かって光が立ち上る…そしてその光の中から、お爺さんが現れた。今喋ったの、このお爺さんの声?…ってというか、人間!?この人、私達の世界にもいそうな老人に見える!

『デビモンを倒したとは、なかなかやるのお』

「お前は、誰だ!」

「デビモンの仲間か?」

『心配せんで良い、儂はお前たちの味方じゃ』

「私達の他にも、この世界に人間がいたなんて…」

『じゃが儂は人間であって人間でない』

「お化けなの?」

ミニミちゃんの一言にムツとした表情をするお爺さん。でも、人間であって人間でないって…どういうことだろ。

『儂の名はゲンナイ。今までデビモンの妨害があつてなかなか通信出来なかったが、やっと会えたのお』

「通信って…どこからしてるの?」

『ここ、ファイル島から遠く離れた海の向こう、サーバ大陸からじゃあ、成る程。この人って私達を呼んだ人ってことかな？で、本来なら私達がこつちの世界に来た時点で、通信で詳しい事情を教えてくださいはずだったのかも。だけど、デビモンの力が強くて通信を妨害されていた…ってこと？』

「ゲンナイさんは、いつからそこにいるの？」

『僕は最初からこの世界におる』

「お爺さんがアタシ達をここに呼んだの？」

『儂じゃない』

「じゃあ誰が？」

『それは…知らん！』

…予想がいきなり外れちゃった。呼んだのはゲンナイさんじゃない…でも、ゲンナイさんは私達の存在に気づいて通信をしようとしてたってこと。タイミング的に考えて、暗黒の力で通信妨害されてたっていうのは嘘じゃなさそう…あれ？でもゲンナイさんがいる大陸にいるデジモンの方が暗黒の力が強いってデビモンが言ってたような…だったら、暗黒の力が強いのに通信が出来るのって何で？

「じゃあ僕達、どうすれば元の世界に帰れるのか知ってる？」

『それも…知らん』

「何だよ、頼りにならねえ爺さんだな！」

「太一君！お年寄りにそんな口聞いちゃ…」

『良い良い、しかし僕はお前達を頼りにしておるぞ。サーバ大陸に来て敵を倒してくれ、選ばれし子供達なら出来るはずじゃ』

「来いと言われても、場所が分かりません！」

『それもそうじゃな、今お前のパソコンに地図を送ってやろう』

「ええ!？」

アドレス知らないんじゃない…って思ったけど、デジタルワールドなら出来るのかな？とんでもないハッキングの腕前とか…いや、無いか。

「でも、デビモンより強い敵を倒すだなんて出来るはずないよ…」

『いや、お前達のデジモンがもう一段階進化すれば、それも可能じゃ』
「僕達があつと進化する？」

『その為にはこれが必要じゃ…』

ゲンナイさんが消えて、代わりに映ったのは何かの道具。これは…何？金色の何かと、その中央に丁度収まりそうな、台形の何か。

『タグに紋章を嵌め込めば、デジモンは更なる進化が出来るのじゃ』
「そのタグと紋章はどこにあるんです？」

『さあ…紋章はサーバ大陸のあちこちにはらまかれてしまったのじゃ。それにタグは、デビモンがまとめてどっかに封印…エッ、アッ、イカン…妨害ガ…アア——』

「何だつて!？」

またゲンナイさんが姿を現して話していたら、突然光が消えかかり始めた。声も何を言っているか聞き取れなくなって、最後には円盤から光が出なくなってしまうた。

「消えた!」

「何だったの？今の…」

「…地図は、無事届いたみたいです」

「これからどうする？」

「うーん…とりあえず山を下りよう！まず、何か食って決めるのはそれからだ!」

こうして私達は、ひとまず下山することにした。

下山した私達は、ひとまず晩ご飯の準備を始めた。その際、私とタケル君は殆どついて行くだけだった。皆も疲れているはずなのに、凄い気遣われちゃった…特に空ちゃん和ミミちゃんはずっと傍にいてくれてた。ヤマト君もずっとタケル君の傍にいて…って、それはいつも通りか。

それぞれ採取してきた魚や木の実を簡単に調理して、皆で食べ始める。デジモン達はいつもより食べる量が多い。ポヨモンとココモンは、小さいからか食べるスピードが遅いし、何だか食べづらそうだったから、出来るだけ柔らかいものを食べさせてあげるようにした。

「はい。ポヨモン！あーん」

「ココモンもポヨモンも可愛い〜！ココモンはずっとそのままが良いかも〜」

「こうしてると、本当に赤ちゃんみたいですね」

「まあ実際赤ちゃんだし：あ、こら。逃げないで」

ポヨモンはタケル君に嬉しそうに食べさせてもらってるのに、ココモンはどういうわけか食べさせて貰うのを拒否しようとした。まあ、無理矢理にでも抱えて食べさせたけどね。地面に置いて食べるなんて許しません。

全員が食べ終わって、ようやく一息入れる余裕が出来た。

「ふう〜、食った食った！」

「やつと落ち着いたわね〜」

「腹あ一杯になったら眠うなって来ましたな」

「さって、飯も食ったし、これからのこと決めようぜ！」

「ゲンナイさんはサーバ大陸に來いつて言つてたけど：」

「この地図が正しいとすれば、ここからかなり離れてるはずだ」

光子郎君が見ているパソコンの画面を見させて貰うと、イタリミアみたいな形の大陸の地図が映されていた。右下に小さく表示されているのがファイル島だとして：この地図、ファイル島からサーバ大陸までの距離、分かりづらいな。でも、ファイル島がこの消しゴムくらいの大きさだとすると：かなり長い船旅になる気がする。

「アタシ、25メートルも泳げないんだもん。そんなの無理！」

「：行かなきゃいけないのか？この島からデビモンはいなくなつた。黒い歯車も消えた。ほぼ一周したから、どんな場所も大体分かる。水も食べ物も困らない」

「：…どういう意味？」

「だって、ゲンナイとかいう奴のこと簡単に信じて良いのか？本当にサーバ大陸なんてあるのか？」

「おい、何だよ！ここにいても元の世界には戻れないんだぞ？」

「デビモンを倒すのも大変だった。でも、さらに強い敵が待ち受けて

いるのよね…」

「それに、海の向こうの大陸にどうやって行くんです?」

「変なデジモンだっているかもしれないし…」

「…もう少し、ここで様子を見ても良いかもな」

「何だよ皆!」

皆、デビモンとの激戦の後で悲観的になってる。確かにこれまで、ここがデジタルワールドなんて考えて無かったから大人を探そうって頑張ってたけど…これからは違う。自分達で、デビモンみたいなデジモン達を倒して…元の世界に帰れるまで長い旅をしなきゃいけない。

丈君が言ったように、まだゲンナイさんがどんな人かも分からない。敵かもしれないけど、敵だからといってこの島に残り続けるっていうのは…ただ帰れるまでの日数が延びるだけ、だと思う。だって、他に手がかりはないんだから。

…だけど、私はまだ、怖い。今回は何とか…本当にギリギリで、誰も死ななくて済んだけど…もつと強い敵なのに、今度も大丈夫なんて保障はどこにもない。また、ココモンを失いそうになったら…!」

「行こうよ!」

「タケル…」

「どんな敵が待っているか分からないけど、やってみようよ!」

「ポヨ!」

「ほら、ポヨモンもそう言ってる!だから、僕…!」

「僕達も行くよ!タグと紋章があればさらに進化出来るんじゃない?そしたらきつと、太一達を守ることが出来ると思う!」

「アグモン…」

タケル君とアグモンの一言で、全員が明るくなった。タケル君、強いな…私と同じ経験をしてるのに、真っ直ぐな目をしてる。

「…!」

「ココモン…」

元気良く跳ねてるココモン。その姿は、私のことを、精一杯励ましているように見えた。

そうだ…私達は何も一人で戦ってるわけじゃない。皆が一緒だったから、これまで何とかなったんだよね。だから、あれだけ強大なデビモンも倒せたんだ。

「ヤマト、行こうよ!」

「…行こう!」

「うん、行きましょう!」

「分かったよ、僕も行く!」

「皆が行くなら、アタシも行く!」

「新大陸ですか!」

「皆でなら…きつと、何とかなるよね!」

「よし、決まったな!サーバ大陸に行こう!!」

〈おおー!!〉

こうして、私達はサーバ大陸への旅立ちを決めた。

「それで、どうやって行くんですか?」

〈……………〉

盛り上がった皆が、光子郎君の一言で時が止まる。

「光子郎く!せっかく皆でやるぞー!っ!ってなつてたのにさく」

「あ…すみません」

「まあまあ。光子郎君、さっきの地図見せてもらえる?」

「あ、はい」

「何するんだい?結衣君」

「皆も見て。大切なことだから」

光子郎君のパソコンを全員で覗き込む。少し狭いけど、この人数じゃしょうがない。

「これが多分ファイル島だね?出来るだけアップに出来る?」

「はい。…これが最大です」

「ありがと。皆でこの島の地図を見れば、少なくともこの地図が合ってるかくらいは分かると思うんだ」

「成る程」

まずやることは、ゲンナイさんがくれたこの地図がちゃんと正しい

ものなのかどうか。確かめるには、このファイル島の部分がどれだけ正確なのかを皆で照らし合わせていくしかない。細かい場所が分からなくても、何もしないよりはずつと安心出来る。

「どれどれ…この氷っぽい場所、ユキダルモン達がいたところか？」

「ああ、多分な」

「丈先輩、ここって墓地ですよね？」

「そうだ！僕達ここで食べられそうに…」

「僕達がカブテリモンに乗せて貰った時に見た景色を考えると…ここがケンタルモンの遺跡ですね」

「どこどこ？」

デビモンに一回散り散りにされたことで、行けてなかった場所をそれぞれが訪れることが出来たみたい。これでより地図が正しいかが分かるはず…

「光子郎君とミミちゃん、島が分裂した時の位置分かる？今空から見たって言ってたけど…」

「確かめてみます」

「あ、私もバードラモンに乗って見たから多少は」

「やっぱ空飛べるって便利だな」

「ごめんね飛べなくて！」

「だから拗ねんなって！」

光子郎君、空ちゃん、ミミちゃんの三人で話し合って、どんどん正確な位置が分かっていく。そこにこれまで歩いたルート、最初の森からムゲンマウンテンまでのルートを照らし合わせると…

「これまでの情報を合わせると…この地図は正しいと思います」

「ってことは、ゲンナイさんは味方で合ってるってこと？」

「本人はそう言ってたわね」

「少なくとも、地図は正しいんだから、サーバ大陸もちゃんとあるってことだよー」

「一応、この島のデジモン達にも聞いてみた方が良いかもね…皆は分からないの？サーバ大陸の噂とか」

「聞いたことないよ」

「オイラ達、ファイル島からは出たことないんだよ」

「まあ…会った時小さかったしな、お前ら」

とにかく、これでこの地図の信憑性が増したと思う。で、この地図が正しいことが分かれば次は、どうやって行くか。

「木を切つて、筏を作れば良いんだよ!」

「そうはいつても、この地図を見た感じかなり遠いぞ…何日かかるかわからない」

「海は荒れやすいって聞きますしね…」

「食料とか水も出来るだけ乗せないとだから…」

「それも何日も持つかしら?」

皆で話し合いながら、明日からの予定を決めていく。最終的に、明日からは筏を作る為の材料を確保することになった。

筏かあ…船を作れたら良いんだけど、どこかに船を作れるデジモンとかいないかな…

翌日。皆でサーバ大陸に面している海岸まで移動して、その近くの森の木を伐採して木材を確保することになった。

「『ベビーフレイム』!」

「倒れるぞ!」

「木を切るだけで、随分かかりそうですね」

「焦つても仕方ないわ、ゆっくりやりましょ。…ん?」

アグモン達が技を使つて一本ずつ木を倒して、その木を運んで…これだけでもかなり時間がかかる。進化して貰えば早いかもしれないけど、体力を消耗させてしまうだけだろうし、こればかりは地道にやっっていくしかない。

そう思っていた私達だったけど、心強い助っ人が沢山来てくれた。

「レオモン!?!」

「無事だったんだね、レオモン!」

レオモンとは昨日の戦い以来、オーガモンの攻撃で吹っ飛ばされてそれきりだったけど…何ともなさそうであつた。

「まあな。それよりも、サーバ大陸へ行くそうだな？」

「なんでそれを？」

「噂好きなデジモン達もいるんだ。何か手伝えることはないか、とな」

「ホントに手伝ってくれるの!？」

「頭数なら沢山いるぜ」

来てくれたのは、これまで出会ったデジモン達。エレキモン、ケンタルモン、メラモン…本当に沢山のデジモン達が手伝いにきてくれた。

数日はかかると思っていた筏作りだけど、大勢のデジモン達の力を借りて、何と数時間足らずで完成。ロープや帆なんかの材料ももらえたことで、思っていたよりも立派な筏が完成した。

「出来た!!」

「バランスも良いみたいですね!」

「こんなんで大丈夫なのか？」

「ちよつと不安だね…」

「決めたんだ。行くしかない!」

「お前たちなら、こんな海くらいきつと越えられる」

「ありがとうレオモン、君たちのおかげだ!」

餞別としてもらった食料も出来るだけ詰め込んで、私達は皆に見送られながら、このファイル島を後にした。

出発してからしばらく、運良く追い風が吹いているからか思っていたよりもスピードが出ている。その分揺れるけど…あ、光子郎君とミミちゃんがダウンしてる。

「何にも見えないな」

「流石に見えてこないんじゃないかな?まだ出発したばかりだし」

「あとどれくらいかかるんだろ…水も食料も、切り詰めても半月しか

持たない」

「その時は、魚でも釣るさ！」

「あとは、天気が崩れないのを祈るだけね」

よく半月分の食料を集めれたなって私は思うけどね。皆が手伝いに来てくれてなかつたら、あと数日は筏作りに苦戦してたと思う。出来れば船を作りたかったけど…流石に八人と八匹を乗せられる程の船を作るデジモンはいなかった。小舟ならレオモンが作れるらしいけど、流石にそこまでの知識は持ってないから無理だって。

「こら、ポヨモン！気をつけろよ！」

「ポヨ？」

「落ちたら大変だからね」

「ポヨ！」

ポヨモン、凄く可愛い…癒やされるなあ。ポヨモンと遊んでるタケル君も、可愛いと思っちゃう。私もココモンと遊んでみたい…どういうわけかココモンは遊んだりしないみたいだし。今も腕の中で寝てるし…寝顔も可愛いけどね。

「…？」

「あ、起きた？」

「…??？」

「どうしたの？キョロキョロして」

ココモンが起きたと思ったら、周りを見渡し始めながら疑問符を浮かべたような顔をした。何だろ…周りには海しかないけど。

と、その時だった。私達の近くまで大きな波が押し寄せて来た。幸い、飲み込まれることはなかったけど、波に流されて筏がさらに揺れる。

「急にどうしたんだ!？」

「風がないのに波が！」

「近くを船でも通ったのかな…」

「船なんていねえよ！」

光子郎君の言う通り、今の波はおかしい。突然近くで波が出来たように見えたし、そもそも今、風は止まっていた。少なくとも、波を起こ

せる程の強風じゃない。

もしかして、ココモンが周囲を気にし始めたのって…？

「皆、気をつけて！もしかしたらデジモンが近くににいるかも！」

「何だって!?!」

「あ、あれ！」

さっきの波とは反対側に、海から巨大な何かが浮かび上がって来た。それは茶色い、丸みを帯びた何か。とにかく巨大で、私達が乗ってる筏の何十倍はありそう。

「島だ！」

「違うわー！これは、島なんかじゃない!!」

その島らしきものが私達の後ろへと進んでいく。さらに見えたのは、大きな青い尾びれだった。そして、その島らしきものは海からその巨大な姿を現した。

「鯨!?!」

「な、何でだ!?!」

「ホエーモンは獰猛なモンスターやけど、いつもは海の底にいるはずや！」

ガブモンやテントモンが慌てる中、ホエーモンはまた頭を出した。そして、今度はその大きな口を開ける…これって、まさか！

「イヤ、食べないでく!!」

「逃げれないのか！」

「ダメ、間に合わない！」

海水ごと、私達は口の中に飲み込まれていく。完全に口の中に入ってしまった。ホエーモンはその口を閉じてしまった。

ホントに食べられちゃった…！光が入ってこないから、殆ど真っ暗でも見えないけど、筏がどんだんどこかに流されてるのだけは分かる。

「きつとこれは、ホエーモンの食道です！もちろん、レストランという意味の食堂ではありません！」

「そんなこと分かってるよ！」

「やっぱ食べられたんじゃない！」

「どこまで行けば出口なの？」

「出口は、お尻でしょう！」

「そんなところから出るのなんてイヤだ！」

「：ウンチみたい」

「言わないで！」

と、その時。私達の近くでポチャーン！つと音を立てて、何かが落ちた。今の、誰か落ちた!?

そう思ったけど、次々と同じ音がそこから中で聞こえる。目も、段々暗闇に慣れてきたのか見えるようになって：：これ、何？スライム？

「何コレ!？」

「もしかして、ホエーモンの白血球みたいな：？」

「白血球とは違うと思うけど：：っ！」

「何で襲ってくるんだよ！」

「僕達のこと、バイ菌か何かだと思っているのかも知れません！」

特に被害も出ずに、私達は開けた場所に流されて来た。半ば落ちたようなものだったけど：：とりあえず、ここは光が差し込んでるみたいで、中の様子が見える。

「広い所に出たわね：」

「ここは、どこ？」

「食道の先は、胃だと思うけど：」

「胃って、食べ物を消化するところだよね？」

「ああ：」

「そもそも、何でここ明るいんだろ：」

「さあ：」

そんなことを話していたら、壁際の水から、何かが流されているのが見えた。

「胃液だ！」

「いえき？」

「胃に入ったものを溶かす、消化液のことです！」

「皆、絶対に落ちないで！」

「早くここを通り過ぎないと危ない！」

下手したら、私達ここで死んじゃうんじゃない？ココモンが、何かをジーツと見つめてる。何処を見て…あ！

「あっ！太一、あれ！」

「黒い歯車だ！」

「だからホエーモンは暴れてたんだ！」

「何とかしてあげようよ！」

「どうやって…」

「アタシに掴まって登れば…！」

「ちよ、ちよつと待って！それは流石に危なすぎるから！」

パルモンが手の触手を伸ばそうとしていたけど、それを登って黒い歯車を攻撃するなんて危険すぎる。あれだけ深く食い込んでるってなると、引き抜くことも出来ないと思うし…

「ねえ、多少怪我させちゃうかもしれないけど…皆で一斉攻撃すれば壊せるんじゃないかな」

「そうしましょう！ピヨモン、お願い！」

アグモン、ガブモン、ピヨモン、テントモンが全員で黒い歯車を攻撃。すると黒い歯車に罅が入った。そして、最後には粉々になるように消えて無くなった。

「よし、やったぞ！」

黒い歯車が消えた途端、壁が急に白くなって…私達を謎の浮遊感が襲う。すると、急にどこかへと移動し始めた。え、これどうなってるの!?

「ど、どこ行くんだった!？」

次に私達を感じたのは、落ちている感覚。そして水の中に落ちたということだけが分かった。今の衝撃でバラバラになった筏の木片を掴み、身を預ける。

私達、ホエーモンの頭の上に行ったんだ…さっきのはホエーモンが潮を噴いて、私達はその水に乗って吹っ飛ばされた。結構な高さから落ちたみたいだったし、筏がバラバラになるのも頷ける。あ、ホエーモンの中が明るかったのって、頭…背中？の穴から光が差し込ん

でだから、とかなのかな？

そうだ、皆は…！

「皆、大丈夫!?」

「何とか…」

「ポヨモン、大丈夫だった?」

「ポヨ…」

…うん、全員ちゃんといるね。ココモンもちゃんと抱いていたから手放さなくて済んで良かった。ココモンは丸太の上で体をブルブルと震わせて、びしょ濡れの体の水気を取っていた。

ホエーモンは…落ち着いてくれた、と思うけど、どうなんだろう。表情があまり掴めない…

「イヤ、来ないでーっ!!」

『すみません、乱暴なことをして…』

これって、テレパシー?ホエーモン、喋れたんだ…

「ホエーモンが悪いんじゃないわ!」

「黒い歯車のせいだったのよ」

「きつとあれが、最後の一個だったんだよ!」

「ホントに最後か!」

『おかげでやつとスツキリしました』

「ホエーモン、サーバ大陸ってここからどれくらいかかるか知ってる?」

『はい。私でも五日はかかります』

え…ホエーモンでも五日…?そんな距離を筏でだったら、半月じゃ足りなかったんじゃないや?ゲンナイさん、もうちよつと移動手段のことを考えて欲しかったなあ…

「かなり遠いってことか…」

「困ったね、筏壊れちゃった」

『サーバ大陸に向かうのですか?』

「うん、そうだよ」

『黒い歯車を取り除いて下さったお礼に、私がお送りしましょう』
「ホント!」

「ラッキー!!」

やった!これこそ、渡りに船つてやつだね。今日は何だか、良いデジモンにばつかり会えてる気がする。

ホエーモンの好意に甘えさせて貰うことになり、ホエーモンの上で潮風を楽しむ私達。筏より安定感も抜群だし、揺れも問題無さそう。

「気持ち良い〜!」

「筏に乗って行くより、よっぽど快適ですね!」

「これなら船酔いしない!」

「あとは、デビモンが封印したっていうタグと紋章を見つければな!」

『デビモンですって?』

「何か知ってるのか?」

『タグと紋章というのはよく分かりませんが…前にデビモンが、海の中のある場所に、何かを置いていったとか…』

「それって…!」

「その場所は?」

『サーバ大陸へ向かう途中にあります。皆さん、また暫く私の体の中に入って頂けますか』

成る程…海底だったら行けるデジモンも少ないし、海上を進むだけだったら見つかりっこない。ホエーモンに会えて、本当に良かった…確か、紋章がサーバ大陸のあちこちに隠されたってゲンナイさんが言ってたから、そこにあるのはタグだと思う。

ホエーモンの中に入って暫く待っていると、やがてホエーモンから声がかかった。もう着いたらしいけど、いわゆる海底洞窟というものらしく、ホエーモンにはこれ以上進めないらしい。空気はあるので、私達で探すことになった。

『私はここでお待ちしております』

「ありがとう!」

ホエーモンに待ってもらい、奥へ進んでいく。すると見えてきた

のは、何処にでもありそうなコンビニだった。洞窟の中にコンビニ：異様すぎる光景だなあ：今更だった。というかこの異様な光景に慣れつつある自分がいる。

でも、デビモンだったら：この洞窟に門番みたいなデジモンを配置していたとしてもおかしくない気が――

「コンビニだ！」

「……！！」

「……ココモン？」

またココモンが体を震わせてる：何で声出さないんだろ。ポヨモンは一応、鳴き声くらいは出してるのに。まあ、それは置いて：もしかしてココモン、デジモンが現れるタイミングを教えてください？ホエーモンの時もそうだったし：

その予想を裏付けるように、コンビニまでの通路の地面が突然崩れて、かなり大きな穴が出来た。そこから姿を現したのは、紫と肌色の、頭にドリルをつけたデジモンだった。モグラ：かな？その背中には、またしても黒い歯車が。

「な、なんだ!？」

「ドリモゲモンだ！」

「あつ：黒い歯車だわ！」

「やっぱりまだあつたんじやないか！」

「デビモン様の命により、ここには誰も立ち入らせん！出て行け！」

「太一、ここは僕達に任せてタグを探して！」

「分かった！」

「へん、そんなドリルなんて怖くないやい！」

ドリモゲモンがドリルを突き出し、それに対してゴマモンが一步前に出てそう言い放った。ゴマモンの体が、光に包まれる。

「ゴマモン、進化――っ!!イツカクモン!!」

「『ドリルスピニング!』」

「皆、今の内だ！」

イツカクモンが角でドリモゲモンのドリルを受け止め、その間に私

達はコンビニの中へと駆け込んでいく。中も普通のコンビニだ…!? 「イツカクモン、手加減してやってくれよ!」

どうやらイツカクモンがドリモゲモンを吹っ飛ばしたらしく、コンビニのガラス部分に叩きつけられた。それを見て丈君がそう呟くけど…:どうやら、手遅れみたい。イツカクモンが角をドリモゲモンに向けているのが見えた。

「皆、伏せて!」

「ッハープーンバルカン!」

へわああっ!」

イツカクモンもこつちに当てないようにはしていたみただけど…:さっきのドリモゲモンの激突で野晒しになっていた店内に、着弾の余波がこつちにもあった。店内の棚は次々と倒れ、私はココモンを抱えたまま身を丸めた。

「わてにもやらせてえな!」

コンビニを飛び出して行ったテントモン。二体が相手すれば、あつちには問題ないはず、それよりも今は店内だ。

「危ねえ〜!」

「皆さん、無事ですか?」

「ええ、大丈夫!」

「ポヨモン!どこにいるの!?!」

皆無事みただけど、ポヨモンがはぐれたみたい…:色々倒れた衝撃で埃が舞い上がって視界が悪い。下敷きになったりしてないよね?

と、棚と棚の間で何かが動いたのが見えた。

「タケル君!こつち!」

「え?あ、ポヨモン!そんなところ入っちゃダメだよ!」

「ポヨ…:ポヨ?」

「何それ?」

「タケル、ちょっと貸してくれ」

ポヨモンが出てきたと思ったら、ポヨモンは小さな箱にくつついたまま出てきた。ヤマト君がその箱を受け取って、中を確認してみる。「タグだ」

「ゲンナイさんが映し出したのと、同じです」
「キレ〜イ！」

タグを回収した私達は、再びホエーモンに頼んで海上へ。そのままサーバ大陸へと進む。ちゃんと八人分のタグが入っていたみたいだし、あとは紋章か：

「……」

「気になる？」

ココモンはさつきから、ずっと私の首にかけられたタグを見つめる。

…もしかして、ココモンは…七つしかタグが入ってなかった、とか考えてるのかな。確か、私はココモンのおかげでいるから、ココモンがいない世界線だといないんだよね。だったら、ここまでは七人で旅しているはずだし、タグも七つしかなかったはず。

ココモンが、何だっけ。神様？に頼んだことで、選ばれし子供達が私含めた八人になっているっていうだけなのか、それとも何か別の理由があったりするのかな。前者だと仮定して…そうになると、私の紋章はどこにあるんだろう？

どちらにせよ、全員分の紋章が手に入るのはかなり先になりそうなのがする。この五日間の船旅…鯨旅？はリラックス出来るように過ごすことにしよう。

不安は多少あるけど…私達はこれから向かう新しい大陸に思いを馳せながら、夕日に染まる海を眺めていた。

第十四話 エテモン、悪の花道！

ホエーモンと出会ってから四日目の夜。私達は順調に航海を続けていた。まあ、ホエーモンのおかげで順調なのは間違いないけど。この四日間、私達がやることといえば釣りをして食料を調達することくらい。たまに海のデジモンにも遭遇するみたいだけど、ホエーモンには近寄ってやることはなかった。

「いよいよ、明日はサーバ大陸かあ」

「明日に備えて早めに休みましょ」

「一応、上陸場所の確認をしておこう」

「光子郎君、お願い」

「はい、上陸予定地はこの場所です。形状から考えると、この入り江が最も最適だと思います」

パソコンの画面を見ながら、明日からの予定を確認し合う。サーバ大陸のあちこちにある紋章を手に入れるには、サーバ大陸を踏破するくらいの気持ちでいた方が良いと思う。手がかかり、何にもないし。

「上陸の後はどうする？」

「出来れば、水や食料の補給をしたいわね」

「そうだね…：筏が壊れた時に大分無くなっちゃった」

「そうなるよ、村がどこかにあれば良いのですが…：ホエーモン、村や町の場合に心当たりはありませんか？」

『皆さんが上陸する予定の場所からは少し遠いですが、南の方にコロモンの村があります。彼らなら、補給の心配も無いでしょう』

「コロモンって…」

「アグモンの進化前だよね？」

知らないデジモンよりは、知っているデジモンの方が安心出来る。ピヨコモンの村の子達も良い子ばかりだったし、コロモンの村も同じ感じかもしれない。

詳しい位置を教えて貰うと、確かに上陸場所からは少し遠い…：あ、でもこつちの方からなら近くて良いかも。

「ねえ、私達は今、南東の方角にいるんだよね？：だったら上陸場所をこ

の岩場にすれば、コロモンの村までもそう遠くないし、上陸時刻も早められるんじゃない?」

「成る程…ホエーモン、どうでしょう?」

『上陸は可能でしょう。そこからなら、半日も歩けばコロモンの村がある森に辿り着けるかと』

「私も賛成」

「俺も」

「決まりだな!じゃあ、上陸をここにしよう!」

太一君の言葉に皆が頷く。と、ここでタケル君が小さく欠伸をした。

「もう休もう、明日も早い」

「そうだな、それじゃお休み!」

そう言つて、皆が眠りにつく。まあ、話し合つてる段階で既に寝た子もいたけど…幸せそうな顔してるし、そつとしておこう。

「ポヨ…!」

「どうしたの?ポヨモン…わっ!」

「眩しっ…!」

ポヨモンが突然、小刻みに震え始めた。その直後、ポヨモンの体が光に包まれる。光が収まった後、目にしたのはタケル君の手の上にいるトコモンの姿だった。

「トコモンだ!」

「またよろしくね、タケル!」

「良かったわね!」

「次に進化したらパタモンだ!」

「じゃあ、ココモンも…!?!」

「あっ…!」

ココモンに目を移すと、ココモンも小刻みに震えていた。そしてポヨモンと同じように、光を放つ。

「…!」

「はあく…やつと喋れる」

「チヨココモン…!」

「ちよ、おい、苦しつ…」

久々に聞いたチョコモンの声。声は高いのに荒っぽい言葉遣いが、とても懐かしく感じる…声を聞いただけで泣きそうになって、それを誤魔化すためにチョコモンを抱きしめて隠す。

「良かったですね、結衣先輩！」

「うん…！」

チョコモンの体の感触が、余計に懐かしく感じる。ロップモンも抱き心地最高だったけど、チョコモンはプニプニしてて気持ち良い。

…今まで赤ちゃんデジモンだから、抱きしめすぎないように思ってた出来るだけ抱きつかないようにしてたけど、これでもう我慢しなくて済む。

「や、か…ぐふっ」

「結衣君、ストップ！チョコモンが苦しそうだ!？」

丈君からストップが入るまで、遠慮無く抱きしめていたら…チョコモンが目を回してた。あれ？

☆☆☆

はあ…死ぬかと思った。久々に喋れるようになったかと思ったらこれだもんな。あの後、結衣は何度も頭を下げてくれたので、それで不問として明日に備えて休むことになった。時間も時間だったし。

そして今、俺は何故か朝早く目が覚めてしまい、皆はまだ眠っている。何でこんな時間に起きてしまったんだ…あれか、幼年期だから睡眠時間が他の奴らよりも少ないってことか？いやでも、トコモンはまだ寝てるしな…

「…ホエーモン、サーバ大陸まではどれくらいだ？」

『そうですね。日が昇りきった頃には見えてくるかと思いますが』

「そっか…もうすぐ、だな」

もう太陽は顔をだそうとしている。一面海の景色で日の出を拝めるといいうのも、中々出来ない経験だと思う。ホエーモン様々だ。

ココモンだった間も、ちゃんと意識はあった。ただ、ポヨモンみた

いに鳴き声しか出せないのは分かってたから、出来るだけジェスチャーだけで反応するようにしてた。ココ！しか言えないの、不便すぎる。

おかげで俺がこの数日間、どれだけイライラした生活を送っていたか……！最初は勝手なことをしたなと結衣に申し訳なきがあつたが、アイツ：俺が赤ちゃんデジモンになったからつて完全に赤ちゃん扱いだぞ。食べ物をはぐすとか、添い寝するとか、そこまでしなくて良い！つて何度思ったことか。しかも、チョコモンになるまでに一週間ちかくかかるとは……

俺とポヨモンの件で少しストーリーにずれがあるかと思つたが、概ね同じで良かった。特にホエーモンに会えなかつたらどうしようかと思つたぜ……計算したけど日数は一緒だつたしな。会えない方がおかしいと思うが。タグも結衣の分がちゃんとあつて良かった。多分神様の力だな、これは。別に光が解雇されたわけではない、はずだ。

「ん……んんーっ！」

「お、起きたか」

「……チョコモン？おはよう、早いね」

「お前もな」

結衣が起きたらしい。一番最初に起きるのは太一かと思つていたが……コイツ、昨日の懲りてねえな。

「おい」

「ちよつとだけ、ね？」

「……ハア。分かつた、ちよつとだけだぞ」

「えへへ」

俺を抱きしめて満面の笑みを浮かべる結衣。若干寝惚けてないか？……とりあえず、昨日みたいに絞め殺されそうになることはなさそうだ。

「……あの時は、悪かつたな。あれしか思いつかなかつたんだ」

「……デビモンとの戦いのこと？あの時は……その、色々取り乱してたから考える余裕無かつたんだけど、あれはどうなつてたの？」

「エンジェモンの集めた聖なる力を、俺が預かつたんだ。エンジェモ

ンの体が消えないようにな」

「聖なる力…そっか、だからあの時のロップモンは白かつたんだね」
「…何？」

白かった？どういうことだ？確かに俺はエンジエモンの聖なる力を調節するためにこの体を貸したが…っていうか、白かったか？あの時は無我夢中だったからな…覚えてねえ。

「覚えてないの？」

「ああ…俺、白くなってたのか？」

「うん。エンジエモンにくつついてる間、ずっと」

「そっか…あ」

「何か分かったの？」

俺は結衣に、白いロップモンのことを話した。そういえばデジモンクロスウォーズでそんな特別なロップモンがいたというだけだが。あれって、どういうロップモンだったか…そもそもあれって、ネオヴァンデモンに食われたロップモン達が集めたことで白くなつたんじゃなかったか？あれって自力でなれるのか？

「うーん…思っただけけど、それって聖なる力がそのロップモン達の力の代わりになつたんじゃない？」

「そういうこと、なのか…まあ、白いロップモンは多分、無理に力を宿している状態だろうし、まさに諸刃の剣ってやつか…もうそんな姿になることはない、と願いたいな」

「ホント…もう勘弁してほしいよ」

「…ああ」

少し力を強めた結衣。その時、俺達は日の光に照らされる。眩しいけど、美しい光景だ。

「ん…つくうっ！」

「あ、太一君。おはよう」

「結衣さん、おはよう…ふわあく…そうだ。サーバ大陸は？」

「まだ見えないよ。私もさつき起きたところ」

「そっかあ…」

太一が起きて、そのまま食料のある方へと向かっていった。多分、

朝飯を食いにいったな。

「そういや、お前は朝飯食わねえのか？」

「食べるよ？・チョコモンは？」

「俺も食う、ちゃんとエネルギーとつとかないとなー！」

早くロップモンに進化したいな…手足のある生活、バンザイ。前にも思ったが、常時成熟期計画を本格的に考えるべきか？

…っーか、まさか、エテモンとの戦いが終わるまでこのままってことは……ない、よな??

あの後、サーバ大陸はすぐに見えた。予定していた上陸場所に到着し、俺達はホエーモンに教わった通りにコロモンの村へと向かう…のだが。約一名、ビビってホエーモンから下りていない。

「さあミミちゃん！勇気を出してー！」

「何でこんな所から上陸しなきゃいけないの!?!もつとマシな場所なかったの!?!」

まあ、上陸がしやすいとは言えないな、これは。そのまま滑るだけだったらまだ良いが、それだけだとホエーモンと岸の間の海に落ちる危険もある。

「確かに、ここから少し北の方に上陸しやすそうなり江があるんですけど…」

「だから皆で相談して、ここから上陸することに決めただ！君は寝てたけど！」

「もう！そんな大切なこと勝手に決めないでよ！ああ、いや〜!!」

「うぐっ！」

「もう、いや〜…」

ホエーモンが体を揺らして、ミミは足を滑らせて滑り台のように下りてきた。さらにタイミング良くホエーモンが体を揺らしたことで無事に着地…光子郎を押し倒す形にはなったが。所謂ラッキーシン？だが、この頃の光子郎はまだミミのことを何とも思っていない

だっけか？

ホエーモンに別れを告げ、今度こそ予定通りに移動を開始する。

「で？これからどこ行くの？」

「ホエーモンが教えてくれたの、ここから半日くらい歩いた森の中にコロモンの村があるって！」

「コロモン？…聞いたことがあるような」

「僕が昔コロモンでした」

「そうだっけ！」

昨日の会議で既に寝てたミミに説明しながら、広大な砂地のような場所を進んでいく。タケルでさえまだ起きていたのに…何でコイツだけ既に寝てたんだ？

道中は、それは退屈なもんだった。デジモン一匹見当たらず、景色の代わり映えもなく。流石は大陸と言われるだけのことはある。日差しがやや強く、水分補給のペースもその分多くなる。

「ん…！」

「アグモン、どうした？」

「こつちからコロモンの匂いがするんだ」

「なんだって？」

アグモンが匂いを嗅ぎながら、ある方向を向いて立ち止まった。アグモンの言葉を聞いた太一が少し高めの場所まで行くと、単眼鏡を覗く。

「森だ！」

「コロモンの村がある森か？」

「多分な！」

「あ、待って太一！」

「太一さーん！」

アグモンと太一の後を続いて行くと、確かに森があつた。その中を進んでいくことしばらく、森の木々が無い広い場所に出た。遠目から見ても大きな…テント、なのか？ドーム状のテントらしきものが見え、その中心の上に大きい、こけしみたいな形状の大きなものが目立つ。多分、あれがコロモン達の住処なんだろうな…明らかにピヨコモ

ンの村みたいな小さきではないらしいが、何でだ？単純にファイル島とサーバ大陸における文化の違いだろうか…

「コロモンの村だ！」

「ピヨコモンの村みたいな想像してたけど…野宿はしなくて済みそうだね」

同じ事考えてる誰かさんがいるな…と、ここでまたトラブルメーカーが動き出した。

「お風呂ーっ！」

「ちよつと、ミミ待つてー！」

まあた考え無しに向かう奴もいるし…っていうかはええな！パルモンが追いつけない速度で走って行くミミ。そんなに走れたのか、アイツ！

「…あれ？」

「どうした、アグモン？」

「違う、ここ」

〈え？〉

アグモンの話では、コロモンの匂いもするが、それと同様に他のデジモンの匂いもするらしい。ああ、パグモンが今は乗っ取ってるんだっけか…

「早くミミちゃんを追わなきゃー！」

全員でミミの後に続き走って行く。村の中まで入ると、ミミが灰色のコロモン…いや、コロモンの触覚の代わりに耳があるデジモンに担がれて連れて行かれているのが見えた。一緒にいたパルモンは咄嗟のことに気圧されて尻餅をついたらしい。

「ミミちゃん！」

「あの角を曲がったわ！」

「ここはコロモンの村じゃなかったのか！」

「そうみたい！」

パルモンが言う角を曲がると、パグモンがそれぞれの建物の前で塞ぐようにいる。唯一塞がれていないのがあの、外から見ても一際デカかった建物のみ。確か、この先って…

「どっちだ!？」

「きやあーっ!」

「あそこだ!」

「わっかりやすい悲鳴だな……」

「え?」

俺の呟きに僅かに結衣が反応する。他の子供達は全員建物の中に入っていた。

「結衣、とりあえず太一と光子郎を止める。それがお互いの為だ」
「う、うん。よく分からないけど分かった」

大きな建物の中は、外観とは裏腹にやたらと豪華だった。なんか、城っぽいというか：エントランスに、両サイドに二階へと続く階段がある。コロモンが作ったにしては豪華すぎるよな、ここ……

結衣と俺が入った頃には、空が階段でミミの帽子を拾っている所だった。その後ろを太一と光子郎、丈の三人が登っていく。あ、もしかしたら間に合わないか？俺は別に良いんだが：光子郎的にはラッキーかもしれないしな。でも、やっぱり結衣達女性陣からすれば忌避されることになるだろう。こんなことで仲間の関係に亀裂が入るのはちよつと……なあ？

結衣は太一達を見た直後に階段を登って空に追いつき、そのまま空と一緒にミミの鞆を拾っている丈の隣を通り過ぎる。そのまま太一と光子郎が入っていたと思われる部屋に入り：太一が一直線に禁断の扉を開けようとしていて、その後ろを光子郎が追っていた。あ、これ間に合わないな。

「ここって……」

「……！ダメ、太一!」

「ハア……『ダブルボブル』」

「うわっ……!」

「うおっ!?!何すんだよ!」

久しぶりの泡攻撃を放ち、太一と光子郎がギリギリで回避する。まあ、躲せるように遅いのを撃ったんだが。当たっても目の前でパァン!って泡が割れる程度だし。

「お前ら、人の話聞け」

「太一君、光子郎君、そこは開けちゃダメだよ」

「何で？」

「ミミちゃん、入浴中だからよ！太一のバカ!!」

それを聞いた太一と光子郎は顔を真っ赤にし、結衣と空が代わりに禁断の扉の中を確認し、ミミの安否を確かめる…というかカーテンだけで遮っているこの部屋もどうなのか。つか、ホントにミミってトラブルメーカーすぎじゃね？

「ミミちゃん、大丈夫？」

「あ、空さん！結衣さん！お風呂ですよ、お風呂！一緒に入りましょうよ！」

「確かに入りたいけど…でもミミちゃん、勝手にいなくなったら心配するからもう止めてね？」

「ええ〜？だって、お風呂ですよ！折角お風呂に案内してくれたんだしー」

「や・め・て・ね？」

「は、ハイ!!」

…うん。まあ。その…奴の説教は結衣に任せておこう。俺は太一と光子郎と一緒にその場を後にした。

☆☆☆

ミミちゃん、まさかお風呂に入ってるとは…初対面のパグモンをそこまで信用するなんて、不用心とか何というか…これが元の世界だったら、完全に誘拐事案なんだけど？

まあ、あの後とりあえずミミちゃんとは軽くお話して、その後全員お風呂入らせて貰ったけどね…デジモン達と一緒にだったら、まあ大丈夫かな？って思うし。

一悶着あった昼間だったけど、今は夕方。パグモン達が私達を大広間みたいな場所に案内して、おもてなしをしてくれることになった。今はパグモン達が、クリスマスに被るあの三角帽子を被って踊りを披

露してくれている。コロモンの村じゃなかったみたいだったけど、パグモン達も良いデジモンみたいで良かった。

「ここはパグモンの村だったんだ」

「おかしいなあ、確かにコロモンの匂いだと思ったんだけど」

「お待たせしました！」

「まるで竜宮城に来た乙姫様の気分！」

「それを言うなら浦島だろ？」

「まさか、偽物ってことはないわよね？」

「そう何度も同じ手にかかってたまるかよ！うん、うめえ！ホンモンだ」

「太一君、あのご飯も美味いって言ってたけどね…」

あの時とは、デビモンの館のご飯を食べた時のこと。あれが幻覚だったなんて、まだ少し信じられない。本当に美味しかったし…あ、でも食べても食べたことにならないなら、ちよつと得した気がする。

「変やな、パグモンは意地の悪い性格って噂やったのに」

「ただの噂だよ、きつと」

「そうそう、ただの噂！」

「ホントは良いデジモンなのよ」

「そうそう、良いデジモン！」

皆、それぞれご飯を食べている…けど、ふと横を見たら凄い勢いでご飯を食べているチョコモンに目がいった。ど、どうしたんだろ…そんなに食べたらお腹壊すんじゃない？

「チョコモン、ちよつと食べ過ぎじゃない？朝も結構食べてたし…」

「まあな…ん！よし、結衣！ちよつと頼みがあるんだが」

「何？」

「俺が進化出来るか試してみてくれないか？」

「そんなにロップモンになりたいの？私としてはもう少しこのままでも…」

「頼む。ちよつと試しておきたいんだ」

沢山食べてたのって、進化のエネルギーを蓄える為だったんだ。でも、昨日ココモンから進化したばかりなのに、もう？こんな連続で

進化するのって、体への負担が大きいんじゃないかと思うんだけど。
「ダメ、今はご飯中だし…昨日進化したばかりでしょ？体の負担と
か…」

「あー…そっういやそっうか」

「チョコモン、昨日進化したんだ」

「それなら、トコモンもだよ！」

〈おめでと〜！〉

パグモン達が耳を使って拍手してくれている。ちよつと可愛いけど、何か違う。たまに、ギラツとした目をする時があるみたいなんだよね、パグモンって。素直に可愛いって思えないんだよね…

それにしても、チョコモン…あっさり引き下がったけど、何だったの？別に進化したかったわけじゃないってこと？

「ねえ、さっきのどういいうこと…？」

チョコモンに小声で話しかける。いつもチョコモンは私が抱えているから、コソコソ話しやすい。周囲は騒がしいし、聞かれる心配はあんまりしなくて良いかな。

「ああ…急に悪かったな。パグモン達に俺が最近進化したってことを伝えたかったんだ」

「…？何で？」

「ここ、本当はコロモンの村で合ってたんだよ。コイツらはコロモン達を近くの滝の裏の洞窟に監禁してる」

「か…っ!？」

「シーツ…で、俺がつい最近進化したって分かれば、気に入らないって理由で俺を連れてくはずだ。結衣、お前は皆を連れてコロモンと俺達を助けに来てくれ。多分、夜中に連れて行かれる…ホントは、トコモンのことは隠すつもりだったんだが」

な、何その計画?!いくら何でも危険すぎる…!いくら相手が幼年期とはいっても、チョコモン達も幼年期なのに…でも、もう既にパグモン達が動くのは確定してるみたいだし…手遅れ、かな。

とりあえず、チョコモンの計画を詳しく聞いてみると…敵はパグモンとガジモンっていう成長期のデジモンらしい。これから対峙する、

デビモンより強い敵の子分らしいけど、その敵は今遠い場所にいるらしく、すぐには襲って来れないみたい。

「…チョコモン、今後はちゃんと私に話してから動いてね？約束したよね？」

「…うああ。元々、そのつもりだぞ？」

「…ハア。何か、今日は怒ってばかり。ミミちゃんのこと、チョコモンは悪く言えないね」

「何でだよ!？」

そりゃあ、二人ともトラブルメーカーっていうことには違いないだもん。ミミちゃんは不用心すぎる感じだけど、チョコモンはトラブルが起きるのが分かっているのに自分からトラブルに突っ込んでくんだよ…どつちにしろ、気苦労が絶えない気がする。

今後は、ちゃんとチョコモンに頼りっぱなしになるんじゃないかと、ストツパーの役目も頑張らなきゃ。もう、チョコモンが無茶して傷つかないように、一緒に考えていかないと。

その日の夜、皆が寝てる時…チョコモンの言う通り、パグモンが動いた。寝たふりをしていた私の横で、チョコモンとトコモンを縄で縛り始める。

我慢、我慢……出て行くまで、我慢、我慢……!

パグモン達がチョコモンとトコモンを担いで部屋を出て行った直後、私は勢いよく起き上がる。

「皆、起きて…起きて」

「ん、ん…?？」

「どうしたんですか…?？」

「パグモンが、チョコモンとトコモンを連れて出て行ったの!」

「え…トコモモン?トコモモン!」

タケル君も心配そうな顔でトコモンを必死に探す。その声で、まだ寝惚けている皆も目が覚めてきたみたい。

「パグモン達がそんなことするなんて…」

「やっぱり良いデジモンじゃなかったんだ」

「急いで追いかけてよう！」

全員急いで準備して、外に出て、手分けして探し始める。チョコモンは、連れて行かれる時に分かりやすいように痕跡を残すって言った。

「皆、これ…」

「濡れてる？」

地面には所々に濡れた場所があった。これだ…これが、チョコモンが残していくって言ってた痕跡。

「きつと、チョコモン達が残していったんだよ。これを辿れば…」

「でも、おかしくないですか？この後、村の外まで続いているみたいですが…」

追っていくと、森の入り口へと続いている。とりあえず、手がかりはこれしかないから、追おうとしたら…アグモンが、木の傍で立ち止まる。

「ん？…あれ？」

「どうした、アグモン？」

「何か…いる!？」

「お化け!？」

暗かったから分かりづらかったけど…アグモンの足下に、真っ黒の何かがある。アグモンがその子を拾い上げると、顔をこっちに向けただ。あれ、この子って確か…

「この子、始まりの町にいなかった？」

「いたよ！確か…」

「ボタモンや！」

「どうして、ボタモンがここに？」

「どういうことだ？」

「ボタモンはコロモンに進化する前のデジモン。パグモンの村にいるはずない！」

「それじゃ、ここはやっぱり…」

「ここ、コロモンの村だったんだ!」

「皆、急ごう!」

痕跡を辿っていくと、大きな滝を見つけた。滝の裏側に回れそうな道を見つけた。その反対側には、二足歩行の…なんだろう、犬? 狼? みたいなデジモンが三人。

「誰だ? アイツら…」

「ガジモンだ!」

「あ、パグモン達が出てきたよ!」

「何か喋ってるぞ…?」

「一人どこかに行きましたね」

「もしかして、パグモンの仲間じゃない?」

あれがガジモン…成長期のデジモンだって言ってたから、チョコモン達を助けるのは簡単なはず。

「ガジモンの相手は俺がする!」

「よし、任せたぞヤマト!」

「ああ」

「ヤマトさん、手伝います」

「わてもやりまっせ!」

ヤマト君とガブモン、光子郎君とテントモンがガジモン達を相手にしてくれることになり、私達はその隙に滝の裏側に続く道を進むことにした。

「何者だ、お前ら!」

「待て、人間だど!?!」

「プチファイアー!」

「プチサンダー!」

「今の内に!」

滝の裏側に入ってみると、そこには大きな洞窟があった。中には檻が沢山あって、一番手前の檻には…

「トコモン!」

「チョコモン…!」

「見て、コロモン達もいるわ!」

「僕に任せて！」

アグモンが檻についていた錠を爪で壊して、開けてくれた。アグモンは次々とコロモンの入っている檻を壊していく。

「トコモーン！」

「タケル、心配かけてごめん！」

「チョコモン：良かったあ」

「結衣：ありがとな」

こんな危ない作戦、また次にやったら許さないんだから：：とりあえず、今回は一日モフモフの刑で許してあげる。

コロモン達を助け終わった頃、外では大きな音がした。多分、ヤマト君達が上手くやってくれたんだと思う。

「ヤマト！光子郎！」

「こっちは無事に終わりました」

「アイツら、エテモン様がどうって言ってたぞ」

エテモン：それが、デビモンより強い敵の名前。チョコモンが言うには、見た目はふざけているサンガラスをかけた猿みたいな姿だっただけけど：：グレイモン達成熟期のデジモンが束になつても勝てないくらい強い、らしい。アンドロモンと同じ完全体だって聞いた。

「不味いな：エテモンがこっちを襲ってくるのは間違いない。来る前に逃げないと」

「何でだ？」

「エテモンは、『ラブセレナーデ』っていう技を持ってるんだ。戦う力を奪うっていう」

「それを聞くと、力が抜けてしまうんや」

「何か対策はないんですか？」

「今のままやと無理や、もっと進化せな」

「ガルルモン以上に進化しろってことか」

「だからゲンナイさんは、タグと紋章を手に入れろって言ったのね」

「とにかく、逃げなきや！」

「逃げるってどこへ？」

「それなら、こっちの方に来て！」

コロモン達が、滝の奥へと進んでいく。私達もその後についてみると、すぐに行き止まりに辿り着いた。壁には、不思議な紋様が描かれている。これ、もしかして…？

「…は？」

「村に何かあった時は、ここから逃げろって言い伝えがあるんだ！」

「この紋様は…!?!」

太一君の胸元、正確には太一君が首から掛けているタグが…光っている。同じように、壁全体も光を放って、視界がオレンジ色に染まる。

太一君が服の内側に入れていたタグを外に出すと、部屋の光がどんどん小さくなって…太一君の目の前に、小さな何かとなった。オレンジ色で、太陽みたいな紋様が書かれている。

「これは、紋章だ！」

「なんだと？」

紋章が、太一君のタグに吸い込まれるように、ピッタリと収まった。サーバ大陸に来て早々に、太一君の紋章が見つかったんだ！

「紋章が、手に入ったんだ！」

「やった！」

「あ、見て！」

空ちゃんが指差した先には、外が見えた。さっきまで来ていた道とは反対、つまりさっきまで行き止まりになっていた場所が、外への出口になっていた。後ろを振り返ってみると、こっちは行き止まりになっていた。どういふこと…？もしかして、一方通行だったのかな？

「ここは、僕達の村から遠く遠く離れた森の中だ！」

「じゃあ、僕達！」

「うん、暫くはエテモンから見つかれることもないんじゃないかな？」

「やったあ！」

「あ、でもコロモンの村に戻れないんじゃない？」

「大丈夫！ここは食料も一杯あるし！」

「エテモンが来たら、村もただじゃ済まないだろうし…」

「もしかしたら、村も消えちゃうかも…」

そんなに強いんだ…しばらく、エテモンから逃げる日々が続くか

も。早く、全員の紋章を見つけなきゃ。それにしても、私の紋章……どこにあるんだろ？

第十五話　　グレイモン対グレイモン!

コロモンの村から、どういう原理か北の山中へと移動した私達は、コロモン達と別れてそのまま内陸の方へと向かうことにした。この広大なサーバ大陸、紋章が各地に散らばっているのなら、海辺よりは確率が高いという判断。

山を抜けた辺りで、コロモンの村まで見ていたような砂漠地帯へと景色が戻った。同じ砂漠ではないとは思うんだけど…こうも砂漠が続いていると、水も消費が激しくなるし食料も心許なくなってくる。せめて、どこかにオアシスのような所で水の補給が出来れば良いんだけど。

「グレイモン達がさらに進化するには、どうすれば良いんだろうな?」

「どうしたの?突然」

「だって、紋章を手に入れたんだぞ?」

「けど、紋章で本当に進化出来るのか?」

「出来るさ、な?アグモン!」

「え?う、うん」

「シャキツとしろよ、シャキツと!今んところ、もう一段上に進化出来るのはお前しかないんだから!お前が先頭に立って、頑張ってくれなくちゃ!」

「頼りにしてまっせ」

太一君がアグモンを叱咤しているけど…プレッシャー与えてるだけに見える。アグモンはまだ自信がなさそう。いきなり紋章があるんだから進化出来るって言われても、実感湧かないよね…

「で?どう思う?」

「これまでの進化で分かっているのは、進化には大量のエネルギーを消費していることですね。つまり、腹ペコの状態だと進化出来ませんでした。それと、パートナーが危険になった時です」

「成る程、しかしそのエネルギーってのも、もう一つ上に進化するんだからな。相当なエネルギーがいるんだろう、な?」

これまでデジモン達はご飯を食べていないと技も使えていなかった

たし、成熟期からさらに進化するっていうことは、さらにエネルギーを消耗するっていうのは納得できる。それと、これまでの皆の進化した時を思い返すと、やっぱりそれぞれ危険な状況だったと言える。つまり、大体は敵に襲われている時だった。

「それはちよつと違うと思うぞ」

「どういうことですか？」

「進化にエネルギーがいるってのはそうだろう。でも、俺達はそれだけじゃないと思う」

「え？でも、ご飯食べてないと戦えなかったし…」

「そりやそうだ。だけど、進化出来るようになる前と、進化が出来るようになった後で食事量は変わってないだろう？」

「確かに、一日に何度も進化出来るようになっても倍の量が必要ってことは無かったな」

「自分のことなのに良く分かってないってのも変な話だけど…多分、俺達は進化する為に適した体になってる。だから、食事量に関してはこれまで通りでも問題は無いはずだ」

つまり…何度も進化を繰り返すうちに慣れたってこと？でも、そう考えると一日に何度も進化出来るようになったのはそう表現するのが合ってるかも。確か、アグモンはグレイモンに進化出来た日、シードラモンと戦ったあの夜は進化しようとしても上手く出来てなかった。

「っていうことは…俺達がさらに危ない目に遭ったら」

「太一君、それはダメだよ。これ以上危険な目になって遭うなんて」

「結衣先輩の言う通りだわ。馬鹿なことは考えないで！」

「あ、ああ…」

これまでもデジモンに捕まったりしていたんだけど…これ以上に危ないって、それももうデジモンに食べられたりしているんじゃない？そんなことになる前に、私は止める…危ないことに自分から向かっていくのは、間違ってる。

「とにかく、飯はいつもより多めに食べとく方が良いだろう？」

「話が戻ってるぞ、太一…」

「初めてグレイモンに進化した時もさ、アグモンに戻ったらすぐに腹減った〜って言ってたんだ。つまり、慣れるまではエネルギーは必要ってことだろ？」

「…あー、まあ、その通りだ。でも、食べ過ぎていざという時に戦えないってのは止めてくれよ」

「それもそうだな…」

チョコモンがこういうこと言う時って、大体この先に良くないことが起きようとしている時だと思う。つまり、アグモンが、食べ過ぎて戦えないってことがあったのかな？

でも、太一君ってそんなことしないような…リーダーシップはあるし、思いついたことも何でもやってみるってタイプだとは思うけど、私達が危険な目とか、無茶なことはさせないように気をつけてる。それは、アグモンだって同じだと思うんだけど…

「あ、あそこー！」

「オアシスだー！」

「お水が飲める〜！」

進行方向にオアシスを見つけ、一度ここで休憩することになった。太一君とアグモンは、さっきのチョコモンの注意に従って、無理矢理ご飯を食べさせ続けるということとはしてないみたい。でも…

「アグモン、次に戦うことになったら俺達だけで戦うぞー！」

「ええ!？」

「ちよつと！何言ってるのよー！」

「そうすれば、グレイモンがさらに進化出来るかもしれない。だろ？」

何だか、焦ってるように見える。エテモンの力がどれ程のものなのか良く分からないけど…でも、あのデビモンより上ってことは間違いない。デビモン自身がそう言っていたんだから。ということは、今の私達が束になっても勝てないってこと…焦るのも、当然かもしれない。

「トコモン、行くぞー！」

「うんー！」

こっちはこっちで、トコモンとチョコモンがご飯を食べ終わった後、戦闘訓練をし始めた。まあ、やっていることはランニングみたいなものなんだけど…トコモンはともかく、チョコモンは跳ねてるよね、あれ。

「何してるんだ？」

「今ね、トコモン達が早く進化出来るようにって頑張ってるんだ！」

「チョコモンが言い出しっぺなんだけど…意味あるのかはちよつと分からないけどね」

チョコモン曰く、デジモンも人間と同じでトレーニングで強くなったりするらしい。皆は日々、旅をしながらいぎという時戦ったりもしてるから、実戦で強くなってるけど、幼年期の二人にはそれも難しい。だから、チョコモン考案のトレーニングをしてる。

「ダブルボブル！」

「プウッ！」

今度は、木に技を当てる特訓。他にも、体当たりだったり、互いを狙って回避兼狙いを定める特訓とか、色々やってた。途中、何かあみだくじ？みたいなものも地面に書いたりしてたけど…チョコモンはすぐに断念してた。一体何だったんだろ？

「お、おい皆！僕のタグが…」

「何かに反応してる！」

「近くに、紋章があるんですよ！」

「本当か!？」

丈君の言葉を聞いて、太一君が単眼鏡で周囲を見てみる。すると、何かを見つけたみたい。

「あ、何かあるぞ…建物みたいだ。大きいぞ」

「きつと、そこに紋章があるんだ…うわあーっ！」

「…？何でこんな所にケーブルが？」

丈君が急に転んだ…ゴマモンが、丈君が躓いたと思われる黒いケーブルを見つけたみたいだけど…ここ、砂漠だよね？しかも、このケーブルって凄く、長い…？どこまで続いているんだろ、これ…？

「それじゃ、行くぞーっ！」

「あ…丈君、大丈夫？」

「あ、ああ…それより、皆を追わないと！急ごう！」

ケーブルのことが少し気になったけど…今は先に行ってしまった皆のことを追いかけることにした。

「結衣ーっ」

「あ、チョコモンお帰り」

足下にやって来たチョコモンを拾って、皆と無事に合流。進んでいった先に見えてきたのは、ローマのコロッセオみたいな大きな建造物だった。

☆☆☆

今回、暗黒進化を止められるかどうか、正直分からん。

まだ結衣にも何にも伝えてないからっていうのもあるが、何より太一の暴走もやや始めている。正直、エテモンの姿も見えないからそこまで危機感を持ってないはず、と思っていたんだが、太一は結局周りが見えなくなっているように感じた。エテモンの脅威はそこまで感じていないが、デビモンの強さは身に沁みているからな…気持ちに分かるんだが、出来れば今回は暗黒進化させてしまう前にケリをつけたいっていうのが本音だ。

スカルグレイモンにトラウマを覚えてしまう奴もいる…タケルとかな。この暗黒進化の件は、後々太一の教訓としても残るかもしれないが…元々太一は、無鉄砲ってわけじゃない。勇気と無謀は違うというのは、太一ならちゃんど理解出来ると思う。さらに、スカルグレイモンは皆の不安の要素にもなってしまう。確か、ミミとかも今回の件から最初は紋章を手に入れることにさえ悲観的だったはずだ。

というか、個人的にもスカルグレイモンは怖かった。アグモンの痛々しい姿なんか見たくねえ。ただ、太一が自分から敵に突っ込んでいったら、ほぼ確実に暗黒化するだろうな…よし、決めた。そんな時は多少強引にでも止めるか。

というわけで今回俺がやることは、全部で三つだ。一つ、丈の紋章を原作より早く見つけること。二つ、エテモンがあこの画面に現れた時に、ゴールに逃げ込まないように全員を誘導すること。三つ、敵のグレイモンを太一達にだけ戦わせないことだ。

「手がかりはこのタグだけだし、紋章は僕とゴマモンで探すよ！皆は休んでて！」

まずは丈の紋章を見つめる。確か、丈の紋章はサッカーゴールの真下にある岩だったはずだ。えーと、あのモニターから逃げたんだから…あつちのゴールか。

「チョコモン？」

「俺達も手伝おうぜ、結衣」

「うん」

「俺も探す！」

丈とゴマモンの後を、俺と結衣、太一とアグモンがついていく。今回は食べ過ぎで動けないという状況は何とか回避出来たからな、アグモンも当然太一と一緒に動ける。つてなると、アグモンだけが戦うつて状況になるのも回避出来るはずだ。

「丈君、どう？」

「うーん…こつち？いや、こつちかな？」

「太一の紋章は洞窟の壁だった。丈のも壁とか床の一部だったりするんじゃないか？」

「成る程…確かに」

「よーし、じゃあ手分けしてそれっぽいのを探そうぜ！」

「ああ」

…つて、あれ？な、何で全員いるんだ？確か、サッカーボールを見つけて遊ぶはずじゃ…

「あ、サッカーボール！」

「これは…普通のサッカーボールだな」

「うん、おかしい所もなさそう」

そ、空がサッカーボールに興味を示してもサッカーしようつて提案をしないだど…!?な、何でだ？ここで原作乖離する原因が分からん！

「ねえ、お兄ちゃん！皆でサッカーしたら楽しそうだね！」

「そうだな…でも、今は丈の紋章を探すのが先だ。結衣さん達も探してるんだし、終わったらにしよう」

「うん！」

あ、もしかして最年長の結衣が探すの手伝ってるから、遊んでるのも申し訳ないのかな？いや、でもコイツらってそんな先輩を見習う、みたいな考えあったか…？個性の塊ぞろいだし、そんな感じ一切無かったような気がするが。

「サッカーってなんや？」

「あのボールを使ったスポーツのことですよ」

「皆、丈君が言ったように手がかり少ないし、休んでも良いんだよ？」

「皆で探した方が早く見つかりますよ」

「そうそう！」

まあ、少し取り乱したが…確かに全員で探せば、誰かしら丈の紋章を見つけてくれるかもしれない。俺も参加して、結衣に手伝って貰いやすくなる。

それに、ばらけて探していればエテモンが現れた時にゴールに閉じ込められることもない。何か他の仕掛けがあったりするかもしれないが…そっちの注意もしておいた方が良いか？

「結衣、俺達はこっちを探すぞ」

「あ、待って」

飛び跳ねてゴールの所まで向かい、結衣は俺の後ろをついて来る。よし、他の奴らも皆上手く散らばったみたいだ。今の内に、結衣にも簡単に計画を話した方が良いな。勝手に行動したらまた色々と言われそうだし。

「結衣、ちょっと耳を貸してくれ」

「…どうしたの？」

「この後、エテモンがあモニターに映される。その後、奴の手下のグレイモンが襲ってくるから、全員で協力して倒すぞ」

「分かった…太一君、無茶しないと良いんだけど」

「太一に無茶をさせないのが最優先だ。もし太一が暴走した場合、アグモンが間違った進化をすることになるんだ…」

「間違った、進化……うん、分かった。頑張るね」

「よし。あ、それと丈の紋章はこの真下のはずだ」

「……?」

よし、とりあえず疑問は置いてくれたか。後でちゃんと説明しなきゃな……あー、毎回こんなこと考えてるな、俺。出来ればちゃんと結衣に一から全部話してやりたいな……どこか、タイミングを見てじっくり話さない。タケルが未来で書く小説、あれが欲しくなるな……

そんなことは置いて、結衣がゴールの真下の岩盤をひっくり返そうとしたが、持ち上がらない。まあ、どう見ても重そうだもんない……

「結衣先輩、どうしたんですか?」

「あ、空ちゃん。ここ、凹みがあるから持ち上げられるんじゃないかと思ってる……」

「それなら手伝いますよ」

空とヤマトが来て、結衣と三人がかりで力を入れて持ち上げる。今更だけど、ヤマトって結衣には敬語使ってるんだな……ちよつと新鮮だ。丈は何で敬語を使われてないんだろうか……威厳が無いのか、そうか。

「あ、これ……!」

「丈!こっちにきてくれ!」

「どうしたんだい?」

「これ、紋章じゃないかな?」

地面の岩盤をひっくり返すと、そこには不思議な模様が描かれている。近くの岩盤も全員でひっくり返していくと、その模様が明らかになっていく。

「タグが反応してる。これがもし、紋章だとしたら……」

丈がその模様の上にタグを置くと、タグと同じように紋章が光り始めた。眩しいくらいに強くなった後、光が小さくなっていき……タグの中に黒い紋章があった。

「うわっ!?!」

「きゃあっ!?!」

丈がタグを手に持った瞬間に、下の足場が崩れた。紋章のあの岩が、この脆くなつた足場に覆い被さっていたから今まで崩れてなかつたんだな…というか、これ人工的に作られた穴じゃないか?真下に、かなり深くまで正方形にくり抜いたような感じだな。あ、横穴が上にある。

「大丈夫か!?!」

「お兄ちゃん!」

「あ、ああ…大丈夫だ!」

「ビツクリした…」

「やったぞ、僕の紋章だ!」

落ちたのはヤマトと空、丈と結衣の四人とそのパートナー達か。他の奴らは、さつきまでいた場所にいるな。あ、これ…ヤバくないか?

『オゝホツホツホツホ!!アチキつてグレイトゝ?』

「何だ!?!」

パラパラッパラゝ♪という軽快な音の直後、オネエみたいな声がコロッセオ中に響き渡った。予感的中じゃねえか!この上に太一達がいるってことは、ゴールに捕まっちゃう…!

「おい、何だお前!」

『始めましてね、選ばれし子供達♪アチキはエテモン、ってもう知っているかしら?』

「こいつがエテモン!?!」

「あれがデビモンより強いデジモンなの?」

「変なサングラスしてるし…」

『本当はサーバ大陸に來た日の内に倒しちゃうつもりだったんだけどねえ、生憎、今は遠いところにいるのよ。ほら、スターって忙しい商売だからあ』

「…おい、急いで上に戻るぞ!」

「ああ」

落ちた奴らで協力し合って、何とか横穴に辿り着き進んでいく。その先はコロッセオの観客席の所で、外に出て見たら太一達はゴールの所より少し前にいた。良かった、警戒しようとして数歩前に出ていたんだな。おかげで誰も閉じ込められていないし、エテモンも罨を作動させていないようだ。

『きつと驚くわよ〜！イエイイエイイ〜！！』

「今のは…!?!」

「お、おい、あれ〜！」

丈が指差すのは、太一達がいる方とは反対側のゴールの方。ゴールの後ろの観客席から現れたのは、黒い首輪をしているグレイモンだった。よく見ると、あのグレイモンは太一のグレイモンとは違って、頭の甲殻に黒い斑点模様が付いている。

「あれは…！」

「グレイモン!?!」

『驚いてくれたようね〜！ん〜、なんて心憎いアチキの演出〜！さあ、始めるわよ！イツツシヨータイム!!』

敵のグレイモンが観客席を破壊し、ゴールを踏み潰して雄叫びを上げた。それに対抗して太一とアグモンが一步前へ出る。アイツら…一騎打ちするつもりだな。

「行くぞ、アグモン〜！」

「おう〜アグモン、進化——っ!!グレイモン!!」

グレイモンは、敵のグレイモンに真っ直ぐに突っ込んでいく。そのまま取っ組み合いになり、グレイモンが頭突きをするが、相手もグレイモンだ。同じ固さを持つ甲殻を持っている為、弾かれて怯んでしまふ。その隙を突いた敵のグレイモンが尻尾を使ってグレイモンの横っ腹を攻撃する。

さらに追撃として、懐に入って強烈な頭突きを顎に喰らうグレイモン。その勢いのまま太一達がいる方へと吹っ飛ばされ、太一達は何とか横に跳んで回避したが…グレイモンは、ゴールを背中潰した。その際に、ゴールネットに流れていた高圧電流を浴びてしまふ。あのト

ラップ、作動させていないわけじゃなかったのか！

「進化するんだ、グレイモン！」

「ガブモン！」

「来るなっ！グレイモンを進化させるチャンスなんだ！頼むから邪魔しないでくれ！」

「アイツ……！」

この勝負、一対一ならこつちの方が不利だ。グレイモンが普段通りだとしても、敵のグレイモンの方が経験は上だ。グレイモンとして生きた月日が長い。戦いも、ファイル島のデジモンより陸地もデジモンの総数も多いサーバ大陸の方が多いだろう。俺達は、成熟期に進化出来るようになってからまだ一ヶ月も経っていないんだ。

今も、こつちの攻撃は躲され、敵の攻撃は次々と当たっている。たまにこつちの攻撃も当たるが、先にダウンするのは間違いない。太一のグレイモンの方だ。このまま見てるわけにはいかない。

「…皆、行こう。これ以上、見てられない」

「でも結衣先輩は……」

「こつちの心配は良い。お前らはグレイモンの加勢に行ってやってくれ！」

「…行こう。ガブモン、頼む！」

「ピヨモン！」

「ゴマモン！」

「ガブモン、進化——っ!!ガルルモン!!」

「ピヨモン、進化——っ!!バードラモン!!」

「ゴマモン、進化——っ!!イツカクモン!!」

ガルルモン達が加勢に行っている間に、俺達は太一達の方へと回り込む。いざという時は、俺も進化して加勢に——

「…メガフレイム!!」

「…メガフレイム!!」

「何っ!?!」

二体のグレイモンの“メガフレイルム”が、コロッセオの中央でぶつかり合う。結果、大爆発を起こしどちらのグレイモンも吹っ飛ばされる…が、やはり太一のグレイモンの方が大きく吹っ飛ばされていた。敵のグレイモンが数メートル程度なのに、太一のグレイモンは観客席まで飛ばされている。その余波で、ガルルモン達は近づけずにいるようだ。

それにしても、あの敵のグレイモン…あんなに強かったのか。原作だと不調のグレイモンとの戦いだったからそこまで強く感じなかったが…本当に戦い慣れている。

「グレイモン!!」

「太一!!」

「待て、危険だ!!」

太一がついに、グレイモンの傍まで走り出す。このままだと、太一は自らを危険に晒すだろう。

「…：…：チョコモン」

「…：結衣？」

その時、俺が見たのは…結衣の、怒りの表情。そして、今まで聞いたことがないくらいに冷たい声だった。背筋が凍り付くというのは、こういう感覚なのかと思うほどに。

「太一君を、止めて」

俺のことは一切見ていない。見ているのは、グレイモン達の戦いの最中に飛び込もうとしている太一のみ。

…ダメだ。結衣に、この感情を露わにさせてはいけない。そう直感した瞬間、俺は結衣の腕の中から跳びだした。

「チョコモン、進化——っ!! ロップモン!!」

ロップモンに進化した俺は、太一の方へと一直線に走る。敵のグレイモンは今、立ち直ったガルルモン達が抑えている。流石に三対一ともなれば確実に倒せるだろう。

俺はその戦いに身を投じようとしている太一の進行方向に狙いを定める。当たらないようにしないとな。

「ブレイジングアイス！」

久しぶりに放った冷氣弾。それが一直線に太一の目の前の地面に突き刺さる。それに驚いた太一は、足を止めて俺の方を向いた。

「な、何するんだ！」

「お前こそ、何をするつもりだ」

「何って…戦いに行くんだよ！」

「パートナーも無しにか？」

「何言って…グレイモン？」

太一のグレイモンはまだ、起き上がれていない。起き上がろうとしているが、連続でダメージを受けたせいか痛みを耐えている。

「肝心のグレイモンがあのだザマだ。お前のせいだな」

「何だって…？」

「事実だ。前にも言ったはずだぞ、太一。俺達デジモンはお前たち人間のパートナー次第で力が発揮できるか決まるって…グレイモンは、力を発揮することも出来ずに、同じグレイモンに負けたんだ」

「太一君」

後ろから結衣が歩いてやって来た。太一はそれを見て、顔を俯かせせる。結衣が怒っているのが分かったからだろう…太一の目の前までやって来た結衣は、太一の左頬を右手で――

「っ…！」

「昼間に、言ったよ。自分が危険な目に遭うのはダメだって」

「…けど、結衣さん！早く、グレイモンを進化させなきゃ…」

「焦る気持ちは分かる。でも、それとこれとは別。私達が危険な目に遭うのが進化に繋がるなんて、私は思っていない。私達が危険な目に遭った時にデジモン達が進化してくれるのは、私達を助けたって気持ちが強くなったから…私は、そう思ってる」

「俺達を、助ける…?」

「グレイモンは、これまでいつも太一君を助けたいと思ってた。なのに…こんな方法、間違ってる。グレイモンを、良く見て…:…:貴方は、何も感じない…?」

「たい、ち…」

「グレイ、モン…:…」

ボロボロになったグレイモンを見て、太一は声を震わせていた。ようやく、暴走も終わったか。自分がグレイモンに酷いことをしたと、自覚してくれたようだ。

と、その時、太一を見ていたグレイモンがゆっくりと起き上がった。

「グレイモン!？」

「太一…僕は、まだ、戦える!」

「グレイモン…:…」

「どうする、結衣」

「…うん。太一君、もう大丈夫だよね?」

「…ああ!!」

「じゃあ、行こう!」

敵のグレイモンに向き直った俺達。ガルルモンがスピードで攪乱し、バードラモンとイツカクモンが空からの攻撃で、敵のグレイモンが回避と防御を繰り返すうちにどんどん追い込まれていく。その先は、丁度エテモンが映るモニターの方だった。

そういえば…あのモニターをぶち壊せば、エテモンのネットワークを妨害出来るはずだったな。

「…行くぞ、グレイモン!!」

「おう!!」

太一の声に反応して、グレイモンが敵へと真っ直ぐに突っ込んでいく。先程は弾かれてしまったが、グレイモンはさつき敵がやったように顎に頭突きして怯ませた。

「太一!」

「悪い、皆!もう大丈夫だ!力を貸してくれ!!」

「太一…ええ!」

「一斉攻撃だ!!」

「グレイモン、上に飛ばせ!!」

グレイモンがさらに体勢を低くして、頭に敵のグレイモンを乗せて、そのまま上に吹っ飛ばす。敵のグレイモンがエテモンの顔と重なった所で、太一が叫んだ。

「今だ!!」

「フオックスファイアー!!」

「ハーブーンバルカン!!」

「メテオウイング!!」

「メガフレーム!!」

四体の攻撃が重なり、敵のグレイモンは爆散した。勿論、エテモンのモニターも巻き込んだ大爆発を起こして。

コロッセオを後にして、俺達はまた旅路に戻った。

今回は、何とかスカルグレイモンに暗黒進化させずに済んだ。これで他の子供達も、完全体への進化に対する不安も少なくなると思う。何より、太一とアグモンが間違わずに済んで本当に良かったと思う。

「皆、ごめんな…俺、焦ってた。早くもう一段進化しないと…でも俺、ちゃんと周りが見えてなかったんだ。一人で背負い込んだ気になって…アグモンのことも、見えなくなってた」

「太一…」

「結衣さんも、ごめん…あれで、目が覚めたよ」

「私こそ、偉そうなこと言っ…太一君、ほっぺ痛くない? 叩いちやっごめんね」

「良いって、あれくらいの方が目も覚めるってもんさ!」

結衣が、あれだけ怒るとは思わなかったけど…そこは、今は良い。結衣のことは結構知ったつもりだったけど、まだ知らないことはこれから知っていけば良いんだもん。

それより、あれでエテモンのネットワークにダメージがあったのかだけが不安要素だな…どこかで確かめるべきだな。

「ロップモンに進化出来たんだね！」

「ああ。お前もやろうと思えば進化出来るはずだ」

「楽しみだね、トコモン！」

「うん！」

「…それにしても、結衣さんって怒るとあんなに怖いんですね」

「お前もそう思ったか」

「普段優しいから、尚更怖いわね…」

「今後、出来るだけ彼女の逆鱗に触れないようにしよう」

「…?皆、どうしたの?」

「何でもないです!」

「??ロップモン、聞こえたでしょ?何て言ってたの?」

「いや?空耳じゃないか?」

そんな他愛ない会話をしながら、俺達は歩みを進めたのだった。

第十六話 幻船長コカトリモン!

コロッセオでエテモンの手下のグレイモンと遭遇し、何とかグレイモンの暗黒進化を防ぐことに成功し何とか事なきを得た俺たち。そこまでは良かったのだが、ほぼ手掛かりが無い状態でどこに進んだらいいのかも分からず、とりあえず砂漠地帯を進み続けていた。

「空…大丈夫?」

「何とかね…」

「光子郎はん…へこたれたらあかん」

「あ、ああ……」

「ヤマト…」

「俺のことより、お前こそその毛皮じゃ暑いだろ?」

「ああ、俺なら大丈夫…」

皆かなり参ってるな…以前、ファイル島のサバンナ地帯でやった俺の冷氣弾で作った保冷剤作戦もやってるんだが、ここはあそこよりも暑いせいかすぐ溶ける。俺自身、毛皮のせいでもかなり暑い…やっぱ、ロップモンって暑い場所の方が苦手なんだな……

「ロップモン、大丈夫?」

「お、おう…お前こそ、大丈夫か?」

「今のところは…でも、早く休める場所を探さなきゃ」

「だなあ…」

皆で励まし合いながら進んでいるが…例の巨大サボテンはまだか…あれ?違うな、一回巨大サボテンの蜃気楼を見てからコカトリモンの船か。暑すぎて一瞬考えが回らなかった…ここらでまた氷を作っとくか。

「皆、また氷作るぞ」

「助かる〜!」

「頼むよ、ロップモン!」

「大丈夫なの?ロップモンの体力は…」

「まだ大丈夫だ。ブレイジング——」

「あーっ!!」

「…つとと…！な、なんだ？」

「あれ!!」

ミミが突然叫ぶから、技出す前に態勢を崩しちまったじゃねえか。ミミは前を指差して固まってるし…ああ、蜃気楼の巨大サボテンを見つけたのか。蜃気楼って、原理をよく理解してないんだが…全員同じ蜃気楼を見るってあり得るんだろうか？幻なんだろう、あれ。

「よーし、皆！あのサボテンの陰に入るんだ！」

「私もあのくらい大きなサボテンになりたーい！」

太一がそう言ったのを皮切りに、全員がサボテンの下に走っていく。俺は走ってないが…俺は。結衣に捕まったから、俺たちもちやんと太一達について行ってる。

「…！皆、ストップ！」

「え？」

「あ、あれ…？」

結衣が静止をかけたのと、太一が異変に気付いて足を止めたのはほぼ同時。俺は結衣の頭の上にジャンプして着地し、サボテンに影が無いのが見えた。

〈日陰がなーい!〉

「蜃気楼、だった…」

全員がその場で座り込んでしまう。やつと休めると思ってた体力消費してでも向かったのに、これじゃあな…俺ですら分かってて落胆しちまってる。あー、水を飲んでえ…

『選ばれし子供たちよ…選ばれし子供たちよ』

と、その時だった。急にエコーがかかったような声が聞こえた。この声は…

〈ゲンナイ!?!〉

ファイル島でデビモンとの戦いの後に出てきた、あのUFOみたいな謎の通信装置がどこからか現れて、ホログラムのゲンナイさんが出てきた。この装置、今何もない所から出てこなかったか…？これも蜃気楼の一種か？地面から出てくるような音もしなかったし…

「やいジジイ！お前の言う通りタグに紋章をはめ込んで敵と戦ったけど、何も起こらなかつたぞ！」

「このタグと紋章で、本当にイツカクモン以上に進化なんてできるのか!？」

「そもそも、紋章つてもう少し効率的な探し方ないんですか？」

『落ち着け、選ばれし子供たち：望むと望まざるとに関わらずタグと紋章はいずれお前たちのものとなる。タグと紋章はお互いに惹かれ合う性質を持つておるのじゃ』

「本当なのか…？」

…原作とは違う内容の責め方してるな、太一達。まあスカルグレイモンになってないから、紋章があつても進化出来ないのでは？つていう疑問が出てくるのは当たり前か。つーか結衣もちやつかり質問してるし。確かに、タグと紋章が共鳴し合うにはそれなりに近くないとダメみたいだからなあ…闇雲に探すのは骨が折れるつてもんだ。実際は…まあ、次々と見つけていくから心配いらないんだが…結衣の紋章はどこにあるか分からんからな、ゲンナイさんが何か知ってる可能性もあると思う。

『グレイモンが進化しなかったのは、その時ではなかったからじゃ。たとえタグと紋章を手に入れても正しい育て方をしないと』

「正しい育て方？」

『そう、正しい育て方をしないと正しい進化もしない!』

「正しい育て方ってなんだよ？」

『選ばれし子供たち、正しい…て方を考える…じゃ…それが…』

「ゲンナイ…あのジジイ、いつも訳の分からないことばっかり言いやがって!」

また通信妨害か…今で言うと、ナノモンの仕業か？それとも、ヴァンデモンの手下でナノモンみたいな機械に強い敵つていたつけ…？まあ、ゲンナイさんの通信装置つてボロそうだしな、妨害が無くてもあまり期待できねえし。多分。

「正しい育て方だつて」

「俺たち、正しい育て方されてるのかな？」

「ガブモン、ちよつと待て！」

「僕、自信無い……」

「こちら光子郎はん、何ゆうてまんねん」

「オイラは？」

「僕も全く、これっぽっちも自信無い。自信ゼロパーセント」

「おいおい……」

正しい育て方か……なんかなあ。後々を知ってるからかもしれないが、デジモンって育てるって感じあんましないんだよなあ。ゲームとかじゃ育成がメインと言っても過言じゃないが、アニメの場合デジモンと一緒に成長していくから、育成って言葉にしっくり来ない。というか……子供たちがデジモンたちをちゃんと育成しようって考えたこと、無いんじゃないか……？

正しい育て方っていうのも、ゲンナイさんのでまかせだしな。後にデジモンに正しい育て方なんて存在しないって言ってたし。進化に良い悪いは無い、ってな。悪そうな奴がいいデジモンだったり、良いデジモンっぽい奴が悪い奴だったりもする。そこは人間も同じだ。正義とか悪とかはつきり分けれる話じゃないんだ。

「……ん。皆、気をつけろー！こっちに何か来てるぞ……かなりデカイ」

「何かって、なんだよ？」

「敵なのか？」

「まさかエテモンが!？」

「分からない……足音じゃないんだが、かなり大きな物がこっちに向かってきてる」

「大きいって、どれくらい？」

「……多分、もう見えるんじゃないか？」

俺が見た方向に全員が振り向く。まだ少し距離がある……はずなんだが、途轍もなく巨大な船が砂漠の中を突き進み、こっちに向かってきてるのが見える……あれ、これヤバくね？

「軍艦だ!？」

「いいえ、豪華客船よ!」

「どうして砂漠の中に豪華客船が!？」

「…あれって、本物…?？」

「言ってる場合か！全員走れ!!」

プオオーーツと汽笛(?)を鳴らしながら、スピードを落とすことなくこつちに向かってくる。このままじゃ轢かれることに気づき、全員で船の進行方向に重ならないように大急ぎで走る。結衣の頭にしがみつきながら後ろを見ると、さっきまで俺たちがいた場所を通過してしばらくして、船が急ブレーキをかけて停止した…いや、ブレーキ遅っ！俺たちがいるの、見えてたよな？

「ハア、ハア…」

「危なかった…」

「あ、あれ！」

タケルが指差したのは、停止した豪華客船の甲板から顔を覗かせた、船員っぽい服を着たヌメモンだった。そういえば、なんでこの船のヌメモン達はあの服着てるんだ？デジモンでああいう服系のアクセサリーつけてる奴、こいつくらいじゃないか？

「ヌメモン！」

「なんでヌメモンが…お日様の下って苦手じゃなかった？」

「さあ…それは俺にも分からんが、渡りに船ってこのことじゃねえか？太一、頼んでみてくれよ」

「あ、ああ…ヌメモン！船で休ませてくれないかー！」

「ヌメエ…」

露骨に嫌そうな顔しやがった…アイツ、俺達を轢こうとしておいてなんだあの態度。流石に腹が立つ…後でアイツら襲ってきた時に出るだけ痛めつけてやろうか。

「ヌメモンのことなら私に任せて！ヌメモン！アタシ達、疲れてるの…この豪華船で、少し休ませて？お・ね・が・い！」

「ヌ、ヌメエ〜！」

ミミが前に出て、ヌメモンにぶりっ子くいな喋り方したら、船から階段が伸びてきた…良いのか、ヌメモンよ。こんなわがまま姫にそんな簡単に…ま、良いか。楽出来るなら楽させて貰おう。

☆☆☆

豪華客船で休ませてもらうことになった私達は、内装の豪華さに驚かされた。一流ホテルさながらの設備。あ、ビリヤード台とかもある…やったことないけど、他にも色々あるみたい。

太一君と丈君は、ゴマモンの提案で甲板にあるプールに。ヤマト君とタケル君、光子郎君は食堂に行くって言った。で、私は…

「結衣先輩！早く行きましょ！」

「早く早く！」

「二人とも、そんなに引つ張らなくても」

空ちゃんともミミちゃんに連れられて、個室についてるシャワールームでお風呂に入ることになった。久しぶりのお風呂だからか、二人ともはしゃいでる。あ、そうだ。こういう時っていつも…よし。

「うおっ!?!」

「どうしたの、ロップモン？」

「結衣先輩、ロップモン連れてくんですか？」

「うん。前は一緒に入れなかったし」

「でも…」

この二人、前にデビモンの館でお風呂入った時…まあ、あれも幻覚だったから実際は入ってないんだけど、その時にロップモンだけ男湯で、私がロップモンも一緒に入りたいって言ったら渋ってたんだよね。でも、やっぱり私だけパートナーとお風呂に入れてないってちよつと寂しいから、今回こそは一緒に入るんだ。

「お、おい。空達が嫌がつてるだろ、離せて…」

「そんなこと言って、ロップモンが恥ずかしいだけじゃないの？」

「何言ってるんだ…この際、それでも良いや。ほら、俺は外で待ってるから——」

「ロップモン、生意気な弟だと思ってたら可愛く見えない？」

「あ、確かに！口調もそんな感じだし！」

「私、一人っ子だからそういうの分からないですけど…そう考えると可愛く見えますね」

「な、なに!?おい、誰が弟だ!」

「それに、ロップモンもちゃんとお風呂入った方が良いよ。前は幻だったんだし」

空ちやんとミミちゃんの同意も得られたことだし、ピヨモンとパールモンにロップモンを捕まえてもらって、六人でお風呂に入った。デジモンって、数えるときの単位って人でいいのかな?良いよね、人みたいに個性あるし。

服を脱いでいる間に、ロップモンが逃げようとしたからしつかりとホールドしておく。それでも逃げようとするけど、私が怪我しないようにしてるから力出し切れてないみたい。そのまま浴場へ。

「はい、目閉じて」

「俺はガキじゃ…っ!」

「はいはい、ちゃんと洗おうね」

「どこからどう見ても…」

「姉弟って感じですよね!」

「やっぱり砂だらけだね…:はい、終わり」

泡を流した瞬間、ロップモンは湯舟のお湯にダイブ。ダイブする時に耳を持つたのが可愛さポイント高い。本人気づいてないと思うけど。すぐにお湯から浮かんできて、大の字でプカプカと浮いてる。さらに高得点。恥ずかしさはもうなくなったのかな?

「はあく…:良い湯だ〜」

「良いなあ…:パールモン、早く洗っちゃお!」

それぞれお風呂を満喫してる。次いっお風呂に入れるか分からないもんね…:ただでさえこの砂漠地帯は暑いし、靴の中砂だらけになっちゃうし…:早く砂漠地帯から抜けてほしいな。まさか、サーバ大陸全部砂漠、とか言わないよね…?:

「…:二人とも、髪長くて羨ましい」

「空ちやんだって、すぐに私達くらい長さにはなると思うよ?」

「そうですねよ!それに空さんの髪だってキレイだもん!」

「あー…:でも、サツカーする時邪魔なんですよね…:ヒラヒラ動くの気になっちゃって」

「それはわかるかも。でも、だったらお団子とかにしちやえば?」
「それはちよつと…」

そんな他愛ない話をしてると、いつの間にかもう洗い終わっちゃった。最後に湯舟に入ると、ついため息が口からこぼれちゃう。

「気持ちいい〜!」

「ホントね〜」

「私たちも!」

「ほら、ロップモンもこっち」

「あー…」

…ずつと入ってるけど、もしかしてのぼせてる? ロップモン、暑い
の苦手みたいだから…でもどうなんだろう? 顔色じゃ分からないし…

「ロップモン、大丈夫?」

「おー、大丈夫ー…」

「あんなに嫌がってたのに、大分満喫してるね」

「そりゃーなー………ん?」

いきなりロップモンが起き上がって、湯舟から出た。そして耳をピクピクとしてる…何か、近づいてる?

「…まずいな」

「どうしたの?」

「敵だ。この船の船長のコカトリモンが何か企んでやがる」

「コカトリモンですって!」

「知ってるの? ピヨモン」

「鳥なのに飛べないのが悩みの種のデジモンよ」

「そいつが言うには…エテモンに連絡をとろうとしたけどダメだったらしい。この前のコロッセオで通信機に異常が出てるみたいだな」

「ロップモン、それ全部聞こえたの?」

「ああ。コカトリモンがこの船のヌメモン達に連絡する為のパイプがいくつもあるみたいだ。それが響いて所々聞こえたって感じた。全部聞こえたわけじゃないが…ほら、その窓からならヌメモン達は何か言ってるだろ?」

湯舟の上の方にあつた換気用の窓かな? そこを開けると、ピヨモン

が外に意識を集中させてみる。

「…ホント、何か騒いでるわ」

「それじゃ、早く逃げないと!」

とりあえず湯舟から出た私たちは、ひとまずバスタオルを体に巻いて、シャワールームの扉を少しだけ開けて確かめてみる。すると、もうヌメモンが部屋の中にいた。

「…駄目、もうヌメモンがいる」

「悪いな、俺がちゃんと警戒しておくべきだった。他のヌメモン達も向かってきてるぞ」

「ど、どうするの?これじゃ着替えてる時間が…」

「他の出口は…あ」

空ちゃんが何か思い浮かんだみたいで、シャワールームにある窓によじ登ろうとしている…って、え?

「そ、空ちゃん!私達、今バスタオルしか…」

「ヌメエ〜」

「ヌメモン達が…!」

「結衣先輩、覚悟を決めて下さい!」

「せめて下着くらい…」

「パルモン、デジヴァイスとって!」

「ええ!『ポイズンアイビー』!」

パルモンが手の触手を伸ばして、私達の荷物からデジヴァイスだけを取る。ヌメモン達は…気づいてないみたい。

「さ、今のうちに!」

「うう…こんな格好で出るなんて」

「結衣さん、急いで!」

「なんで二人とも平気そうなの…?」

二人の度胸がすごい…でも、確かにつべこべ言ってる場合じゃない!最年長の私がいっかつかりしないと!

そう覚悟を決めて、シャワールームの窓から廊下に脱出する。幸い全員が脱出するまでヌメモン達に見つかることはなかったけど、どこに行こう…?

「これからどうするの?」

「コカトリモンを倒すんだ! そうすればヌメモン達は逃げ出すはずだ!」

「じゃあ、船長室に向かおう…出来るだけ一目を避けて」

「分かりました!」

廊下を裸足で走り、甲板の上の方にあるはずの船長室に向かう。その途中で、鷄みたいな姿をしたデジモンが立ちふさがるように現れた。

「コカーツ! 見つけたぎゃ!」

「コカトリモン!」

「こいつが、エテモンの仲間!?!」

「あ、太一さんと丈先輩の紋章!」

「他の選ばれし子供たちは捕みゃーて日干しにしたぎゃ。もう少ししたら選ばれし子供たちの干物が出来るがや」

「ひどい…!」

「デジモン達は?」

「ワシの力で石にしたがや。漬物石くらいには使えるぎゃ?」

「„ブレイジングアイス“!」

「コカーツ!?!いきなり何するぎゃ!」

ロップモンがコカトリモンに向けていきなり冷氣弾を撃ったけど、コカトリモンは後ろにジャンプして躲した。

「うるせえ! 俺達を轢こうとしたくせに、白々しい! そもそも敵なんだから攻撃するのは当たり前だろうが!」

「え…あれって、私達を狙ってたの?」

確かに、ブレーキかけるの遅いような気がしたけど…でも、コカトリモンが船長なら狙っててもおかしくない。

「許せない! „マジカルファイアー“!」

「„ポイズンアイビー“!」

「„プチツイスター“!」

「コカーツ!」

コカトリモンは皆の攻撃を翼で弾いたり躲したりして対処した。

その後、翼をガッツポーズするみたいにして力を溜めて…これ、何かするつもりじゃ？

「避ける！」

「ッペトラ…ファイアー！」

「きやあつ！」

コカトリモンの目から緑色の光線が出て、ロップモン達は咄嗟に回避。光線が当たった木の床が、その当たった場所だけ石みたいな色になった。そういえば、さつきコカトリモンが自分の力で石にしたって…こういうこと？

「二人とも、甲板に！」

「はい！」

こんな狭い廊下で戦ってたなら、あの光線に当たってしまう可能性が高い。進化しても戦いやすいように、広い場所に行かなくちゃ…！

コカトリモンは私達の後を追いかけてくるけど、今のところ追いつかれる心配はなさそう。さつきの光線攻撃もしてこないし…あの光線はさつきみたいに踏ん張ってからじゃないと出来ないのかもしれない。

何とか甲板に辿り着いた私達は、後ろのコカトリモンに向き直る。これだけ広ければ、思う存分戦えるはず！

「コカーツ！追い詰めたぎや！」

「ピヨモン、進化よ！」

「うん！ピヨモン、進化ーっ！！バードラモン！！」

「と、飛んだぎや!!」

ピヨモンがバードラモンに進化して、空高く飛ぶ。そして翼に力を溜めて、羽ばたいた。

「ッメテオウイング！」

「コカーツ!?!」

翼から放たれた炎を、コカトリモンはさつきみたいに後ろにジャンプして躲すけど、今はかなり慌てるように見える。

「コカトリモン、本当に飛べないのね！」

「パルモン、チャンスよ！」

「うん！パルモン、進化ーっ!!トゲモン!!」

パルモンがトゲモンに進化して、コカトリモンに接近していく。バードラモンとトゲモンがいれば負けれないと思うけど…

「結衣！」

「ロップモン？」

「俺達も、やろう！」

「でも…！」

「大丈夫だ、絶対！もう二度と、あんなことは起きない！だから…頼む！」

…私、まだ怖がつてる。トウルイエモンに進化させて、戦わせることを。またデジタマに戻っちゃうかもって、不安になつてる。初めてデビモンと戦った時なら、こんな風に思わなかったのに。

でも、このままじゃダメだ。このままじゃ、ロップモンにも、皆にも迷惑をかけちゃう。

「ロップモン…約束して。絶対、私のところに無事で帰ってきて」

「結衣…おう！約束する！」

「……うん、じゃあ、行くよ！」

デジヴァイスを強く握りしめて、ロップモンに翳す。するとデジヴァイスが光って、ロップモンが進化を始めた。

「ロップモン、進化ーっ!!トウルイエモン!!」

久しぶりに見た、ロップモンの成長した姿。卯人と呼べる姿になった彼は、握りしめた右拳を見つめている。その仕草で、何となくクワガーモンと戦った時のことを思い出した。初めてロップモンに進化したあの時も、ああやって体の調子確かめた。

「…よしー！」

「メテオウイング！」

「コカツ!? しまったぎゃ！」

「トゲモン、上に飛ばしてくれ！」

「任せて！ チクチクバンバン！」からのく… ココナツツパーンチ
“!!”

「コカッ!?」

トゲモンの連続攻撃、針を飛ばしてからのアッパーでコカトリモンが上に飛んでいく。そのコカトリモンの真下に、トウルイエモンが待機していた。ピヨンピヨンと上へ上へと向かい、コカトリモンが飛んでいく先にあつた船の煙突(?)に先回りしたトウルイエモンは――
「これでも、食らえっ!!」

「コギヤッ!」

渾身の右ストレートがコカトリモンにヒットし、コカトリモンは船の前方の砂の山へと飛んで行った。

「やったーっ！」

「ふう…」

「…まだだ」

「え…?」

聞こえてきたのは、コカトリモン…ではなくてトウルイエモンの声。まだって…あんな一撃入れて、まだ追撃するの? それはいくらなんでも…!

「トウルイエモン、どうするつもり?」

「ん? もちろん、コカトリモンをこのまま轢いてやるんだよ! 俺達を轢こうとした恨み、忘れてないぜ！」

「いくら何でもやりすぎじゃない?」

「何言ってるんだ! 危うく皆船に潰されるところだったんだぞ? それに、今轢いたとしても砂に埋もれて死なないって、多分!」

「多分って…」

「それより、お前ら早く服着てこいよ。ピヨモンとパルモンは他の奴らを助けに行ってくれ。俺は操舵室行ってくる」

「分かったわ！」

いつの間にか退化してたピヨモンとパルモンがトコトコと走っていった。

うーん、やつぱりちよつとやりすぎな気も…？でも、皆が危ない目にあつたのは間違いないし、そう考えると、ちよつと痛い目見て反省してもらった方が良い…のかな？

とにかく、いつまでもこんな格好でいるわけにはいかない。そう思って、空ちゃん達とさっきのシャワールームに向かうことにした。

☆☆☆

コカトリモンを原作とは違う形でやつつけたのには、ちゃんとした理由がある。アイツって簡単にはやられず、またこの豪華客船で襲ってくるからな。アイツを船から追い出して、また襲われないようにする必要がある。またあの砂漠を走り回るのはごめん。

あと、船を何とか動かせればあの砂漠を歩かなくて済むっていう考えもあるが…？つかどつちかというところの方がメインかもしれない。せつかく風呂でさっぱり出来たからな。

風呂：最初は遠慮するつもりだったんだが、結局強引に連れていかれてしまった。今、俺はデジモンなんだから、性別の無いデジモンには性欲なんかないんだが、やつぱり前世云々があるから、罪悪感が半端なかった。でも、まあ…久々の風呂は、気持ちよかつたのは間違いない…リラックスしすぎてコカトリモンの通信、所々聞きそびれたし。水の中だと音が上手く聞こえないことって、あるよな？

「って、何考えてんだ…それより電源はつと」

ロップモンに戻った俺は操舵室で、機械の電源を入れるボタンを探していた。とはいえ、全然分からないっていうのが本音なんだが。船なんか操作したことなんてねえし…あ、これか？

ポチツ。ギギ、ウィーン…

「お、動いた？じゃあ、後はアクセルか」

「ロップモン！」

「お、結衣。太一達も無事だったか」

「ああ。ヌメモン達はもう船から出て行ったぞ」

結衣が捕まっていた太一達も助け、全員でここまでやってきた。結衣が俺の前でしゃがみ、いつものように拾いあげる。

「ロップモン、トウルイエモンに進化出来たんだって？」

「おう！」

「僕も早く進化したいな〜…」

そういえば、トコモンはずっとトコモンのままだな…戦う機会が殆どなかったからか、それともエンジェモンの時の聖なる力を集め過ぎた弊害なのか…でも、原作よりは早くパタモンになれるはずだ。

「そうだ、光子郎。ここの機械動かせねえか？全然進んでくれねえんだ」

「船を動かすんですか？でも…」

「そういう時は、叩けばいいんだよ！」

「止める、太一！それで前にアンドロモンが暴走したんじゃないか！」

「そうなのか？太一！」

そんなこともあったなあ…あの時は太一がアンドロモンを叩こうとして、皆で止めて、そしたらアグモンが…

ガアン！

「つておい！お前何叩いてるんだ!？」

「へ?！」

デジャブが起きた…アグモンが、またしても船の機械を叩いた。コイツ…失敗から学んでないのか？

それが切欠だったのか…機械から変な音がし始めて、船が徐々に進み始めた。

コカアー……………

「今、何か聞こえなかったか?！」

「キノセイジャナイカ?！」

「なんで片言なの…ごめんなさい」

結衣が敵に拝んでる…まあ、死んでないって！きつと、多分、恐らく。原作で船と共に爆散するよりはマシ…なはずだ。きつと生きてるよ、うん。あれはきつと断末魔じゃないんだよ。ただ叫んだだけ。「ねえ、これどこ向かってるの?」

「さあ…?」

「それより、速くなってないか?」

「……これ、止め方分らないんじゃない?」

〈あ……〉

結衣の一言によって、危機的状况に陥ったことに気づく子供たち。だーから機械を叩くなんて良くないんだって言ってるんだよ。

「どうやって止めるんだよ!」

「光子郎君、どう!?!」

「駄目です…制御できなくなってます!」

「あ、あれ!」

「巨大サボテン!?!」

「また、蜃気楼!?!」

「いや、影がある!」

進行方向にあったのは、数時間前に見た蜃気楼と同じような巨大サボテン。しかし今度は影があり、このままだとあのサボテンに激突…このままだと、爆散するの俺達じゃね?

仕方ない…ブレーキが利かないなら、機械をぶっ壊すか船から飛び降りるしかない!

「光子郎、これぶっ壊したら止まると思うか?」

「壊す…いえ、そんなことしたら船を止める手段が無くなります。機械トラブルであちこちに不具合が生じるかも…」

「つてことは、壊すより飛び降りた方が良いな…皆!あのサボテンにぶつかる前に降りるぞ!」

「テントモン、お願いします!」

「ガブモン!」

「ゴマモンも!」

光子郎、ヤマト、丈の三人がデジヴァイスを取り出し、成熟期へと

進化させる。それぞれバラバラに乗せてもらい、豪華客船から飛び降りる。豪華客船はそのまま巨大サボテンに衝突し、巨大サボテンは大きくしなる。そして元に戻る反動で、豪華客船は上空へと吹っ飛ばされた。

「蜃気楼じゃ、なかった…」

「本物の巨大サボテンだ！」

カブテリモンの上で、一緒に乗っていたミミとパルモンが喜んでいゝる。吹っ飛ばされた豪華客船は、船体が真つ二つに折れ曲がってしまゝいゝ、やがてサボテンの上の方で爆発した。

「危なかった…」

「な、何？」

ミミの方を見ると、ミミが首から掛けていたタグが光っていた。タグが勝手に浮かび、さっきの巨大サボテンに向いている。すると巨大サボテンの一番上の部分に蕾が出て、その蕾が花咲いた。その花の中から出てきたのは、雫みたいな形の模様が刻まれた石盤。

「紋章だ！」

紋章がミミのタグと同じ光を放ち、徐々にミミの方へと小さくなりながら近づいていく。タグに収まるサイズになる頃には、タグの真横に紋章があり、すぐにタグの中に填まった。

「これがゲンナイさんが言った、タグと紋章が惹かれ合うってことなんだ…」

「紋章…私、パルモンを正しく育てられるかしら…」

「み、ミミ…」

第十七話

妖精！ピッコロモン

コカトリモンを撃退し、ミミの紋章も回収することが出来た俺たちは、砂漠を進み続けている。あとどれだけ進めばこの砂漠の旅も終わるのか：暑すぎて敵わねえ。エテモンを倒した後も、太一以外はしばらく砂漠を進んでいたからな：この砂漠、どんだけ広いんだよ。

エテモンを倒す、か：もし、エテモンを倒す時にメタルグレイモンに進化しなかったら。もし進化したとして、太一だけ元の世界に戻るあの空間の歪み：あれを防ぐことは出来るのか？そんなことをずっと考えているんだが：答えは出ないままだ。あの現象、イマイチよく分かってないんだよな：あれは、何が原因で現実世界へ通じる道が出来たんだ？エテモンがあの時取り込まれていた、気持ち悪いうねうねした球体のせいなのか？

「紋章は手に入ったけど…」

「使い方が分からないんじゃないあ…」

「正しい育て方って言われてもねえ…」

「でも、まだ全部の紋章が集まったわけじゃないんだ」

「そうですね。まず紋章を全部集めて、それから考えることにしましょうよ」

「おーい、何やってんだよーっ！」

「早く早くーっ！」

いつの間にか足を止めて話し込む子供たち。先頭を歩いていた太一とアグモンだけがかなり先行していた。

俺は太一達が離れた始めた段階で、既に周囲に気を配っていた。出来るだけ耳を澄ませて、奴がどこにいるのかを確かめるように。だが、ハッキリ言うとは良く分かん。確か、砂の中にいるはずなんだが…

「今ねー、デジモンについてのとつても大事な重要会議してるの！すぐ行くからちよつと待ってねーっ！」

「ねーっ！」

タケル：それだと重要ってことしか伝わらないぞ。：っっていうか、そうか。奴に太一達が狙われるなら、太一達を呼び戻せば良いんじゃない

ないか？はぐれていたのを狙われたんだろうし。流石に近くまで来れば聞こえるだろ。

「お前らも話に参加しろーっ！紋章持ってるの、お前もだろーっ！」

「だって、太一」

「仕方ない、戻るか…ってうわあ！」

太一とアグモンがこっちに来ようとした瞬間、二人が地面に沈んだ。やべ、遅かったか!?っーか、マジで音聞こえなかったぞ?どうなってるんだ?

「な、なんだあ!？」

「ロップモン！」

「悪い、聞こえなかった！俺も分からん！」

「太一君、アグモン！」

二人がいた場所、砂の中から現れたのは、真っ赤な体をした巨大な昆虫型デジモン。そう、俺たちが最初に戦った、クワガーモンだ。奴が砂の中から出てきて、奴のハサミには太一とアグモンがしがみついている。

「うわあーっ!？」

二人はクワガーモンが顎を大きく振ったことによって、太一は明後日の方向に、アグモンはクワガーモンの目の前の地面に突き刺さった。まあ地面は砂だから、二人とも埋まってるだけで怪我はないはずだが…あ、アグモンが深く突き刺さったのか、下半身だけ砂から出してジタバタしてる。

「キシャアアッ!!」

「く、クワガーモンですー！」

「結衣、行くぞー！」

「うん…！」

俺と結衣が一番先頭にいるし、一番手っ取り早いのは俺が進化してクワガーモンを倒すことだ。そう思ったんだが…待っていても進化しない。結衣の方を見ると、手に持っていたデジヴァイスが光っていなかった。いや、よく見たら光っていないわけじゃなく、弱い。小さ

な光だった。

「…結衣？」

「結衣君、どうしたんだ!？」

「あ、あれ…?ちよ、ちよっと待って」

「『ベビーフレイム』!…うわっ!」

体制を立て直したアグモンが、クワガーモンに攻撃する。しかし、クワガーモンは何食わぬ顔ですぐにハサミで反撃してきた。アグモンは尻餅をついてしまったが、結果的に回避することが出来た。

「こ、こいつ…ファイル島の奴より全然強いや!」

「アグモン!進化だ!」

「あ…ロップモン!」

「よし、行くぞ!」

太一が叫んだのと、結衣のデジヴァイスが光を強くしたのはほとんど同じタイミングだった。何だったんだ?いや、今は敵だな。

「アグモン、進化——っ!!グレイモン!!」

「ロップモン、進化——っ!!トウライエモン!!」

スカルグレイモンへの進化が無かったアグモンは、トラウマを持ってないからな。普通にグレイモンに進化して、クワガーモンと取っ組み合いを始める。俺は猛スピードでクワガーモンに近づき、がら空きになつてるクワガーモンの横っ腹に狙いを定めた。

「『巖鬼烈斗』!!」

「キシヤアアッ!!」

「ぐっ…!」

「なっ!？」

両手の『兎角鉄爪』とかくてっそうで抉れるような一撃を入れたはずなんだが…実際に傷は出来ている。しかしクワガーモンはダメージを受けていないかのように、グレイモンを俺の方に倒してきた。何とか躲せたが…コイツ、痛みを感じていないっていうのか?

「トウライエモン…!」

「グレイモン、俺が隙を作る!チャンスだと思ったら、思いっきりぶちかませ!」

「おう!!」

作戦を変えて、止めは俺より攻撃力があるグレイモンに任せて、俺はクワガーモンの体、ダメージが入りそうな関節や柔らかそうな腹に攻撃。出来るだけつかず離れずでクワガーモンに満足に攻撃させないようにする。動きづらそうに、イライラしているのだろう。時々怒りのままに攻撃してこようとするが、俺にうまく攻撃できずにいた。頃合いを見て、俺はクワガーモンから少し離れ、丁度ハサミで攻撃できそうな位置に立つ。

「キシヤアアアアッ!!」

「キレても怖くねえ…よっ!」

クワガーモンが激昂して、ハサミで攻撃しようとした所に、俺はまたクワガーモンの懐に飛び込み、顎に思いっきりアッパーを食らわせてやった。その衝撃でクワガーモンは上を見上げて腹を見せる姿になる。俺は着地と同時に、大きくジャンプして退散。

好機を見逃さないグレイモンは、俺がいなくなったのを確認して、口に溜め込んだ炎を解き放った。

「メガフレイム!!」

「キシヤアアア…!」

ダメージを受けたクワガーモンは、そのままひっくり返った。それでも消滅しないあたり、こいつどんだけ堅いんだ…? 流石、カブテリモンのライバルの昆虫デジモンなだけはあるな。ファイル島の奴も、成長期の俺達の攻撃が効いてはいたが、かなりしぶとかったっほいしな…

「どうする、トゥルイエモン?」

「そうだな…止めを刺しとくか。見逃して後々恨まれて襲われても厄介だしな」

「…:…:トゥルイエモン」

「結衣?」

俺を呼ぶ結衣の声に振り向くと、結衣がこっちに歩いてきていた。いやいや、何やってんだよ…殆ど決着がついたとはいえ、まだ戦闘中なんだが。

「結衣、あんま近づくな」

「あ、ごめん…その、クワガーマンなんだけど…見逃してあげてほしいの」

「は？何でだよ？先に仕掛けてきたのはコイツだぞ？」

「でも、これじゃ弱いものいじめしてるみたいで、見てられなくて…」

……まさか、まだ戦いに慣れていないのか…？結構、戦いばかりの日々だから太一達と同じように慣れてきていると思っっていたんだが…

「…結衣、あんな——」

「…っ、危ない！」

グレイモンの声の切羽詰まった声に、反射的に結衣の盾になるように、結衣の方を向いたまま両手を広げて守る。直後、背中に強い衝撃を受けた。

「がっ…！」

「トウルイエモン!？」

「はあっ！」

「キキツ…キシヤアアツ!!」

宙に浮く感覚を覚え、何とか空中でバランスを整えて着地に成功。どうやら吹っ飛ばされたのは俺だけ、結衣はまだ取っ組み合いをしているグレイモンとクワガーマンの傍にいた。ハサミで掬い上げ攻撃を食らったらしいが…やっぱ、クワガーマンはもう既に虫の息だ。力が入っていないのが分かる一撃だった。

と、その時だった。俺の耳がある声を捉えた。

「——ピットボムッ！」

「っ!?グレイモン、結衣!伏せろっ!!」

猛ダツシュでさっきいた場所まで戻り、結衣をその場で押し倒す。グレイモンも俺の指示通りにその場で姿勢を低くした。そして数秒後。

想像していたような爆発音は全くしなかった。砂が巻き上げられ

るようなザザザという音はしたが、それだけだった。その巻き上げられた砂が俺たちに降りかかって、俺や結衣は砂に埋もれてしまう。口に砂が入っちゃった。

「ぺっ、ぺっ……グレイモン、結衣、大丈夫か？」

「ああ……」

「うん……何、今の？」

「ピッピッピッ……」

俺たちの目の前を、小さなピンク色の体をした丸っこいデジモンが堂々と歩いていった。その背中には真っ白な翼、手には槍を持っている。やっぱり……あの必殺技の声を聞いた時から、コイツがいるのは分かっていた。

「グレイモン！大丈夫か？」

「太一……ああ、何ともない」

「結衣先輩も、無事で良かったです！」

「クワガーモンは？」

「何あれ……変なヤツ！」

「ピッピッピッ……ピーツ！この未熟者！」

「あーっ！あなた、ピッコロモンね？」

「可愛い！」

こんな小さな姿でも、立派な完全体のデジモン。俺達の味方のデジモンだ……味方、のはずなんだが。コイツ、さっき俺達がすぐ近くにいるのにも関わらず必殺技使いやがったな。もし食らってたら、俺もグレイモンもただじゃ済んでないぞ……？

「クワガーモンをやっつけたのは、ピッコロモンだったのね？」

「ピッピッピーっ！私の魔法の威力、見たかーッピ！全く君達、選ばれし子供なんでしょ？危なっかしくて見てられないッピ！そんなんじやせつかく紋章とタグを手に入れても宝の持ち腐れだッピ！」

「……可愛くない、このデジモン」

ピッコロモンを拾い上げていたミミがそう呟いた。気持ちは分かるぞ……こんな見た目でも、中身は老人みたいなこと言うからな、ピッコロモンって。俺も人のこと言えないかもしれないが、見た目と中身

が合っていない。

「デジモン達もデジモン達だツピ！君たち皆たるんでるツピ！努力が足りないツピ！根性が無いツピ！」

「ピッピッピッピ、うるさい奴だな……」

珍しくヤマトがぼやいてる……というか、これ俺も入ってるんだよね？そこまで言われるとイラッと来るな……いや、今は我慢だ我慢。

「アタシ、努力って嫌い……」

「どうせオイラは根性無いよ……」

「よって君たち皆、今日から私の元で修行するツピ！」

「修行？」

「何ですの？それ」

「特にその君！」

「わ、私……？」

「君とこのトウルイエモンは重症だツピ！スペシャルメニューで猛特訓だツピ！」

「何だと!？」

なんか原作と全く同じ流れで太一とアグモンの代わりに指名されただが!?!何でだ、俺達そこまで言われる程じゃないと思うぞ！

「さあ、ついて来るツピ！ピッピッピッピ……」

ピッコロモンが歩いていくのを無視して、俺たちは集まって話し合いを始めた。

「どうする？」

「信用できるのかな？あのデジモン」

「どうなんだ？ガブモン」

「口うるさいけど悪いデジモンじゃないよ」

「黒い歯車も、ケーブルもついてないみたいだし……」

「いいじゃない、デジモン達の正しい進化が分からないのは事実なんだし。それに皆で合宿すると思えば、楽しいわよきつと」

「歩くよりのんびり出来そうかな？」

「太一はどうなんだ？」

「行ってみようぜ！面白そうじゃんか」

「結衣さん達は良いんですか？スペシャルメニューって言ってみましたけど」

「…うん、行こう。ちょっと怖いけど、必要なことなんだと思うし」

「決まりだね！」

「何をぐずぐずしてる！早く来るツピーっ!!」

☆☆☆☆

ピッコロモンについていくことになって暫く、さつきまでと同じように砂漠を歩き続ける私達。

「ねえ、まだ〜!?」

「もう少しだツピー！」

「もう少し、もう少しって…さつきからそればっかり〜」

「着いたツピー！ここだツピー」

「ここって…何もないじゃない!」

「ピーッ！ウホルパラホルパシリカツピ、トルカラトルカラシタカツピ〜！」

ピッコロモンが手に持つ槍をクルクルと回しながら呪文？を唱えると、ピッコロモンの目の前の景色が、森になった。ううん、森になったというかピッコロモンの目の前の見えない扉が開いたみたいなの。そう、空間が割れたみたいなの感じ。

「な、なんだあ!?!」

「驚くことはないツピ、私の結界の中だツピ。さつ、ついてくるツピー！」

その空間の割れ目に入ってみると、中は木々が生い茂っていて、砂漠の中とは思えない。ピッコロモンが結界って言ってたけど…どうなってるんだろ？たまに木々の隙間から見えるのは砂漠地帯なのに…完全に魔法だよね、これ。

「…この音は…」

「ロップモン、どうしたの？」

「あ！皆、見て！」

空ちゃんが指差したのは、木々の先の砂漠を走っている…何だろう、あれ。列車？みたいなのを引っ張っている黒い鎧を身に纏っているデジモン。どこかで見たような…そうだ、モノクロモン。ファイル島で縄張り争いをしてた子だ。

「今度は何だ？」

「あれはエテモンのトレーラーだツピ」

「ええ!？」

「でも心配することはないツピ、向こうからは結界の中は見えないツピ」

ああ、あれってトレーラーって言うんだ。車体の側面に笑天門って書いてるけど…あ、エテモンってことね。それにしても、結構近くを走ってる…ピッコロモンに会ってなかったら、エテモンに襲われてたかもしれない。

しばらく歩いて、見えてきたのは岩山。長い長い階段があって、その上にはいくつか、和風の建物が見える。

「この上が私の家だツピ」

「この上って…ええ？」

「何よ、これ！信じられない〜！」

「これを登るんですか!？」

「何段あるのかな…」

「数えるだけ無駄だ」

「ちよつと、修行はもう始まってるとてわけ?」

「そういうことツピ!」

全員ががっくりと肩を落とす…これ、登るだけでどれくらい時間かかるんだろ…ふと横を見たら、一人だけ落ち込んでいない宙に浮かぶ赤いのが見えた。

「へへ、こんなん楽勝やがな…何でならわて——」

「言っとくけど今後の修行中は、空は飛ばないで欲しいツピ」

「んなアホなあ…」

「楽することばかり考えないで、ピツピと登るツピ!」

「仕方ないよ、皆…行こう?」
「はぁーい……」

そうして登り始めること数時間。階段があるだけまだマシって思っていたんだけど…ゴール地点と思われる建物が見えてきたのは夕暮れだった。思っていたより…キツイ。足が棒みたいだよ…

「これくらいでバテるとは情けないツピ。さっ、あれが私の家だツピ」
「気味悪いな…」

「食事の用意も出来てるツピ」

「ん!?飯!!」

「……誰が用意してるんだろ…?」

ピッコロモンの他にも誰か住んでるのかな…それとも魔法的な何かでポンつと出せるみたいなの?

それにしてもこの建物、他の和風建築とは違うというか…あまり見ない建築だと思う。上手く例えられないけど…バウムクーヘンみたいに中央が吹き抜けになつて、生地の部分が廊下になつてるって感じ…お菓子で例えても分かりにくいよね……

というか…あの吹き抜けになつてる中央に巨大なピッコロモンの石像があるのは何でだろ。自分の石像がある場所って、暮らしにくそう…あんまりリラックス出来ない気がする。

「ねえ…飯は?」

「その前に、次の修行だツピ!」

「そんなことだと思つた…」

折角元気になつていたのに…特に一番「飯」と聞いて張り切つていたゴマモンが可哀想…と、ピッコロモンはまた例の呪文を唱えて、今度は大量の水入りバケツと雑巾を出した…え、まさか…?

「全員でこの廊下を、雑巾がけだツピ」

「ぞ、雑巾がけ…!」

「ええ!?この廊下、全部でつか!」

「嘘おく!?何なのよ、もう!!」

「君たちはスペシャルメニューだツピ、私についてくるツピ!」

「あ、あはは…皆、頑張ってるね…」

「何で俺達なんだよ……」

私達がピッコロモンについていった先は、建物から出てすぐの所にある洞窟だった。中は暗くて、殆ど何も見えない…こんな所で何をするんだろ？

「ねえ、ピッコロモン。ここで何を…わっ！」

「結衣！おい、ピッコロモン！」

「無事に帰ってくる。それが君たちの試練だツピ！」

そう言つて、洞窟から飛んでいったピッコロモン。私達は洞窟の地面が沈み、どんどん深みに落ちていく…何これ？沼…じゃない？服も汚れてないし、濡れてない。というか、地面に触れない…すり抜ける!?

私達は、脱出することも出来ず…程なくして、洞窟の地面に飲み込まれた。

「…ねえ、ロップモン」

「何だ？」

「ここ、どこ？」

「さあ…俺も分かんねえ」

目が覚めたら、何故か小舟の上だった。何でか明るくて、オールも付いているけど漕いでも方向も変えられない。為す術も無く流されるしかない…船の下も、ちゃんと水だし、何で洞窟の下にこんな景色が広がってるの？地底湖か何か？

「分かんないって…」

「ここが何処なのかは俺も知らないんだよ。多分だが、ピッコロモンが作った幻覚か何かじゃないか？」

「幻覚…これ、全部？」

「俺らが入った洞窟もな…」

洞窟ごと全部幻覚って…ピッコロモンってそんなこと出来るの？

一人でこんな大規模な…：そういうえば、あの広い森や岩山も含めて結界で覆ってただつけ…：完全体のデジモンって凄い。

「で、これはどうやって戻れるの？」

「分からん…：本当は太一とアグモンがここに来るんだが。何で俺らなんだ？」

「太一君達が…：何で？」

「ほら、前に話したスカルグレイモンの一件で、アグモンが進化するのにトラウマ持っててな。それを見たピッコロモンがここで太一とアグモンのトラウマを克服させたんだ。挑戦することが大事だということを思い出させてな」

「そんなことが…：じゃあ、私達がここに連れてこられたのは？」

「そこが分かんねえんだよな…：俺達は別にトラウマ無いし」

「トラウマ…：」

…：もしかして、クワガールモンと戦った時にすぐにロップモンを進化させられなかったことかな。あの時は何ですぐ進化させられなかったのか分からなかったんだけど…：あれって、私の問題なんじゃ…？

正直…：思い当たることは、無いわけじゃ無い。

「そうだ、丁度良いから今の内に色々話しておきたいんだが、良いか？」

「あ、うん。私もこれからのこと、聞いておきたかったんだ」

流され続ける間、私はロップモンから色々な話を聞きながら過ごした。エテモンの話とか、これから先の話。長かったけど、ある程度は話したとロップモンは言った。言っただけ…：ある程度は、っていうのが気になる。要するに、まだ全部じゃないんじゃ？

「ねえ、少し気になることがあるんだけど」

「ん？」

「一回、私達の世界に戻れるんだよね？」

「ああ、たった数日だけだな…：すぐこっちに戻ってくることになる。それがどうしたんだ？」

「その時にさ、ノートにさっきの話を書いてほしいの。まだ話してないこと、あるんでしょっ？」

「なるほど…分かった。確かに、02とかの話もあるしな…」

「ゼロツって?」

「いや、気にしなくて良い。とにかく了解だ、日本語も俺は書けるしな」

そっか、こつちの世界って基本は独自の言語なんだよね。ロツプモンは元人間だから書けるってことね。

次第に、話はここから出る方法のことになる。ふと周りを見てみると、海しかないのに見覚えのある建物が見えては消えてを繰り返していた。

「ビッグサイト…東京タワー…あれは、アパートか?」

「あれは…私が住んでたアパートだよ」

「住んでた…引越したのか?」

「うん。あれは光が丘に住んでいた時のアパート」

そうして、最後に見えてきたのは…病院だった。

いつの間にか景色はその病院の中。一般の入り口じゃなくて、緊急搬送口の中、そこを通る数人の医療従事者と、患者。その患者に寄り添っていた、二人の少女。

「あれは…?」

『お母さん、お母さん!』

『由恵…結衣を、頼むわね…』

『お母さん…ごめんなさい、ごめんなさい…!』

『結衣…貴方は、良い子よ…人の為に、行動するのは、良いこと…良いことは、自分に、返ってくる…から…』

『小林さん、安静にして!』

「これは、あの時の…」

「結衣…これって」

「うん…昔、実際にあったこと」

『結衣!!』

また景色が変わって、今度は小さな私が、ひっぱたかれていた。すぐ近くにいた私より大きい女の子：お姉ちゃんがすぐに私に駆け寄った。

『何するの、お父さん！』

『お前が：お前があんなことをしたから、お母さんがこんなことになったんだぞ！分かってているのか!？』

『違うの、お父さん！結衣は：』

『由恵、お前は黙っていなさい！お前は、お母さんを傷つけたんだ!!』
私はいつの間にか目を瞑っていた。両手で耳を覆って、しゃがみ込む。

「止める!!」

「：！」

『な、何だお前は!?!』

「え：：？」

隣で叫び声が出たと思ったら、ロップモンが怒った表情でお父さんを睨んでいた。お父さんはロップモンに今気づいたみたいに、驚いた表情でロップモンを見ていた。

「『ブレイジングアイス』!!」

『な——』

ロップモンが攻撃したら、お父さんもお姉ちゃんも私も、全部消えた。これは、本当に幻覚だったっていうことなんだと思う。

「悪いな、結衣。我慢出来なかった」

「う、ううん：別に良いけど」

「：でも、お前のことは少し分かった。お前が戦うことを嫌う理由も、何となく分かったよ」

「：：：：：そう」

ロップモンが私の方を見て、笑った。穏やかな笑顔で、私を見ていた。

「確かに、人を傷つけるのは良いこととは言えない。でも、デジタルワールドでは基本弱肉強食だ：敵は基本的に、俺達が見逃しても襲つ

てくる」

「…頭では分かっているの。でも…」

「良いんだ。だけど、一つだけ言っておく。エテモンみたいな、この先の敵を放っておけば、いずれお前の家族も危険になる。それを食い止めるために、俺達は戦うしかないんだ」

「…皆、傷つく…」

「敵が可哀想とか、そういうのは考えないようにしてくれ。その躊躇で、お前たちが死んだら…」

「…そう、だよ。そんなことになったら、私は…」

もう、私は立ち直れなくなる。私が今やらなくちゃいけないのは、太一君達と全員で、無事に家族の元に帰ること。それが最年長としての責務で、私が望んでいることなんだ。だったら…どうするべきか。「私、もう迷わない…絶対に、全員で帰る為に…戦うことを迷わないよ」

「…ああ。今はそれで良い。戻るぞ、結衣！」

「うん！」

さつきまで乗っていた小舟に乗って、流れに逆らってオールを漕ぎ続ける。さつきよりも流れが弱まっているように感じる…これなら、元の場所に戻れる！

ロップモンも手と耳を使って、一緒に漕いでくれて…見えてきたのは、さつきの薄暗い洞窟。聞こえてきたのは、皆の悲鳴だった。もう戦ってるんだ…急がなきゃ！

「ロップモン!!」

「おう！ロップモン、進化——つ!!トウルイエモン!!」

出口に近づいて、ロップモンが進化して私を背負う。大きく跳躍すると、さつきまでいた洞窟の中に出た。そこからさらに跳んで洞窟から出ると、悲鳴が聞こえるのは森の方だった。トウルイエモンは森の方へ向けて駆け抜けていく。ここからでも既に、大きな赤い竜が見えた。

「トウルイエモン、あれがティラノモン？」

「ああ！俺はアイツの背中黒いケーブルを狙う！」

「トウルイエモン、下ろして！先に先行して！」

「分かった、お前も気をつけろよ！」

私を下ろしたトウルイエモンが、さらにスピードを上げてテイラノモン目がけて進んでいく。そして、この聞こえてくる変な歌がエテモンの技…これで、成熟期への進化が防がれてしまうし、少しするとトウルイエモンもロップモンに戻っちゃう。これは、時間との闘いでもある。

私も走ってテイラノモンのいる場所まで向かっていると、テイラノモンが吐く炎攻撃の先に、太一君達があった。ピッコロモンが結界で守ってくれているけど、早く助けないと！

「グオオオオオッ!?」

「トウルイエモンだ！」

「皆ーっ！」

「結衣さん！」

「おらあ！」

テイラノモンが苦しみ始めた…きつと、トウルイエモンが背中のケーブルを切ったせいだ。一本、また一本と切る度にテイラノモンが苦しんでいる…

でも、皆を守る為には……やるしかないんだ。

「トウルイエモン!!」

「巖鬼烈斗!!」

「グオオオ……！」

短い悲鳴を上げて、テイラノモンは粒子となって消滅していった。

その日の夕方、私達は旅を再開することになった。この場所はもうエテモンにバレてしまっているから、ピッコロモンも別の場所に逃げるらしい。

そして、私とロップモンがいない間に、ヤマト君と光子郎君が紋章を手に入れていた。この近くの井戸にあつたらしいけど…結界の外

にあったから、それでテイラノモンに見つかって襲われたみたい。大
体ロップモンから聞いた話と一緒にみたい。

「ピッコロモン、ありがとうございます！」

へありがとうございます！

「これからも日々精進だッピ！この世界を救えるのは、君たちしかい
ないッピ…頑張れ、選ばれし子供達…ッピ」

ピッコロモンの激励を受けて私達は旅を再開した。

第十八話 迷宮のナノモン

「これが？」

「ええ、エテモンが僕達の居場所を知る為のネットワークに違いありません」

「そ、それじゃ僕達がここでこうしているのも探知されているんじゃないのか？」

「ええ!?早く逃げなきゃ!」

「逃げましょ、逃げましょ!」

ピッコロモンの家を後にし、旅を続けていた俺達。砂漠のど真ん中に、黒いケーブルが何本も繋がれているコンソールの様な何かを見つけた。エテモンの使っているネットワークを管理しているホストコンピューターの役割をしているナノモンが接触してきた奴だな、これ。今光子郎がパソコンを接続してエテモンの動向を探っているが、もう少ししたらナノモンからメールが来るだろう。

「まあまあ、落ち着いて!」

「ここで逃げて、またすぐに探知されるだけだ」

光子郎の推測を聞いて、丈やミミが慌て始めるが、ヤマトと空が宥める。もし探知されたとしても、エテモン自身がやってこない限りは大丈夫だろう。エテモンの部下で完全体クラスの奴ってナノモンくらいしかいないみたいだしな。成熟期レベルならよっぽど大群で襲ってこない限り、今の俺達なら問題ない。

「何してまんねや?」

「:..やっぱり。エテモンのネットワークの情報です」

光子郎のパソコンに表示されているのは:マップか?多分、このサーバ大陸にあるコンソールの位置と黒いケーブルのルートか。結構密集して配置してあるんだな:ケーブルに引っかけたらエテモンに気づかれるみたいだし、まるで蜘蛛の巣だ。

「他にも、何か掴めるかもしれない:」

「なに?このマーク」

「メール:..一体誰から?」

「まさか、敵からじや!？」

「開けて見ろよ、光子郎」

「はい」

「たすけて…?」

光子郎がメールを開くと、一番上に大きめにそう書かれていた。俺は結衣の肩を耳で掴んで覗き込むようにして画面を見てみる。

「私を助けてくれたら、紋章の在処を教えよう…」

「紋章だって!？」

「何者なんだ、一体…」

…ざっと読んでみたが、一つの紋章がここから南西に一日歩いた所にあること、そしてあと二つの紋章の在処は助けた後に教える、らしい。でも、ナノモンだからな…一瞬、二つってことは結衣の紋章の在処も知っているのかと期待しちまったが、あまり信用出来ないんだよな…助けた後、コイツは暴走するに決まってるし。

だが、結衣の紋章に関しては何の情報も無いのも事実…もし、もしもナノモンが二つ紋章を持っているんだとしたら…罫と分かかっていても、行くしかない。

「どうしますか?」

「紋章の在処を知ってるって言ってるんだ。まず、南西にあるっていう紋章を探しに行ってみよう!」

こうして、俺達はメールの差出人の情報を確かめる為に、ひとまずタケルの紋章の場所へ向かうことになった。まあ、道中に丈が敵の罫だったらか色々言っているが、結局は行ってみるしかないという結論になる。紋章の手がかりが一つも無い俺達には、どっちにしろ行くしかないというのは分かっているはずなんだが…丈も言わずにはいれないんだろうな。

というか、勝手に決めつけてるけど…これ、タケルの紋章で良いんだよな?アニメ何度も見返しているけど、会話で南西に一日歩くとは言っていなかった。アニメに映ったナノモンのメールの文面までは流石に覚えてないしな…

そんなことを考えながら一日かけて南西に進んでいくと、次第に周囲の景色が砂漠というより渓谷っぽい感じになっていった。それを見て、俺もここにあるのはタケルの紋章だとほぼ確信している。結衣は分からんが、空の紋章がここにあるとは考えづらい。

空、結衣、タケルの三人はタグを手にとって、反応を見ながら進んでいる。

「そろそろのはずですが…」

「…！光った！」

「…近いな」

タケルの持つタグが黄色の光をピカピカと点滅させる。ヤマトの言う通り、反応がかなり近い。周囲を見回し、それらしき物が無いか探す。すると、トコモンが声を上げて駆け出す。

「あーっ！タケル、こっち！あれだよ、紋章！」

思ったよりデカいな。岩壁に刻まれた、希望の紋章。俺達は紋章の方へと向かい、タケルはタグを掲げながら進んでいくと、反応がさらに強くなり…目の前まで来ると、紋章が光を放ち、やがて小さく…タケルの持つタグへと収まった。

「僕の紋章だ…！」

「やったね、タケル！」

「どうやら畏じゃなかったみたいだな」

「残り二つの紋章は、助けてくれた後に場所を教えるそうです」

「よし、早速助けに行こうぜ！」

「あ、あれ！」

希望の紋章が収まっていた岩壁を見ると、四角く切り抜かれている洞窟がある。その洞窟の中には、壁や天井を埋め尽くす程のデジ文字が描かれている。

光子郎はその文字を見た途端、すぐにパソコンを取り出してカタカタと操作し始める。

「間違いありません！アンドロモンの町や、ケンタルモンの遺跡で見たのと同じ文字です…！違うのは、この文字だけ…！」

光子郎がそう言って、一つ文字を手でガサガサと擦って消すと、洞窟の中がパツと明るくなった。電球無いのに、すげー。

「やはり……ここでは、プログラムによってエネルギーが発生しているんです！」

「えっ? どういうこと?」

「つまり、こうやって壁に描いてあるだけのプログラムを書き換えるだけで、電気を付けたり消したり出来るんです。多分、ここもこうする……」

今度は光子郎がペンで文字に一本線を描き足すと、空中に地図みたいなホログラムが映し出される。太一達からすれば、光子郎が魔法使いみたいに見えるだろうな。

「この周辺の地図ですね」

「そんな、壁に描いたプログラムでそんなことが出来るなんて、コンピュータの中じゃあるまいし……」

「……分かりませんよ」

「え?」

「ここは……この世界全体は、データやプログラムが実体化した世界なんじゃないかって、僕は思っているんですよ」

「そういえば、前にもそんなこと言ってたな」

「ここがデータの世界ってことは、私達自身も?」

「ええ、実体の無いデータのみ存在です」

「実体が無い? 生身の肉体じゃ無いってことか?」

「それって、幽霊みたいなもの?」

「ち、近いかも知れません……」

「じゃあ、本当の自分は何処にいるんだ?」

「恐らく……まだ、キャン普場にいるのでは。デジモン達は、正にデジタルモンスター……データ上の存在だったわけですよ」

「じゃあ、ここはゲームの中みたいなものなの?」

「そこまで単純じゃ無いけど……」

「メールの差出人も、データなのかな……」

「さあ、どうでしょう……え!」

「どうした?」

「ちよ、ちよつと待つて下さい、今皆に分かるようにします!」

光子郎って本当に天才だよな…自分の力だけで、こうしてデジタルワールドの謎を解明している。

と、感想はさておき。しばらくカタカタとパソコンを操作した光子郎。すると、さつき出現した地図のホログラムが歪み、球体に形が変わった。コイツ、完全にデジ文字把握してないか…?

「全体が見えるように調整しました。これに、アンドロモンの町で見たプログラム、それにゲンナイさんから貰った地図を合わせると…」

「広い世界だな。地球と同じくらいある」

「寧ろ全く同じなんです」

「え?」

「さつきのメールのアドレス、つまりメールを出したコンピューター場所は、あそこです。あそこは、僕がよく見ていたインターネットのホームページがある場所です」

球体のマップに赤く点滅する場所が表示される。光子郎がそう付け足し、太一達は疑問符を浮かべた。

「え?どういうことだ?」

「あのメールは、私達の世界から来たっていうこと?」

「それだけじゃありません…あれが僕達の地球。そしてそのネットワーク。この世界の物と重なると…」

「ネットワークの形が全く同じ…!」

「え?つまりどういうこと?」

「ここは、データだけの世界。つまりゲームやコンピューターの中と同じ世界なんです。地球から遠く離れた何処かというわけではなく、僕達の地球のコンピューターネットワークそのものなんです!つまり、このデジモンワールドは僕達の地球と同じ場所にある、地球の影と言って良い世界なんです!」

「地球の…」

「影……ここは、地球だったのか!」

丈が崩れ落ち、タケルやミミはまだ分かっていないような顔をして

いるが、太一達は光子郎の話を何となくでも理解出来たようだ。

「え？じゃあ、すぐに元の家に帰れるの？」

「いや、そういうわけじゃないんだ。凄く近いけど、ここは地球そのものじゃない」

「ますますどうしたら良いか、分からなくなった…」

「もー、何言ってるんだよ！オイラがついてんじやないか！」

「空、良く分かんなかったけど…すぐに戻っちゃうの？」

「ううん、私達がこの世界でやらなきゃいけないことがあるみたいだから、それが終わるまでは戻れないわ」

「そうだな、とにかくメールの差出人を助けるのが先だ」

「ごめん、その前に一個だけ良い？」

「どうしたんですか？」

今までずっと黙っていた結衣が手を上げた。話の間、ずっと険しい表情をしていたが…何を考えてたんだ？この話、殆ど前に話したはずだが。

「私達はデータ上の存在…でも、怪我や痛みはちゃんとある。これって、データが破損したっていうことで良いのかな？」

「そうですね、その認識が近いと思います」

「もし…もしもだよ、ここで命を落とすようなことがあつたら…？」

「……」

誰かが、息を飲み込む。緊張感が伝わってくる。

「僕達はデータと言っても、かなり膨大で緻密なデータです。たとえ戻れたとしても、この世界で起きたことは何らかの形でフィードバックされるはず。その時、僕達のデータは破壊されてしまっているわけですから、最悪…植物状態に近い形になるのかも…」

「そんな…！」

「植物状態って？」

「…治る見込みが無い、病院でずっと寝たきり、意識が戻ることもない状態の患者さんのことを、植物状態というんだ。父さん達から聞いたことがある」

「…皆、怖い思いさせてごめんなさい。でも、どうしても確認しておかなくちやいけなかったの。今の話を聞いて、ゲームの主人公みたいにやり直せるって思った人もいたと思うし…ここで確認しないで、軽はずみに行動してしまうこともあったかもしれない」

そうか…結衣はもう、デジモンアドベンチャーの大まかなストーリーは知っている。ここで、全員が命を落とす可能性を少しでも下げようとしているんだ。太一は特に、危険な目に遭うことが多いしな。他の皆も、多かれ少なかれ危険な目に遭う。そんな時、もしやり直せると考えていたら…悲惨な目に遭うのは間違いない。

「皆、ここがデータ上の世界でも、絶対に危ない事は止めて。ここで生きていくのと同じだということを忘れないで欲しいの」

「そうね…今までと変わらないわ、出来るだけ慎重に動きましょう。そして誰一人欠けること無く、全員で元の世界に帰りましょう!」

結衣と空の言葉に、全員が力強く頷いた。

「太一君、ごめんね。話の流れ切っちゃって」

「大丈夫大丈夫!で、光子郎、これからどうするんだ?」

「それは…メールについてきたプログラムを実行すると…」

「あ、奥が!」

「外が見えるよ!」

「今度は何が起きたんだ?」

「あの外に、差出人がいるはずですよ」

「え?こんな近くに?」

「いえ、さっきのプログラムで空間を繋いだらしいんです」

さっきまで行き止まりだったはずの洞窟の奥が、急に明るくなる。外を覗いてみると、今いるのはエジプトにあるスフィンクスみたいなものの口の中、そして外には逆さにひっくり返したピラミッドがあった。そして、その逆ピラミッドに向かって直進する物体。太一はそれを単眼鏡で観察する。

「あれは…エテモンだ!」

「そうか、エテモンに閉じ込められているってメールに書いてあったな」

「つまり、あの逆さのピラミッドに差出人がいるんだね」

「ええ…あのピラミッドには普通は見えない隠し通路があるみたいで
す。それを使って、差出人が閉じ込められている部屋まで行けるみた
いですね」

「でも、エテモンがいるってことは…」

「何とかして、見つからないように行くしかないってことね」

とりあえず洞窟の中に戻り、ナノモンを助ける為の作戦を考えるこ
とになった。あそこはエテモンの本拠地と言っても良い場所、隠し通
路を使っても全員で行くと見つかる可能性も高くなる。そこで、救出
する潜入組と何か問題があった時に駆けつける待機組で別れること
にした。

「残る紋章は二つだから、結衣君と空君、それと案内役で光子郎も潜入
組だな」

「じゃあ、俺も潜入組に行くよ。タイミングはどうする?」

「うーん…夜中から早朝にかけてが一番良いんじゃないかな?」

「そんな時間に行くの?」

「その時間帯が一番警戒心が緩むんだって、お爺ちゃんが言った。
それに相手はあのエテモンだから、きつと自分の拠点に襲ってくるこ
は思われていないはず」

「それじゃ、決まりだな!ヤマト達はここで待機していてくれ」
「分かった」

大体こんな感じの流れで、原作で丈の代わりに結衣が入る形になっ
た。話の途中で気になったんだが…結衣のお爺ちゃんって何者だよ。
元軍人か何かなのか?ちよつとリアルワールドで会うのが怖くなっ
てきたな…

とにかく、今日はこの洞窟で野宿、交代で見張りもすることになっ
た。俺達潜入組は念のため、見張りは早朝の時間の担当になった。

☆☆☆

エテモンがいる逆さのピラミッドに潜入する日の早朝。多分、日の

出にはまだあと一時間くらいかかるような時間帯に、私とロップモンは洞窟の外で焚き火をしながら見張りをしていた。暇だから何となく会話するけど、話す内容はやっぱりナノモンのこと。

「ナノモンが私と空ちゃん紋章を持っているらしいけど、本当なのかな…」

「どうだろうな…結衣の紋章が何処にあるのかは、俺も分からねえ。でも、どっちにしる罫だとは思うぞ」

「だよね…最初のタケル君の紋章は私達を信用させる為のもの、ってことだよね」

「ああ…アイツは封印を解除した途端襲いかかってくる。紋章を持っているのは、エテモンを倒す為の切り札として持っているはずだからな」

成る程…エテモンを倒すために、私達選ばれし子供のパートナーデジモンを完全体まで進化させて戦わせるってことなんだ…でも、それって可能なの？

「ナノモンが紋章と私達を利用するって、そんなこと出来るの？」

「うーん…俺は無理だと思ってる。紋章っていうのは、選ばれし子供達が持っているエネルギーを引き出しやすくする為の装置みたいな意味合いが大きい。要するに、子供達が心から協力しない限り無理なはずだ。けど、ナノモンは多分そのことを知らずに、紋章を完全体に進化させる為に必要な物としか思っていないだろう」

「私達のエネルギー…でも、別に脱力感とかは無いよ？まだ紋章を使っていないから？」

「あー…えーっと、その辺は話すと長いから後々だ。今すぐどうこうなるというわけじゃないから、今は気にしなくて良い」

こういう時のロップモンって、聞いても教えてくれないんだよね…後々、つて言っても多分かなり後だと思う。まあ、気長に待つつもりではいるけどね。

「えっと、じゃあそこは置いて…紋章は何とか回収しなきゃいけないから、ナノモンをどうにかしなくちゃダメだから…」

「問題は、勝てるかどうかだな…ナノモンも完全体、エテモン程ではな

「いとは思いたいけど…」

レベルでは負けている。でも、対策を立てておけば何とかなるかもしれない。そういえば、私ナノモンってどんなデジモンなのか知らない。話では出てくるけど、姿形も分からないんだよね。

「ナノモンってどんな形のデジモンなの？」

「どんな形い…？んー…そうだな、サイズは今の俺と同じくらい？で、体は機械だ。ちよつと説明が難しいんだが…えー、何だ。カプセルみたいな薬、分かるか？」

「え？うん」

多分ロップモンが言いたいのは、風邪引いた時に飲むお薬のことだと思う。粉薬を溶けやすい小さなカプセルに入ってる錠剤。

「あのカプセルを縦にして、下半分にイカみみたいな機械の触手くっつけたような感じだ」

「カプセル…機械…？？」

サイズがロップモンと同じくらいで完全体…パツと浮かんだのはピッコロモンだけど、ナノモンが機械の体なら魔法みたいなのは使わなさそう。それにしても…

「で、攻撃方法は、手の先から小型の爆弾を打ち出す『プラグボム』だ。破壊力以外にも、特殊なウイルスが含まれているっつー技だったはずだ」

「うーん…ごめん、イマイチ姿が想像出来ない」

ロップモンって結構…特殊な例えするんだ。いや、ナノモンの姿が説明しにくいだけ？

「何となくそんな気はしてたよ…ま、まあ見れば分かるさ」

「でもそれだと対策を立てられないね…ロップモン、私達四人だけで勝てる可能性ってどれくらいあると思う？」

「そうだな…攻撃が厄介で、それなりに素早い。ちよこまかしてチマチマ攻撃してくるから、グレイモン達だけならやりづらいだろう。が、俺がナノモンの動きを封じれば勝てる可能性は十分あるはず…」

確かに、小さいのに素早いデジモンってかなり厄介そう。トウルイ

エモンとエンジエモン以外は皆大きいし。

「ま、今回は俺が何とかしてみせる、と言いたいが、結衣に注意して欲しいのはナノモンが何を狙っているかだ」

「狙い？」

「ああ。エテモンが乱入してきたら、アイツは秘密の隠し部屋の奥に空とピヨモンを連れ去る…だが今回はそもそもエテモンの乱入も防げるかもしれない。ナノモンと俺達が一騎打ちになる場合、奴が追い詰められたら何をしてくるかは未知数だ」

「分かった。私はナノモンを注意深く観察してみる」

「頼む」

「結衣さん、ロップモン、おはようございます」

「あ、おはよう」

洞窟から出てきたのは、次の見張りを担当している光子郎君とテントモン。もう交代の時間になっていたんだ…私達も少しでも休んでおかないと、とは思うけど正直あんまり眠たくない。

「見張り、お疲れ様です」

「ありがとう、でもあんまり眠くないんだよね…」

「そうだ、結衣さんに少し相談したいことがあるんですが良いですか？」

「良いよ、どうしたの？」

光子郎君が相談なんて、少し珍しい。正直、光子郎君って丈君と同じくらい、もしくはそれ以上に頭が良いと思う。それに比べて私はあまり頭が良いとは言えない…良くて平均点以上って感じだから、光子郎君に質問されて答えられるかはちよつと不安を感じる。

「昨日皆さんに話したことなんです…」

「私達の体がデータで出来ているって話？」

「はい。結衣さんが昨日質問した、この世界で死んだらどうなるのかという話になった時に、もう一つ仮説が思い浮かんだんです。もしかすると、僕達は体も含めてデータに変換されているのかもしれないんじゃないかって…」

「キャンプ場に体があるんじゃないかって、体も一緒にこの世界に来たっ

てこと？」

「はい。どちらにしろ、この世界で命を落とすのは危険ということには違いないんですが…デジモン達が僕達の世界に来たらどうなるんだろう、ってふと考えたんです。こればかりは確証が無いので、何とも言えないんですが…」

「デジモン達が私達と同じように存在出来るのか…っていうことだよな？」

「はい。もし僕達が体から映されたデータだとすれば、僕達とデジモン達が一緒に僕達の世界に行ったら…混ざり合うこともあり得るのではないかと」

「混ざり合う…」

「わてと光子郎はんが合体するってことでつか？」

思わず光子郎君がテントモンのコスプレをしている姿が浮かんで、嘔き出しそうになるのを必死に堪える。

この答えを、私はもうロップモンから聞いて知っている。デジモン達はちゃんと人間界でも存在する。私達も、体を含めてデータ化されている。でも、そう言っても怪しまれるだろうし…あくまで、私の予想って形で答えなきゃ。

「私は、体も一緒にこの世界に来たと思う…というより、そう思いたいかな。ロップモンと混ざっちゃうっていうのは遠慮したいし」

「どういう意味だ、おい」

「それに、お姉ちゃん…私の家族にロップモンをちゃんと紹介したいなって思うんだ」

「そうですね…驚かれると思いますけど、僕も両親にテントモンを紹介したいです」

明確な答えを言えないから、私がそう思いたいって話になっちゃったけど…光子郎君の表情はさつきより明るくなった。

その後、私は見張りの交代もしないで、出発の時間まで四人で雑談して過ごした…テントモンが何でそんな喋り方なのかは、結局分からずじまいだった。実は一番気になってたのになあ。

それから大体一時間後、私達潜入組はスフィングスの口を出て、逆さのピラミッドに向かった。

パソコンを操作しながら案内する光子郎君の後についていき、隠し通路に入れる側面へと回り込む。

「こちら側の側面に隠し通路があるはずですよ」

「どの辺だよ？」

「…げっ！」

「どうしたの、太一？」

「エテモンだよ！」

「気づかれた…？」

太一君が壁に背を預けて角からエテモンの様子を窺っている。どうやら、エテモンが丁度正面から出てきたみたい。太一君が首を横に振っているから、まだ気づかれたわけではないみたい。今の内に隠し通路を…！

「…あった！」

何とか、気づかれることなく隠し通路に入ることが出来た。中からは隠し通路の先が半透明に見える。

「ここにあるのは見た目のデータだけで、中身が無いんです」「どれっ！いてて…！」

「通路以外は中身のデータがありますから、注意して下さい」

アグモンがその辺の壁を叩くけど、ペシンツ！といい音が鳴っただけだった…今の音で気づかれたりはしないよね、流星に…

隠し通路の中を進み、階段を下りたり少し広めの通路を通ったり、かなり複雑なルートを通っている。途中、隠し通路の向こう側、つまり正規のルートにエテモンの手下のガジモンが通ったのが見えたりしたけど、特に気づかれることは無かった。よく見ると、正規ルートの方には監視カメラっぽいのが見えた…というかロップモンが見つけた。

そして、ようやくナノモンの部屋に通じる所まで来たんだけど…隠

し通路がある壁が、なんかビリビリしてる鉄格子みたいになってる。これ、明らかにヤバい気がする…

「これ、高圧電流でも流れとるんとちゃいますか…?」

「ですが、隠し通路の入り口部分だけは、見た目のデータのはずです」
「どの辺なんだ? 光子郎」

「えっと…ここです」

光子郎君が指差す場所を見て、全員が顔を見合わせた。そりやあ怖いよね…どうしよう。

「ちよつと下がってろ」

「ロップモン?」

「『ブレイジングアイス』!…よし、大丈夫そうだな」

「そんな確認方法…中の人が怪我したらどうするの」

確かに、誰も怪我する心配もないし、中は封印に閉じ込められたナノモンだけだから問題ないかもしれないけど…急でビックリした。

「…よ、よし、皆行くぞー!」

ちよつと顔を引きつらせた太一君の掛け声で、順番に中に入っていく。その部屋に入って、私は一瞬ここがピラミッドの中ということをおぼえてしまいそうになった。

天井も高く、かなり広い部屋。でも壁や床の材質は全部機械。勿論、家具とかそういう類の物は何も無く、部屋の中央の台座に、三角形のガラスで作られた三角錐、それを二重にしたような物体がある。その中で、機械で出来た何かが動いた。

「ここが、目的地です」

「ここが…」

「あ、あれはナノモンや。確か、ごつつ頭のええデジモンや」

あ、やっぱりそうなんだ…ロップモン、大分コミカルに表現しようとしてくれてたんだ…確かにカプセル型の錠剤に見えなくもない、けど中に脳みそみたいなのが見えるのがちよつと怖い。中々グロテスクだよ…

「ひよつとして、あのデジモンがメールを送ってきたの?」

『その通りだ、選ばれし子供達』

「え？」

「…そうか！赤外線ポートに直接データを送り込んでいるんだ！」

光子郎君のパソコンに、ナノモンの姿が表示されている。囚われているナノモン本体を見ると、片目を赤く点滅させていた。

『私がかつて、エテモンと戦い、そして敗れた。破壊された体のままここに封印され、思考能力を奪われた上で、エテモンのネットワークを管理するホストの役割を与えられた。だがある日、私は記憶を取り戻し、エテモンに気づかれぬよう少しずつ自分の体を修復し始めたのだ。外で起こっていることは何でも知り、それに干渉することも出来るようになった。だが、封印を解除するには外部の協力が必要なのだ』

「私達の紋章が何処にあるのか、本当に知っているんでしょね？」

『勿論。私はエテモンすら知らない多くのことを知っている』

「…貴方は、私達の味方なの？」

『私と君たちはエテモンの敵ということで共通している、信じて欲しい』

「分かった。で、どうすれば良い？」

ナノモンの指示に従って、太一君と光子郎君が協力して壁にある装置を操作する。その間、私と空ちゃんはここを出る唯一の通路の先を警戒するけど、今の所大丈夫みたい。

「太一さん、レバーを下ろして下さい。それで作業は完了です」

「分かったー！」

太一君がレバーを下げると、元々逆さのピラミッドのような形をしていた封印が上に開いた。

「やった！」

「ご苦労だった、選ばれし子供達」

私は、ナノモンをずっと見ていた。そして、ナノモンは私達の予想通りの行動に出た。ナノモンの目が一瞬光ったと思った瞬間、封印に使われていたガラスの壁を、こっちに飛ばしてきた。

「皆、避けて!!」

「きゃあっ!!」

「な、何するんだ!？」

『お前たちの役割は終わりだ。後はエテモンに対抗する切り札…そのピースを揃えるのみ!』

「ロップモン、進化——っ!!トウルイエモン!!」

何とか、ガラスの攻撃を回避することが出来た私達。ナノモンが敵と判明した今、もう戦うしか…ない。

トウルイエモンが、ナノモンに向かって駆けていく。それに遅れて、アグモン達も進化を始めた。

「アグモン、進化——っ!!グレイモン!!」

「ピヨモン、進化——っ!!バードラモン!!」

「テントモン、進化——っ!!カブテリモン!!」

「皆、ナノモンを囲んで!攻撃のタイミングは私達に任せて!」

進化したはいいけど、無闇に攻撃すると接近戦を繰り返しているトウルイエモンの邪魔になってしまう。そこで考えていた作戦は、まずトウルイエモンが接近戦を仕掛け、ナノモンが必殺技を繰り返す隙をわざと作り出す。そしてナノモンがその隙を突いて必殺技を繰り返す瞬間に全員で一斉攻撃を仕掛けるというもの。

「ふっ…はあっ!!」

『…チツ、中々素早いようだ。だが!』

トウルイエモンが、出来るだけジャブのような隙の少ない攻撃を続ける。ナノモンはそれに悪態をつくけど、トウルイエモンが回し蹴りを放った瞬間にナノモンが大きく後退して両手を前に出した。

「今!!」

「メガフレイム!!」

「メテオウイング!!」

「メガブラスター!!」

『む…プラグボム!!』

三体の必殺技と、ナノモンが両手の先から発射した小型爆弾がぶつかり合って、巨大な爆風となる。

同時攻撃でも、殆ど相殺された……！トウルイエモンは？

「『忍迅拳』！」

『ぐはっ……！』

ナノモンの背後に回っていたトウルイエモンの速さを重視した一撃がナノモンにヒット。体勢を崩したナノモンがトウルイエモンに向き直るけど、グレイモンがすかさず頭突きを仕掛けた。

「はあっ！」

『くっ……どうやら、こちらの分が悪いようだな。致し方あるまい……』
プラグボム』！」

ナノモンが、突然天井に向けて小型爆弾を放った。爆発と衝撃で地鳴りが起こり、さらに警報が鳴り始めた。

「今度は何だ!?」

『たった今、このピラミッド全域に警報を発した！これで外の奴らはこここの異変にすぐに気づくことになるだろう！』

「じゃあ、このままじゃエテモンが……！」

この場にエテモンが来たら、ナノモンには逃げられてエテモンに襲われる最悪の展開になってしまう……その前に、何とかナノモンを捕まえて、隠し部屋に行かないと……

その時、ナノモンが中央の台座に近づき、台座の下にあったケーブルに自分の手を接続した。まだ何かをするつもりなら、その前に……！

「トウルイエモン！」

「分かってる！『巖兎烈斗』!!」

『ふん、もう遅い！』

「なに……くっ……！」

さっき回避した、封印のガラス。それがトウルイエモンとナノモンの間に壁となって、トウルイエモンが何枚か破壊したけど、最後の一枚で食い止められてしまった。

直後、壁や天井から真っ白いガスが噴き出した。これ、毒ガス!?!とにかく、出来るだけ吸わないようにしないと……

「きやあつ！」

「空ちや…むぐつ!？」

空ちゃんの声を最後に、私は何かに目を覆われて……バチツ!と音がしたと思つたら、意識がすぐに遠くなつていく。

トウルイエ、モ……

☆☆☆

くそつ、ガスのせいで視界が悪いし、警報のせいで耳が痛くなつてくる……!これじゃナノモンがどこにいるのか分かんねえ!

「きやあつ!？」

唯一聞き取れたのは、空の悲鳴だった。アイツ、混乱に乗じて空とピヨモンを攫うつもりか!？」

「空!!」

…おかしい。空が襲われたのに、ピヨモン…つていうかバードラモンが見える。空中にいるあの赤っぽい鳥はバードラモンのはず。空だけ攫つた…?」

「結衣…?結衣!どこだ、結衣!？」

俺の声に、返事が返ってくることはなく…煙が段々と晴れてきたが、思った通り結衣も、空もない。あのクソ野郎…パートナーだけ攫いやがった!

と、その時、出入り口の方からこつちに向かつてくる一つの足音。姿を見た瞬間、思わず舌打ちをしてしまう。

「アンタ達、散々好き放題してくれたみたいね!」

「エテモン…こんな時に!」

「皆さん、ここは一時撤退しましょう!」

「待ってくれ、結衣がいねえんだ!!」

「結衣さんが!？」

「空もない!」

「何をゴチャゴチャ言ってるのかしらあ!？」

混乱する俺達にお構いなしという風にエテモンが突っ込んでくる。それをグレイモンとカブテリモンが迎え撃つが、グレイモンは角を掴まれてぶん投げられ、カブテリモンはジャンプしたエテモンに上から叩きつけられる。

「メテオウイング!」

「ふんっ!!」

「ぐあつ……!」

バードラモンの攻撃を意にも介さず、バードラモンに直進。そのまま顔をぶん殴って、バードラモンもダウンした。

残っているのは…俺だけ。今ここで俺が出来るのは、一つの手段だけだった。

「太一、光子郎! 隠し通路が他に無いか探せ! 俺達が…ここを何とか食い止めてみせる!!」

「トウルイエモン…分かった、ここは頼んだぞ!」

「太一さん、こつちに!」

二人が部屋から出て行くのを、足音で把握する。その間もエテモンから視線を逸らしてはいなかったが、何故か動く気配が無かった。

「随分と大きく出たじゃない? 本当にアチキを食い止められると思ってるの?」

「…うるせえよ。こつちは今、腸煮えくり返ってるんだ。八つ当たりさせてもらうぞ」

ほぼ同時に飛び出した俺とエテモン。そして同時に互いの顔面に向けて拳を突き出した。そして互いにヒットした…が、吹っ飛ばされたのは俺だけ。地力の差だった。

壁にぶつかりそうになったが、体勢を立て直して、壁に足をつけて跳ぶ。出来るだけ部屋全体を使って、壁と壁、壁と天井を攪乱するように跳びまくる。

「こんのっ…ちよこまかと面倒くさい、わねえ!」

「ぐはっ……!」

エテモンが跳んだと思ったら、俺の腹に一撃を入れていた。目で追

えなかった…！

が、俺はエテモンの腕を掴んで、今度は吹っ飛ばされないようにする。

「この、離しなさい！」

「お前ら、やれ!!」

「だが…！」

「全力でいけ!!」

「メガフレーム!!」

「メガブラスター!!」

「メテオウイング!!」

最初に適当にあしらわれたグレイモン達が立て直し、それぞれの必殺技がエテモンと俺に迫る。ギリギリまでしがみついて、直前で回避するつもりだった。

「ダークスピリッツ!!」

「なっ…くっ！」

エテモンが、俺がしがみついている腕と反対側の手に禍々しい黒い球体を作ったのを見た瞬間、体に寒気が走った。これは、ヤバい。

「ぐあっ！」

そう悟った俺は、気づいたらエテモンから離れていた。ナノモンの「プラグボム」とは比べものにならない程の威力。三体の必殺技が相殺されただけでなく、グレイモン達にもダメージが入ったらしい。後ろまで吹っ飛ばされて、壁も壊れている。そして、それぞれが成長期に退化してしまっていた。

「アグモン！」

「太一、ごめん…コイツ、強い……」

しかも、太一と光子郎が壊れた壁の先の通路にいる…が、最悪な状況では無かった。既に天井が破壊されていて、ガルルモンとトゲモン、イツカクモンが穴の上に見える。どうやら先に救助に来てくれていたらしい。

全速力で、エテモンの足を狙って、スライディングで攻撃。俺に後ろを向けていたからか、エテモンは俺の攻撃を食らって後ろに倒れ込

んだ。その隙に、アグモン達三体を抱える。

「アイタっ!？」

「二人とも、結衣と空は!？」

「それがまだ……」

「今は逃げるぞ!太一、早く!」

太一は……原作通り、高圧電流の隠し通路を怖がってしまったんだろう。どこか虚ろな雰囲気でヤマトに手を引っ張られていく。そういう俺も……情けない気持ちで一杯だ。今は逃げるのが最善だと、自分に言い聞かせているのにも腹が立つ。

何が、俺が守るだ……何も守れていないじゃないか。

第十九話 完全体進化！メタルグレイモン

目が覚めた時、そこは知らない部屋の天井だった。辺りを見渡してみると…三辺の壁はピラミッドの壁だったけど、足下の方の壁には大きなモニターとそれを動かす機械があった。部屋にはベッドが全部で四つ…私もベッドに礫にされてるみたいだから良く見えないけど…何とか顔を起こした時に、足下の方のベッドに水色の帽子が見えた。

そつか…私、捕まっちゃったんだ。空ちゃんと一緒に、ナノモンに攫われたんだ。あれからどれくらい時間が経ったんだろう…こうなってしまった以上、太一君達の救出を待つしかない。

ふと、もう一度辺りを見渡す。私と空ちゃんがいるのに、パートナーの二人がいない…つまり、あの煙幕の中、ナノモンが攫ってきたのは私達だけってこと。良かった…ロップモンは無事だったんだ。絶対、ロップモンが太一君達と一緒に助けに来てくれる。私達はそれまで、ただ寝転がっていれば良いだけ…それだけなんだ。今は、まず空ちゃんが無事なのか確認しないと。

「空ちゃん、起きてる？…空ちゃん！」

「…う、ううん…あれ、ここは…？」

「目が覚めた、空ちゃん？体は何ともない？」

「はい…結衣先輩、ですよね？どこに…何、これ？」

『ここは、私の研究室だ』

目が覚めた空ちゃんが、少しずつ状況を理解して混乱してるみたい。そんな時、部屋全体に響いてきた、機械的な聞き覚えのある声。私はまた部屋中を見渡して、見上げるようにして私の上側を見たときに、巨大なモニターの前に立つナノモンの姿があった。

「私達をどうする気!？」

『お前たちを使って、エテモンを倒すのだ』

「…パートナーもいないのに、私達だけじゃ何も出来ないよ?」

『お前たちがこのピラミッド地下にいることは、お前たちの仲間の一人が気がつくはずだ。そうならば、お前たちを助けに乗り込んでくる

に違いない。見ず知らずのデジモンですら助けようとする連中だからな』

…あれ、確かナノモンって元々空ちゃんとかピヨモンを攫って、助けが来るのは予想外だったはずじゃ…？

「お生憎様！ピヨモン達がいたとしても、パートナーがいなきや進化出来ないわ！」

『お前たちを使うつもりはない。見るが良い』

そう言つて、ナノモンはモニターの方へと向き直る。何か操作をした後、私の頭の上の方にあつたオレンジ色の光を当てるバー？が足下の方へとスライドするように下りていった。隣に並んでいた二つのベッドの方も、同じようにバーがスライドする。少しすると、そのオレンジ色の光の場所に何かが形成されていつている。

「何よ、これ！」

『お前たちをコピーしているのだ』

「ええ!？」

『お前たちはまだ紋章の力を全く引き出せていない。だから私がこのコピーを使つて力を引き出してやろうというのだ』

ナノモンが近くのスイッチを押すと、見覚えのある形をしたもの…紋章があつた。赤い、ハートのような形が刻まれている。でも、出てきた紋章は一つだけ。あれは、多分だけど空ちゃんの紋章かな？

「それは、紋章!? 貴方が持ってたのね！」

『これは…ふむ、こちらか。生憎と一つしかないが、どうということはない。エテモン程度、紋章が一つあれば事足りる…もう片方も使い道はあるだろう』

「私と結衣先輩のタグまで…」

私達が眠っている間に取り上げたらしいデジヴァイスと紋章がある。ナノモンにもどつちのか分からなかつたみたいだけど。そういうえば、前にロップモンが、ナノモンが私の紋章を持っている可能性もあるかもしれないって言つてたっけ。残念ながら、そんなことは無かつた。

『私はかつてエテモンと戦い、過去の記憶の殆どを失つてしまった。

失われた記憶は二度と戻らない。私に出来ることは、エテモンに復讐をすることだ…どんな手を使ってもな!』

そう言った後、ナノモンは殆ど喋らなくなった。その間、私は出来る限り空ちゃんを励まし続けた。太一君達が助けてくれる、その希望を捨てないように…最善を尽くす。それが、私に出来る唯一のことだから。

☆☆☆

「居場所も分からないんだぞ? ナノモンが行動を起こすのを待つしかないだろ?」

「その間に、空と結衣さんに何かあつたらどうするんだよ」

「ナノモンの目的はエテモンを倒すことだ、だったら俺達が先にエテモンを倒せば、返してくれるんじゃないか」

「さっき負けたばかりなのに…」

スフィックスの口を通つて、昼間にいたデジ文字が描かれている洞窟まで避難した後、太一達は今後どうするかの話し合いをしていた。空と結衣をどうやって助けるのかを。夜飯を食つて、アグモン達が眠つた後も続けている。

「俺があの時、二人を助け出していけば…」

「自分ばかり攻めるなよ! 僕達だつて…」

「何か、何か出来ることはあるはずだ!」

「違うわ…私が、空をちゃんと守っていなかったから…空あ」

「ピヨモン、泣かないで…」

「……」

デジモン達でまだ起きているのは俺と、心配で眠れないといった様子のピヨモンのみ。ピヨモンの気持ちは痛いほど分かる…俺も、同じようなもんだから。ナノモンの隠れ場所、何をしているのかが分かつていても…俺には、簡単に割り切れるものじゃないらしい。

「皆さーん! 分かりました!」

洞窟の中でずっと作業していた光子郎が太一達を呼ぶ。俺とピヨ

モンもついて行くと、中にはピラミッド内部の地図が空中に映されていた。

「ナノモンは何処かに逃げたフリをしてただけなんです。実際には殆ど移動していませんでした」

「それじゃあー！」

「まだ、あのピラミッドの中にいるのか!？」

「はい。ピラミッドの地下、最も深い部分に隠し部屋が存在するんです。間違いなく、ナノモンと空さん達はそこにいます！」

「エテモンの裏をかいたというわけか……」

「空が、ここに……皆！危険なのは分かっている、でも俺、どうしても空を、二人をこの手で助けたいんだ！だから……」

「分かっているよ、太一！」

「俺達だって、同じ気持ちさ！」

「空さんも、結衣さんも、ここに居る皆の仲間だもん！」

「一緒に助けようよ！」

「私も……今度こそ、絶対に空を助ける！」

「ああ……ついでに、ナノモンをぶっ飛ばしてやる！」

「皆……！」

「そうだ、助け出すのは絶対。そのうえで、奴をぶちのめしてやる……絶対に許さねえ。」

全員が眠りについた中、俺は怒りを抑え込むように深呼吸をしながら、何とか寝ようとした……けど、それも上手くいかず、気づいたら朝を迎えることになった。

正直、体は休めていないと思うが、それ以上に早く動きたくてたまらなかった。朝日が出てすぐ、俺は散歩したり技を出したり……色々やったが、全く気が晴れなかった。これじゃダメだ。そう思って、結局は太一達が起きるまで、座って深呼吸して過ごした。

実は結衣が連れ去られた後、何とかトウルイエモンの状態を保っていられないかと踏ん張ってみたんだが、結局戻っちゃったんだよね……この件が済んだら、常時成熟期になれるように特訓しねえと。

で、肝心の作戦だが、テントモンが探索に出た結果、ピラミッドの周囲にはティラノモンやモノクロモン、ガジモンなんかがウジャウジャと配置されていて、気づかれずに潜入というのはまず無理だ。なので、ヤマト達が囷になっていて間に太一と光子郎、アグモンにテントモン、俺、ピヨモンが一気に潜入するという作戦だ。

「二人を助けるのが第一だ、くれぐれも無理な戦闘はするんじゃないぞ」

「ああ」

「丈さん達こそ、無理な戦闘は避けて下さい。エテモンが出てきたら、皆逃げて構いません」

「分かってる。タケルも、良いな？」

「うん！」

「皆無事で、ここに帰ってきましょう！」

ピラミッドを囲むようにヤマトと丈が配置につくまでの間、俺達は布団代わりに使っていた布を隠れ蓑にして、砂に擬態して待機だ。

数分後、ピラミッドにミサイルが着弾した。別の方向では、青い炎が空に迸っているのが見える。どうやら、二人が動き出したらしい。少しして、エテモンが乗っていると思われるトレーラーがピラミッドから出て行った。

「行くぞー！」

「気をつけてね！」

ミミヤタケルと別れ、俺達は隠し通路からピラミッドへの潜入に成功した。順調に進んでいるが、昨日の戦いの余波か所々崩落している場所がある。ある程度進むと、完全に瓦礫で進めなくなっている場所があった。

「一旦、隠し通路から出ないとダメですね…」

…この時に、隠し通路から出たのが原因で監視カメラに映って、エテモンが戻ってくるんだっけか。俺達にとっては不利な展開ではあるが、ガジモンの通報が無いとヤマト達がピンチになったはず。ここは、原作を変えるとか言ってる場合じゃ無い。

「…よし、大丈夫そうだな」

隠し通路の外に出て、別の隠し通路に移動して、そのまま慎重に進んでいく。思ったより、所々崩れているんだな…ここだけじゃなく、数回正規の道に出ないと通れない場所が何カ所があった。

ビーー!!ビーー!!

「な、なんだ?」

警報が鳴り響いた直後、隠し通路の外にはガジモンがウロウロし始めた。完全に警戒態勢になっちまったな…しかし、大分進んだことには変わりないはずだ。

「気づかれたみたいでんな…」

「あともう少しなのに…あの通路を右に行つた正面の壁が、ナノモンの部屋に通じる隠し通路になつていているんです」

「…何か、聞こえない?」

「何かつて?」

「…上だ!避けろ!!」

天井の方から聞こえる、ドゴオン!という破壊音。これは、何者かが一直線にこつちに向かつてきているということだ。

太一達が俺の声に反応して上を見たその時、天井が崩壊し…エテモンがやって来た。

「うわあ!」

「見くつけた!ナノモンが何処にいるか教えて貰うわよ!」

「太一さん!ここは僕とテントモンで何とかします、早く空さんと結衣さんを!」

「テントモン、進化——っ!!カブテリモン!!」

「光子郎、頼んだぞ!」

成長期の俺達じゃ足手まといになる…そう考え、ピヨモンに太一達の後を追うように促し、先へ急ぐ。やがて、昨日見た高圧電流が流れている鉄格子の壁の場所まで来ることが出来た。後は…

「……」

「…僕が先に行くよ!」

「待ってくれ、アグモン。二人も」

「太一…」

「…俺が行く！この壁の向こうには、俺の大切なモノがあるんだ」

「…空のこと？」

「…ああ、けどそれだけじゃない、俺があの時失ってしまった、もっと大切な何かがあるような気がするんだ」

「太一、頑張れ！」

体が小刻みに震えているのが、少し遠くから見ても分かる。そう…皆、まだ小学生なんだよな。ただの小学五年生だった太一が、命を賭けて、惚れた女を助けようとしている。

「…ここが正念場だ…太一！」

「頑張つて、太一！」

「勇気を出して!!」

「う、うああああっ!!」

太一が、右手を壁に突っ込む。ちゃんと隠し通路に通じていて、さらに…太一の勇気の証を示すように、太一の胸元が光り輝いたのが俺には見えた。

「やったあ！」

アグモンが叫んだ瞬間、後ろの方からカブテリモンとエテモンが通路を破壊しながら現れる。カブテリモンの腕を掴んで、抑え込むエテモン。それを見たアグモンが一步踏み出す。

「アグモン、進化——っ!!グレイモン!!太一、今の内に！ロップモンとピヨモンも！」

「…頼む。行くぞ、太一！」

「分かった！」

隠し通路を抜けた俺達は、そこで今までの部屋とは違う場所に出た。大きなモニターと機械、部屋に置かれている四つのベッド、そしてその中の二つに寝かされている、二人の少女。

「空!!」

「ピヨモン！太一！」

「ロップモン……！」

「結衣……！」

……！
すぐに助けてやりたいが、今はまだ耐えろ……部屋全体を、観察しろ

「空と、結衣さんが……二人？」

『たった今、コピーは完了した』

太一はベッドにいる二人と、ナノモンの近くに立っている二人を見て混乱しているらしい。

「……随分と趣味の悪いことやってるなあ、ナノモンよ」

『エテモンを倒すため、そのピヨモンとロップモン、そしてこのコピー二体を使い紋章の力を引き出してやろうというのだ。光栄に思うが良い！』

「何だって……！ふざけるな、それは空と結衣さんの物だ！」

太一がナノモンの傍まで駆け出そうとしたその時、結衣と空が叫んだ。

「太一、ダメー！」

「ロップモン、ナノモンの下、三発!!」

「『ブレイジングアイス』!!」

昨晚、ずっと考えていた。ナノモンがなぜ選ばれし子供だけを攫ったのか。いや、本来は空とピヨモン、結衣と俺……どっちか一組だけなら攫うことが出来た。しかし、あの時は俺もピヨモンも成熟期の姿だったし、大きさ的にも、タイミング的にも捕まえることが出来なかった。だから、二人だけを攫って、俺とピヨモンが助けに来るはずだと予想をつけて、その時に俺達も捕まえるつもりだった。

そうなれば狡猾なナノモンのことだ、部屋の中に何かしらの罠を仕掛けているはず。ナノモンが真正面から俺達を攻撃することは、最終手段にするはずだ。つまり、罠を仕掛けている場合、ナノモンは目の点滅という分かりやすい特徴はあるが、それ以外はノーモーションで発動させることが出来る。成長期に退化してしまった俺達にナノモンを止めるのは無理……だったら、罠が発動する前にその罠自体を攻撃するなりして、何とか突破する必要があった。

そこまで考えて、一つ、解決策を思いついた。結衣の観察眼なら、どこの罠が作動するのか、分かるんじゃないか？罠の内容が分からなくても、ナノモンが操作するあのモニターには、その罠が作動する場所が表示される、とか。そういった、よく観察しないと見抜けないことも、結衣なら分かるはず。

だったら、俺が部屋に入った時にすることは、ナノモンと結衣、そして部屋全体をよく見ることに。そして、結衣の声に耳を傾けることだ。

『何…!?!』

俺の冷氣弾が、ナノモンの乗っている機械に直撃。それによって、中から何かしら飛び出す仕掛けだったのだろうが、俺の冷氣弾が蓋をする形になって罠は不発となった。

その間に太一が走り出し、二人のデジヴァイスと紋章（結衣のはタグだけみたいだが）を機械から取り返す。そのまま空と結衣の方に来ようとする太一だったが、ナノモンが目を光らせているのが見えた。確か、この後は…ヤバイ！

「太一、結衣のを投げろ！」

『ふん、もう遅い！』

「きやつ…!?!」

「太一っ!!」

「空!!」

「くっ…!」

結衣と空が寝かされていたベッドが消え、穴がそれぞれの真下に一つずつ開く。

太一とピヨモンが空を、俺は結衣を下に突然空いた大穴に落とさないうように必死に掴む。やべ…これじゃ俺も、動けん…!

「お、おも…」

「ロップモン……」

「こ、これは…!?!」

『エテモンのネットワークを形作っている暗黒の力の中心部だ。そこ

に落ちれば全ての物が暗黒の力に吸収され欠片も残らない。オリジナルに用は無い、消滅してもらおう!」

「そんなこと、させるもんですか!」マジカルファイアー!」

ピヨモンが太一に空を任せて、ナノモンを迎撃しているが…やっばりだ、アイツ機械なだけあって固いらしい。全然効いてねえ…!

穴の底を見ると、巨大なチューブでぐるぐる丸くまとまった物が見えた。それを見ただけで、体にゾクツ…つと、背筋が凍るような感覚を覚える。これが、闇の力なのか…

いや、今はそんなことどうでも良いだろ!まずは、結衣を何とか引っ張り上げねえと…

「くっ…ぐ、ぐうっ!」

「ロップモン…」

「ゆ、い!掴め、るか!」

「う、うん!」

ほんの少しだけ俺が持ち上げたことで、結衣はもう片方の手を伸ばして穴の縁を掴んだ。よし、これで俺が離しても大丈夫だろ!

「太一、こつちに投げろ!!」

「あ、ああ!」

「…よし!結衣!」

「うん!」

太一が投げたデジヴァイスとタグを、耳でキャッチ。そのまま流れるように結衣に手渡す。それと同時に、デジヴァイスが光を放つ。

「ロップモン、進化——っ!!トウルイエモン!!」

「わっ」

進化した俺は、結衣の手を掴んで引き上げ、そのまま結衣を背負う。また穴を空けられたりしたら面倒だからな。

「ピヨモン、進化——っ!!バードラモン!!」

どうやら、ちゃんと空にもデジヴァイスと紋章は渡ったらしい。バードラモンが穴の中に足を入れて、すぐに浮上すると、足にぶら下がる太一と空が見えた。

『しまった…!』

「結衣! 口閉じて、しつかり捕まってる!!」
「っ!」

俺は逃げる前に、呆けているナノモンの方へ跳んだ。右手だけ兎角鉄爪を展開し、ナノモンへ振り下ろした。

『グハツ…!』

「ふう…:とりあえず、この一発だけはやつとかねえとな」

怒りが無くなったわけじゃないが、少しはスッキリした。踵を返し、今度こそバードラモンが突き破った入り口の方へ向かう。あそこ、例の高圧電流の隠し通路の筈だが…見事に瓦礫の山だな。壁を破壊した先にはグレイモンとカブテリモン、光子郎の姿があった。で、瓦礫の中に埋もれている、ビクビクと小刻みに震えているのがエテモンだな。

「アバババツ!」

そんな感じの奇声が聞こえた気がするが、無視。エテモンにとっては、どうせ大したダメージにはならねえだろ。電流でしばらく痺れてくれ。

「空さん、結衣さん!」

「心配掛けてごめん!」

「逃げるぞ、皆!」

目的が達成された今、もう隠密だの何だの気にする必要は無い。正規の道を目安に、一直線に道を作りながら外に出る。

「おーい、皆!」

ざっと見た感じ、作戦通り散らばっていたエテモンの手下達を上手く分散させることが出来たみたいだな。スフィックス側にいる敵の数は数えるほどで、丁度ヤマト達がこっちに向かってきていた。

と、その時だった。背筋が凍る感じを背後に感じて勢いよく振り返る。

「トウルイエモン?」

「…早く逃げるぞ」

俺を先頭に、ピラミッドから離れヤマト達と合流することには成功した。ただ、移動する間ずっと嫌な感じがして、しかもそれが段々強くなっているように思えて仕方がない。

「空さん、結衣さん！無事で良かったあ〜！」

「皆、心配かけてごめんね」

「エテモンや、ナノモンは？」

「まだピラミッドの中みたいだな…早くここから離れよう！」

「…なあ、トコモン」

「どうしたの？」

「お前は感じるか？あのピラミッドから…」

「…う、ん。何か、変な感じ」

やっぱり、トコモンも感じるってことは…間違いない、闇の力とやらが増大してやがる。これはつまり…ナノモンが、あの気持ち悪い塊を活性化させたんだ。

「な、何？」

「引っ張られてるような…？」

「皆！早くスフィックスへ！」

ピラミッドを中心に吸い込まれていくティラノモンとかのエテモンの手下のデジモン達。俺達は流れに逆らえているが、奴らは多分黒いケーブルのせいで逆らえないんだろう。

「何が起こってるんだ!？」

「こっちが逃げるのには好都合です！」

「見て、ピラミッドが！」

殆どのデジモン達が吸い込まれ…ピラミッドから、禍々しい光が放たれた。

「ど、どうなってるんだ？」

光が収まると、突然ピラミッドが崩壊する。そして、ピラミッドの底…瓦礫の中から現れたのは、ピラミッドと同じくらいに巨大な、塊。さつきナノモンの部屋で見た、あの気持ち悪い塊だった。

さつき見た物と唯一違うのは…その暗黒の力の塊に、エテモンが下

半身を取り込まれていることだ。ナノモンが道連れにしようとした結果、エテモンがパワーアップしてしまった…だが。

『アハハハッハッハッハ！アチキがこんなことでやられると思ってるの？』

「エテモン…!?!」

『ナノモンが勝手にくたばってくれたわ…次はアンタ達の番よ』

「メテオウイング」！

「メガブラスター」！

バードラモン、カプテリモンの技がエテモンの下の塊に当たるが、当たった瞬間にデータ粒子化…見た感じ、吸収されたっぽい。

『あら、肩こりに丁度良いわ。これが代金よ、ダークスピリッツ』

「うわっ！」

見た感じは前に見た技と変わらないが、バードラモンとカプテリモンの二体を弾き飛ばし、遙か遠くに見えていた山、そして俺達の脱出の手段であるスフィックスに直撃。すると、直撃した場所に飲み込まれるように…山も、スフィックスも消滅した。

「ああ、スフィックスが！」

「逃げ道が、無くなった…！」

「このままじゃ、この世界全体が無茶苦茶になっちゃう！」

「でも僕達が敵うはず無いじゃないか！」

エテモンのパワーアップに、殆ど全員が絶望している…しかし、一人だけ希望を捨てていない男がいた。胸元の輝きを見て、その瞳に光を宿している。

「いや、まだ一つだけ方法は残っている。行くぞグレイモン！」

「分かった、太一！」

『アハハハ！まだやる気なのね！』

「俺は逃げない、絶対に！」

太一が、紋章をその手に持って掲げながら走る。グレイモンも太一

と一緒に。紋章が輝いているのは、俺達からでも確認出来た。

「見て、太一さんの紋章が！」

「光ってる、紋章が光ってる！」

『ハン、無駄だつて言ってるんで、しよー！』

「うおっ……！」

エテモンの「ダークスピリッツ」に吹っ飛ばされるグレイモン。
地面に仰向きに

倒れてしまった。

「最後まで諦めるな、グレイモン！」

「太一の勇気が、僕の体に……力が漲ってくる……！」

太一の持っている、デジヴァイスと紋章が、オレンジ色の光を放つ。
それは今までの進化とは違う、力強い輝きだった。

「グレイモン、超進化——っ!!メタル、グレイモーン!!!」

「これは……！」

「紋章の力だ……！」

グレイモンの左腕と頭部の外殻、胸部や尻尾の一部が金属へと変化し、背中には紫色に透き通った翼が生える。大きさもグレイモンの何倍にもなり、今のエテモン程ではないにしても、かなり巨大になった。
「これが、グレイモンの進化……！」

『少しくらい進化したからって、アチキに勝てるはず無いでしょー！』

エテモンの「ダークスピリッツ」を、メタルグレイモンが左腕の「トライデントアーム」で切り裂く。時空を歪ませる程の攻撃を、容易く。

『何ですって!?!』

「グアアアアッ!!」

「メタルグレイモン……！」

メタルグレイモンが雄叫びを上げ、エテモンに体当たりを喰らわせる。必殺技を破られたことに驚愕していたエテモンは、その一撃を食

らい大きく退く。

『…ぬううっ！よくもよくも、踏み潰してくれるわ!!』

エテモンの、暗黒の力の大きさに正直ビビっていたが…今のメタルグレイモンには、その闇の力を凌駕する程のパワーを感じる。

そして、ついにメタルグレイモンが決着をつけるつもりらしい。体に聖なる力を宿して、淡く光り始めた。

「メタルグレイモンが、光ってる!？」

「光のエネルギーだ!」

「聖なる力だよ!」

「『ギガデストロイヤー』!!」

メタルグレイモンの胸部から射出された、二発のミサイル。それが暗黒の塊に直撃し、その爆風で俺達は吹っ飛ばされそうになる。何とか目を開いてみると…暗黒の塊が、さっきの山やスフィンクスみたい

に、暗黒の塊が時空の歪みに飲み込まれ始めた。それに飲み込まれて始めているエテモンと…俺達よりもエテモンの近くにいた太一とメタルグレイモン。

『消えたくない、アチキは大スターなのよ!?!何でこんな所でえええ!!』

「太一!!」

「うわあっ…!メタル、グレイモン…!」

時空の歪みに飲み込まれ…俺達の目の前には、砂漠だけが残った。

ヴァンデモン編

第二十話 結衣の心

エテモンとの決戦から、時空の歪みに飲み込まれてしまった太一とアグモンを探して、俺達は何も無い砂漠地帯を歩き回った。

あの二人は一時的に人間界に帰ってるから、俺達は特に何も心配することはなく、寧ろこれからどうするべきなのかを考えなければならぬのは、俺達の方だった。エテモンがいなくなってから、明確な敵という敵が現れない。今までデビモンにエテモンという強敵がずっといて、倒すべき目標がハッキリしていた。

しかし、今はただ漠然と二人を探すだけの日々が続いた。結衣にも以前話したんだが、俺の話を聞いても結衣は太一達の搜索を止める気は無いらしい。選ばれし子供達の中で、唯一紋章が見つかっていないのが結衣なんだが…探し回っている間、紋章探しは後回しだ。まあ、反応すること自体無かったから探しようが無いんだが。

優しさの紋章に関しては、俺も全く知らないからな…初登場も確か、デジモンカイザーこと一乗寺賢が要塞の暗黒の力を制御する為に使ってたんじゃないか？とにかく、賢が手に入れた場所に関しては明記されていなかったはずだ。唯一の手がかりになりそうなのは、賢の初めての冒険が砂漠っぽい場所ってことだけか…？

「結衣さん、紋章は探さなくて良いんですか？」

太一搜索から一週間くらい経った日の夜。光子郎が結衣にそんな質問をしてきた。

「あ、うん…今はそんなに強い敵もないみたいだし、急ぐ必要は無いかなって」

「確かに…エテモンがいなくなってるから、殆ど戦うことも無かったし」

「太一さん…どこに行っちゃったんだろ」

「アグモンもいるんだ、心配はいらないよ！」

タケルが不安そうにしているのを、ガブモンがフォローを入れる。ガブモンのやつ…タケルの扱いが上手くなってきたな。

「私のことより…空ちゃん、大丈夫？」

「あ、はい…大丈夫です。でも…これだけ探しても見つからないなんて…」

「あの時…エテモンをメタルグレイモンが倒したあの時、何処かに吸い込まれたように見えました…」

「ああ、俺もそう見えた。けど、一体何処に…」

「…あの黒いのと同化したエテモンは、空間を歪ませるような力を持ってた。山とか、スフィンクスとか」

「あの姿、気持ち悪かったあ…」

ミミのその言葉には同意するが、今はそういう話じゃない。

「つまり結衣さんは、太一さんとメタルグレイモンは空間の歪みに吸い込まれたと思っっているんですね？」

「うん」

「それって…もしかすると、すつごく遠くに飛ばされちゃったってことなんじゃないか？」

「…確証はないが、だったら砂漠だけを探すのは非効率かもしれないな」

そういえば、この時のヤマト達って砂漠をずっと彷徨ってたんだろ
うか？原作じゃ、砂漠にしかいなかったようだったが…太一がこっち
に戻ってくるのに二ヶ月くらいかかってたはず。砂漠をくまなく探
していたんだったら、それくらいかかる、か…？

「危険が無いんだったら、手分けして探すのも良いかもしれませぬね。
合流する場所と時間を決めるとかどうでしょう？」

「そうだな…」

「でも、私達はこのサーバ大陸を全部知ってるわけじゃない。もしか
すると、エテモンよりも強い敵だっているかも…」

「…結衣さん、そんなこと言ったら何も出来ない。今こうやって太一
を探し回るのも危険ってことになるじゃないか」

「…ごめん。私が言いたいのは、危機感を忘れない方が良いつてこと。

油断して、痛い目に遭ったら遅いから…」

「ヤマト、言い過ぎよ。結衣さんの言ってること、分かるでしょ？」

「…ああ。結衣さん、悪かった…」

「ううん、大丈夫。気にしないで」

それにしてもずっと思っていたが、太一とアグモンがいなくなつてから子供達に活気が無い。話し合いにも身が入っていないし…これじゃ、離ればなれになってしまうのも頷けるな…特にヤマトは今の状況に苛立つてきているみたいだ。

話し合いの結果、今後は朝から二手に分かれて行動し、夕方に決まった場所に合流するという事になった。

☆☆☆

皆で話し合いをしてから、一ヶ月くらい経った。太一君はともかく、私の紋章も見つけられず、しばらく探索するだけの日々が続いて…皆の危機感もかなり薄れてしまつていると思う。このままだと…ロップモンが言っていた通り、皆離ればなれになってしまうこともあり得る。私は、出来ることならそれを阻止したい。何とか皆をまとめなきゃ…

「今日はこの辺りを探そう」

「では、夕方にまたここで合流ですね」

ここ最近、探索のチーム分けも固定化してる。私は光子郎君とミミちゃんの三人で行動することが殆ど。こういう組み分けになつたのにはちゃんといくつか理由があつて、一つ目は機動力を考慮して空ちゃんと光子郎君が別々に。二つ目は私の紋章を探すという事を考えて、もしかしたら光子郎君のパソコンの力が必要になるかもしれないということ、私と光子郎君と一緒に。三つ目は…丈君とミミちゃんの意見だけど、年長者は別れた方が良いということと本人の希望で、私と丈君は別々に、ミミちゃんは私と一緒にになった。

合流地点を決めた私達は、二手に分かれてそれぞれ別々に行動を開始した。カブテリモンに乗せて貰って、上空から探索をしていた時の

こと。

「結衣、タグはどうだ？」

「うーん…ダメ、反応無し」

「ねえ光子郎君？パソコンで紋章の場所が分かっていたりしないの？」

「周囲の様子を探ったりは、しているんですが…」

「ミミちゃん、無理言ったらダメだよ」

「皆はん、下を見てもえまっか？」

カブテリモンの声を聞いて、私達は下の景色を見てみると、そこには砂漠の中にポツンと見える一つの茶色い何か…どうやら、デジモンが倒れているみたい。放っておけないと思った私はカブテリモンにお願いして、その茶色いデジモンの近くに降りて近づいてみることにした。

倒れていたのは、茶色い兎のようなデジモンだった。大きさは、私よりも少し大きいくらい。両手が鋭く尖っていて、鉄製のグローブをつけてるみたい。よく観察すると、垂れているその耳の先も鉄のように尖っていた。見た目可愛らしいのに、所々危ない印象を受ける。デジモンならではの物騒な感じがした。

「コイツは…!？」

「プレイリモンやな。普段は地中で暮らしてるデジモンや」

「モグラみたいね」

「それより、怪我してる…」

プレイリモンはボロボロで、戦った後みただった。皆で相談して、近くにあつた洞穴…多分、プレイリモンが掘ったものだと思われるその中に運んで、水で傷口を洗ったりとか、簡単に手当をして、プレイリモンが目覚めるのを少し待ってみる。私達はその間、この後どうするかを話し合うことにした。

「それにしても、何でこんな何もない場所で倒れていたんでしょう？」

「うーん…」

「…この穴、奥が何処かに繋がってるみたいだな。風の音が微かに聞こえる」

「じゃあ、プレイリモンはそこから来たってこと？」

「きつとそうよ！行ってみましょ！」

「…待って。光子郎君とテントモンには、ヤマト君達を呼んで欲しい。もしかするとプレイリモンがこんな怪我をした原因のデジモンがいるかもしれない」

「そうですね…分かりました」

「あとは、一度この辺をもう一度探索した方が良いと思う。他にも怪我してる子がいるかも…」

「あーじゃあ、私とパルモンで見回ってきまーす！」

ピン！と手を伸ばしてそう言ってくれたミミちゃん。助かるけど、ミミちゃんにはここでプレイリモンの看病しててもらおうつもりだった。もし探索中に敵に遭遇したら大変だから。やる気満々なミミちゃんをどうにか説得しようとしたけど、ミミちゃんは元氣よく走って行ってしまった。光子郎君とテントモンも少し遅れて洞穴から出ていく。

「丁度良い、伝えておくことがある」

「何？」

「俺はプレイリモンを見たのは初めてだ。だが、どんなデジモンなのかは知ってる」

二人きりの時に話すっていうことは…ロップモンの知識では見たことが無いって、そういうこと…だよな？でもプレイリモンを見たことが無いからって、特に不思議でもない気がするけど。

「ロップモンが見たこと無いデジモンがいても不思議じゃないと思うけど」

「そりゃそうなんだが、コイツは少し特殊なデジモンなんだよ。プレイリモンはアーマー体に分類されるデジモンでな…進化に特殊な条件が必要なんだ」

「勿体ぶるね…つまり？」

「プレイリモンに進化する条件は、優しさのデジメンタルっていうアイテムが必要なんだ。まあ、自然に進化する場合もあるらしいんだが、俺はコイツの住処とかの近くに、結衣の紋章の手がかりがあると思ってる」

「それって……！」

「……うう」

その時、横になっていたプレイリモンが呻き声を上げた。

「あ、起きたか？」

「ひっ……いき、君たちは……う？」

目を覚ましたプレイリモンは、私達の顔を見た途端に体をガタガタと震わせて縮こまってしまった……やっぱり、何かあったんだ。こんなに怯えてしまうような何かが。

「落ち着け。俺達はお前が行き倒れてたから助けてやったんだよ」

「ひっ……！」

「ロップモン、そんな言い方じゃ信じて貰えないよ」

「む……あー、何かすまん」

ロップモンって初対面でも高圧的な喋り方するんだよね……私も初めて会った時はビックリした。

「ごめんね、悪気はないから許してあげてね。私は結衣。こっちがロップモン」

「……ぼ、僕はプレイリモン。助けてくれてありがとう……」

プレイリモンはそうお礼を言ってくれた。少し落ち着いてくれたみたいなので、本題を聞いてみる。

「ねえ、プレイリモンは何で砂漠で倒れてたの？それに酷い怪我もしてたし……」

「そ、それが……僕達は元々、地中に暮らしていたんだ。けど、突然アイツがやって来て……」

「アイツ？」

「……要するに、お前は他のデジモンに襲われて、この砂漠まで逃げた所で力尽きたわけか」

「あ、ああ……ここら辺では見ないやつだったよ……」

そう言いながら震えるプレイリモン。よほど恐ろしいデジモンだったのかな……アーマー体っていうのは、成熟期のデジモンくらいの強さって思っていて良いのかな？だとすると、そのプレイリモンの群れを襲った敵っていうのは、完全体くらい……？だとしたら、私達だけ

だと力不足かもしれない。光子郎君にヤマト君達を呼びに行つて貰つて正解だった。

「ロップモン、良い？」

「ああ」

「ありがと。プレイリモン、私達で良かったら力になるよ」

「や、止めた方が良い！君たちじや、あんな強い奴に勝てない：僕達が群れで束になつても勝てなかつたんだ！」

「大丈夫、私達には仲間がいるんだ。皆と協力すれば、何とか出来るよ！」

「とりあえず俺達は先に偵察に行つてみるか。この洞穴、お前が掘つたんだよな？住処はこの先で良いのか？」

「そ、そうだけど…いや、しかし…」

「よし：それと、確認しておきたいことがあるんだが」

「な、何だ…？」

「こんな感じの模様、見たことはねえか？俺ら、これを探してんだ」

ロップモンが手で地面の砂に、円とか三日月とか、見たことが無い模様を描く。これが、私の紋章：優しきの紋章、だっけ。

「これは…」

「見覚え、あんのか!？」

「こらつ、そんな詰め寄つたらダメ。ごめんね」

「い、いや…：これは、僕達が住んでいる地下溪谷の底にある石碑によく似てるよ」

「成る程…：だつたら、尚更行かないわけにはいかねえな」

ロップモンの言葉に頷き、ロップモンもまた力強く頷く。そんな私達のことを、プレイリモンがキョロキョロと見回している。

「もしかして、君は選ばれし子供なのか？」

「あ、うん。そうらしいよ」

「そうか…：分かった。君たちがどうしてこの模様を探しているのかは分からないが、こつちとしても君たちに来てもらえるのはありがたい。どうか、僕達を助けてはくれないだろうか？」

「勿論！」

「よし、それじゃ決まりだ。プレイリモンはここで休んでろ。俺達で先にコイツの住処とやらに行つてみようぜ」

「え、でも皆を待つてからの方が…」

「後で合流できるし、慎重に探れば問題ねえつて。それとも俺だけで先に見てくるか?」

「…それはダメ。一緒に行こ?」

「おう」

確かに、この洞穴一本道みたいだし…先に行つても問題ないよね。何かあればすぐに引き返せば良いし。

ロップモンが洞穴の奥へとズンズン進んでいく。私もその後について進んでいくけど、段々暗くなつていくから殆ど何も見えなくなつてくる。穴の大きさはそれ程狭く無いから、進みやすくはあるんだけど、ちよつと怖い。

「ろ、ロップモン、ちよつと待つて…」

「ああ、悪い。ほれ」

へつぴり腰で進む私を見て、ロップモンが見かねて耳をこつちに伸ばしてくれたらしい。声のする方に手を伸ばすと、もふもふした何かを掴んだ。ああ…片手だけでも癒やされる……

「ユイ、ロップモン、待つてくれ!」

「ひやつ…!」

「お前…休んでて良いんだぞ?」

後ろから声をかけられて、変な声出た…ロップモンは何事もないように、プレイリモンにそう返事した。プレイリモン…だと思うけど、ほぼ真つ暗で見えない。

「そういうわけにもいかないだろう、僕達の問題なのに…」

「でも、まだ怪我が…」

「これくらい、大丈夫。心配してくれてありがとう。ここからは僕が先に行くよ」

そこからはプレイリモンが先頭を行つて、私とロップモンがその後ろに続く。進んでいる最中に、私はあることを思い出した。

「あ…どうしよう、皆に何も言わずに来ちゃった」

「光子郎がいれば大丈夫じゃないか？ 洞穴を見つけさえすれば何とか…」

と、その時。

ドーーーーーン!!!

「な、何…!?!」

「まずい!」

突然、浮遊感が体を襲った。今まで体を預けていた足下や壁が突然崩れ、私達は今…落ちていた。

「ロップモン、進化——っ!! トウルイエモン!!」

「…っ!」

進化したトウルイエモンが私を抱え、私は歯を食いしばって目を瞑る。何処までも続くかと思えた落下は、ボフンツ! という衝撃と共に終わりを告げた。

「あ、ありがとう…」

「ああ…ったく、何だったんだ、今のは?」

「あれ…プレイリモンは?」

見渡しても…って、暗くて何も見えないから、トウルイエモンの聴覚を頼るしかない。今は手持ちに灯りになりそうなものは無い。懐中電灯? そんなもの、一ヶ月以上デジタルワールドにいれば電池は既に切れてしまった。あとはチャッカマンくらい?」

「ちよつと待て…砂やら石やらがうるさくて分かりづらいんだ…:…:見つけた!」

耳を澄ませたトウルイエモンが、近くの砂地に歩いて行き、砂の中に手を入れる。そして勢いよく引っ張ると、片足を掴まれてるプレイリモンが出てきた。

「…う、うーん…:…」

「気絶してるね…」

試しに顔を軽く叩いてみるけど、起きる気配はない。さっきのこ
と、聞いたかったんだけどな…

「案内役のコイツがこれじゃ、どこ行けばいいのか分かんねえな…ど
うする?」

「うーん…トウルイエモン、周りの音を聞いて何か分かる?」

「ん……さっきの轟音の原因かは分からんが、あっちの方から何か聞
こえてくるぞ。何の音かは良く分からんが」

「他は?」

「特に聞こえねえ」

「じゃあ、そっちに行ってみよっか。慎重にね」

「おう」

他に行く当てもないし、元来た道にも戻れないし…まあ、何となく
何かあるのは間違いないんだけど。下手をすると例のプレイリモン
の群れを襲ったデジモンに会っちゃうかもしれないから、ホント慎重
に行かなきゃ…トウルイエモンがいてくれて良かった。

それにしても…どうしよう。私達が皆の所に帰るまで、どれくらい
かかるだろう?まさか、このまま皆の所に帰るまで何日もかかったり
すれば、皆がバラバラになっちゃう…急がなきゃ。

それからしばらく、溪谷みたいになった道を進んでいく。段々と、
私の耳にもさっきの轟音のような音が聞こえてくる。たまに雄叫び
のような声も聞こえてくるから、進んでいる方向は間違っていないは
ず。

「う、うう…あれ、ここは…?」

「目が覚めたんだね、プレイリモン」

「起きたんなら下ろすぞ」

プレイリモンを背負っていたトウルイエモンが、ゆっくりと姿勢を
低くする。プレイリモンが地面に足を下ろして、トウルイエモンは先
を進んでいく。その後、私とプレイリモンが続く。

「さて、そろそろ話を聞かせて貰おうか?さっきのドーンって音は何

「だっただんだ？」

「音…そう、それだ！あれは奴が壁を殴った音だよ！」

殴った音…？え、どんな怪力なの？というか、殴るだけでそんな爆発したみたいな音が鳴るの…？

「その奴ってどんなデジモンなんだよ？もう少し詳しく教えろ」

「あ、ああ…奴は緑色で、腕が四本ある。力が凄く強くて、僕らの攻撃じゃ傷一つ付けられないくらい固いんだ…」

説明しているうちに段々と弱々しくなっていくプレイリモン。でも今の説明だと…私には肌が緑色で四本腕の怪人にしか思えないんだけど…何か、想像してて気持ち悪いなと思っちゃった…

でも、トウレイエモンは何か分かったらしい。目を少し見開いて、その後すぐに考え込むように顎に手を当てている。

と、その時。真つ暗だった視界が、突然光った。暗闇に慣れたせいとか、それ程強く無い光なのに思わず目を覆った。

「これは…！」

「私の、タグ…？」

「紋章が近いみたいだな…ってことは、だ。その奴ってのと戦う可能性があるってことか…」

「トウレイエモン…？」

私の声に返事はせずに、額に手を当てるトウレイエモン。その後、大きく首を振って、両手で自分の頬をパァン！と叩いた。

「…結衣、言っておく。敵が俺の思っている通りの奴だとしたら、十中八九負ける。ヤマト達に協力してもらったとしてもだ」

「…完全体？」

「そうだ。今の俺達じゃ…少なくとも、俺の攻撃はソイツには通らないだろうな」

苦々しい表情を浮かべるトウレイエモン。確かに、トウレイエモンの攻撃力はグレイエモン達と比べると低い方だと思う。大きさも一番小さいし、トウレイエモンの戦い方は素早さを活かして攪乱して、隙を突いて攻撃するスタイルだから…せめて、大きさがエンジエモン以

上あれば力も強くなりそうだけど。

「とにかく…どうするのか、慎重に考えてくれ」

「うん…トウレイエモンはどう思ってるの?」

「…正直言えば、逃げるべきだと思ってる。まあ、聴いた感じ逃げ道が分からないが」

先頭に行くトウレイエモンが足を止めた。私も足を止めたのに、さっきまでよりタグの反応が強くなっている気がする。それだけ紋章の場所に近づいたってこと…?

「…これ以上は、不味いな」

「近いの…?」

「ああ…音か何かで気づかれたらヤバイ」

「や、やっぱり君たちは逃げた方が良い…怪我を手当てしてくれただけで十分だ。僕が地上まで掘り進むから…」

「……………」

私は、今逃げるのは嫌だ。助けられるかもしれないのに、最初から諦めるのは違うんじゃないかと思ってる。それに、こっちは敵のことを知り尽くしているであろうトウレイエモンがいる。だったら、弱点を狙うことも出来るはずだ。

「…トウレイエモン。私は、プレイリモンの仲間を助けたい。もし敵が完全体だとしても…倒せないとは限らないでしょ」

聞いた感じ、力と守りは凄そうだけど、スピードならまだトウレイエモンの方が素早いんじゃないかと思ってる。それに、ここは元々プレイリモンの住処。地形に関しては彼らに聞けば利用することも出来る。

作戦を立てて、上手くいけば完全体が相手でも勝てる…と思う。プレイリモン達を助けるには、これしかない…私にはここで時間を取られてる暇は無い。急いで皆の所に戻らないと。

「…そう、か。プレイリモン、お前の仲間は何処にいるんだ?」

「分からない…もしかすると、まだこの近くにいてもかもしれないけど

…」

「そんな…!」

「…おい、プレイリモン!ここで結衣を守れ!」

「え…トウルイエモンは?」

「俺が一人で行ってくる。お前らはここで見てろ」

「何、言ってるの…?ちゃんと作戦を立てないと、勝てるものも勝てないよ!ただでさえ、敵は強いんじゃないの!?!」

「…結衣。お前、変わったな」

「は…?」

私が、変わった…?何を言っているのか理解が出来ない。何故か、胸の中で何かが痛んだ気がした。

「俺の知ってるお前はこう言うはずだ…戦わずに助ける方法を探そうってな」

「…そんな、こと…!」

私は、そんなことを言われてられないって理解しただけ…この世界にはそんな甘さは通用しない。敵は、倒さなきゃ…倒さないと、他の誰かが傷つくんだ。

「結衣、お前ならまずプレイリモン達の安否を確認すると思ってたんだが…どうしたんだ?」

トウルイエモンのその言葉に、何故か怒りを覚えた。つい我慢しきれずに、私は感情のままに声を荒げる。

「どうしたって、何言ってるの…?!君が言ったんだよ、敵を倒さなきゃ、皆が傷つくって!だから、私は…私は…っ!」

「…結衣、俺は」

初めてトウルイエモンに怒鳴ったと思う。でも、声を荒げずにはいられなかった。私に冷酷さを求めたのは、他ならない君だったはずなのに。何でその君が理解してくれていないの?君は、あの時の…ピッコロモンの試練で言ってた躊躇するなっていうのはどういうつもりで言っていたの…?

下ろされた。

やべえ…思っていたよりも攻撃速度が速え。これじゃ、迂闊に近づけねえ。

「グオオオツ!!」

「うおっ…ったく、お前はいちいち叫ぶなっつ!!」

徐々にグラウンドラモンがこっちに近づきながら、二本の巨腕を振り回す。ギリギリ躲せる距離を保ちながら、徐々に後ろに下がりつつ回避に専念する。近づけないが、相手から近づいてくれるなら誘導はしやすい。ただ逃げる方向さえ気をつけておけば何とかなる!

「よっ…こっちだ、ついてこい!」

「グルルルツ…グオオオオオー…ツ!!」

手をクイクイツとやって挑発したら、随分ご立腹な表情で俺を追いかけるグラウンドラモン。俺はただひたすらに回避しながら後ろに下がる。自分より弱い奴が煽りながら逃げて、自分の攻撃が全部当たらないとか…相手からすれば、これ相当ストレス溜まるだろうな…俺でもキレル。

周囲の壁の穴の中から一体、また一体とプレイリモンが出てくると、器用に壁を降りて逃げていく。群れの最後と思われるプレイリモンが逃げていくのが見えた俺は、ふと後ろを見て思わず悪態をついた。

「…チツ、どうすっかな」

背水の陣つてのは、こういうことを言うんだろう。後ろに下がりがぎて壁際まで追い詰められていた。だが、勿論こうなることを考えていなかったわけじゃない。俺は両手を地につけ、クラウチングスタートの構えをとる。そしてグラウンドラモンが背中の巨腕を振り上げ、勢いよく振り下ろそうとしたそのタイミングを見計らって飛び出し。

「オラアツ!!」

グラウンドラモンの目の前まで近づき、顎を掬い上げるようにアツパーを繰り出した。大したダメージは入っていないが、視線さえ外せばそれで良い。強制的に上を見ることになったグラウンドラモンが顔を下ろした時には、俺は既にグラウンドラモンの横をすり抜けて

「…今のお前じゃ、進化は出来ねえよ」

「……え？」

「今のお前は、太一に似てるよ。アグモンを暴走させたアイツにな」
「っ…!!」

表情を悲しみに歪ませた結衣を、俺は強く抱きしめる。戦闘中で、回避に徹する必要があるから、万が一にも結衣に攻撃が当たらないように。力強く、それでいて傷つけないように。

俺はさつき、結衣を追い詰めちまった。コイツはただ俺の忠告通りに動いてくれていただけ。なのに、俺は単に、さつきのグラウンドラモンを倒すつて、あの結衣が言ったことに驚いた。らしくないつて、そう感じて…

忘れていたが、結衣はただの小学六年生だ。誰にでも優しくして、相手の気持ちを真っ先に考えることが出来るような、賢い子供だ。そんな優等生のような小学生が、大人の言うことを聞くなつて当たり前だ。

なのに、その大人が矛盾したことを言い出したらどうなる？ さつきはこうしろ、今はああしろと全く別のことを言い始めたら？ 簡単だ、子供はわけが分からずに苦しめられる。俺がやったのもそういうことだ：以前、結衣に敵を倒すのに躊躇するなと言つた。けどさつき、俺は敵を倒そうと提案するのはらしくないつて言つたんだから。

そんな苦しんでる時に、俺は結衣を置いて、こうして戦いの場に来た。結衣にとつて、今頼れるのは俺だけだつたつてのに：一番辛い時に傍にいないなんて、パートナー失格だな。

……だが、俺が今やるべきなのは後悔じゃない。今もなお苦しんでる結衣を支えることだ。

「…結衣！ こんな時だが、聞いてくれ！」

「トウルイエモン…？」

「お前は、何も、間違つてない…！ 間違つていたのは…俺だつた！」

「……なに、言って…?」

「どんな奴でも傷つけたくない、仲間達を助けたい、どっちもお前の氣持ちだ!お前の思いを叶えてやれない…俺が、弱いからだ!」

「そんな…そんな、こと……っ!」

話している最中に、急に辺りが明るくなった。殆ど真っ暗の中で、突如光り出したそれに俺は目を細める。やっと暗闇に慣れてきた目には、少し眩しすぎた。それはグラウンドラモンも一緒だったらしい。

「これは…!?!」

「地面が…」

俺と結衣がいる地面が、赤紫色に光を放つ。地面の光がどんどん縮小していき、やがてその光は俺の掌よりも小さいサイズにまで小さくなった。それは意志を持つかのように、俺達の周りを飛び、結衣の首にぶら下がっているタグへと収まった。

「紋章が…!」

「…っ!トウルイエモン、危ないっ!!」

結衣の声に反応した時にはもう遅かった。グラウンドラモンには接近を許していないが、目の前には俺の身の丈くらいある岩が迫っていた。

「くっ…そおっ!」

「トウルイエモンっ!!」

咄嗟に結衣を背負い投げのように投げ飛ばす。その直後、俺は意識を失った。

☆☆☆

私達がグラウンドラモンと遭遇してから、何日経ったんだろう。未だに地上には出ることも出来ず、プレイリモン達と一緒にグラウンドラモンから逃げるだけ。

とは言っても、グラウンドラモンはあの場所からあまり動こうとは

していない。いや、動けないと言った方が正しいかもしれない。グラウンドラモンの体躯じゃ通れない場所も沢山あるから、そこを通ってグラウンドラモンから何とか逃げるのが出来た。代わりに、グラウンドラモンが暴れて、所々崩れたりするけど。

「ユイ、今日の分だ。ロップモンの分もな」

「うん…いつもありがとう、プレイリモン」

「早く良くなると良いな」

「早く元気になって、アイツをやっつけてくれよ！」

「う、うん…」

プレイリモン達から食料をもらって、ロップモンが寝ている洞穴に向かう。プレイリモン達が蓄えていた食料を分けて貰って、申し訳ないけど…プレイリモン達は私達を巻き込んでしまったことを申し訳なく思っているみたいで、結局は私が押し切られる形で食料を渡される。

しかも優しさの紋章を手に入れたことで、プレイリモン達から選ばれし子供なら助けてくれる、といった期待の視線を浴びることも多くなった…何とかしてあげたいとは、思うんだけど。今の私には何も言い返すことは出来なかった。

洞穴に入ると、ロップモンが起き上がっていた。昨日や一昨日は痛みで寝たきりの状態だったけど…

「ロップモン、調子はどう？」

「おー…動けるようにはなったが、全身痛えわ」

グラウンドラモンが岩を投げ、私を庇ったトウレイエモンにその攻撃が直撃しロップモンに退化してしまったあの時。グラウンドラモンは何故か私達を見逃した。理由は分からない…けど、グラウンドラモンと目が合った時、何だか変な感じがした。あれは…

「ま、動けさえすれば何とかなるさ。リベンジ、行くか」

「……………」

ロップモンは目が覚めてからずっとこの調子…多分、私が早く皆の所に帰ろうと急いでいる気持ちを察してくれてるんだと思う。でも

…私も、この前よりは頭が冷えた。

「ロップモン、ちゃんと休んで。まだ動いたらダメ」

「…でもよ、早く皆に合流するんだろ?」

「それなんだけど…皆、バラバラになっちゃっても大丈夫なんだよね? 太一君も無事だつて、前に言つてたでしょ?」

「そりや、そうなんだが…それでも太一を探すし、ヤマト達もバラバラにさせないって意気込んでたじゃねえか」

「…うん。でもこうなっちゃたらしょうがないよ。私達は目の前のことに集中した方がよいよ」

それに、いくら待つても皆が助けに来ないってことは、残念ながら光子郎君達が私達のいた場所に戻れなかったということだ。きつと、グラウンドラモンが暴れた時の地響きか何かで、あの洞穴が崩れちやつた、とかかな。そうなると、ここに辿り着くのは難しいと思う。

一回、落ち着いて考えて分かったのは…私とロップモンが戻るには、あのグラウンドラモンをどうにかしないといけないということ。というのも、グラウンドラモンが暴れる度に、この辺の地形が変わつてしまうのが原因。もしプレイリモンに頼んで地上まで穴を掘つて貰つても、移動している最中に生き埋めになる可能性が高い。それ程に、ここら辺の地盤は脆い。

皆が来てくれたとしても…成熟期のデジモン達は大体大きいし力も強いから、戦いの最中、攻撃の余波なんかでここは崩れてしまうと思う。

「とは言つてもよ、それでどうするんだ?」

「どうするつて?」

「結局、グラウンドラモンをどうにかしないと俺達は戻れねえぞ? 何か作戦、あるか?」

「…ううん」

それも、ずつと考えてるけど…トウレイエモンだけでグラウンドラモンに勝つ方法が、全然思いつかない。圧倒的な力、こっちの攻撃を物ともしない頑強さ。トウレイエモンにとって、最も相性が悪いと言える相手だと思う。それなのに、ロップモンはまだ戦おうとしてくれ

てる…

「でも…今の私じゃ、トウレイエモンは進化出来ないんでしょ？」

「ああ、あれはあの時の結衣だったらって意味さ」

「あの時の？」

「あの時のお前だったら絶対無理だった。ただ焦って暴走してたからな…今のお前なら、気持ち次第で進化出来るかもしれねえ」

「気持ち次第…」

確か、紋章は持ち主の心の力を増幅させるものだっけ…私の紋章の意味は、優しさ。つまり、優しさの気持ちを強くイメージすれば良い…？優しさの気持ちって…何？そもそも優しさって…戦いの最中に考えることなの？

「…おーい、大丈夫か？」

「なんか、余計こんがらがってきたかも…」

「変に考えない方が良いぞ。お前は…ただ、自分の気持ちに正直にいれば良いんだ」

自分の気持ちに正直に…そういえば、紋章を手に入れる直前にも何か、大事っぽいことを言おうとしていたような…あれ、何だったんだろう。

「ねえ、ロップモン。あの時なんて言おうとしてたの？」

「あの時？」

「紋章を手に入れる前に、何か言おうとしてたでしょ？」

「あれか…そう、だな。ちゃんとやった方が良いな」

ロップモンは少し顔を背けて、その後真っ直ぐこっちを見た。

「お前はあの時、俺のせいで混乱しちまってただろ？」

「それは…」

「変に気を遣わなくて良い。俺自身、矛盾したことを言っちゃった自覚はある…ごめんな」

ロップモンは私に深々と頭を下げた。その時少しバランスを崩して、私が慌てて体を支えようとしたけど、ロップモンが耳で静止したので動けず…ロップモンは膝をついたけど、すぐに立ち上がる。やつ

ぱり、無理してるんだ…

「…私の方こそ、ごめんね。変に取り乱しちゃったけど、ロップモンは私のことを思ってたんでくれてるのに」

「戦う時に躊躇すると、足を掬われることもある。俺はそういう意味で躊躇するなって言ったが…そもそも、俺は間違ってたんだって気づいた」

「間違ってたって…何が？」

「お前に、躊躇するなって言ったことが間違ってたんだ」

「え…？」

戦う時に敵を助けたいって思ってたままの自覚は…正直あった。だから、ロップモンが言っていることも理解出来た。戦う度にそう思っていたら、敵に思わぬ攻撃をお見舞いされるかもしれない。例えば、ナノモンみたいな狡賢い相手だったら…不利と分かった瞬間に命乞いをして、隙を見て攻撃してきたりするんじゃないかと思う。

そういう甘さで、自分だけじゃなくて皆も危険に晒してしまう…そんなことにならないようにって、ロップモンは私の為にそう言ってくれていた。なのに、今はそのロップモンがそれが間違ってたって言う。

「お前らしくないことをさせること自体が間違っていた…だから、もう俺の言うことは気にすんな！どれだけ無茶なこと言われようと、俺が何とかしてやる！」

「気にするなって…そんなこと出来ないよ。そんなロップモンの意見を蔑ろにするようなこと…」

「蔑ろにするってことじゃなくてだな…」

ロップモンが耳を器用に使って、頭を掻くような仕草をする。その後、何か思いついたようにこっちを見た。

「結衣、お前は思ったこと、やりたいことをして良いんだ。俺はお前の為なら…命を賭ける覚悟くらいある。だから、お前が望んでいることを出来るだけ叶えてやる！」

「やりたいこと…」

「そうだ、もつと正直になれば良い！」

やりたいことに…正直に……………?

「もし…もしも、私が敵を傷つけないって言ったたらどうするの?」

「そうだな…俺は、出来るだけ相手を傷つけないようにするよ。最低限の攻撃で敵を行動不能にしてやる！」

「…もし私が、間違ってたら?」

「その時は俺が止めてやるさ。まあお前なら、そういうことは殆ど無いような気がするけどな」

笑いながらそう言うロップモン。ロップモンが言っているのは、多分理想論。そんなことできっこない。夢物語に過ぎない、口から出任せ。きつと、そう。

だけど…これだけの覚悟を決めているロップモンを、信じてあげたいと思った。それだけのことを言ってくれるロップモンを、私も信頼で答えてあげたい。信頼し合う関係になりたい。それがきつと、私達二人の望んでいることだと思うから。

「…!」

「結衣?」

「…:ううん、何でも無い。ねえ、ロップモン」

「なんだ?」

「だったら、ちゃんと証明して」

「証明?」

「そう。私がどんな我が儘言っても、それを叶えるって言ったよね?」

「我が儘って…おい?」

「分かっている、冗談だよ。証明して欲しいのはホントだけど…それじゃ、行こう」

「行くって…」

「グラウンドラモンの所。私、思いついたんだ…良い作戦」

「そうなのか…?それは良いんだが…何か感じ変わってないか?」

「そんなことないって。ほら、早く」

「あ、おい！作戦の内容くらい教えろよ！」

今のロップモンは戦える状態じゃない…だけど、二人でなら何とかなる。そう思えるくらいの光が見えた。

プレイリモン達には隠れて貰って、私とロップモンはまたグラウンドラモンがいる場所までやって来た。数日前にも来たのに、地形が変わっているような気がしたけど…どうやら、グラウンドラモンが暴れ続けたことで岩壁が崩れているらしい。グラウンドラモンの周りには岩がいくつも転がっていた。

「グルルルル…」

「トウルイエモン、下ろして」

「…ああ」

ここに来るまでに、作戦はもうトウルイエモンに伝えてある。どうして欲しいかも、もう伝えた。後は…私が、行動に移すだけ。

「…ねえ、君は何で悲しんでいるの？」

私はグラウンドラモンの攻撃範囲に入らないように気をつけながら、グラウンドラモンに話しかける。この子だってデジモン…私の話だっけ通じるはず。

「私は、君のことを知りたい。どこから来たのかとか、何で暴れているのかとか…何で、そんな悲しそうな目をしているのかを」

「グ…グオオオオオーーーーッ!!!」

「結衣!!」

グラウンドラモンが雄叫びをあげ、私はすぐ後ろにいたトウルイエモンに身を預けて、トウルイエモンが大きく後ろに跳んで着地した。

「…やっぱこうなったか」

「…トウルイエモン」

「大丈夫だ…俺はお前を信じてる。だからお前も…俺を信じろ！」

「うん…私はもう迷わない。君の気持ちに、私も…応えたい！」

私の身につけていたタグと紋章、そして私のデジヴァイス。それぞれが赤みがかった淡い紫色に輝く。それと同時にトウルイエモンが光に包まれた。

☆☆☆

結衣の考えた作戦とは、俺を完全体に進化させるっていう作戦だった。

最初に聞いた時は耳を疑ったが…さっきの会話中に、紋章が光つたらしい。タグと紋章は普段服の内側に入れているから俺は気づかなかったが、見せてもらったらホントに光っていたから驚いた。

しかも、結衣は何で紋章が光つたのか、何となく理由が分かっただけ。何でも、相手のことを正しく思いやるのが重要だとか。勿論、確証は無い話だけど…賭けてみるには十分な話だと俺は思った。

だから結衣と俺は、お互いに信じて欲しいと思っただけ。そして心から信じるようにした。戦闘中にいつでも思いやるには、俺と結衣…パートナー同士で信頼し合うのが一番だと思っただけ。

口で言うのは簡単だが…俺は少し不安だった。この前のようなことがあったし、俺は結衣に信頼されているんだろかって…けど、そんなのは俺の杞憂だったらしい。

「トウルイエモン、超、進化ーーーーっ!!」

結衣のデジヴァイスから放たれた進化の光が、紋章を通して天に昇る。進化の光を受けた優しさの紋章が弾け、俺の中に流れ込む。俺の体が、変化していくのを実感した。人型に近い体だったトウルイエモンの形から、さらに巨大で、強い体に造り替えられていく。

「——アンティラモン!!」

デジモンテイマーズで出てきた、完全体のデジモン。四聖獣デジモ

両腕を挟み込むようにして放たれた、グラウンドラモンの必殺技、
“スクラップレスクロー”。さっきの尻尾の鉄球で殴り倒す“メガ
トンハマークラッシュ”より強い一撃が、俺に向かって放たれる。

勿論、それを黙って受ける必要は無いがな。

「……」

「“マントラチャント”!!」

さっきのグラウンドラモンの跳躍よりも遥かに高く跳び、
傷一つない腕を硬質化させ、グラウンドラモンの後頭部に叩き込ん
だ。

事の発端は、コアドラモンがグラウンドラモンに進化したことから
始まった。

元々、地上で生活していたコアドラモンが、何年もかけて戦い、つ
い先日グラウンドラモンへと進化した。そこまでは良かったが…進
化したばかりのグラウンドラモンは、自分の力を理解していなかつ
た。

試しとばかりに両腕を力一杯、適当に的に定めた巨大な岩に振り下
ろしてみた。その結果、岩が砕け散ったのは勿論、その衝撃で地面ま
で砕けた。脆くなった足場がグラウンドラモンの重量に耐えきれず、
グラウンドラモンはこの地下に落ちた。

地上を目指し何日も彷徨って、グラウンドラモンはプレイリモン達
の集落に辿り着き…そこから先は、プレイリモン達が言っていた話に
繋がるわけだ。

「じゃあ、グラウンドラモンが暴れていたのは…」

「大方、地上に戻ろうと穴を掘ろうとしたんじゃないか？それかプレ
イリモン達が蓄えていた食料を探していたのかな」

「グオオ…」

俺の言葉に頷くグラウンドラモン。一度気絶し、目が覚めたらこれ

までの暴れっぷりが嘘のように大人しくなった。ちなみに、今はプレイリモン達と一緒に飯を食っている。

「大変だったんだね…よしよし」

「それで、プレイリモン達に頼みがあるんだが」

「なんだい？」

「コイツと俺達を、地上に繋がる道まで案内してくれねえか？」

「私達も地上に帰るつもりだったし、グラウンドラモンも一緒に連れて行ってあげたいの」

「分かった！君たちは僕らの恩人だからな、任せてくれ！」

「数日もあれば、ここから帰れる道を掘ってやるよ！」

こうして、プレイリモン達の協力のおかげで、数日後に俺達は地上まで帰ってくる事が出来た。グラウンドラモン、プレイリモン達と別れを告げて、俺達はひとまず適当に歩いてみることにしたんだが…
「ここ、どこだろ…」

「知らない地形っぽいな…そうだ、デジヴァイスに何か反応があるんじゃないか？」

「あ、そっか。えーと…」

森の中に出たみたいだが、サーバ大陸に来てから森なんて、コロモンの村近くにあった森以来だからな…少し遠くに岩山もあるが、それも見覚えが無い。そうになると、後の頼りはデジヴァイスのみになる。

「あ、あつちに反応があるよ！」

「どれどれ…」

デジヴァイスを見せて貰うと、どうやらあの岩山の方に反応が一つ。その岩山の反応に近づいている反応が二つある。ということは…

「あつちに行けば、誰か三人には会えそうだね」

「多分、光子郎がこれで…近づいている二つがヤマトとタケルだと思うぞ」

「でも、ここからじゃかなり遠いみたい…ねえ、一つ試してみたいんだけど良い？」

「何だ？」

「ちやんと、いつでも完全体になれるのか確かめたいなーって」

「お前…この姿の俺にそんなこと言うか！」

完全体に進化した影響で、俺は今チョコモンまで退化している。アンティラモンになれたのは良いが、反動で幼年期になるのがな…退化した直後は腹が減ってしょうがないし、アンティラモンに進化するのは現状いざという時だけにしたい。

「ごめんごめん、冗談だよ！これくらいなら、急いで行けば私の足でも間に合うだろうし！」

「まったく…よっ」

俺が結衣に飛びつき、結衣が俺を受け止めた。結衣が少し驚いたような顔をしていたが、俺はすぐに顔を逸らし、進行方向に向き直る。

「よし、それじゃ出発！」

「ふふ…しゅっぱーっ！」

そんな子供じみたやり取りをしてから進む。数時間後、ヤマト達と合流するまで、他愛ない会話は続いた。

いつでも完全体になれるのか…それは、俺達には既に分かりきっていることだった。

第二十二話 輝く翼！ガルダモン

ヤマト達と合流した俺と結衣は、これまでの経緯を互いに伝えながら、太一達との合流地点を目指して移動していた。途中一回野宿して、今は山を下る道を進んでいる。

「じゃあ、ロップモンも完全体になったのか」

「結果、このザマだけだな」

「でもカツコ良かったよ、アンティラモン」

「いいなあ…：パタモンも早く進化出来ると良いね！」

「うん！」

エテモンとの戦いが終わるまでずっとトコモンだったが、太一達と合流する前にパタモンに進化出来ていたらしい。まあ、ピコデビモンとの戦いに関してはそんなに変わってなかったみたいだが…：変化があったとすれば、先に進化していたことで、あの忘れキノコのこと判明した瞬間にアグモンと一緒にボコつたらしい。

俺の予想としては、正直エテモンの戦いの時にパタモンになってもおかしくないと思っていたんだけどな…：俺がエテモンとの戦いの時にもう成熟期まで進化することは出来てたわけだし。やっぱり戦う機会が無かったのが原因か？

「で、お前らも幼年期ってことは、完全体になれたってことだな」

「ああー！」

「わてもやるときはやりまっせー！」

「それにしても、結衣さん達がいなくなったのにはそういう理由があったんですね。探し出せば良かったんですが…」

「結衣さん達がいなくなったから、僕達いっぱい探したんだよ！」

「ごめんね…：でも、皆元気そうで良かったよ」

「それで、何でお前らはバラバラになつてんだ？」

「結衣さんがいなくなつてから、俺が提案したんだ。太一や結衣さんを探すなら手分けして探した方が見つかりやすいだろうって。でも、それから皆分かれて行動することが多くなつて…：最終的に残ったのは、俺とタケルだけだった」

なるほど：どうやら、バラバラになった経緯に関しては変化が起こってるみたいだな。原作だといなくなったのは太一だけだし、一番最初に別行動をしたのが空だったはずだ。それから一人ずついなくなってくつて展開で：そういや、それにもピコデビモンが一枚噛んでたな。丈あたりは原作通り騙されてそうだが：

「それじゃあ、私達が原因で離ればなれになっちゃったんだね：」

「ま、そんな気にしなくて良いんじゃないか？太一も戻って来たって話だし、そっちでも他の奴らを探してるんだろ？」

「ああ、今は太一と丈が俺達とは別の仲間の所に行つて、この道を下りた山の麓で合流することになってる」

話ながら進んでいる間に、目的地と思われる山の麓は、もう目と鼻の先だった。具体的な場所は分からないが、山を下った所にある森のすぐ傍に湖が見えた。かなり広く、海と言われても信じるくらいだ。そして、その湖の真ん中辺りに、森の方へ直進する何かが見える。

「なあ、あれって太一達なんじゃないか？」

「え？」

「きつとそうだよ！早く行こう！」

「待て、タケル！そんなに慌てると転ぶぞ！」

タケルを先頭に、俺達は駆け足で山を下っていく。見えていたのはスワンボートで、距離が近づくにつれてボートの上に乗るミミ、そしてボートを必死に漕ぐ太一と丈の姿が見えた。

「おーい！」

「ヤマトだ！」

「結衣さーん！会いたかったー！」

「ミミちゃん、元気そうで良かった！」

太一達が岸に上がる頃に丁度合流し、再会を喜び合う子供達。やっぱり、空はいないみたいだな：ちゃんとこの近くに来てくれれば良いんだが。

「コロモン、元気そうだな」

「うん！皆もね！」

「あら、少し見ない間に、小っちゃくなっちゃったのね」

まあ、パルモンの言う通り、再会したら半数が幼年期になってるわけだしな。幼年期の状態で会うのが、何だか懐かしく感じる。

「空は？」

「いや、俺達は会わなかった」

「そっか…アイツ、どこ行っちゃまったんだ？」

「アタシ…空さんに会ったかも」

「え？」

「どこで会ったんだ？」

「ゲコモンの城…もしかしたら、夢だったかもしれないけど」

「そんなことあったんだ」

そうか、ミミは確か、ゲコモンとオタマモンが住んでいる城で姫様になつていたんだっけな。アニメでも、ミミが歌うシーンが印象的だったのを覚えている。あのシーン、生で見てもみたかった…というか、ミミがアニメのエンディング曲を歌うのを聴きたかった…！いつか頼んだら歌ってくれねえかな。

「実はさあ、僕にキノコ食べちゃダメだって教えてくれた声も、なーんか空の声に似ていた気がするんだよなあ」

「ホントかよ？」

「でも、それなら何で空さんは僕達の前に出て来ないの？」

「考えても仕方ないさ…俺達は空じゃないんだ。まず、本人を捕まえようぜ」

「まるで鬼ごっこみたいだなー！」

「こつちの方角ですね」

全員でデジヴァイスの反応を見ながら、空がいるだろう場所へ向かう。結衣のデジヴァイスを見せてもらうと、どうやらちゃんとこの森の中にいるみたいだ。だとすると、原作と同じような展開になる可能性が高いかもな…いつでも戦えるように準備しておこう。

☆☆☆

「おーい、空〜！」

「空さーん！」

「ねえ、今日はもうこの辺にして、休む場所を探さないか？ 暗くなつてから奥地に入り込むのは危険すぎるよ」

「ハア、ハア…アタシ疲れた…」

「でも、もうこの近くにいるはずだ」

合流してから数時間、森の中をずっと探し続けているけれど、私達はまだ空ちゃんを見つけないことが出来ていない。デジヴァイスの反応では近くにいることは分かっているんだけど…空ちゃんも、私達に出会わないように動いているみたいだった。それ程、私達に会いたくないってことなのかな…

「あー！」

「どうしたの？」

「何か聞こえる！」

「空さんかも！」

「チョコモンは？」

「悪いが、今の俺じゃ聞こえん」

あ、そつか。ロップモンじゃないと聞こえないんだよね。昨日初めて完全体に進化したばかりで疲れているだろうし、幼年期でいてもらうのも良いと思っていたけど、進化してもらった方が良いかな…？

そう思っていた時、私の耳にも、ブーン…という音が聞こえてきた。その音はどんどん大きくなって、聞こえてくる方向を見ると、こつちに真つ直ぐに飛んで来る蜂のようなデジモンがいた。

「伏せて！」

体当たり攻撃を躲した私達だけど、蜂のようなデジモンは空中で大きく旋回し、私達の方へまた狙いを定める。チョコモンを見て、小さく頷いたのを確認した私は、チョコモンを地面に下ろしてからデジヴァイスを構える。

「チョコモン、進化——っ！ロップモン！ ブレイジングアイス！！」

冷気弾が飛んでいくけど、敵は紙一重で攻撃を躲して、こつちに向けてお尻…正確には、お尻にある針を向けた。太さから見て、針とい

うか…どちらかというど棘つて表現する方が正しいかな。

その棘をわざわざこちらに向けるような不安定な体勢をするってことは…

「ロップモン！」

「おう！パタモン、俺と同時に攻撃してくれ！」

「うん！」

「ブレイジングアイス！」

「エアショット！」

パタモンの空気弾が加わったことで、さつきより数段早い冷氣弾が蜂のデジモンを襲う。蜂のデジモンも、予想した通り棘をこちらに何発か飛ばして、ロップモンの冷氣弾に当てて攻撃を凌いだ。どうやら、そんなに命中率は高くないみたい。

「この間、ゲンナイさんに貰ったデジモンアナライザーで…ありました！フライモン、昆虫型デジモン、成熟期。タイプはウイルス。必殺技は猛毒の針を飛ばす『デッドリーステイニング』…猛毒の針!？」

怖い必殺技だね…どうやらかなり速度は速いみたいだし、空中戦じゃトウレイエモンでも追いつくのは難しいかも。となると…何とかして、地上におびき寄せるしかない。

「皆！フライモンを攻撃して、地上に誘導して！低い位置におびき寄せれば、後は私達で何とかする！攻撃のタイミングは、フライモンが針をこっちに向けたときお願い！」

「分かった！行くぞ、コロモン！」

「ツノモン、お前も頼む！」

「結衣、俺達も行くぞ！」

「うん！」

私と太一君、ヤマト君のデジヴァイスが光を放ち、三体のデジモンが進化の光に包まれる。

「コロモン、進化——っ!!アグモン!!」

「ツノモン、進化——っ!!ガブモン!!」

「ロップモン、進化——っ!!トウレイエモン!!」

「よし、行くぞ！『ベビーフレイム』!!」

アグモンを筆頭に、全員が上空を飛んでいるフライモンに目がけて攻撃を放つ。フライモンは攻撃する体勢に入った時にタイミング悪く攻撃が来るから、いずれ我慢出来ずに低空飛行で近づいてから攻撃してくるはず。

その時は、案外早くやって来た。フライモンが旋回して木々の中に隠れ、こつちにフライモンの羽音だけが近づいてくる。その羽音が、致命的な弱点であることに気づかずに。

「『巖兎烈斗』!!」

フライモンは悲鳴を上げる間もなく、姿を現した瞬間にトウルイエモンの一撃で撃沈。完全に動きを捉えていたみたい。フライモンは木に衝突し、気を失ったらしく、ピクリとも動かなくなった。

これでフライモンはもう大丈夫。デジヴァイスの方に目を向けると、もうすぐ近くに空ちゃんの反応があった。さっきまで離れていたのに…空ちゃん、皆を助けようとしてくれていたんだ。これだけ近くなら…

「トウルイエモン、空ちゃんとピヨモンが何処にいるか分かる?」

「ん…見つけたぞ。あっちだな」

「よし!それじゃ皆、行こう!」

トウルイエモンはロップモンに退化するのを見て、私は駆け寄ってロップモンを抱きかかえる。その後、全員で空ちゃんがいると思われる場所まで急いで向かう途中、大きな川があった。大きめの岩を足場にすれば、向こう岸まで渡れそう。滑りそうだから、気をつけて行かないきゃ。

太一君とアグモン、ヤマト君とガブモン、タケル君とパタモンが向こう岸まで渡った後、丈君とゴマモンが渡り始めたんだけど…

「う、うわあ!?!」

「丈!」

「落ち着け!足がつく深さだぞ!」

「おーい!大丈夫かー?」

「後から追いつくので、太一さん達は先に空さんの所へ向かって下さい!」

「ミミちゃん、パルモン、向こう岸に渡った後で良いから、丈君を引き上げてあげて」

「ハイー！」

先に渡った三組が空ちゃんの所へ向かって走り出す。その後、ミミちゃんがパルモンに掴まり、パルモンが鳶を伸ばしてターザンの要領で向こう岸へ渡り、また鳶を使って丈君を引上げてくれた。

その後の私達は特に問題もなく、川の向こう岸に全員渡り終えた。丈君がびしょ濡れになっちゃったから、少し準備に時間がかかったけど、デジヴアイスの反応を頼りに太一君達の後を追っていく。

「あ、いた！」

「おーいっ！」

「あ！丈さん達だ！」

無事に太一君達と合流すると、空ちゃんとピヨモンも一緒にいた。良かった、無事に合流できたんだ。でも、空ちゃんの目が腫れているような…

「ねえ、空ちゃんを泣かせたの…誰？」

「そ、それは…」

「太一！」

「なっ！俺は何も！」

「…太一君、ちよつと良いかな？」

アグモンとガブモンの証言により、太一君に視線を向ける。慌てふためく様を見ていると、自分が犯人だって言っているようにしか見えない。これは、ゆつくりお話ししないとイケない。

私と太一君の話が終わったのは、もう夕焼けが終わるような、夜空になり始めた頃だった。空ちゃんの鶴の一声で勘弁したけど…女の子を泣かせるなんて、この程度では許されないと思う。まして、空ちゃんのような良い子を…

「…結衣、もう飯だぞ？」

「あ、うん。今行くよ」

いけないいけない、もう終わったことなんだから、私も切り替えないと。

皆と合流した私は、焚き火の近くに座り、皆と同じように夕飯を食べ始める。食べながら、これからどうなるのかも思い出しておかないと…

えっと、確かロップモンの話だと…今晚、ピコデビモンとヴァンデモンが襲撃してくるって言ってたっけ。ピコデビモンは確か、パタモンとアグモンが戦った相手で、ヴァンデモンがピコデビモンのボス。そのヴァンデモンは完全体だけど、今の私達じゃ勝てないくらい強い相手らしい…アンティラモンが加わったとしても、さほど状況は変わらないかもしれないってロップモンは言っていた。

完全体になれるようになって間もない私達のパートナーでは、同じ完全体でも差が出てしまうんだとか。確かに、私達のパートナーと違って、他のデジモン達は進化するとずっとそのままの姿になるわけだから、完全体に進化したらそのまま完全体として戦い続けているわけだから…慣れというか、経験の差が出てしまうのかも。

ヴァンデモンの襲撃を避ける手段として、私達の近くで監視しているはずのピコデビモンを何とかするのが手っ取り早いんだけど…ロップモンは何故か周囲に敵の音は聞こえないって言った。どういうことなんだろう…？もしかして、ピコデビモンは音を消して近づくと出て来るとか？うーん…あ、そうだ。

「ね、光子郎君。さつきフライモンとの戦いで使っていたデジモンアナライザーなんだけど」

「ああ、これはゲンナイさんにもらったんです。といっても、ゲンナイさんに直接会ったわけではなく、ゲンナイさんの姿をしたホログラムのようなものだと思いますが…パソコンにインストールされていたんです」

「そうなんだ…これ、光子郎君が会ったデジモンの情報が見れるんだよね？他の人が会ったデジモン達の情報とか見れないかな？」

「ちよっと試してみます。……………どうやら、ダメみたいです。これ

には僕が出会ったデジモンの情報しか載っていないみたいですね。どうかして、皆さんが出会ったデジモン達の情報を知ることが出来れば良いんですが…」

「そっか…ありがと、光子郎君」

「でも、突然どうしたんですか?」

「太一君とか空ちゃん、ピコデビモンってデジモンに会ったって言っていたでしょ? 私は会ったこと無いから、どんなデジモンなのか分からないかと思って…」

「成る程…僕もピコデビモンには会っていないです」

「アタシも!」

光子郎君とミミちゃんも、ピコデビモンには会っていないみたい。逆に、その他の五人はピコデビモンに会っていて、どんなデジモンなのか教えてくれた。コウモリのようなデジモンで、丸い胴体に一對の黒い翼、あとは鋭い爪が目立つ二本の足を持つデジモンらしい。

「アイツ、狡猾いデジモンなんだよ!」

「そうそう、僕達に忘れキノコを食べさせようとしたり!」

「他にも、レストランで俺や丈にちよっかい出したりしていたらしい」
「僕は最初、人間がいるってそのデジモンに教えて貰ったんだけど…後で騙されていたんだって気づいたよ」

卑怯なデジモンだっことは分かった…かな? てつきりデビモンっぽい名前だから、デビモンを小さくしたようなデジモンなのかなって思っていたんだけど…聞いた感じ、可愛らしい姿のデジモンなのかもしれない。小憎たらしい感じかな? やっていることは、小憎たらしいで済ませたらいけない内容もあるけど。

「ふわあ〜…」

「そろそろ休もう。ピコデビモンのことは気になるが…今日はもう遅い」

「そうだな!」

そんな会話の後、私達は就寝の準備に入る。見張りは交代ですることになって、最初の見張り担当の太一君とアグモン以外の皆は先に休むことにした。

「結衣、寝てて良いぞ。俺は暫く警戒しておく」

「うん…何かあったら、すぐに起こしてね」

ロップモンが小声でそう言ってきたので、素直に甘えさせて貰う。本当は私だけ休んでしまうことに少し罪悪感があるけど…いざという時に動けない方が問題だから、無理矢理にでも休んでおかないと。

☆☆☆

皆が寝静まって、数時間経った頃。

見張りが交代し、今は丈とゴマモンが見張りの担当だ。俺はずっと耳を澄ませているんだが…何故か、風や木の葉の擦れる音しか聞こえない。何でだ？ピコデビモンは空と合流した今日、ヴァンデモンに報告し、そのヴァンデモンがこつちに到着する前に手柄を立てようと攻撃してくる筈だが…

何かしらの改変により、襲撃の日程がずれたか？そんなことを考え始める。何とも無いのならそれに越したことは無いのだが、やっぱり気になってゆっくり休むことが出来ないな…

「…ピコダーツ…！」

「!？」

突然聞こえてきた声の方を向くと、既にピコデビモンが両足に持っていた巨大な注射器が放たれた所だった。しかも、その注射器は結衣と空を狙って放たれていた。今の声に反応して、どうやらピヨモンも起きたらしいから、そっちは大丈夫だとして…ダメだ、迎撃が間に合わない。

「空、危ない！」

「チツ…！」

「ピヨモン…？ああつ、ピヨモン！しっかりして、ピヨモン!!」

「…えっ…？………ロップモンっ!!」

ピヨモンが空を、俺が結衣を庇い、巨大注射器が突き刺さる。脱力感を感じながら、耳を使って注射器を抜こうとしたが、結衣がそれよ

りも早く俺の腹に刺さっていた針を抜いてくれた。この針…毒、というよりも、刺した相手の力か何かを奪うのか…くそつ、やられた。今分かったが…コイツ、羽音が殆どしねえ。コウモリ型デジモンだから…？

「ん…なんだ、どうした？」

「あーピコデビモンだ！」

「う、うわあっ！」

ピコデビモンが情けない声を出しながら撤退していく。それと同じに、辺りが突然…暗くなった。地上を照らされていた月明かりが雲に隠れたことで見えなくなったから…だけじゃない。猛獣の雄叫びのような声が、周囲に響き渡った。

「な、なんだ!？」

雲が晴れると、さつきまでの青白い月が赤く染まり、その月を背にしてこつちに向かってくる赤い目を四つ持っている黒い竜——デビドラモンがいた。デビドラモンには馬車のようなものがついていて、デビドラモンが俺達の上空を過ぎる際、その馬車の中から棺桶が落とされる。

その棺桶が空中で開き、中から黒いマントで身を包んだデジモンが現れた。そのデジモンは地面に激突するわけでもなく、音も無く着地した。

「選ばれし子供達よ…」

「コイツよ！ピコデビモンと通信していたのは！」

「コイツではない！ヴァンデモン様だ！」

「ヴァンデモン…？」

「ヴァンデモン様だ!!」

空とピヨモンが俺達に合流できなかった理由を、合流した後に聞かせてもらった。空達はピコデビモンとヴァンデモンの通信を聞き、紋章の意味を知り…ピコデビモンに、愛を知らずに育ったと言われた。愛情の紋章は、それでは光ることは無い、と。

空自身もそれに心当たりがあり：母親からは大好きなサッカーを止めろと散々言われ続けてきたらしく、母親は自分のことより家元、華道の先生としての立場の方が大事なんだとそう思っていたらしい。

だから、愛情とは何かということ、一人で考える時間が欲しかった：だが、それでも皆を放っておくことが出来ないから、皆を手助けするように動いていたらしい。まあ、正確に言えば空はまだ親からの愛を受けていたことに気づいていないだけなんだが。

とにかく、紋章の意味を知ったその通信で話していたのが、今日の前にいるこの二体というわけだ。

「フッフッフ：お前たちの旅もここで終わりだ。　〃ナイトレイド〃！」

ヴァンデモンはマントを大きく広げると、両手を前に伸ばし、そこから無数の小さなコウモリが出現した。そのコウモリ達が俺達へと向かってきているのを見て、俺は動こうとしたが：結衣の腕の力に抗うことが出来なかった。それ程、弱っているってことか：くそっ！

「皆、行くぞ！　〃ベビーフレイルム〃！」

「プチファイアー〃！」

「モチモン、進化——っ!!テントモン!!：　〃プチサンダー〃！」

俺とピヨモン以外の皆が迎撃するも、無数のコウモリはその攻撃を掻い潜って攻め込んでくる。

「キリが無いですよー！」

「きやあっ！」

「ミミー・パールモン、進化——っ!!トゲモン!!：皆、伏せて！　〃チクチクバンバン〃!!」

トゲモンの全方位への針攻撃がコウモリ達を迎撃。それによって隙が生まれ、ゴマモンが叫ぶ。

「今だ！ゴマモン、進化——っ!!イツカクモン!!　〃ハーブーンバルカクン〃!!」

「やったぞー！」

イツカクモンの追尾ミサイルがヴァンデモンに直撃。派手な爆風で、ヴァンデモンの姿が見えなくなったことで、丈は声を上げる。しかし、すぐにその爆煙の中から、ヴァンデモンが空中へと飛び出した。「これで勝ったつもりか！ ッブラッディストリームッ！」

「うわあっ！」

「ぐあっ！」

ヴァンデモンの笑い声と共に、血のような深紅の鞭で…仲間達が次々と薙ぎ倒されていく。

「太一…コイツ、強い…！」

「そんな…！」

「…アタシが、行かなきゃ」

「え？」

「アタシ達しか…残ってないもの」

ピヨモンが、か細い声でそう言った。そう、もう残っているのは俺とピヨモンしかない。俺達で、ヴァンデモンを相手するしかない。

…正直言つて、今回は誤算だ。俺がピコデビモンの攻撃を食らってしまうとは…我ながら、情けない。発達した聴覚に頼りすぎていたみたいだ…俺が動ける状態であれば、初手で完全体に超進化して、メタルグレイモン達と力を合わせて迎撃するつもりだった。ピヨモンの超進化の話ではあるが、そんな博打のような超進化でなくとも、空とピヨモンなら超進化まで辿り着くこと自体は可能だと思っていたからだ。

こうなってしまった以上、やれることは一つ。俺達二体で何とか切り抜けるんだ。少しでもピヨモンが危険に晒されないように、俺も全力を尽くす！

「無理よ！そんな体でどうしようって言うの!?!」

「分かってよ、空…アタシ、行かなきゃいけないの…！」

「ダメ、行つてはダメよ！」

「どうして分かってくれないのよ!!」

「っ…！」

空がハツとした時、ピヨモンが飛び出して進化の体勢に入った。それを見た結衣が俺を地面に下ろし、デジヴァイスを構える。

「ピヨモン、進化——っ!!バードラモン!!」

「ロップモン、進化——っ!!トウルイエモン!!…トウルイエモン、超進化——っ!!アンティラモン!!」

「空ちゃん…信じて、バードラモンを。そうすれば、きつと…!」

「バードラモンを…」

完全体に進化した俺が、ヴァンデモンに拳を振り下ろす。ヴァンデモンは空中に飛びそれを回避したが、そこには攻撃体勢に入っているバードラモンがいる。

「メテオウイング——!」

「フン… ブラッディストリーム——!」

空中でもお構いなしに、バードラモンの攻撃を全てマントで受け止め、鞭の攻撃でバードラモンを迎撃。咄嗟に俺はジャンプして、バードラモンとヴァンデモンの間に入って盾になろうとしたが…空中だったのもあり、ヴァンデモンの攻撃スピードの方が上手だった。バードラモンに攻撃が直撃し、そのまま落下を始めた。

「バードラモン…バードラモオー——ン!!!」

こちらに駆け寄ってきていた空の紋章が光輝き、バードラモンが進化の光に包まれた。それを見た俺は、咄嗟にバードラモンではなくヴァンデモンに狙いを定める。

「バードラモン、超進化——っ!!ガルダモン!!」

バードラモンの姿が変わる。深紅の体を持つ、巨大な鳥人。バードラモンからより人型の姿に近くなったことで、両腕での攻撃も可能となった姿。ガルダモンは今の俺…アンティラモンよりもさらに大きい。俺が見上げるくらいの体格差だ。

「空の愛情…一杯伝わったよ」

「ピヨモン、カツコイイ…！」

ガルダモンが空を拾い上げている間に、俺はヴァンデモンに向かってサマーソルトキックをお見舞いする…が、直撃しても少し吹っ飛ばされる程度で、大したダメージにはなっていないように見える。やっぱり聖属性の力を持つエンジEMONとかがいないとダメか…少なくとも、今はまだコイツに手傷を負わせるのも難しそうだ。

「ええい、肝心な所で愛情の紋章まで発動してしまうとは…！」

「空は、この私が守る!! ッシャドーウイング!!」

「ッナイトレイド!!」

ガルダモンとヴァンデモンの必殺技が激突した瞬間、俺は結衣達の元へと猛スピードで戻る。全員を両手に拾い上げた後、ガルダモンに目配せし…激突した衝撃波で視界が悪くなった後、俺は空中に大きく跳躍。それと同時に退化しチョコモンに戻ってしまったが、ガルダモンが飛行しながら俺達を回収。上手く目眩ましにすることでヴァンデモンから上手く逃げおおせることが出来た。

第二十三話 闇の城を攻略せよ!

ヴァンデモンの襲撃に遭い、バードラモンがガルダモンに進化したことで何とか逃げおおせることが出来た俺達は、近くの山の麓の川で朝食の準備をすることにした。元々早い時間から休んでいた為か、戦闘後であつてもまだ行動する元気があるらしい。子供達もかなり遅しくなってきたようだ。

近くの森の中と川、二手に分かれて飲み水や食料を確保することに なり、俺と結衣は森の中を探索する班で、木の実や果物を集めている 最中のことだった。

「お兄ちゃん、これ何だろ?」

「これは…」

「確か、前にも見たことがあるような…?」

一緒に森の中を探索していたヤマトとタケルが、木々が生えていな い岩場のような場所に、地面に埋まっている灰色の何かを発見した。 このゴツゴツした機械の円盤には、俺も見覚えがある。

「ゲンナイさんがファイル島やサーヴァ大陸で使っていた、ホログラムを映し出す装置ですよ!こんな所にあるなんて…」

ああ、そういや光子郎はこの二ヶ月、ゲンナイさんを探して山の中を探し回っていたんだっただか?ようやく見つけた手がかりってわけ だな…とここでこの装置、どうやって動かすんだ?全く動く気配ねえぞ?

「動かないね…壊れてるのかな?」

「僕が調べてみます」

「太一達を呼んだ方が良いな…ちょっと行ってくる。タケルはここで 皆と待ってるよ」

「はい」

ヤマトが他の奴らを呼びに行っている間、光子郎が装置にパソコン のプラグを差し込んでカタカタとパソコンを操作する。暫くすると、 装置の中心からホログラムが映し出された。

『おお、やっと繋がったわい』

「ゲンナイさん！」

『久しぶりじゃな、選ばれし子供達』

映像も音声も、どっちも問題無いみたいだな。光子郎が有能過ぎるな、やっぱ。流石ジーニアスポーイと呼ばれることはある。

丁度装置が直ったタイミングで、ヤマト達が戻って来て、全員が装置を囲むように集合する。

「やいジジイ、今度は一体何だつてんだ？」

「さつきやつと繋がったつて言っていたけど…私達に連絡をしたかったの？」

『その通りじゃ。お前さん達に良い知らせと悪い知らせがあつて、どっちから聞きたいかな？』

「良い話は後に残すつていう手もあるけど…」

「ガツカリするのがオチだから、良い話から聞こうぜ」

『分かった、良い話からしよう。実はな、お主達の仲間が見つかったのじゃ』

ゲンナイさんが話したのは、俺達の仲間…九人目の選ばれし子供が見つかったという知らせだった。名前も顔も分かっているかないようだが、日本…現実世界にいることだけは分かっているとのことだった。ここら辺は、俺が転生する時に神様が調節したつて言つてたつて…実際にゲンナイさんからこう知らせられると違和感が凄いな。

ここで言う九人目つていうのは、太一の妹である八神ヒカリのことだ。そして、そのパートナーデジモンは、ヴァンデモンの手下となっているテイルモン。ヴァンデモンはテイルモンのことは気づいていないが、ヒカリがデジタルワールドではなく、日本に知っている、選ばれし子供達を全員揃えない為にヒカリを殺すつもりでいる。これが、ゲンナイさんが言う悪い知らせだ。

「ヴァンデモンが日本に!?!」

「そうなつたら、大変なことになるわ!」

「何とか食い止めないと!」

『落ち着きなさい、子供達よ。あつちの方角にこれと同じような装置

がある。その近くには、巨大な城があるはずじゃ」

ゲンナイさんが指を指しながらそう告げた。少し距離はあるが、岩山の上の方に明らかに人工らしき建造物が見える。十中八九、あれがヴァンデモンの城だろう。あの山の麓に装置があるということか？

「その城というのが、ヴァンデモンの住処なんですね」

『うむ。まずは奴の城に近づき、内部の情報を探るのが良いじゃろう』
「分かった。一旦そこまで行ってみよう！」

ヴァンデモンの城の場所までは流石に覚えていなかったから、ゲンナイさんナイスアシスト。とりあえず全員でゲンナイさんが言っていた場所まで移動を開始した。つーか、マジで久しぶりに見たな、ホログラム投影装置。コロッセオの前に見たつきりだよな？

ゲンナイさん、太一達がいなくなつた後の二ヶ月くらいの間、ずっと何してたんだ？ヴァンデモンの動向を探っていたのか？いや、もしかするとそれ以外にもデジタルワールドの現在の状況を調べたりとかしていたのか？そこら辺も直接会った時に聞いておきたい所だ。

「でも、ヴァンデモンの城まで行ってどうするの？」

「そりゃ、何とかして俺達の世界に行くのを阻止するんだよ」

「この前、ヴァンデモン相手に俺達は手も足も出なかつたんだぞ？」

「それは…」

…この前っていうか、昨晚だけだな。あの時は殆ど原作通りの流れになってしまい、俺とピヨモン以外が全滅しちゃったからな…ただ、それでも完全体二体で戦ったが、それでもヴァンデモンの方が上手だった。完全体に進化出来るようになって間もないとはいえ、あそこまで力量差があるとなると、やっぱり不安になるよな…

「確かにそうだけど、今回は何もヴァンデモンを直接相手にする必要は無いんだよ」

「どういうことだい？」

「私達の目的は、ヴァンデモンが私達の世界に侵攻するのを阻止すること。ヴァンデモンと戦わなくても、状況次第で何とか出来ると思う」

「成る程…ゲンナイさんはヴァンデモンが人間界に繋がるゲートの準

備をしていると言っていました。そのゲートを破壊出来れば、人間界にヴァンデモンが行くことは出来なくなるということですね」

「その通り、でもそれは本当に状況次第。もし、もう人間界に行く準備が整っていて、いつでも出撃出来る状態だったら：ゲートを破壊する作戦は失敗すると思う」

「じゃあ、まずはヴァンデモンの準備がどこまで進んでいるか探るのが先決か」

主に結衣や光子郎といった頭良い奴らが話を進めている。結衣が話している内容は、以前に俺達二人で話した時にも出たな：原作では、太一達は一度ヴァンデモンの城に潜入出来たものの、ヴァンデモン達の侵攻を阻止することはあと一歩の所で出来なかった。しかもその結果、翌日の二回目の潜入の時に警備が強化されたりと、こちらに不利な状況になってしまっていた。だったらいつそ、このままヴァンデモンを一度見送って、準備万全の状態で侵入した方が上手くいくだろう。

「皆、あれ！」

「先程のものと同じです。ゲンナイさんが言っていたのはこの場所のことで間違いないですね」

そんな会話をしながら進んでいたら、ヴァンデモンの居城、その城壁のすぐ近くにホログラム投影装置を発見した。近くで見ると：建造物があったと思っていたが、これ城じゃなくて都市って言った方がしっくりくる気がするな。立方体や直方体の建物がいくつも連なって建てられている。

『どうやら無事に着いたようじゃな。ここがヴァンデモンの居城じゃ』

「着いたは良いけど、どうする？ヴァンデモンの動向を探ると言っても、私達じゃ目立つだろうし…」

「それなんだが、ここは俺に任せてくれないか？」

空の眩きに対し、俺は声を上げてそう主張した。当然、全員から視線を浴びることになる。中には、不安そうな顔をしている奴らもいる

…というか、大半が不安そうだな。おい、どういうことだ？これでも俺はそれなりに活躍してきたと思うんだが？

「え、でも…」

「一人じゃ危険すぎじゃないか？」

「…いや、確かにロップモンなら、他のデジモン達よりは動けるかもしれない。今までずっと俺達はロップモンの聴覚に助けられてきたし」

おお、ここに来てこれまでずっと何となくやっていた索敵の成果が認められるとは…ヤマト、お前ならちゃんと分かってくれると思って
いたぞ。

「…ロップモンや、トゥルイエモンに進化すればヴァンデモンの居場所も探れると思うけど」

「よし、じゃあ決定だな。パルモン、俺をあそこまで持ち上げてくれねえか？」

かなり上の方にあるが、中には入れそうな穴がある。あそこから建物の中に入れるはずだ。確か、原作だとあそこから変装したアグモンとパルモンが侵入していたんだろう。今回に関しては、俺一人の方が動きやすいし、状況を探るには俺ほどの適任はいない。気をつけるべきは、俺の耳でも羽音が聞こえないピコデビモンか…いや、それ以外にも音を消す事が出来るデジモンがいるかもしれないな。気をつけねえと。

「え、ええ…」

「いや、ちよつと待つて」

と、ここで何故か結衣からストップがかかる。って何でだよ？俺が一人で潜入して、ヴァンデモンの動向を探る。これは結衣も事前に同意していたはずだ。何でここで止めるんだ？

そう疑問に思っていたが、結衣がデジヴァイスを取り出したことで理解した。念のため、トゥルイエモンに進化していけつてことか。確かに、万が一戦闘になった時に今のままじゃ厳しい——

「…先に進化しないとね、チヨコモン？」

「…お、おう」

「…今、完全に忘れてたでしょ」

何が、とは言わない結衣に対し、俺は何気なく返事する。

「いや、別に？早く頼むぜ、結衣」

「ハイハイ…」

…アンティラモンに進化して戦った後、幼年期に退化していたことを忘れていたわけではない。別に皆がロップモンの話をしていたから成長期だと勘違いしていたとか、そんなことは断じてないのだ。

☆☆☆

結果から言うと、私達はヴァンデモンの城に入らなかった。

トウルイエモンがヴァンデモンの城を探索し、ヴァンデモンがもう既に出撃することが出来る状態だということを知った私達は、話していた通りイチかバチかで乗り込むよりも準備を整えて乗り込んだ方が良いということになった。

空ちやんやタケル君が、九人目の仲間の安否を心配していたけど、太一君からデジタルワールドと私達の世界の時間の流れが違うことを聞いて納得してくれた。太一君が東京に戻っていたのが約一時間。たったそれだけの時間で、こっちのデジタルワールドだと二ヶ月くらい経っていたんだから、太一君達もビックリしただろうね…正直、私も実感が無いもん。

とにかく、それだけ時間の流れに差があるのなら、デジタルワールドでの一日なんてたった数分…もしかすると一分にも満たないくらい時間しか経過しないだろうということ。明日に乗り込もうってなったんだけど。次はどうやって私達の世界に繋がる扉（トウルイエモンが城でヴァンデモン達の会話を聞いて扉と判明した）を起動するかって話になって、その時にゲンナイさんに考えがあるということ。一度ゲンナイさんの家に向かうことに。

「それで、ゲンナイさんの家ってどこにあるの？」

『ふむ…』

「肝心な所でまた？」

ホログラムのゲンナイさんの姿が消え、ミミちゃんがまた通信妨害

か何かで消えてしまったのかと嘆いた。けど、すぐにまたゲンナイさんの姿が映し出される。

『ちよつと周りを見渡してくれ』

「え？」

「ん〜：あ！あれ！」

『あの光の方向に進めば、農の家に辿り着ける』

「分かった。それじゃ行こう！」

木々の隙間から見える空に、何かの照明のような光が上に延びていた。それを頼りに移動してみると、ゲンナイさんのヴァンデモンの城から少し離れた所にある湖の中から出ていた。つまり…

「家って、湖の中なのか？」

「成る程…通りで二ヶ月山を探しても見つからなかったわけです」

「それより、どうやって行くんだよ？」

そんな心配をしていたけど、池全体が光ったと思ったら、池が真つ二つに割れて、中から階段が現れた。その階段を降りろということだと察した私達は、その階段を進んでいく。階段のすぐ横が水で、魚なんかも泳いでいるのが何とも不思議な光景で…水族館によくある水中トンネルを何となく思い出した。

かなり長いこと下っていくと、見えてきたのは和風な家だった。かなり大きいけど、日本にあつてもおかしくないサイズの一軒家だ…：ゲンナイさん、ここに一人暮らしなのかな。だとしたら掃除とか大変そう…：ピッコロモンの時みたいに、掃除手伝えとか言われないよね？

「ごめんくださーい！」

「勝手に入りますよーっ！」

入り口らしい門を潜って、玄関まで続いている庭に入ってみると…盆栽や池（何で池の中なのにまた池があるのか分からないけど）の近くに、人影を見つけた。

「ゲンナイ、さん？」

「よく来たな、選ばれし子供達」

「本物なのか？」

「ええ」

ついに、本物のゲンナイさんと初対面。太一君と同じくらいの身長で、映像でも分かっていたけど立派なお髭だった。かなりお年寄りっぽいんだけど、杖も使わず足取りは軽いように見える。

「やいジジイ！お前に聞きたいことがある！」

「ちよつと、太一！」

「なんじゃ？」

「何で今まで直接出てこなかったんだよ！」

「出不精でな」

…外に出るのが面倒くさいってことかな。だったらもつと普通の場所に家を建てれば良いんじゃない？

「あの、ゲンナイさん。貴方のことを教えてもらえませんか？どうして私達を助けてくれるのか、とか…」

「そもそもアンタ何者だ？」

「人間？それともデジモンなの？」

「どちらでも無い。お主達を助ける理由は、この世界を救う為に必要なことだからじゃ」

「選ばれし子供達ってなに？」

「この世界とお前たちの世界を救うために選ばれた子供達のことじゃ」

「俺達を選んだのは誰だ？」

「選んだのはゲンナイさんなの？」

「…もういいじゃろ、今お前たちがしなければならんのは九人目の仲間を助けることじゃ、さあ家の中へ」

うーん、殆ど答えになっていかない気もするし、はぐらかされた。でもゲンナイさんが言うことはもつともなので、私達はゲンナイさんの家の中へとお邪魔することにした。

中では既に夕食の準備がしてあって、私達の為に用意しておいてくれたそうだ。何をするにも、ひとまず腹拵えということ、ありがたく頂きます。白いご飯とか、魚の煮付けとか、こんな普通な感じの食事なんて久しぶりな気がする…そのおかげか、とても美味しく感じ

た。

夕食を全員が食べ終えた頃、ゲンナイさんが立ち上がって私達の方へ向き直った。

「そのままが良い、これを見てくれ」

「日本？」

「東京ね！」

「練馬区だ！」

ゲンナイさんの後ろの天井から大きな地図が降りてきて、ゲンナイさんが扇子を振る度に地図が変わる。どれも私達人間にとっては馴染み深い地図だから、皆すぐに分かったみたい。

「ヴァンデモンの居場所を示しておる」

「練馬区にヴァンデモンが…」

「あ！」

突然、太一君とヤマト君が同時に声を上げた。どうしたんだろう？

「何だよ？」

「いや、大したことじゃない。お前は？」

「いや、俺も…ただ、光が丘だなんて」

「光が丘？」

「私達が住んでいる世界の地名だよ」

「光が丘に、ヴァンデモン達が…」

「でも、まだ動いてはいないのよね？」

「ああ、こつちとあつちじゃ時間の進みが違うんだ、まだ大丈夫だって！」

「それにいくらヴァンデモンでも、何処にいるのか分からない九人目の選ばれし子供を探し出すのは無理なはず。まずは私達の世界の情報を集める為に動くはずだよ」

「いきなり暴れ出すってことは無いわけか…その点は一安心だな」

ロップモンから聞いた話を踏まえても、その点は心配ないと思う。何体か暴走するデジモンもいるみたいだけど、基本ヴァンデモンの手下達は人間の生活に溶け込んで、九人目の選ばれし子供を探そうだし、実際に会ってみて、ヴァンデモンはとても賢そうというか…こう、

無闇に暴れ回るようなことはしない気がする。効率とか、そういうのを考えて行動すると思う。

「とにかく、今は僕達も元の世界に戻らないと！」

「ジジイ！ヴァンデモンが使っていた扉を開くにはどうすれば良いんだ？」

「太一君…ゲンナイさんをジジイって呼ぶのは良くないと思うよ」

「そうよ、お年寄りには親切にしないと」

「わ、分かったって…」

「ちよつと待っておれ」

ゲンナイさんが戸棚の…戸棚、というか壁一面が全部引き出しになっっていて、三脚なんかも使って上の方にある引き出しを開けた。これ、もしかして全部の引き出しに何か入ってるの…？探すの大変そう…っていうか、中身全部覚えてるのかな。

「ほれ、これじゃ」

「あ、オイラのがある！」

「アグモンも！」

「これは？」

「カードじゃ」

「んなことは分かってるよ！」

ゲンナイさんが持ってきたのは、何かのカードだった。表面にはデジモンの絵と…読めないけど文字が描かれている。裏面は全部同じみたいだから、これはトランプのカードみたいなものかな？

「ヴァンデモンの城の地下、扉の前に九つの穴がある。そこに正しい配置でこのカードを置くと扉が開くんじゃ」

「でも、全部で十枚ありますよ？」

「良く分からんのも一枚混ぜっておる」

「正しい並びっていろいろのは？」

「それも…分からん」

いつも通りなゲンナイさんに、全員で溜息をつく。まあ、こんなことだろうとは少し思っていたけどね。

「ま、いいや！適当に嵌め込んでみようぜ！」

「だーっ、ダメじゃよ！そんなことをしたら全くワケの分からん別の世界に飛ばされてしまうー！」

ゲンナイさんが驚きの速さで、カードを持っていた太一君の背後から飛びついた。

「そんなに世界って色々あるの？」

「そうじゃよ、それにお前たちも不完全に復元されることもあるー！」

「何それ？」

「えーつまりじゃな…」

ゲンナイさんが紙と色鉛筆を取り出して、何かの絵を描き始めた。これは…ミミちゃんとパルモンかな。ゲンナイさんって絵が上手いんだね…

「お前たち二人が間違った手順で扉を潜ってしまうと…」

もう一枚取り出した紙にまた同じような絵を描くゲンナイさん。違うのは、ミミちゃんとパルモンが、お互いの姿が合わさったような感じの姿に描かれていること。

「こんな姿になってしまうかもということじゃ」

「それはイヤ〜〜〜!!!」

「だからヴァンデモンが呪文でやったことを、お前たちは自分の力でやらなければならんのじゃ」

「分かんないことばっかりなのにな？」

「とにかくカードは渡しておく。今夜はゆっくり休むが良い、ここから敵も襲ってこん」

ゲンナイさんの言葉に従って、私達は少し早いけど就寝することにしました。

皆が居間の寝室で寝静まった頃、私と光子郎君はゲンナイさんの部屋を尋ねた。この世界のこと、デジモン達のこと、色々聞きたいことがあるという光子郎君に私は随伴させてもらう形だ。

「この世界、僕達の世界に似てますが変ですよ？どうしてなんですか？」

「この世界が何で出来ておるか知つとるか？つまり、お前たちの世界で言う原子や分子にあたるものじゃが」

「データですよ？」

「左様、この世界にある全てのものはお前たちの世界のコンピュータネットワークに流れておるデータから出来ておる。だからこの世界が変だとしたら、それはデータが破損しておるか欠落しておるかじゃ」

データが破損、欠落：分かりやすいのは、あの黒い塊に飲み込まれていた時のエテモンかな。あの時のエテモンの攻撃は、山やスフィンクスといった建物を飲み込んでいるような攻撃だった。あれは、エテモンの攻撃自体がデータを破損させるような一撃だった、ということだと思う。

「そうだったんですか。ところで、ゲンナイさんもデータなんですか？」

「うむ」

「でも実体はあるんでしょう？僕達みたいに」

「無い」

「それって、デジモン達と同じ存在ってこと？」

「それも違う。何故なら僕は属性が無いんじや」

「属性ですか？」

「この世界はデータで出来ておるんじやが、デジモンはさらに固有の属性としてのデータ・ウイルス・ワクチンを持つておるのじや」

「成る程…」

…あれ？確かロップモンの話だと、属性を持たないフリー種と呼ばれるデジモンもいるって聞いたような…そうだ、ゲンナイさんに聞いておきたいことがあったんだった。

「あの、ゲンナイさん」

「今度はなんじや」

「今、この世界と私達の世界が危機に陥っていて、私達が呼ばれたって

「いうのも分かったんだけど…デジモン達だけでどうにかならなかったの?」

「どういうことですか?」

「デジモン達は、私達人間よりも強い力を持っているでしょ? エテモンとか、ヴァンデモンとか…敵に強いデジモンがいるのに、この世界の為に立ち上がった良いデジモン達はいなかったのかなって」

「勿論いた。しかし、デジモン達だけではどうにもならなかった…じゃから、お主らが呼ばれたのじゃ」

「今はもういないの?」

「さあ…のう…儂も全てを知っているというわけではない。今、善良なデジモン達がどこにいるのか、既に死んでいるのかも儂には分からないのじゃ。ただ言えるのは、唯一の希望と言えるのが選ばれし子供達だということなのじゃよ」

「そっか…私達と一緒に戦ってくれるようなデジモンがいるかもと思っただけど」

「まだ僕達が出会っていないだけで、何処かにそういったデジモンもいるかも知れませぬ」

「実はこの質問、私じゃなくてロップモンに聞いてみるようお願いされたことなんだよね。ロイヤルナイツ、とか、七大魔王?とか、そういうった組織名っぽい名前が聞けないか確かめて欲しいって言われたんだけど…私の聞き方が悪かったのかな。」

「そういうえば、デジモンアナライザーは役に立つとるかね?」

「はい!でも、一つ気になる所がありました」

「なんじゃ?」

「これには、僕が出会ったデジモンの情報しかありません。他の方が見たデジモンの情報が見れないんです」

「成る程?」

「何とかありませんか?」

「なる。ちよつとそれを貸してくれんか」

「はい」

「朝までには直しておこう。お主達ももう寝なさい」

「はい」

ゲンナイさんと直接話すことが出来て、良かったかもしれない。ロップモンの話で、デジタルワールドのこととか色々聞けたけど…正直、一気に沢山聞いたからか、まだ良く分かっていないことも多いと思う。こうやって、デジモンについて色々調べていけば、ちゃんと理解もしていけるはずだ。

問題無く私達の世界に帰ることが出来たら、ロップモンにノートを買ってあげなきゃ。これからのことを知る為にもね。

☆☆☆

翌日、ゲンナイさんの家を出た俺達は、またヴァンデモンの城に到着した。また俺がトゥルイエモンに進化して探索をし、警備を掻い潜れそうなルートを案内する。昨日のうちに時間をかけてヴァンデモンの城の内部構造を把握しておいて良かったぜ。ゲートまでのルートだけはしつかり覚えてきたからな。

特に警備をしていたデビドラモン達にも見つかることは無く、例の扉までやって来た俺達。そこで子供達はカードを並べて、正しい並べ方を考えていた。

「うーん…良い奴、悪い奴、汚い奴」

「そうか？小さいの、普通の、大きいの！」

「貸してくれ。これでどうだ？弱い奴、まあまあな奴、強い奴。でも外れがどれか分からないな…」

「住んでる場所よ、陸とか海とか」

太一達がカードの組み合わせを考えている中、光子郎と結衣、テントモンと俺は九つの穴がある台座を見に行く。

「ヴァンデモンが魔法で封印を解いたという事は、きっと石版の絵も魔法に関係しているはず」

「そうだね。星やこの絵、タロットとかオカルトとかを連想するけど…」

「上の三つの絵…射手座と獅子座は十二星座にあります、猿座は無

いですね…」

3×3の表、それぞれのマス目に星が描かれている。上の段が一つ星、二段目が二つ星、下の段が三つ星。表の外、上側には絵が三つ描かれていて、左にライオン、真ん中に弓を持つ人馬、右が猿。表の右側と左側にも何かあるが…これに関しては謎解きに必要無かったはずだから割愛だな。

「これはどうだ?」

「うーん、そうね…」

「無駄だよ」

「そんな、無駄なんて言わないで!」

「たとえそれらしい分け方は出来ても、何の根拠も無いじゃないか」

「それは、そうだけど…」

丈がいきなりそんなことを言い始めた。アニメでもそんなこと言ってたな、確か。でも今までのオドオドしているような感じじゃなく、決意したようなそんな感じの表情をしている気がする。

そして丈が、太一を真っ直ぐに見つめて話し始める。

「太一」

「何だ?」

「僕は、お前に任せる」

「な、何だよ急に?」

「無責任で言っているわけじゃないぞ。とにかく僕は、太一を信じる!」

おつと…別に原作みたいに城が崩れ始めているわけでもないのにそんなことを言うとは。ちよつと予想外だったな…あれは非常時だから出る台詞だと思ってた。

「俺も…ここはリーダーの決断に従おう!」

「おいおい、いつから俺リーダーになったんだよ!」

「俺達はお前がいなくなった途端、バラバラになった…それをもう一度集めてくれたのはお前じゃないか!」

「それは、偶々…」

「そんなことどうでも良い!何とかしてお家に返して!!」

「ミミちゃん…」

「…つて、アタシ今まで言ってたけど、それじゃダメなのよきつと。もうワガママ言わない!」

「そうね! 私達が変わらないと何にも変わらないわ!」

「だから僕は、仲間を信じるんだ!」

「タケルもそう思うだろ?」

「うん! もし別の世界に飛ばされても、皆一緒なんですよ? だったら僕、怖くなんか無い!」

「そうだな!」

「太一君、私達に出来ることなら何でもするから! ね、光子郎君」

「は、はい! 僕も最善を尽くします!」

「やっつてよ、太一!!」

「…分かった!」

…ちやつかり結衣も太一に任せたな。ま、別に良いか。こうして、太一は正式に俺達のリーダーとなった。元々リーダーっぽいことはしていたけどな。

太一は考えながら歩き、やがて扉の前で立ち止まる。皆にもう一度、自分の判断に従ってくれることを確認し、太一はこう告げた。

「…よし、決めた! 光子郎、結衣さん! 二人が選んでくれ!」

「ぼ、僕ですか!?! で、でも…」

「私も?」

「太一さんがそう決めたのなら、アタシそれが良いと思う!」

「でも、もし間違ったら…」

「誰も二人を恨まないって!」

「信じてる!」

「…というわけだ!」

「…光子郎君、やれるだけやってみよ? 出来るかどうか、やってみないと分からないよ」

「…分かりました!」

光子郎がカードを受け取り、再び台座の元へやって来た。まさか、

結衣まで謎解きをすることになるとはな…

「光子郎はん、パソコンで何か分かりまへんやろか？」

「パソコンで…」

「…光子郎君、このカードのデジモン達の情報を調べてくれる？」

「分かりました！えっと…デジタマモンとトノサマゲコモンに会った人？」

「あ、僕だ」

「デジヴァイスを！」

ゲンナイさんが改良したデジモンアナライザー。光子郎のパソコンのキーボードに、デジヴァイスが差し込めそうな凹みがあって、そこにデジヴァイスを差し込むとそのデジヴァイスの持ち主が会ったデジモン達の情報を確認出来るそうだ。

丈のデジヴァイスを凹みにセットすると、パソコンの中に丈の出会ったデジモンの情報が追加された。光子郎はトノサマゲコモンとデジタマモンの情報を調べる。結衣は、光子郎が調べた情報を聞いて、カードをグループ分けしているみたいだな…あれ？俺、ここの情報教えてなくね？

「…成長期が四体、成熟期が三体。完全体が三体。ということは…星の数が、レベルってこと？」

「だとすると、問題になるのは上の絵ですが…」

「この絵…これもデジモンなのかな」

「ということとは…ちよっと待って下さい」

光子郎がまたパソコンを操作し、画面にレオモンとケンタルモン、そしてエテモンの情報をピックアップする。

「あ、この三体かも！でも、レベルも違うし…」

「…！属性！」

レベルと必殺技しか表示されていなかった状態から、それぞれの属性が表示された。レオモンがワクチン、ケンタルモンがデータ、エテモンがウイルスと書かれている。

「じゃあ、ここがそれぞれの属性だとすると…」

「殆どピッタリ合いますね…あとは、ここだけ」

十枚のカードが殆ど組み分け出来ているが、問題なのはワクチン種の成長期の場所。ここだけがアグモンとゴマモン、二枚のカードが当てはまってしまう。どちらが正しいのか、二人で考えてみるもの、やっぱり答えは出なかった。

「…皆、分かったよ」

「ホントか!？」

「結衣さん…」

「私達に出来るのはここまで、皆の意見も聞いてみようよ」

「…そうですね。それでは皆さん、説明しますね」

二人だけで解いた内容を、全員に周知させる光子郎。その間、俺は不快な音を感じてそつちを向く。殆ど真つ暗だから何も見えないが…この音、恐らくアイツが来てるな。だがこれくらいは既に想定済みだ。

「皆、気をつけろ。どうやら敵がこつちに来るみたいだ」

「え!？」

「…大丈夫なの？ ロップモン」

「おう、問題ねえ。ただ、そうだな…ピヨコモン、ゴマモン、パルモン。

俺と一緒に成熟期まで進化してくれ、敵を迎撃する」

「俺達は？」

「万が一、他に敵が来たときの為に他の奴らは待機で頼む。これでも過剰戦力だと思うしな…すぐ終わらせてくるさー」

完全体に進化出来るデジモンが三体もいれば安全だろう。そう考えて、ガブモン達に待機して貰うよう伝える。すると今度は丈が一步前に出た。

「いや…僕達も行くよ、ロップモン」

「でも、まだ話し中だろ？」

「後はこの二枚をどっちか選ぶだけだから…太一君、後は任せて良いよね？」

「分かった！ 丈達はロップモンの指示に従って一緒に行ってくれ。他の皆はここで待機だ！」

何と、もう殆ど説明は終わっていたらしい。結衣が太一にそう確認し、太一がそう皆に伝える。全員が頷き、それぞれ動き始めた。俺も結衣達が準備出来たのを確認し、敵の元へと駆け足で向かう。

「ねえ、何でこのメンバーなの？」

「雑魚が大量みたいだったから、っていうのが一番の理由だ。ま、敵を見つけたら分かるだろ」

「それじゃ皆、進化を！」

それぞれのパートナーデジモンが進化の光に包まれ、全員が成熟期へと進化を果たした。俺は結衣を抱えて先導して駆けていく。一分もしないうちに、不快な音の主を発見したので全員に止まるよう指示する。

「あれって……」

「何アレ、気持ち悪い〜！」

「これで分かっただろ？」

今、俺達の真上……天井を歩いているのは、蜘蛛型の巨大なデジモン——ドクグモンと、ドクグモンと似たような姿をしている小型の蜘蛛型デジモン——コドクグモンだ。ドクグモンの移動速度も速くて気持ち悪いが、恐らくミミが言ったのはコドクグモンの方だろう。ドクグモンの周囲を、大量のコドクグモンがカサカサと音を立てながら大行進をしている。

「成る程……確かに、このメンバーならやつつけやすいね」

「皆、行きましよう！」

「ドクグモンは俺が何とかする！ イツカクモン、小さいのをある程度やつつけたらこっちの援護を頼む！」

「オツケー！ それじゃ、行くぞ！ ムハーブーンバルカン！」

「メテオウイング！」

「チクチクバンバン！」

三体の必殺技が、コドクグモンの群れを殲滅していく。グレイモンも連れてくることを考えたが、太一のパートナーだしな。それに、グレイモンだとパワーが強すぎて城にダメージが入る可能性もある。城が強い衝撃を受けると、後々崩落してしまうらしいからな……出来る

だけそんな状況にならないようにしたい。まあ、アトラカブテリモンの必殺技でそうなったんだから、成熟期の必殺技なら多少は大丈夫だと思うが。

コドクグモンがやられていく状況を見て、ドクグモンは俺達にヘイトを向け、蜘蛛の巣をこつちに伸ばしてくる。それをバードラモンが炎を飛ばして焼き払い、その瞬間に俺がドクグモンの背中目がけて跳ぶ。

「『巖兎烈斗』！」

「ギャアアアアアアア!!」

ドリルのように高速回転し、ドクグモンが悲鳴を上げた。そういやコイツ、喋れたな。まあ、ゆつくり話す必要も無い。このまま一気に倒させて貰おう。

俺の攻撃に耐えきれず、足をバタバタとさせ始めたドクグモン。それを見た俺は動きを止め、イツカクモンに合図を出す。

「イツカクモン、ドクグモンの足下を攻撃してくれ！」

「任せろ！『ハープーンバルカン』！」

「これもおまけだ！『忍迅拳』！」

イツカクモンの攻撃で足にダメージを受け、俺の攻撃でドクグモンが天井から完全に足が離れ、背中から地面に激突。勿論、俺は落下前に避難した。これでドクグモンは腹が丸見えの状態になった。

天井をもう一度見てみると、コドクグモンは半数以上倒したみたいだな。ドクグモンが落とされたことで敗北を悟ったのか、生き残った奴らは引き返していく。

「さて、と…後はお前だけだな？」

「クツ…ヴァンデモン様ニ楯突ク奴ハ、生カシチャオケネエ！」

体勢を立て直したドクグモン、奴の六つの目がチカチカと点滅し始めた。それを見た瞬間、俺はドクグモンへと一直線に駆け出す。

「ステインガーポレーション——」

「オラア!!」

「ンン!?!」

ドクグモンの必殺技は、毒攻撃である『ステインガーポレーション

“だ。この攻撃は凶悪な牙から発せられる攻撃だが、糸に絡めたり霧状に噴射したりと応用が利く。今放とうとしたのも、霧状に噴射するつもりだったんだらう。そこで、ドクグモンが必殺技を放つ瞬間に顔を蹴り上げてみた。

するとどうだろう、ドクグモンは自分の真上に毒を噴射し、自分の体に毒を撒いてしまっている。その結果、ドクグモンは段々動きが鈍くなっていつているな…自分の毒が効くのか分からなかったが、効くのならば話は早い。

「ふっ！」

「ガハア!？」

「トゲモン、頼む！」

「ッチクチクバンバンッ！」

「ギヤアアアアアアア!？」

腹を殴って壁に叩きつけた後、トゲモンの必殺技による針で身動きが完全に取りれなくなってしまったドクグモン。顔も真上を向いている状態の為、首だけこつちに向けて攻撃っていうことも出来ないだらう。圧勝だったな。

「よし、これで終わり！太一達の所へ戻るぞ！」

「うん！」

「倒さないで済むなら、それに越したことは無いですよね？」

「暫くは動けないだらうね…」

ドクグモン達を撃退した俺達は、太一達の元まで戻ってみると、太一が丁度カードを置いた所だった。

「開け…ゴマモン!!」

太一のその一言の後、扉がゆっくりと開いていく。どうやら、原作通りゴマモンにしてくれたみたいだな。もしアグモンを選んでいたら…どこに繋がったんだらうな？興味はあるが…まあ、もうこのゲートを使う機会も無いだらうし、気にする必要は無いが。

「開いていくぞー！」

「やったあー！」

「太一！やったのね！」

「空、皆！」

「こっちは無事に終わったよ！」

「よーし、皆！行くぞ！」

俺達はゲートを潜り、気づくと体は不思議な浮遊感に飲み込まれた。次に気がついた時には、体が何かに埋まっているような感覚と、全員を襲うヒンヤリとした感覚…つて冷てえ!?

「ぶはっ…さ、寒っ!?!」

どうやら雪に埋まったらしい。辺り一面、薄らと雪が積もっていて、少し離れた場所には祠が…そして、俺の近くには子供達と、デジモン達と同じように埋まっていた。どうやら子供達は皆気絶しているみたいなので、ひとまずデジモン達の方を掘り起こしていった。

デジモンになってから、初めてやってきた人間達の世界。もつと感慨深いものかと思っていたんだが…何か、思っていたよりもあっさりしてるな。まだ実感が無い。人間達や、都市を見れば実感も湧くかもな…ま、それは追々だな。

とにかく、どうやら無事に世界を渡れることは出来たんだ。あとは、ヴァンデモン達の野望を阻止するだけだ。ここから先が正念場…出来るだけ、デジモン達の犠牲を抑えてみせるんだと、そう気持ちを新たにした俺は…ひとまず、食料集めに行こうとするアグモン達を静止したのだった。

第二十四話 マンモン光が丘大激突!

「ここは…」

「キャンプ場、か…?」

「んっ…」

目が覚めたら、私達はキャンプ場にいた。雪が積もった古い祠：ちやんと、帰って来れた…んだよね。

「ここで私達は、デジモン達の世界に…デジモン達は?」

空ちやんの一言を聞いて、私達は周囲を見渡す。何だか、ボンヤリしちやってるけど…今までの冒険が全部夢だった、なんてことは…絶対に無い。奇想天外な冒険だったけど、ちやんとデジタルワールドでの日々は覚えてる。あれを全て私の妄想、で片付けるには無理があるよね。

「あ!あそこ!」

「…何やってるんだ?アイツら」

タケル君が指差す先には、全員うつ伏せの体勢で、山のように積み重ねているデジモン達の姿が…あれ? ロップモンがいない?

「ロップモン? ロップモン!」

「ロップモンだけいませんね…」

もう一度辺りを見渡してみるけど…ロップモンだけ見当たらない。祠の中も念の為見に行ってみよう。

「おーい、アグモン!何やってるんだよ!」

「あ、太一!」

…やっぱりいない。何でロップモンだけ?

「実は、ロップモンが…」

「ロップモンがどうしたんだ?」

ガブモンの口からロップモンの名前が出てきたのが聞こえて、そっちにやや急いで向かう。でも、あのロップモンが勝手にどこかに行ったりしないと思ってただけだな…

「結衣先輩!あそこに!」

「え?あ、ロップモン!」

アグモン達が見ていたのは、階段の下。この階段の下には、私達が寝泊まりするはずだったキャンプ場がある。そのキャンプ場へと繋がる階段の中腹辺りに、背の高い眼鏡をかけた男性が、茶色いものを手にして立っていた。

あれ、間違いなくロップモンだよね…

私は急いで階段を降りて、その男性の元へと向かう。

「あ、あの…い…」

「ん？おお、小林！お前達こんな所にいたのか！後片付けもせずに、こんな所で何をブラブラしている！」

「…っ」

その男性…藤山先生は、今回のサマーキャンプに引率で来ていた先生の一人。ロップモンのことを何か言おうと思ったんだけど、思わず黙ってしまふ。

それを見た先生は、私の様子を見て申し訳なさそうにしている。てつきり、もう大丈夫なのかと思っていたんだけどなあ…実際、ヴァンデモンと対峙した時は何とも無かったはずなんだけど。

「おつと…すまん、小林。とにかく、この雪でキャンプは中止と決まっただろう。他の皆はもう帰り支度を始めてるぞ」

「…そ、そう、ですか」

「あー…ンン、と、ここで、お前たち。そのぬいぐるみはどうしたんだ？」

お前たち、という言葉に疑問を覚え、後ろを見ると、太一君達がすぐ後ろにいた。どうやら追いかけてきてくれたみたい。

「こ、これは、その…拾ったんです！」

「そうそう！」

「捨ててあったのよね！」

「それで、遊んでたら結衣さんのぬいぐるみが、えと、落としてしまったというか、跳んでいってしまったというか、とにかく無くしてしまっ

「ん？何だ、これは小林のなのか？」

「は、はい…」

皆が口裏を合わせて、特に光子郎君が切欠を作ってくれたおかげで、先生が私にロップモンを返してくれた。

「あ、ありがとうございます…藤山先生」

「良いって良いって、それじゃ帰り支度が出来たら、全員駐車場に集合だ。グズグズするなよ！」

〈はい！〉

私を除く全員が声を揃えて返事して、藤山先生は駆け足で階段を下っていった。

「結衣さん、大丈夫ですか？」

「あ、うん…助かったよ、光子郎君。皆も、ありがとう」

「結衣さんがあんなにビビるなんて、なんかちよつと新鮮だな！」

「デジモン達相手には普通に話していたのに、少し意外だよ」

「あはは…私にも苦手なものくらいあるよ？」

「それより、これからの事を話しましょ！どうやって光が丘に行く？」
空ちゃんが話を切り替えてくれた…正直、こういう話題は出来れば触れて欲しくないことだったから、助けられちゃったな…この悪癖、早くちやんと直さないと。

一旦切り替えて、皆でこれからどうするのかを話し合い、先生とバスの運転手さんに頼んで光が丘で降ろしてもらえないか聞いてみることになった。デジモン達は、とりあえず人形のフリをしてもらう。

人前で話さず、私達が抱えていれば誤魔化せると思う…アグモンとかテントモンとかが大変そうだけどね。全員成長期だから、余計大変だ。これが幼年期だったらもつと楽なんだけど。

「そういうえば、ロップモン。何で一人でこんな所に？」

「いや、待ってくれ。これには理由があつてだな…」

「何かあつたの？」

「アグモン達がこの階段を降りようとしていたから、俺が慌てて止めたんだ。そしたら、アイツらに押されて俺だけ階段から落ちてな…慌てて起きようとしたらさっきの先生に拾われちゃったんだよ」

成る程、ロップモンもデジモンが動き回るのは不味いと思って、ア

グモン達の動きを抑えてくれていたみたい。そういうことなら、別に気にしない。誰も悪く無いし。

「大変だったね、お疲れ様」

「ああ：お前にも迷惑かけちゃって、悪いな」

「それじゃあ、お詫びとしてしばらくこのままね？ どうせ人形のフリしなきゃだし」

「ハイハイ、黙って動かないようにするよ」

ひとまず解散して、それぞれ荷物を取りに行ったり、テントの片付けを手伝いに行ってみる。藤山先生が行っていたように、もう殆ど片付けは終わっていて、サマーキャンプに来ていた殆どの生徒が、駐車場に集まっていた。

「おお…」

「どうしたの？」

「いや：今見ている光景で、ようやく人間界に来たんだなって実感がしてな」

ロップモンが感慨深そうにそう話す。元人間って言ってたもんね：デジタルワールドの時間の流れがこつちと違うから、ロップモンがどれくらいデジモンとして生きてきたのか分からないけど、今の私と同じように懐かしさみたいなのを感じているんだろうな：

「：ねえ、私の家に帰ったら、何か食べたいものとか無い？」

「食べたいものか：料理なら何でも嬉しいぞ？」

「作り甲斐が無いじゃん：何でも良いから言つてよ、頑張つて作つてあげる」

「そうか？ なら、そうだな：卵焼きなんてどうだ？」

「それくらい簡単に作れるけど：そんなんで良いの？」

「卵焼きって家庭によって違うだろ？ お前の家の卵焼きを食ってみたんだよ」

「分かった、じゃあ今晚作つてあげるね」

「おう！」

そんな話をしているうちに、太一君達が遅れて駐車場に到着したの

でも合流する。あと来ていないのはミミちゃんなんだけど…

「あ」

「どうした?」

「ミミさんがあそこに…」

「どうやら、ミミちゃんは友達に会えて嬉しくなつて、抱きついたりしてみたい。ミミちゃんの友達は不思議そうな顔をしていた。」

「私達はデジタルワールドで何ヶ月も過ごしたから、ミミちゃんの反応も分かるんだけどね…他の人達にはさつき会った、くらいの感覚なんだもんね。何だか、変な感じ。」

「結衣君、ミミ君について行ってもらえないか?僕達は藤山先生に光が丘で降ろしてもらえないか頼んでみるよ」

「分かった。お願いね、丈君」

「私とミミちゃん以外の皆が藤山先生の元へ向かい、私はミミちゃんと同じバスに乗る為に近くに行く。あ、そうだ。」

「パルモン、一緒に行こ?ミミちゃんの所に連れて行つてあげる」

「ホント!?ありがと、結衣!」

「忘れられているパルモンが可哀想だったので、助け船を出す。右手でロップモンを抱え、左手でパルモンの手を掴んでゆつくり歩く。流石に二体とも抱えて行くのは難しいので、パルモンには他の皆にバレないようにゆつくり歩いて貰う。」

「ミミちゃん!」

「え?あ、結衣さん!」

「ちゃんと連れて行つてあげないと、可哀想でしょ」

「あ、パル…じゃなくて、私の人形、忘れちゃつてたく!アハハハ!」
「パルモンって言おうとして、慌てて人形ということにして思いつきり抱きしめるミミちゃん。パルモンがかなり苦しそうだけど…頑張れ。」

「あの、小林先輩ですよ?」

「うん、そうだけど」

「え〜!ちよつとミミ、いつの間に小林先輩と話してたの?」

「良ければ帰りのバス一緒に座りませんか?小林先輩と一度お話してみ

たかったんです！」

「うん、良いよ。あ、私とミミちゃんは途中下車しちゃうんだけど、それまでで良かったら」

ミミちゃんの友達二人がそう言ってくれたので、バスの中で四人で相席することになった。

それにしても、この子達は私のことを何で知っているんだろ？会ったこと無いと思うんだけど…私、後輩達に知られるような目立つことしたことあったっけ。

その後、全員ちゃんと同じバスの中に乗り込んで出発。ちゃんと光が丘に歩いて行ける所へ降ろしてもらえることになったらしい。既にヴァンデモン達も光が丘のどこかにいるはず…一刻も早く向かわないといけない。

「あの、小林先輩！どうしたら小林先輩みたいになれますか？」

「私みたいに？」

「この子、結衣さんに憧れたんですよ！去年の運動会で活躍してる姿がカッコ良くて、普段は優しくて素敵だって！それに美人だって言うてたわよね？」

「ちよ、ミミ！そんな、恥ずかしいじゃない！」

運動会…確かに徒競走やリレーとかで一位になったけど、まさかそんな風に思ってくれる子がいるなんて、思ってたなかった。

「誇張され過ぎだと思っけど…ありがとう、嬉しいよ」

「えーっ！そんなこと無いですって！結衣さんはもつと自分が美人って自覚して下さいよ〜」

「美人なんて、初めて言われたよ？それに皆も十分可愛いじゃない」

「え、そうかな、えへへ」

「っていうか、小林先輩のその人形可愛いですね！ちよつと触っても良いですか？」

「うん、良いよ！」

(…!?)

そんな他愛ない会話をしていると、いつの間にか光が丘団地付近まで到着していた。私達はデジモン達を連れて(持って?)バスを降り、光ヶ丘団地へと歩いて向かう。

この辺りを歩くのも久しぶりだなあ…四年前まではこちら辺のアパートで暮らしていたから、その時以来かな。

「あれが光ヶ丘団地?」

「ああ」

「すごい!空、あんな大きなお城に住んでたの?」

「お城じゃないわよ、中は細かく区切られていて、とても沢山の人が住んでいるの」

「空も光が丘に住んでたの?」

「俺と空は同じクラスだったんだよな。第三小学校、一年二組!」

「俺は第四小学校だった」

「じゃ、じゃあ先生を騙すために嘘をついていたんじゃないのか…」

「光が丘に住んでいたのは本当だよ」

「うん、僕もちよっぴり覚えてる!」

途中下車を許可して貰う為に、少し大きさにヤマト君とタケル君が演技したらしい。家族四人で暮らしていた場所を見たいとか、そんなことを言いながら抱き合うという、所謂お涙頂戴的な感動的な感じだったとか…空ちゃんがそんなことを言っていた。

「私も、ヤマト君と同じ第四小学校だったなあ」

「僕は、第五小学校だった」

「アタシも幼稚園の頃に!」

「僕もですよ!ほんの少しの間でしたけど…」

「じゃあ、全員が光が丘に住んでたってことか?」

「ただの偶然とは思えないですね…」

ついに、選ばれし子供達の共通点を見つけた。今までも何度か、光二郎君と私達が選ばれた理由とか、選ばれた基準について話し合ったことがあったけど、結局分からずじまいだった。

というか本当は、私はロップモンから聞いたことがあるんだけど…

それは、私の口から言っただけで良いことじゃないし、光子郎君には悪いけど黙っておくことにしたんだ。

「とにかく、今は九人目の選ばれし子供を探そう！」

「手分けして探した方が良いんじゃないでしょうか？」

「よし、じゃあ一時間後にあの駅に集合にしよう！」

デジヴァイスの反応を頼りに、バラバラになって九人目の選ばれし子供を探す。同じ選ばれし子供なら、私達と同じようにデジヴァイスを持っているはずだから、この方法でなら探し出せる。

やっぱり問題は、ヴァンデモンが今どの辺りにいるのか。確かロツプモンの話だと、ヴァンデモンは既に九人目の選ばれし子供：太一君の妹である八神光ちゃんとの光の紋章を持っていて、それが選ばれし子供に近づけば反応する。でも、この方法も私達と同じようにデジヴァイスに反応するから、もしデジヴァイスを持っていなければ反応しない。

何で私が、九人目の選ばれし子供が光ちゃんだと知っているのに、この光が丘に来たのかというところ——

「ロツプモン、この辺りで良いの？」

「ああ、そのはずだ。この辺りにマンモンが現れるはず」

ヴァンデモンの配下として連れてこられたデジモン、マンモンがこの光が丘で大暴れする。車を破壊したり、陸橋を破壊したりとかなり大事な事件になってしまう。それを防ぐ為に、ここまでやって来た。

他にも、ここからお台場に帰る途中にも、ゲソモンっていうイカミたいなデジモンも暴れるらしいし：出来るだけ、無関係の人達に被害が出てしまうのは避けたい。

……あと、ここが荒れるのは見たくないし。

「結衣？」

「え？」

「いや、次はあっちの方に行かねえかって話をしてたんだが…どうした？」

「ううん、何でも無い。それじゃ行ってみよっか」

その後、マンモンを搜索するけど特に何も見つけれなかった。もうすぐ約束の時間になるので、一度集合場所の駅へと向かうことに。

マンモンって、ロップモンの話によるとかなり大きなデジモンらしいんだけど…ゾウと同じくらいって聞いていたのに、そんな大きな動物は見る影も無い。

「結衣、分かっていると思うが…今回ばかりは手加減は出来ないぞ」「…やっぱりダメなのかな？」

「俺も考えたんだけどな…結論は前に話した時と同じだ。俺達が倒さなくても、ヴァンデモンに殺される。隠すにしても、場所もねえ。こつちに来ちまつた以上、倒されたデジモンはデジタマに戻ることも出来ないだろうしな…」

ピッコロモンの修行で二人きりになった時から…ヴァンデモンの配下のデジモン達は、どうしても倒さなければならぬと聞いていたんだけど、何とかして助けられないかと二人で話し合った。結論は、今ロップモンが言った通り。

こればかりは私達ではどうしようも無い…ヴァンデモンの城に乗り込んでいけば、配下のデジモン達を私達の世界に連れてくるのを防げたかもしれない。でも、ああいう選択をしたのは私達だし、こうなることもロップモンからも言われていたから、心構えはしていたつもりだった。

やっぱり、心構えをしても辛い。敵とは言っても、デジモンを…殺さないといけないのは。

☆☆☆

「皆…どうだった？」

「いや、こつちは何も」

「こつちもよ。反応無しだわ」

「うーん：今は光が丘にはいないのかな」

結局、全員集合してみたが誰も収穫は無かった。まあ当然だが、ヴァンデモンの配下のデジモンも見つからなかったな：マンモンならすぐに見つけられると思っていたんだが。

出来るだけ被害が出る前に倒したいんだよな：特にマンモンはかなり大規模な被害になっていたはずだ。恐らく死者も出ていただろうし。

結衣はマンモン達を助けたいと言っていたが、現状では不可能に近い。

ヴァンデモンは残酷なことを平気でする。原作のパンプモンとゴツモンのように、裏切ったデジモンはすぐにやって来て始末される：もし、俺達が見逃したデジモンが俺らに協力しようとしたなら、その時点で俺達はほぼ詰みだ。

ヴァンデモンが直接俺達に攻撃してきたら、完全体にまだ進化出来ない奴らがやられる可能性がある。なんせ、ヴァンデモンは完全体七体、というより天使型の完全体デジモンがいないと倒すのは困難だからな。

とにかく、余計な危険を避けるためにも、俺は敵を躊躇しないで倒す。

ヴァンデモン側のデジモンと、この世界の人間達の命を天秤に掛けることになっちゃったが：悪いが、俺は人間達を守る。結衣や、結衣の友達とか家族もこの世界にはいるんだ。

それにしても、久々の人間界は新鮮な感じがしたが、慣れてくると騒音が多すぎるな。少しは慣れてきたんだが、車の音が特にうるせえ：耳が良すぎるってのも、この世界じゃ少し厳しいぞ、これ。

「……ん？」

「何か聞こえた？」

「他の音がうるさくて確証は無いが：多分、あっちの方から変な音が聞こえるな」

「変な音か…」

「どうしますか?」

「行ってみよう。ヴァンデモンが連れてきたデジモンが暴れているのかもしれない」

俺の聴覚を頼りに、その音がする方へ向かう。

変な音っていうか、擬音にするとグシヤ、ゴシヤ、みたいな音がするんだよな…不規則に数秒間隔で聞こえてくる。もしかすると、これがマンモンの足音なのか? たまに聞こえないのは、立ち止まっているからなのか? マンモンの足音なら、もつとズシンって感じの、もつと重たい音だと思ったんだがな。

俺の予想はどうやら的中したらしい。向かった先の道路に、茶色の巨大な塊が動いているのが見えた。道路のど真ん中を陣取って、その長い鼻をブンブンと振り回している。

「おい、あれを見ろ!」

「あれは…デジモンだ!」

「あれは、マンモンです。完全体のデジモンのようですね」

「完全体か…だったら、こっちも完全体に進化だ!」

「ちよ、ちよつと待って、太一! もう少し作戦を考えなきゃダメよ!」

「そうだよ、ここは人間界なんだから、周囲の被害を抑えないと…」

確かに、メタルグレイモンだと破壊力がヤバそうだな…かといって、ここで二体も完全体になったら、後々のエネルギー回復の為に食事が大変だな。金もかかるだろうし。

一番被害が出なさそうなのは…ワールガルモンか? 人間の大人よりもやや大きいくらいのサイズだし、俺含め他の完全体よりは戦いやすしい被害も出しづらいはずだ。

「ヤマト、ガブモン。お前たちならどうだ?」

「俺も同じ事を思ってた。行けるか、ガブモン?」

「もちろん、いつでも行けるよ!」

「光子郎君、マンモンの技とか分かる?」

「えつと、長く伸びた二本の牙で相手を突き刺す。タスクストライク

ス」と、長い鼻から一気に冷たい息を吐き出して、どんな相手も一瞬で凍らせる。ツンドラブレス」の二つです」

「氷…ありがとう、光子郎君。じゃあ、ワーガルルモンが戦っている間、グレイモンとバードラモンに待機してもらって、出来るだけ周囲への被害を抑えるように動くのはどうかな?」

「凍らせる攻撃をしてきた時の為に、炎を出せるからってことですね！」

「よし、じゃあ今の作戦で行くぞ！他の皆も、いつでも戦えるようにしていてくれ！」

〈おー！〉

ワーガルルモンがメインで、グレイモンとバードラモンがサポートか…それなら、今回は俺の出番は無いかもな。俺は出来るだけ周囲に気を配るようになるか。他にもヴァンデモンの配下のデジモンがいるかもしれないな。

全員である程度近づいた後、太一とヤマトがマンモンの目の前、空がマンモンの後ろへと移動する。戦いの場が駅近くの道路になってしまったが、これ以上被害が増えるよりはマシだろ。

「行くぞ、アグモン！」

「頼む、ガブモン！」

「アグモン、進化——っ!!グレイモン!!」

「ガブモン、進化——っ!!ガルルモン!!」

マンモンの前に並び立つグレイモンとガルルモン、先に仕掛けたのはガルルモンだ。『フォックスファイアー』を放ち牽制しながら、マンモンの横を通り過ぎるように背後に回る。

マンモンがガルルモンに注意を向けた隙を、グレイモンが頭突きを喰らわせる。

「うおっ…！」

「グレイモン！」

だが、グレイモン一体では、マンモンのパワーには勝てない。頭突きしたグレイモンが簡単に押し返され、グレイモンが仰け反った。何

とか倒れずに数歩後ろへ下がるグレイモン、その隙を狙って突進を仕掛けようとするマンモン。

「こっちも行くわよ、ピヨモン！」

「うん！ピヨモン、進化——っ!!バードラモン!!」

援護で現れたバードラモンが、マンモンを上から襲う。突進攻撃をキャンセルされたマンモンが、今度はバードラモンを攻撃しようとしたが、今度はガルルモンが側面から炎攻撃で牽制。バードラモンが上空へと飛び立つ。

上手く牽制しながら、一体だけに的を絞らせないように立ち回ってるな。戦い方が上手い…！いつの間にかこんな戦い方が出来るようになったんだよ、コイツら。このままなら完全体にならなくてもそのうち削りきれられるかもしれん。このままなら、の話だが。

「かいじゅう…！」

「え？」

「どうしたんですか、タケル君」

「僕、前にもかいじゅうを見たんだ！それで、今みたいに戦ってた！」
観戦していたタケルが、そんなことを言い始める。確かにこの時の戦闘は、昔のデジモン事件を思い出す切欠になっていたが…グレイモンとバードラモンが加わったことで思い出したみたいだな。

「怪獣…そうだ、あの時も」

「うん、こんな感じだった！」

「私も…覚えてる。大きいのが、互いに戦って…」

そんな重要な会話をしていた俺達だったが、戦っている三人は俺達の会話は聞こえていないらしく、ヤマトがデジヴァイスを掲げていた所だった。

「ガルルモン！」

「ガルルモン、超進化——っ!!ワーガルルモン!!」

獣人のように二足歩行となったワーガルルモン。今まで牽制の意味合いでの攻撃しかしていなかったガルルモンだったが、超進化した

今、ガルルモン以上の素早い攻撃が、ガルルモンの数倍の攻撃力を持ってマンモンへと襲いかかる。

マンモンは為す術無く、フルボッコ状態だ。必殺技を使う暇も無く、グレイモンやバードラモンからの牽制もあつて、本当に何もさせてもらえていない。

「ワーガルルモン！後ろに回れ！」

「グレイモン、そのまま撃て！」

「バードラモン、グレイモンに合わせて！」

ちゃんと子供達もただ見ているだけじゃなく、戦況を見て指示を出している。この指示も、何をやるうとしていいのか分かりやすいな。敢えてマンモンに必殺技を撃たせて、その隙をワーガルルモンが仕留めるつもりだ。

「メガフレイム！」

「メテオウイング！」

マンモンが「ツンドラブレス」を、グレイモンとバードラモンの炎が相殺。そして背後に回っていたワーガルルモンが、両手に力を溜めている。

「カイザーネイル！！」

これが、マンモンのトドメの一撃となった。マンモンは体を粒子へと変え…消滅していった。

マンモンを倒した後、警察がやって来た。すぐ近くにいた俺達も事情聴取で捕まる可能性があったから、とりあえずその場から離れ、今は木が多く生えている公園に身を隠している。

「…そうだ、覚えてるよ。タケルが母さんに怪獣を見たつて言い張ったんだ。俺も同じ光景を見ていたのに、俺は何も言えなかった」

「それは、いつのことですか？」

「四年前の、爆弾テロ事件の時だ」

「爆弾テロ…多分、デジモン達が起こした事件だって分からなかったから、爆弾テロってことになったんだね」

戦闘中のタケルの発言についてヤマトに尋ねたら、ヤマト自身にも心当たりがあったらしく、そう話してくれた。その話を聞いた太一は目を瞑り、何かを考え込んでいる。

「あの時…戦ってたんだ。今日みたいに、何かと何か…あの時戦っていたのは…グレイモン？」

「そうだ、グレイモンだ！」

「そうよ！」

「あの日、家にコロモンが来たんだ。コロモンはアグモンになり、グレイモンになって、もう一匹のデジモンと戦ったんだ！」

…四年前なんだろう？覚えてないのか？まあ小学一年生とか幼稚園年長とかだと記憶も曖昧なのかもしれないが…皆が忘れていような昔のことを覚えている光が凄いのか？

「光の奴、コロモンのこと知ってるわけだよ、あの時会ってたんだ」

「そうなの？」

「きつと違うコロモンだよ。でも太一と初めて会った時、何だか懐かしい感じがしたんだ…」

「でも、これで少し分かってきたね」

「ええ、なぜサマーキャンプにあれだけの子供がいたのに僕達を選ばれたのか。僕達には、四年前にデジモンに出会っていたという共通点があったんです」

「それじゃ、九人目も？」

「間違いなく、あの事件の目撃者のはずです！」

「……」

結衣が考え込むように俯き、視線をすぐに太一の方に向けた。

「太一君」

「何だよ、結衣さん？」

「思ったんだけど…九人目って、太一君の妹さんじゃないかな？」

「えっ!？」

「光ちゃん、だっけ。彼女は四年前の事件にも関わっていて…デジモンに既に会ってるんでしょ？コロモンのことも覚えていたって言うてたし」

「あ、ああ…」

「そうですね…僕達のもう一つの共通点も含めて、その可能性は高いかもしれません」

「もう一つって？」

「…光が丘から引越した？」

「はい」

「この光が丘を探し回っても反応が無いのは、もう光が丘にはいないから。もしかすると、太一君の家にデジヴァイスがある可能性が高いと思うの」

「だったら、急いだ方が良く。早く太一の家まで向おう」

俺達はどうして、八神光のいる場所…八神家へと向かうことにしたのだった。

第二十五話 東京湾大襲撃!

光が丘でマンモンを撃退した俺達は、九人目の選ばれし子供が太一の妹である光なのではないかと推測し、ひとまず全員自宅へと帰るところにした。

駅に入り、子供達が路線図とにらめっこしている間に、俺はこれから戦うだろうゲソモンとどう戦うかを考える。そして、俺はある可能性に気がついた。

ゲソモンとは無理に戦わなくて良いのではないか、という可能性だ。

原作でゲソモンが太一達に襲いかかった理由。それは、デジヴァイスの進化の光を目視したからだ。ゲソモンが偶々太一達の傍を通る時に、これまたタイミング良くモチモンがテントモンに進化した。その光を見たゲソモンは、選ばれし子供達がいると確信し襲いかかってきたんだ。

じゃあ、この偶然のエンカウントを回避したらどうなるか? 答えは簡単だ、何も起こらない。ヴァンデモンの手下達は、選ばれし子供達と接触しない限り襲いかかってこない。奴らが無差別に襲いかかるようになるのは、ヴァンデモンが本格的に動き始めた後だ。つまりそれまでは無闇に人間に襲いかかることは無いということだ。

もしスルーした場合、問題になるのはゲソモンをいつ倒すことになるのかだが:ゲソモンはイツカクモンと一対一で戦っても勝てるくらいに弱い。つまり、俺でも一人で何とかなる。だったら、他の子供達と別行動している時に海辺に行つて倒せば問題無い。いや、もしかすると:今夜にでもチャンスはある。

「というわけなんだが:ただ、この場合は俺達が倒さなくちゃいけない。どうする?」

「:私なら大丈夫。それに、この後に遭遇しない可能性もあるんだよね? じゃあ、出来るだけ出会わないように、お台場まで帰ろう」

戦うのが嫌いな結衣を、戦いに連れ出すのは正直気が引けるが:い

や、これは乗り越えなくてはならないことだ。ゲソモンには悪いが、結衣が戦いに慣れる為の踏み台になってもらおう。

日も暮れ始めてきた夕方。俺は今、結衣の家の前にいる。

いやあ…マジで何事も無くお台場に帰ってきたな。原作だと電車で寝過ごした描写があったはずだが、それも結衣が全員を起こしたことで回避。唯一の問題は、ミミがハンバーガーを食べたいと言いついたことくらいだ。それも結衣が何とか宥めたことで事なきを得た。

しかし、無事にお台場に着いたものの、今から全員で八神家にお邪魔するのもどうかということになり、今日は全員それぞれの自宅へ帰って、太一は光にデジヴァイスを確認する手はずとなった。

…まあ、俺達は夜に芝浦へ行くわけだが。ゲソモンをスルーしたとはいえ、八神家の飼い猫のミーコの行動を変えることは出来ていないだろうし。きつと、ミーコは原作通りにデジヴァイスで遊ぶ一連の流れをするだろう。あの猫を確保しなければならぬ。

「なんか…凄い久しぶりな感じ」

「……」

とにかく、今は結衣の久しぶりの帰宅なのだ。正直、何故か俺も少し緊張している。

俺は結衣の家族構成とか、そういう話を本人の口からはハッキリと聞いていない…

結衣の父親も…多分いるよな。

まあ、あの時はピッコロモンの幻覚だったが…あれを見た時は、事情は殆ど知らない俺でも理不尽な父親だと思ったものだ。そして、恐らくこの家にはあの父親も一緒に暮らしているはず。警戒しておくに越したことはない…はずだ。

「ロップモン、ビックリした？これが私の家…っていうか、私のお爺ちゃんの家だよ」

「爺さん？」

爺さんの家と聞いて、少し納得した。てつきりアパートとかに住んでいると思つたら、和風の一軒家だもんな。爺さんが和風なのが好みなんだろう。

「多分お爺ちゃんの中にはいると思うから、人形のフリお願いね」

結衣の爺さんについてももう少し聞こうとしたが、結衣はすぐに玄関を開けて、ただいまーっ、と声を上げる。すると、少しして奥から結衣の爺さんと思しき人物が出てきた。

「ん？結衣、なのか？」

「ただいま、お爺ちゃん」

「お前さん、今日はキャンプではなかったか？」

「それが、キャンプ場に雪が降って中止になっちゃったの」

「なんと！こんな夏真っ盛りの時期に雪が降るとは、驚きじゃのう！」

「うん。ホント大変だったよ……」

ほっほっほ、と朗らかに笑う結衣の爺さん。なんか、思っていたよりも元気そうな爺さんだ。ヨボヨボの爺さんというよりも、健康的そうな筋肉が見てとれる爺さんだ。何か武術とかやってたのか？

「ところで……まーたそんな物を買ってきたんじゃな？」

「別に良いでしょ」

「うむ、中々可愛らしくて良いと思うぞ。そうじゃ、由恵ならもうすぐ帰ってくると思うぞ」

「うん、分かった」

そう言つて、二階へと上がっていく結衣。どうやら二階に結衣の部屋があるらしく、結衣は迷うことなく一つのドアノブに手を掛けた。

「ここが、私の部屋だよ」

「おお……おう」

何か微妙な感想になった。結衣の爺さんが俺を見てあんな反応になったのも頷ける。結衣の部屋には、可愛いぬいぐるみやポスターなんかもあつて、如何にも可愛い物が大好きな女子って感じの部屋だった。外観の和風建築とは合わないな……

「この部屋も、久しぶり……」

結衣が自分のベッドにダイブした。俺は結衣の部屋を見回してみる。パソコンやゲームもあるな。思ったより結衣ってインドアなのか…ん？

「なあ、結衣。お前って何か習ってるのか？」

「え？ううん、何で？」

「いや、あれ」

結衣の部屋には似合わないような、無骨な胴着がそこにあつた。空手とか習っているなら持つていても不思議じゃないと思うんだが… どういうことだ？

「あれは、お爺ちゃんが買ったの。一階に広い部屋があつてね、お爺ちゃんにそこで合気道教わってるんだ」

「合気道…何か、お前の爺さんって強そうな感じするよな」

「他にも色々かじってるらしいよ。空手に柔道、剣道とか色々ね」

なんだ、その脳筋爺さん…下手したらデジモンと戦えるんじゃないやね？

そんな他愛ない話をしていたら、ガラガラと玄関を開ける音が聞こえた。そのすぐ後、階段を駆け上がるような足音が聞こえてきた。

「誰か来るぞ？」

「私のお姉ちゃんやんで由恵って言うの。私の七つ年上で、今年から新社会人なんだ」

七つも年上…ってことは、結衣の姉ちゃんは高卒で社会人になったのか。と、その時、部屋のドアからコンコンと音を出す。

「結衣！いるの？」

「はい、いるよ」

ガチャ、とドアを開けてきたのは、スーツを着た髪の長い眼鏡をかけた女性。結衣が大人になったらこんな感じなのかもしれない。

「お爺ちゃんから聞いたよ、キャンプ残念だったね」

「うん、でもまあ楽しかったよ」

「だったら良かった〜…んっ!？」

(なんだ!?)

人形のフリをしていたら、姉ちゃんがこっちにバツと振り向いた。

内心ビツクリしていると、姉ちゃんは俺を思いつきり抱きしめる。

「何この子、可愛い〜!!」

(ぐっ…締まってる、締まってる!)

「お、お姉ちゃん…」

「あ、ごめんね! キャンプ先で買ってきたの? 凄く可愛いわね!」

「あー、まあそんなところ…そうだ、今日はご飯どうするの?」

「そっか、もう準備しないと! 今日はおムライスにするから、楽しみにしててね〜!」

そう言つて、姉ちゃんは一階へと戻つて行つた…あ、嵐のような奴だったな……

「大丈夫?」

「お、おう…何とか」

「それじゃあ…そうだ、晩ご飯どうしよう?」

ああ、そうか…確かに小六の子供が人形を膝に乗せてご飯を食べるってのは無理があるか。

「そうだ、夜出た時にコンビニ寄っていく?」

「良いのか?」

「うん、お小遣い貰ってるから大丈夫」

「…分かった、そうしよう。悪いな」

「それじゃ、私は一階に行つてくるね。ロップモンはここで待ってて」
結衣も部屋から出て行き、一人きりになった俺。この後はまた戦うことになるんだ、今はゆっくり休んでおこう…

☆☆☆

「ご馳走様でした」

「ふふっ、今日はよく食べるわね〜」

だって、久しぶりだったから…と心の中で呟く。お姉ちゃん達に久しぶりだった、とか言っても意味が分からないだろうしね…でも、本当に美味しかった。

「ふわあ…」

「なんじや、結衣。もう眠いのか？」

「うん：ちよつと眠たくなつちやつた」

「慣れない場所で疲れたのかもしれないわね。寝る前に歯磨きするのよ？」

「うん」

この後、夜に抜け出すわけだから、早い時間に眠ったことにしておいた方が気づかれなかな。夜に外出するって言ったら：絶対二人とも心配するよね。さっさと部屋に戻ろうつと。

「ロップモン、入るよ：あ」

小声でそう言つて、部屋に入る。そこには、ベッドの上で寝転がるロップモンの姿があつた。ベッドの横に座つて、そつと頭を撫でる。やつぱり手触りが気持ち良い。

「う：あ？やべ、寝て…」

「大丈夫、まだそんなに時間経つてないよ」

「そう、か：すまん、気づいたら寝てたらしい」

「ロップモンにとつても、久しぶりのベッドでしょ？気にしなくて良いよ」

前にベッドで寝たのは：デビモンのあの幻の館の時。それも警戒していたから、殆ど寝てないもん。安心して寝られるのなんて、本当に久しぶりだもんね：私も多分、ベッドに入ったらすぐ寝ちやいそう。

「：そろそろ行くの？」

「ああ：準備出来たら行くぞ」

「うん」

急いで支度をして：最後に部屋の鍵がかかっていることを確認。荷物も問題無いことを確認出来たら、窓を開けて屋根に足を降ろす。

「なんか、手慣れてないか？」

「四年生くらいの時、ここから外に遊びに行ったことがあるんだよね：あの時はかなり叱られて、それからは一度もしてないよ？」

窓を閉めようとした……その時。

コンコン！

「結衣、起きてる？」

「ビックリした……お姉ちゃん？」

ロップモンと顔を見合わせて、ロップモンが頷く。ひとまず部屋に戻って、窓を閉めてからドアを開けた。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

「まだ起きてたのね、泉さんからお電話よ」

「泉さん？……あ、光子郎君かな。今行くよ」

どうやら私達が想定していたよりも早い時間に、ヴァンデモンの手下が動いたみたい……急がないと不味いかも。

「はい、もしもし？」

『結衣さん、良かった！光子郎です！』

「光子郎君、どうしたの？何かあった？」

『ええ、実はですね……』

光子郎君が言うには、ゲンナイさんが光子郎君のパソコンに搭載した機能で、芝浦に未確認デジモンが上陸したことが分かって、それを選ばれし子供達全員の家電話しているみたい。私は三番目だから、他の皆にも電話してみるそう。その間に私達は、光子郎君の家の前に向かうことになった。光子郎君の家の住所を聞いて、メモに書き記しておく。

「分かった、すぐ向かうね」

『お願いします！それでは』

受話器を置いて……私は、お姉ちゃんとお爺ちゃんがこつちを見ていることに気がついた……どうしよう。

「結衣、どこか行くのかの？」

「えっと、ちよつと急ぎの用事があつて……ダメ？」

「ふーん……」

お姉ちゃんから、疑念の眼差しを感じる……やっぱり、小学生には暗くなる時間帯に歩くのは難しいのかな……？

「少し心配じやのう…大丈夫か？」

「良いんじゃない？結衣はすっかりしてるから、あまり遅くならないうちに帰ってこれるわよね？」

「うん、もし遅くなりそうになったら公衆電話で電話するよ！」

「じゃあよし！あ、そうだ！自転車使う？」

「ありがとうございます、お姉ちゃん！行ってきます！」

「気をつけるんじやぞ！」

一度部屋に戻って、ロップモンその他を回収して、玄関から外に出る。家の庭にある自転車の籠にロップモンを入れて走り出す。

「急がなきゃー！」

「さっきの電話、やっぱ芝浦か？」

「うん！光子郎君の家の前に集合だつて！」

出来るだけ速く移動している中、大事なことを忘れるところだった。

「そうだ、何食べたい？」

「そうだな…ハンバーガーとかが食べてえ」

「ふふっ、ミミちゃんみたい」

「実はあの時から何となく食べたいと思ってたんだ」

「じゃあ、途中で買ってくるね！」

コンビニでハンバーガーを買って、ロップモンに渡す。私も食べたかと思っただけ、さっきいっぱい食べたから遠慮した。これ以上は、ちよつと…色々気になるし。

「う、うめえ…！」

「そんなに感動してもらえて良かったよ」

まだそれ程遅い時間じゃないけど、人通りは少ない路地を通っているから、こうしてロップモンがハンバーガーを食べていても気にする人はいない。それにロップモン、こっち向いて食べてるしね。両手でハンバーガーを持って頬張ってるロップモン、凄く可愛い。

自転車で移動すること数十分。光子郎君の家と思われる建物が見

えてきた。入り口には、光子郎君と…何アレ？光子郎君より小さい、カッパを着た誰かがいる。もしかして…？

「結衣さん！」

「光子郎君、連絡ありがと…ふう、疲れた」

「光子郎、他の奴らは？」

「他の皆さんは、どうやらもう寝てしまったみたいで…」

「わてらだけでも、何とかしましょう！」

「あ、やっぱりテントモンだったんだね！」

よく見てみると、足がそのままだし…まあ、これだけ暗いなら気づかれないか。

ここからはタクシーで移動して、芝浦まで急ぐ。ここからならそれ程遠くないし、時間もあまりかからず、無事に芝浦までやって来た。

「ここにデジモンが…」

「ええ、そのはずです。探してみましよう！」

「…いや、その必要はないらしいぞ」

ロップモンがそう言いながら、耳であつちを見るとジエスチャーしている。

見えたのは、ドロドロとした巨大な物体だった。どうやら、こつちに向かつて一直線に来てる。

「な、なんやアイツは!？」

「…レアモンって奴だ!」

「もうここまで…あれ?」

そのドロドロのデジモン、レアモンの手前に、こつちに全速力で駆けてくる猫が見えた。その猫が加えている何か、ピカピカと光ってる。もしかして、あの猫が…？

「ロップモン、あの子を捕まえられる?」

「任せろ!」

ロップモンが地面に降りて、猫の向かう先を通せんぼした。猫は方向転換しようとしたけど、ロップモンが耳を使って猫をグルグル巻きにして捕まえた。

猫を抱きかかえると、やっぱり何かを加えている。そして、この猫は首輪がついていた。

「光子郎君、これ……!」

「これは……デジヴァイス!?」

「なんやて!?!」

「レアモンは、このデジヴァイスを狙っているらしい。とにかく、一旦奴を倒すぞ!」

ロップモンが前に出て、私はデジヴァイスを取り出す。テントモンも着ていたカツパを脱ぎ捨てて、ロップモンに並んだ。

「ロップモン、進化——っ!! トウルイエモン!!」

「テントモン、進化——っ!! カブテリモン!!」

トウルイエモンとカブテリモンが、レアモンと相對する。その間に私と光子郎君は、少し離れた物陰で隠れる。

「カブテリモン、お前は上から狙え! 俺がコイツの動きを止める!」

「よっしゃ、いっちゃやったるで!」

トウルイエモンはレアモンの体を迂斬りのように鉄爪で攻撃し続けている。その間にカブテリモンは上空へ退避して、攻撃を入れるチャンスを探っている。

トウルイエモンじゃ、あのレアモンには殆ど攻撃を入れられないよね……トウルイエモン自身、それが分かっているからダメージにならないさ。さそうな攻撃をして気を引いているんだ。

レアモンの狙いもトウルイエモンだけに集中し始めて、何度か口からヘッドロを出して攻撃している。それでもトウルイエモンには攻撃が当たらない。それにしても、レアモンが段々私達から遠ざかっているような……何処行くつもりなんだろう?

「トウルイエモン……どこまで行くの?」

「このまま海まで向かう!……ここじゃ周りに被害が出るだろ!」

トウルイエモンはどんどん海の方へとレアモンを誘導していく。

確かに、ここはトラックや倉庫が多くて、周りに被害が出やすいと思うけど…何でわざわざ海に誘導しているんだろ。トウルイエモンが翻弄して、カブテリモンがトドメの一撃を入れる。それで終わりのはずなのに…

とうとう、トウルイエモンは背水の陣…もう一步でも下がったら海に落ちてしまう位置まで来てしまった。レアモンも勝ちを確信したのか、トウルイエモンの逃げ場をなくすようにジワジワと迫ってきている。

と、その時。トウルイエモンの真後ろから、巨大な影が現れた。

「あれは!?!」

「あれは…ゲソモンというデジモンです!あれではトウルイエモンが…カブテリモン!」

トウルイエモンの狙いはこれだったんだ!ゲソモンとレアモンをまとめて倒す為に、ゲソモンをおびき出す為に海の近くまで向かっていたんだ…また無茶して!

ゲソモンが触手を、レアモンがヘッドロ攻撃をほぼ同時に放った。危機に陥ったトウルイエモンは、ゲソモンに向かって飛びかかった。

ゲソモンを足場にして、攻撃を回避。また陸地へとジャンプして戻ってくる。

「今だ!!」

「『メガブラスタ』!」

カブテリモンは、レアモンに向かって電撃を放った。レアモンは大きな爆発に巻き込まれる。カブテリモンはさらにもう一撃を、ゲソモンに向かって放つ体勢をとる。

ゲソモンもカブテリモンの攻撃が脅威と感じたのか、海に潜ろうとしている。僅かに、カブテリモンのチャージが間に合わない。

そう思った時、トウルイエモンが動いた。

「くらえっ、『巖兎烈斗』!!」

トウルイエモンの攻撃で、ゲソモンの体が大きく凹む。その状態で、トウルイエモンが高速で回転。ゲソモンの体を…貫いた。

データの粒子となった二体のデジモンに合掌して、その場を後にすることにした私達。ちなみに、ロップモンが捕まえたあの猫も一緒にいる。

「それにしても、この猫は一体…恐らく、この猫の飼い主が九人目の選ばれし子供だと思うんですが」

「うーん…とりあえず、私の家で預かるよ。明日、皆で集まった時に連れて行く」

「分かりました。では結衣さん、今日はありがとうございました」

「こちらこそ！また明日ね、光子郎君！」

「はい！また明日！」

光子郎君の家から、また自転車に乗って家まで向かう。行きと違うのは、籠に入っているのがロップモンだけじゃなく猫もいることかな。ロップモンが頑張って猫を抑えてくれている…可愛い。

「お前の家、猫とか急に連れて行って大丈夫か？」

「うーん…多分？大丈夫だよ」

「なんだそりや…それより、今日の作戦は良かったら？」

「作戦って、ゲソモンをおびき寄せたやつ？」

「そうそう！上手くいったら？」

うーん…それは流石に結果論だと思うんだけど。

「あれ、実はたまたまでしょ？」

「そんなことねえって！ゲソモンなら、俺でも倒せると思ってたんだよ！」

自信満々にそう言うロップモン。どうやら本当に狙っていたみたいだけど…次からはちゃんと教えて欲しいな。

その後、家に着いた私達は、猫のことをお姉ちゃん達に話して、今

日一日だけ預かる事になった。そして、私とロツプモンはベッドに入ってすぐに、眠りについた。

第二十六話 早すぎる遭遇

八月一日、深夜。もう間もなく八月二日になる頃、一匹のコウモリが芝浦付近を飛んでいた。

「ヴァンデモン様、ご報告があります」

そのコウモリは、普通のコウモリではない。人間界とは別の、デジタルワールドから来たヴァンデモンの手下、ピコデビモンである。

コウモリ型の通信機で、先程の芝浦での出来事：レアモンとゲソモンが選ばれし子供達に倒されたこと、さらに彼らにとつてはそれ以上に重要な情報をヴァンデモンに報告する。

「奴らが倒された付近で、九人目の反応を感知しました。他の選ばれし子供の付近で常に反応していたことから：恐らく、既に選ばれし子供達に合流している可能性があるかと」

苦々しい表情でそう話すピコデビモン。過去の経験から、このような報告をしたらお仕置きされると身構えていたが、ヴァンデモンの反応は思っていたものとは違っていた。

『ふむ…ピコデビモン、お前はそのまま九人目の反応を追え。奴らに気づかれぬように注意せよ』

「はっ…その、ヴァンデモン様は如何成されるのですか？」

『私も準備を終え次第そちらに向かう。明日、選ばれし子供達がバラバラに行動したら報告せよ』

「はっ、了解しました！」

通信が切れたことを確認したピコデビモンは内心ホツとしつつ、九人目の反応を追って飛び去っていった。

☆☆☆

朝、目が覚めたら見知らぬ天井だった…いや、昨日から見知った結衣の部屋の天井だった。

久々のベッドで、俺も結衣もよく眠ってしまったみたいだな…今、何時だ？今日は午前中に他の奴らと集まる予定があるから、早く起き

ないと…

そう思つて、ふと窓の外を見た。ベッドから見たからか、外が白い。最初は雲なのかと思つたが、何かがおかしい。

今日は八月二日、確か東京タワーや渋谷でデジモン絡みの事件がある日だ。俺の記憶では、原作のこの日は晴れていたはず。いや、天気までは詳しく覚えていてるわけじゃないし、雲があつたかどうかまでは覚えていないが、日差しが強い日だったのは覚えている。ミミがそんなことを言つていたのが印象深い。だというのに、今日はそれ程暑くも感じない…

「結衣、起きろ」

「ん…どうしたの…？？」

「ちよつとな…まずはどいてくれ」

結衣の抱き枕状態だった俺は、結衣を起こして窓際に移動する。結衣も眠そうにしながら起き上がつて、俺の傍に来た。

「これは…」

「…霧？」

外が霧に覆われている。日差しは見えず、遠くの景色は見えない。恐らく、というかこの霧は十中八九ヴァンデモンの仕業だろう。だが、この霧は本来なら明日に展開されるはずだ。少なくとも、これ程濃い霧にはなつていなかった。

そもそも、ヴァンデモンがこの霧の結界を張つた理由は、光をお台場から逃がさない為。原作ならヴァンデモンが、光のパートナーデジモンがテイルモンであると気づいたから結界を張つたはずだ。テイルモンを使えば光をおびき出せると。

つまり…ヴァンデモンは既に、九人目のことを嗅ぎつけている？まさか、昨日の芝浦でピコデビモンが…？

「結衣、急いで太一達の所に行くぞー！」

「う、うんー！」

とにかく、全員集合だ。まさかとは思うが…ヴァンデモンが動き始

めているかもしれない。原作よりも早く…どう動くつもりなのか分からないが、この状況で単独行動は不味い気がする。

準備を整え、俺と結衣は約束していた集合場所までやって来た。霧の結界がほぼ出来つつあるから、もしかするともう既にバケモンとかが動き始めているのかと思っただが…どうやらそれはまだらしい。

それにしても…これからのヴァンデモンの動きが読めない。他の子供達は、まだこの霧がヴァンデモンの仕業だとは思ってもいないだろうし…

「ロップモン、大丈夫？」

「あ、ああ…いや、あまり大丈夫じゃないかもしれないねえ」

「まだヴァンデモンは動いていないよ、落ち着いて。皆と話せば、何か良い考えが浮かぶかもしれないし」

「にゃー」

俺の代わりに昨日の猫を抱いている結衣。何とも人懐っこい猫だな…飼猫だからか？まあ…少し和んだ気がしたから、良いか。

それから少しして、他の子供達が次々とやって来る。ひとまず問題無く全員が集まることが出来たのは、良かった。

「あ、ミーコ!？」

「この子、太一君の所の猫なの？」

「あ、ああ！だけど何で結衣さんが…？」

「太一さん、その猫は昨日、芝浦で保護したんです」

昨日の夜の出来事を、光子郎が皆に説明する。特に太一は驚いたようだ…自分の家の飼猫が、レアモンに襲われるなんて大冒険を繰り広げていたとは思わなかったんだろうな。そして、ミーコがデジヴァイスを持っていたという話にもさらに驚いた。

「え、それじゃあそのデジヴァイスって…」

「うん…昨日話した通り、やっぱり太一君の妹さんが九人目なんだと思うの」

「光が…」

「ねえ、だったら早く光ちゃんの所に行つた方が良いんじゃないかしら？」

「そうだな、こうしている間にもヴァンデモン達が狙っているんだ。急ごうぜ、太一」

「ああ！」

本来なら、この話し合いで丈が名簿を押しつけられることになっていたんだが、もう光が九人目で確定だと思つて移動しているからサクサク話が進むな。

「み、皆！ちよつと待つてくれ！」

「なんだよ。丈？」

「悪いんだけど、僕は一度別行動をさせてくれないか？明日から夏期講習なんだけど…その、両親や塾の先生に今日は休むつて連絡しておきたくて」

「夏期講習つて、お前な！今は世界のピンチなんだぞ!？」

「太一君、しょうがないよ。元々私達は受験生だしね…でも、丈君がサボるなんてビックリしたかも」

「ホント、こんな時でも夏期講習は行くつて言うかと思つたわ」

「うつ…そりゃあ、出来るならそうしたいけど。今はそれどころじゃないだろう？人の命がかかっているというなら尚更、塾に行つてる場合じゃないと思うんだ」

…へえ。丈の奴、原作とは違つて成長していたんだな。ちゃんと命の重さを分かつている辺りは、流星は医者の子つて感じがする。

だが、ここで単独行動させるのは不味い。ヴァンデモン側は別に光を狙わなくても、俺達の中の誰か一人でも始末出来れば良いんだし。せめてゴマモンが超進化出来るようになっていれば、まだ安心出来るんだけど。

しかし、これは予想できた展開だな。結衣と目を合わせると、小さく頷いた。

「あ、私も夏期講習あつたんだ」

「えーつ、結衣さんもなの？」

「ごめんね、ミミちゃん。そういうわけだから、皆は太一君と一緒に
行つて？ 私達も後から追いかけるから」

これは予め考えておいた嘘だ。丈を単独行動させない為に二人で
考えた作戦。これなら自然に丈と一緒に離脱出来るし、この後丈と分
かれたとしても、後からついて行けるし。

「そうだ、これはどうするの？ 名簿」

「その中に九人目がいる可能性があると思つたんですが…今は光さん
に会つて確かめてみる方が良いでしょう」

「そうだな。それじゃ、行こう！」

というわけで、皆は太一の家に向かつて行つた。良かったな、丈。
名簿を押しつけられて電話させられることはなくなったぞ。

「それじゃあ、僕達も行こう」

「うん。でも、丈君の家だと厳しそうだよね…お父さんがお医者さん
なんですよ？」

「そうなんだよ…今から何を言われるのかと思うと、ハア。お腹が
痛いよ…」

「大丈夫だつて！ 丈は心配性なんだよ！」

「とうか、お前らケータイは持つてないのか？」

「ケータイ？ 何だそれ？」

ゴマモンはまだ知らないらしい。あれ、確か原作で丈は持つていた
ような気がしたが…と思つていたら、丈が鞆からケータイを取り出し
電話をかけ始めた。

「それが、繋がらないんだよ。発信しても…ほら！」

聞こえてきたのは、電話が繋がらない時のアナウンスの音声だつ
た。これも霧のせいなのか…もしかすると、既にお台場が隔離されて
しまつているかもしれないな。

「ホントだ…私は持つてないし、どこかで公衆電話で試してみる？」

そんなことを話していた時だった。俺の耳が、微かな音を捉えた。
一瞬だけだったが、今確かにバサツ、みたいな音が聞こえた。この音
は、前にも聴いたことがある。

「二人とも、止まってくれ」

「ん？どうしたんだい、ロップモン？」

「敵が来ているみたいだ…ゴマモン、臨戦態勢だ」

「おう！」

「て、敵だつて!？」

「丈君、シーツ…」

ゴマモンと共に地面に立ち、俺は目を閉じて音に集中する。聴覚をより研ぎ澄ますように意識する。

——異音を、複数キャッチ。

「…そこだ！ ブレイジングアイス！」

「ギャア!？」

俺の攻撃が、ピコデビモンにヒット…はしなかったが、どうやら掠めたらしい。悲鳴を上げながら体勢を崩した。

「お前は、ピコデビモン！」

「な、何故分かった!？」

「お前の音は、もう覚えてんだ！何度も欺けると思うなよ！」

前のヴァンデモンに襲われた時には、まさかお前に苦汁を飲まされることになるとは思わなかったがな。もう二度とあんなミスはしねえ。

「チツ、だがここに来たのは俺だけじゃないぞ！」

憎たらしくそんなことを言うピコデビモンだが、そんなことは俺も既に把握済みだ。足音からして、どんな奴なのかも大方察しが付いている。

「結衣！」

「うん！」

「丈、行くよ！」

「頼むぞ、ゴマモン！」

「ロップモン、進化——っ!!トウルイエモン!!」

「ゴマモン、進化——っ!!イツカクモン!!」

成熟期に進化した俺は、ピコデビモンがいる方向とは別方向に向かつて駆け出す。その先には、コートを着た大柄な男がいた。

「イツカクモン！」

「分かつてるー！ ッハーブーンバルカン！！」

「ッ巖兎烈斗！！」

イツカクモンのミサイル攻撃が、その大柄な男に直撃。爆煙で殆ど何も見えなくなったが、俺はお構いなしに必殺技をぶち込む。

ガキイン！と、固い何かにぶつかったような感触。それを感じた瞬間、俺はすぐに退く。

「全然効いてねえな…」

「アイツは!?」

全身が青い炎に包まれた大男——デスメラモン。さつきまではもう少し小さかったが、今はイツカクモンよりも大きいサイズになっている。やはりというべきか、俺達の攻撃じゃそれ程ダメージが通らなかつたらしい。ダメージが少しでもあるならこのまま連携で倒したかつたんだが。

チラツと結衣の様子を見る。デスメラモンの見た目に、少し萎縮してしまっているようだが…

「結衣…大丈夫か？」

「うん…うん、大丈夫。行こう、トウルイエモン！」

結衣の持つデジヴァイスが、さらに光を放って。色が水色から赤紫色に変化する。

「トウルイエモン、超進化——っ!!アンティラモン!!」

デスメラモンと同じくらいに巨大になった俺は、デスメラモンに対して臨戦態勢を取る。

「イツカクモン、お前はピコデビモンを警戒してくれ。奴は俺に任せろ」

「分かった！」

イツカクモンの返事を聞いて、俺はデスメラモンに集中する。イツ

カクモンには悪いが、デスメラモンは炎攻撃を吸収して大きくなる。イツカクモンのミサイルなら効くかと思ったが、あれも炎攻撃に分類されるようだから、イツカクモンには相性が悪い。

「マントラチャント」

「へヴィーメタルファイアー」!

デスメラモンの炎…いや、確か正確には体内で溶かした重金属か。それを避けて、クロンデジゾイド合金レベルまで硬化した右腕で下からアップパーを食らわせる。大きく宙に浮くデスメラモンは、隙だらけだ。

デスメラモンの攻撃は周囲への影響が大きすぎる。辺りを燃やし尽くされる前に…斃させて貰う。

「ハアアアアッ!!」

「グ、ガ…ッ、グハアッ!」

「マントラチャント」で硬化した両腕でラツシュ攻撃。デスメラモンは一切身動きが取れず、ただ攻撃を食らい続けた。そして…粒子となっていた。

まだだ。これで終わりじゃ無い。デスメラモンの命を無駄にしな
い為に、あれを試すんだ。

デスメラモンの粒子を、自分の体の中に取り込むように意識してみ
る。すると、俺の体の中にデスメラモンの粒子が吸い込まれていく。

「アンティラモン…?」

「…大丈夫だ、心配ない」

突然の行動に驚いたんだろう。デジモンロードについては、何も
言っていないかったからな。結衣が不安そうな顔をしていたが、俺は安
心させるようにそう伝えた。

デジモンロードとは、デジモンテイマーズでレナモンがやっていた
現象だ。倒して粒子化させた相手デジモンのデータを取り込み強くな
る。確か、取り込めば取り込む程強くなれるとか言っていたような
気がするが…まあ、俺にとってはそこは重要じゃない。死んだデジモ

ンのデータを俺も取り込むことが出来るかどうかが重要だった。

とにかく、成功したことは喜ばしいことだ。今はまだやらなくてはいけないことがある。この場に向かっていたのは、デスメラモンだけではないのだ。

「後はお前だけだぞ、ピコデビモン！」

「く、くそお……！」

……イツカクモンがピコデビモンをジワジワと追い詰めているようだ。ピコデビモンはどうやら気がついていないようだな。

「イツカクモン、退くぞ」

「な、何で？今は僕らが優勢じゃないか！」

「このままここにいるのは危険だ。別のデジモンが近づいてきている」

「別のデジモンって？」

「分からないが、音は複数だ。このまま連戦は厳しいだろう」

複数の音……そのほぼ全てが羽ばたくような音。ピコデビモンと同じような羽ばたく音だ。それが意味するのは、ただ一つ。

「はっはっはー！もう遅いー！あの方はもう間もなくここへいらっしやるのだー！」

そんなことを言い始めるピコデビモンを攻撃したくなったが、今はそれどころではない。結衣を頭の上に乗せ、丈をイツカクモンの上に乗せる。早く移動しなければ――

「どこへ行くこうというのだ？」

良く響く低い声。忘れもしない……ヴァンデモンの声だった。

☆☆☆

「お待ちしております、ヴァンデモン様！」

ピコデビモンが、ヴァンデモンの近くまで飛びながらそう言った。

ヴァンデモンは薄ら笑みを浮かべながら、こっちの様子を窺っている。

「どうしよう、アンティラモン…?」

「…逃げるのは不可能だ。結衣、俺に考えがある。丈と一緒にあそこに向かってくれ。こっちにも助っ人が来るみたいだ」

アンティラモンの視線の先は…さっきまで私達が集まって話していた場所? あんな開けた場所に…助っ人って、もしかして太一君達か? だとすれば、この状況も何とかなるかもしれない。

「分かった。無茶しないでね、アンティラモン」

「ああ、任せろ」

私を降ろして、ヴァンデモンに集中するアンティラモン。イツカクモンも同じように、丈君を降ろしてアンティラモンと並び立つ。

「丈君、私達はあそこまで行くよ」

「え? 変に移動すると危ないんじゃない?」

「アンティラモンの考えなの、一緒に来て!」

「わ、分かった!」

「『ハーブーンバルカン』!」

イツカクモンの攻撃が始まったのを見て、私達は走り出す。ヴァンデモンは…私達のことは気にも掛けていないみたい。だったら、今の内にさっさと移動しよう。

「『ナイトレイド』!」

「『マントラチャント』!」

ヴァンデモンがイツカクモンの攻撃を迎え撃っている間に、アンティラモンが別方向から高速で殴りかかる。ヴァンデモンはヒラリと躲し、アンティラモンは連続で攻撃し、ヴァンデモンはまた躲す。そんなやりとりがずっと繰り返し返されていた。アンティラモンは出来るだけ時間を稼げるように動いてくれている。急がなきゃ。

「つ、着いたけど…これからどうするんだい?」

「ちよつと待って…」

辺りを見渡して、誰か人影が見えないか探す。

「おーい！」

「あれは、ヤマト！」

「タケル君も！」

来てくれたのは、ヤマト君とタケル君だった。タケル君まで一緒にいるなんて、少しビックリした。ヤマト君なら、タケル君は危険だからって連れてこないと思ったのに。

「二人とも、来てくれたのか！」

「ドカーンって音が聞こえたから、戻って来たんだ！」

「何があっただんだ!?!」

「ヴァンデモンに襲われているの。今はアンティラモンとイツカクモンが戦ってくれてる」

「ヤマト、俺達も行こう！」

「タケル！僕も戦いたい！」

「パタモン：うん！行くよ！」

ヤマト君だけじゃなく、タケル君もデジヴァイスを手にした。すると、進化の光が二人のデジヴァイスから溢れ出す。

「ガブモン、進化！ガルルモン！ガルルモン、超進化——っ!!ワーガルルモン!!」

「パタモン、進化——っ!!エンジエモン!!」

「パタモンが……！」

「進化出来た！」

「：行くぞ、エンジエモン」

「ああ！」

ワーガルルモンとエンジエモンが、アンティラモン達が戦う場所に向かう。ワーガルルモンは、ヴァンデモンに急接近して必殺技の構えをとった。

「『カイザーネイル』！」

「ふっ」

ワーガルルモンの技を躲したヴァンデモンだけど、逃げた先にはエンジエモンが武器を構えている。

「はっ！」

「む…聖なる力を持つ者か」

ヴァンデモンがエンジェモンの攻撃を受け止めた後、すぐに距離を取った。その直後、アンティラモンの体が光り出し、チョコモンに戻ってしまった。

「チョコモン…お疲れ様」

「悪い、もう少し戦えると思ったんだが…」

「だが、これでも三対一だ！」

「お前たちがいくら束になろうと無駄だ。　　ブラッディストリーム
！」

「ぐっ！」

ヴァンデモンの赤い鞭のような攻撃がそれぞれに襲いかかる。ダメだ、このままじゃ徐々に追い詰められてしまう。一度、撤退するべきかもしれない。

「皆、ここは一旦逃げよう！」

「逃げるの!?!」

「ヴァンデモンは、ガルダモンとアンティラモンの二体でも倒せなかった…このままじゃ私達が不利だよ！」

「そう、だな…そうしよう！」

「逃がすと思うか！」

「〴〵円月蹴り〴〵！」

ワーガルルモンとヴァンデモンの攻撃がぶつかり合う。その隙に、私達は一斉にある方向へと駆け出した。

「イツカクモン！」

「おう！皆、乗って！」

「〴〵ナイトレイド〴〵！」

「〴〵カイザーネイル〴〵!!」

「〴〵ヘブンズナツクル〴〵!!」

ヴァンデモンとワーガルルモン、それにエンジェモンの必殺技がぶつかり合って、空中で大きな爆発が起こった。その爆発に乗じて、退

化してしまったガブモンとパタモンを抱えて、私達はイツカクモンの背に乗る。そのまま海上を進み：何とか、ヴァンデモンの魔の手から逃げる事が出来たのだった。